目次

まえがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
全体研究
Ⅰ　研究開発課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
Ⅱ　研究開発の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
Ⅲ　研究開発の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
Ⅳ　研究開発の内容
１　研究の目的と仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
２　教育課程の特例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
３　編成した教育課程の特徴・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
４　Ⅰ部（第１学年～第４学年）で実践した教育課程の内容・・・・・・・・・３２
５　Ⅱ部（第５学年～第７学年）で実践した教育課程の内容・・・・・・・・・４４
６　Ⅲ部（第８・９学年）で実践した教育課程の内容・・・・・・・・・・・・５４
７　特別支援教育部で実践した教育課程の内容・・・・・・・・・・・・・・・６１
Ⅴ　研究開発の結果及びその分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６５
Ⅵ　研究組織・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７６
どう生きるか指導計画
第１学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７７
第２学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８４
第３学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９１
第４学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９８
第５学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０５
第６学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１２
第７学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１１９
第８学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２６
第９学年・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３３
特別支援学級・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４０
あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４７
研究同人・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４８

本報告書に記載されている内容は、学校教育法施行規則第 55 条及び第 79 条において準用する第 55 条の規定に基づき、教育課程の改善のために文部科学大臣の指定を受けて実施した実証的研究です。
したがって、この研究内容のすべてが直ちに一般の学校における教育課程の編成・実施に適用できる性格のものでないことに留意してお読みください。

ま　え　が　き

本校は、６０年以上の歴史をもつ岐阜大学教育学部附属小学校及び中学校を前身として、令和２年度から義務教育学校として生まれ変わり、今年度で５年目を迎えました。また、義務教育学校開校と同時に、文部科学省の「研究開発学校」としての指定をいただき、研究開発課題として、新領域「どう生きるか」を創設し、実践を積み重ねてきました。

この領域は、学校の仲間や、社会で生きる様々な人々との出会いを通して、実生活や実社会の課題（現実世界にある「よりよく生きるための課題」）と向き合い、そこから自分なりの納得解や最適解を見いだしていく探究的な学びです。また、「総合的な学習の時間」、「生活科」、「特別の教科　道徳」を融合させた新領域であり、各教科等の学びとの連携を図りながら、主題にある「自己実現に向かう児童生徒の育成」を目指しています。

現代は将来の予測が困難な「VUCA」の時代と言われています。そのため、今まで経験したことのない課題に直面することは、必然であるとも言われています。「知識」はただ身に付けているだけでなく、さまざまなことと関連付けながら、どのように使いこなすかが重要であり、さらには他者との関わりの中で協働しながら最適解を見つけ、課題解決に向き合っていくことが求められます。だからこそ、実生活や実社会の課題や変化と向き合い、多様な他者の価値観を理解し、周りの人々と協調するとともに、「自分はどう生きるか」を問い続けながら、自分なりの解を見いだし、自分が進むべき道を力強く切り拓いていこうとする資質・能力の育成を目的とした新領域の学びは重要なのだと考えます。

本年度は、「研究開発学校」としての指定最終年度です。これまでの４年間の研究実践を進める中で見えてきた課題を踏まえ、改めて子供一人一人に目を向け、その子の願いや切実感を大切にし、「自己実現に向かう児童生徒」を子供の姿で検証していきたいと考えています。真摯にそして誠実に取り組んできた実践ではありますが、皆様のご教示とご指導、ご批正を賜ることができましたら幸いです。

最後になりましたが、本日の授業公開や研究紀要を作成にあたり、多くの方から御指導いただきましたことを深く感謝申し上げます。令和２年度より継続して研究の方向性について御指導いただきました運営指導委員の皆様、文部科学省、岐阜県教育委員会、岐阜市教育委員会の関係者様、岐阜大学教育学部の皆様には厚く御礼申し上げます。さらに、本校の「人間教育」の理念に賛同し、学校を支え、惜しみなく協力をいただきました保護者の皆様、地域の皆様にも改めて感謝申し上げます。

また、ご多用のところ研究報告会にご参会くださいました全国の皆様に、あわせて御礼申し上げます。

令和６年１１月２日

岐阜大学教育学部附属小中学校
統括校長　　横　山　真　一

２１	岐阜大学教育学部附属小中学校	R3～R6

令和６年度研究開発実施報告書

Ⅰ　研究開発課題

将来、今以上に不確実で変化の早い時代の中において、一人一人がなりたい自分を考え、自分の能力を発揮し、自分や他者のために創造的に生きていく、自己実現に向かう姿の育成を目指した義務教育９年一貫の教育課程の研究開発。

Ⅱ　研究開発の概要

自己実現に向かうために必要な資質・能力を「問題解決力」「関係構築力」「貢献する人間性」とし、全ての教育活動で効果的に育成する教育課程の研究開発を目指して、以下について取り組む。

○自分や他者、社会を知り、「自分はどう生きるか」と探究しながら、自己実現を目指していく新領域「どう生きるか」を創設する。
○新領域「どう生きるか」の内容として、実社会・実生活をテーマにした探究的な学びを設定する。そこから生まれた「エラー」や、学校や社会にある現代的課題、特別活動や生活上の人間関係での「ジレンマ」を議論し、自己実現へ向かう学びを連続的・発展的に行う。
○「自己実現に向かうための資質・能力」を系統的かつ横断的に育成することを目指した「どう生きるか」の９年間カリキュラムをつくる。

Ⅲ　研究開発の経緯

１　年次研究計画

第一年次	本校における既存の研究成果と課題を基にした実践の継続及び、先行研究や先進校視察を踏まえた理論研究を通して、新領域「どう生きる科」において育みたい資質・能力を決め出し、作成したカリキュラムに基づいて実践・研究を行う。 ①　「どう生きる科」の単元構想（「学びのカテゴリー」に基づいた単元計画）と授業づくりの方法原理を見いだす。 ②　目指す児童生徒の姿の明確化 ③　教育課程の編成と実施 ④　評価方法の開発（児童生徒、保護者、教師へのアンケート及びインタビュー）
第二年次	第一年次に作成したカリキュラムに基づいて実践・研究を行う。 ①　三つの資質・能力を効果的に育成するための９年間のカリキュラムづくり ②　自己実現に向かう児童生徒の育成を目指した「どう生きる科」と関連した「各教科等」の研究実践 ③　教育課程の編成の実施と見直し ④　評価方法の改善
第三年次	第二年次に作成したカリキュラムに基づいて実践・研究を行う。 ①　三つの資質・能力を育むための９年間カリキュラムの修正・加筆・見直しと実践の収集 ②　児童生徒の資質・能力についてのアンケート等による実態調査を基にした「どう生きるか」の「学びのカテゴリー」の見直しと、各学年の実践の積み上げ ③　「どう生きるか」の学びの蓄積及び学習評価方法の確立 ④　第二年次に準備した、児童生徒・保護者・教師によるカリキュラム評価の継続実施と、カリキュラムの検証

第四年次	第三年次に作成したカリキュラムに基づいて実践・研究を行う。 ① 「どう生きるか」の実践研究の継続 ② 「どう生きるか」の９年間カリキュラムにおける指導原理のまとめ ③ 研究の評価、成果と課題をまとめたものを提案発表 ④ 児童生徒の自己評価と保護者・教師による評価方法の継続

２　年次評価計画

第一年次	① 児童生徒アンケートの作成・実施・分析 ② 児童生徒の意識について知るために、映像や音声による記録とインタビューと分析 ③ アンケート等のデータの数値と児童生徒の成長が本校の教育活動の効果によるものなのか因果関係を分析し、成果と課題を明確化 ④ 本校職員や保護者、教育関係者から研究開発に関する意識調査の実施 ⑤ 研究に関する定期的な意識調査・自己省察を行う機会の位置付け ⑥ 評価計画の作成・実施
第二年次	① 児童生徒・保護者・教師のアンケートの検討・実施・分析（経年で比較） ② 児童生徒の意識について知るために、映像や音声による記録とインタビューと分析（経年で比較） ③ 本校職員や保護者、教育関係者から研究開発に関する意識調査 ④ 研究に関する定期的な意識調査・自己省察を行う機会の位置付け ⑤ アンケート結果の分析から、アンケートの内容項目について見直し ⑥ 児童生徒の資質・能力についてのアンケート結果から、本校の教育活動の効果の検証と、カリキュラムの改善、評価方法（パフォーマンス評価、自己評価方法）の検討
第三年次	① 児童生徒・保護者・教師のアンケートの検討・実施・分析（経年で比較） ② 児童生徒の自己評価データの蓄積と、資質・能力についてのアンケートのデータから本校の教育活動の効果を検証 ③ 本校職員や保護者、教育関係者から研究開発に関する意識調査 ④ 定期的にの研究に関する意識調査・自己省察を行う機会の位置付け ⑤ 児童生徒の資質・能力についてのアンケート結果から、本校の教育活動の効果の検証と、カリキュラムの改善、評価方法の改善
第四年次	① 児童生徒・保護者・教師のアンケートの実施・分析（児童生徒・保護者は全学年を対象に７月実施・分析、経年で比較） ② 児童生徒の自己評価データの蓄積と、資質・能力についてのアンケートのデータから本校の教育活動の効果を検証、また、研究の成果と課題についてのまとめ（運営指導委員と連携し、研究の成果と課題を明確化）

３　第四年次の取組の経緯（７月まで、８月以降予定）

月	日	曜	内容　■授業研究会　◆校内研修　〇支援委員会　◎運営指導委員会
4	4	木	・研究推進委員会（昨年度の研究開発の成果と課題、研究開発課題の確認、研究計画の検討） ◆校内研修（全体研究構想の確認、年間指導計画・第１単元の計画作成）
	12	金	・研究推進委員会（研究推進委員会、運営指導委員会の計画）
	26	金	・研究推進委員会（全校研究会の指導案検討）
5	1	水	◆校内研修（各学年の指導構想を深める）
	14	火	■どう生きるか全校研究会【検証授業】

			授業者　窪田泰三教諭（第５学年１組）「自分たちの暮らしを見つめる」 講　師　横山真一統括校長
6	14	金	・研究推進委員会（運営指導委員会の確認、指導案等の様式検討）
	21	金	◎第一回研究開発運営指導委員会（授業提案と指導助言） 第１、２学年部会 授業者　舟橋和恵教諭（第１学年１組）、鈴木香子教諭（第２学年２組） 講師　石井英真准教授（京都大学大学院教育学研究科・運営指導委員） 第３、４学年部会 授業者　北村佳之教諭（第３学年１組）、下川舞子教諭（第４学年１組） 講師　藤田忠久元校長（岐阜市立岐阜小学校・運営指導委員） 第５、６学年部会 授業者　伊藤暢宏教諭（第５学年３組）、青木笙悟教諭（第６学年３組） 講師　菱川洋介准教授（岐阜大学教育学部） 林日佳理助教（岐阜大学教育学部） 第７学年部会 授業者　今西賀寿真教諭（第７学年１組）、平尾龍平教諭（第７学年２組） 講師　西野真由美総括研究官（国立教育政策研究所・運営指導委員） 第８学年部会 授業者　磯谷直毅教諭（第８学年１組）、岡田春香教諭（第８学年３組） 講師　長倉守准教授（岐阜大学教育学部） 第９学年部会 授業者　大塚光朗教諭（第９学年２組）、浅井拓也（第９学年３組） 講師　三島晃陽教育主管（岐阜県教育委員会・運営指導委員） 特別支援教育部会 授業者　江口隆寛教諭（第３・４学年４組）、土生雄一（第９学年４組） 講師　別府哲教授（岐阜大学教育学部・運営指導委員）
7	2	火	◆校内研修（全校研究会、及び運営指導委員会で指導を受けたことの共有、指導計画の見直し、第２単元の構想）
	4	木	・アンケートの実施（対象：児童生徒、保護者、教師）～12日（金）まで
	19	金	・研究推進委員会（次回校内研修の内容検討、教育研究会に向けての成果物についての確認、質問紙調査の進捗状況確認）
	26	金	◆校内研修（進捗状況の共有、どう生きるか第２単元の検討、教育研究会授業の検討）
8	30	金	・研究推進委員会（教育研究会の詳細確認、研究構想の提案）
9	19	木	◎第二回研究開発運営指導委員会（授業提案と指導助言） 第１、２学年部会 授業者　上原純教諭（第１学年３組）、桐山裕也教諭（第２学年３組） 講師　今村光章教授（岐阜大学教育学部・運営指導委員） 第３、４学年部会 授業者　岩田尚之教諭（第３学年２組）、田中雄也教諭（第４学年３組） 講師　藤田忠久元校長（岐阜市立岐阜小学校・運営指導委員） 第５、６学年部会 授業者　窪田泰三教諭（第５学年１組）、干場康平教諭（第６学年２組） 講師　益子典文教授（岐阜大学教育学部）

			菱川洋介准教授（岐阜大学教育学部） 林日佳理助教（岐阜大学教育学部） 第７学年部会 授業者　今西賀寿真教諭（第７学年１組）、平尾龍平教諭（第７学年２組） 講師　西野真由美総括研究官（国立教育政策研究所・運営指導委員） 第８学年部会 授業者　磯谷直毅教諭（第８学年１組）、岡田春香教諭（第８学年３組） 講師　長倉守准教授（岐阜大学教育学部） 第９学年部会 授業者　大塚光朗教諭（第９学年２組）、浅井拓也（第９学年３組） 講師　三島晃陽教育主管（岐阜県教育委員会・運営指導委員） 特別支援教育部会 授業者　江口隆寛教諭（第３・４学年４組）、土生雄一（第９学年４組） 講師　鈴木祥隆助教（岐阜大学教育学部）
	27	金	・研究推進委員会（運営指導委員会における指導の取りまとめ）
10	25	金	・研究推進委員会（教育研究会リハーサル）
11	2	土	☆教育研究会（研究構想提案、どう生きるか授業公開、分科会、シンポジウム） 第１、２学年部会講師　今村光章教授（岐阜大学教育学部・運営指導委員） 第３、４学年部会講師　藤田忠久元校長（岐阜市立岐阜小学校・運営指導委員） 第５、６学年部会講師　菱川洋介准教授（岐阜大学教育学部） 第７学年部会講師　高橋純教授（東京学芸大学教育学部・運営指導委員） 第８学年部会講師　長倉守准教授（岐阜大学教育学部） 第９学年部会講師　三島晃陽教育主管（岐阜県教育委員会・運営指導委員） 特別支援教育部会講師　鈴木祥隆助教（岐阜大学教育学部） シンポジウム シンポジスト　石井英真准教授（京都大学大学院教育学研究科・運営指導委員） 西野真由美総括研究官（国立教育政策研究所・運営指導委員） 益子典文教授（岐阜大学教育学部・運営指導委員）
12	6	金	・研究推進委員会（教育研究会振り返り）
1	8	水	・研究推進委員会（研究開発フォーラムでの発表内容について）
			・研究開発フォーラム参加
2	28	金	・研究推進委員会（次年度に向けて①）
3	14	金	・研究推進委員会（次年度に向けて②）

Ⅳ　研究開発の内容

１　研究の目的と仮説

（１）　研究の目的

①　本校の教育目標具現のために

本校は、教育目標を「独歩・信愛・協働」とし、教育理念「人間教育」を基軸に、児童生徒が人生をよりよく生き、幸せを実感できるようになる教育とは何か、そして教師は何をすべきなのかを常に考え歩んできた。そして今も、児童生徒に必要な私たちがすべきことは何かを問い続け、教育活動を行っている。本校が考える「幸せ」とは、大きく三つのことを大事にした生き方である。一つ目は「自分らしく」である。かけがえのないたった一度の人生だからこそ、自分の頭で考え、自分の足で立ち、歩めること、つまり自分らしく生きることは幸せであると言える。二つ目は「人と

のつながり」である。私たちの周りには様々な人がいる。その人たちとの出会いを通して、感動、喜び、勇気、大切な思い出などを得て、人生を豊かにできる。三つ目は「貢献できること」である。「ここに居てよかった」、「自分ってこんなすてきなところがある」と誰かや何かの役に立ち、自己有用感が高め自身の存在価値を見いだすのである。

以上の三つのことを大事にした生き方を児童生徒に歩んでもらうための教育を本校は推進している。

②　これからの社会を児童生徒が生き抜くために

児童生徒が生きていくこれからの社会は、情報化がいっそう進み、社会の在り方そのものも変化し続ける。こうした時代を生きていくには、自ら社会やテクノロジーの進化に対応しつつ、情報を取捨選択し、新しい知識を取り込み、そして活用していく必要がある。そのためには、生涯にわたって学び続けられるかどうかが鍵になる。また、テクノロジーの飛躍的な進化を背景として、経済や文化など社会のあらゆる分野でのつながりが国境や地域を超えて活性化し、多様な人々や地域同士のつながりはますます緊密さを増してきている。こうしたグローバル化が進展する社会では、多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を創り出していくことが重要である。

常識も価値観も多様化する時代においては、多様な価値観を理解し、他者と協働しながら目的に応じた納得解や最適解を見いだしていくことが求められている。そして、よりよい社会と人生を創り出していくためには、人任せにするのではなく、自分の存在意義を感じながら、自分で幸福を実現していくことが求められている。

以上のような社会を児童生徒が生き抜いていくための資質・能力を身に付けていくための教育が必要であると考える。

③　自己有用感を高めるために

内閣府による我が国と諸外国の若者の意識に関する調査（対象：各国 13 歳から 29 歳までの男女）（表Ⅳ－１）では、「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」の質問に「そう思う」と答えた日本の若者の割合は 10.8%であり、調査した国の中でも低いことが分かる。また、同じ調査の「自分には長所があると感じている」の質問についても、調査を行った国の中で最下位となっている。平成 25 年度の結果と比べると、どちらの質問についても、肯定的に回答した日本の若者の割合は減少している。

令和４年度の内閣府「こども・若者の意識と生活に関する調査」（表Ⅳ－２）では、「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」の質問に対し、「そう思う」と答えた割合が平成 30 年

（表Ⅳ－１）
平成 30 年度　我が国と諸外国の若者の意識に関する調査

うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む	
各国	そう思う
アメリカ	42.3%
フランス	41.8%
イギリス	32.7%
ドイツ	29.4%
韓国	24.2%
スウェーデン	23.6%
日本	10.8%

自分には長所があると感じている	
各国	そう思う
アメリカ	59.1%
ドイツ	42.8%
イギリス	41.7%
フランス	39.5%
韓国	32.4%
スウェーデン	28.8%
日本	16.3%

（表Ⅳ－２）令和４年度　こども・若者の意識と生活に関する調査

うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む（※）	
年齢	そう思う
10～14歳	35.1%
15～39歳	16.3%

※　10～14歳は「がんばって取り組む」

度の調査に比べ、若干の増加が見られるが、割合が低い傾向は引き続き変わらないことが分かる。これらの結果から、日本の若者たちの自身に対する自己有用感が低下していると言える。

本校児童生徒についても令和６年度全国学力・学習状況調査（本校６年生100人、９年生98人対象）（表Ⅳ－３）の質問紙から次のような結果が得られた。それぞれの項目に対して「当てはまる」「どちらかというと当てはまる」「どちらかというと当てはまらない」「当てはまらない」と回答した児童生徒のうち、「当てはまる」と回答した児童生徒の割合を全国、岐阜県、本校で比べたものである。全国、岐阜県の結果から、児童生徒は、人の役に立ちたいという思いがあることは分かる。一方で児童生徒の実態として、なかなか行動に移すことができていない姿がしばしば見られる。このことが、「自分には、よいところがある」という数値の低さにつながっていると考えられる。本校児童生徒においても同様の傾向が見られ、自己有用感が低いと推察できる。

（表Ⅳ－３）令和６年度
全国学力・学習状況調査

	本校	岐阜県	全国
人の役に立つ人間になりたいと思いますか			
６年生	７７％	７０％	７１％
９年生	８２％	７１％	６９％
自分には、よいところがあると思いますか			
６年生	５２％	４２％	４３％
９年生	４０％	４２％	４１％
将来の夢や目標を持っていますか			
６年生	５６％	５８％	６１％
９年生	４５％	３７％	３６％

児童生徒の自己有用感を高めるためには、児童生徒がもっている「人の役に立ちたい。」という思いを行動に移し、実現していく体験活動が必要である。そして、その活動の中で「難しいことも自分で解決することができた。」「自分にも人や社会のためにできることがある。」という満足感を得ることで、自己有用感を高めることができると考える。

④　多様化・狭小化する価値観に適応するために

本校においても生徒指導上の諸課題はある。児童生徒間のトラブルを自分たちで解決することができずにずっと悩んだり、こじれたりする事例が多い。その中で「自分は悪くない。」「〇〇が悪い。」「自分は（よいと信じて）こうしたのに〇〇は分かってくれない。」「〇〇はこういう子だから（考えだから）仕方ない。」など、自分とは違う価値観に対する排他的な姿が見られることもある。

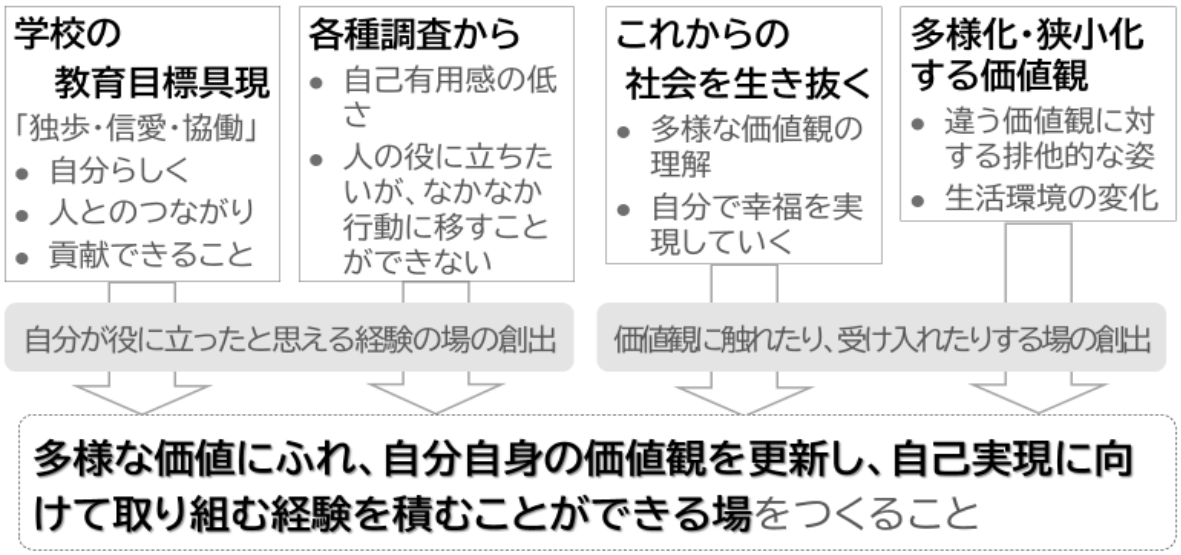
その原因の一つには生活環境の変化がある。中央教育審議会（平成８年）においても「近年の都市化、核家族化等により地縁的つながりの中で子育ての知恵を得る機会が乏しくなったことや個人重視の風潮、テレビ等マスメディアの影響等による人々の価値観の大きな変化に伴い、親の家庭教育に関する考え方にも変化が生じている。」と久しく言われている。生活環境の変化により、個人のもつ価値観が多様化し、その許容量が狭小化している。本校でも少子化、核家族化、共働き家庭の増加、児童生徒の生活の変化等が進んでいる。だからこそ、これまで行ってきた教科等における日常の中での生き方追究のみならず、児童生徒の発達の段階に応じて、家庭や地域社会で経験することが望ましい生活体験、社会体験、自然体験などを学校教育に取り入れ、実社会・実生活のような現実的な場面で体験させ、自分の生き方を考えることができるようにする必要がある。

①～④から、児童生徒の自己有用感を高めるためには、「人の役に立ちたい。」という思いを行動に移し、実現していく体験活動の場を設定することが必要であると考えた。活動の中で「難しいことも自分で解決することができた。」「自分にも人や社会のためにできることがある。」という満足感や充実感を得ることで、自己有用感を高めることができる。体験活動の場を設定するとは、これまで行ってきた教科等における日常の中での生き方追究のみならず、児童生徒の発達に応じて、家庭や地域社会で経験することが望ましい生活体験、社会体験、自然体験などを学校教育に取り入れることである。

また、体験によって、多様な価値観に触れたり、受け入れたりすることができる。価値観に触れたり、受け入れたりすることを通して、自分の生き方を考え、よりよく生きるためにはどうすればよいかを問い続け、自分らしく生きることができるようにする。

そこで、「予見不可能な未来社会において、自分らしく生きるため、一人一人が『自分はどう生きるか』を問い続け、納得解や最適解を求め、学び続けること」を「自己実現（※）に向かう」ことと本校において定義し、本校の研究主題を「自己実現に向かう児童生徒の育成」とした。自己実現に向かうために必要な資質・能力を育む義務教育９年間を一貫した教育課程を構築することで、児童生徒自身も、共に生きる周りの人々も、幸せな人生を実感できることを目指し、本校の教育目標、教育理念である「人間教育」につながると考えている。

（※ここでいう「自己実現」の「自己」とは、「個人と社会との調和において成り立つ自分」を意味している。）



図Ⅳ－１　研究の目的

（２）　研究仮説

（１）の目的を達成するための手立てとして、他者（学級の仲間、教師、家族など）からの認めや、行事等の達成感を味わうことが効果的である。また、他者からの認めだけではなく、自分で自分に問うたり、自分で自分を認めたりできることも必要であると考える。このように自分はどうしたいのかと見つめたり、どうしたからよかったのかと振り返ったりするといった、児童生徒が主体的に自己の存在感を確かめる行為に目を向けている実践は多くない。そこで、児童生徒が自分や他者、社会などを視点に問いをもち、自分自身に問い続け、自分のキャリア形成や自己実現に向けて、自分で選択・行動していく学びを実践・研究する。このカリキュラムには、次の３つの要素を取り入れる。

①　実社会・実生活をテーマにした探究的な学び

キャリア形成や自己実現に向かうためには、自分や他者、社会を知り、自分の立場や状況を把握することが必要である。そこから自分に必要なものが何かを考え、それを得るためにはどうしたらよいのかを判断し、行動していくことが重要となる。そこで、自分や他者、社会をテーマにした探究的な学びを位置付ける。探究的な学びのテーマを、９年間を通してバランスよく仕組み、各教科等と関連付けていくことで、様々な教科で学んだ考え方を生かして教科横断的に学び、自分や他者、社会を知り、自分はどう生きるのかと考えていくことができると考える。

②　事柄や価値そのものを議論する学び

児童生徒は、自分や他者、社会などを視点に問いをもって進める探究的な学びを通して、「それでいいのか」と誰かに問いたくなるようなことや、「そんな考えもあるのか」と新しい考えに出会うだろう。これらのことをきっかけに、「本当にそれが大切なのか」「自分はどうしたらいいのか」と問いをもち、自分や他者、社会のためにはどんな事柄や価値こそ大切にしなければいけないのかを考える学びを位置付ける。自己実現に向かうために必要な資質・能力を育んでいくためには、児童生徒が自ら大切にしなければならないものを見いだしていく必要がある。さらに、事柄や価値そのものを議論することが、道徳科の目標である道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育成することにもつながると考える。こういった議論を行い、他者と深く考え、妥協した解ではなく納得解や最適解を見いだす活動は、自己実現のために必要なことであると考える。

③　自分と社会の未来に夢と責任をもてる学び

自己実現について、樟本ら[(1)]、畠山ら[(2)]の研究結果から、自己実現傾向の高い児童生徒は、攻撃行動が少なかったり、向社会的行動が多かったりすることが明らかにされている。自己実現を図る上で、周囲の者たちや社会のことを知り、自己有用感をもってそれらとしなやかに関わっていくことは重要な条件であると示唆される。

自己有用感について、栃木県総合教育センター[(3)]の研究では、栃木県の児童生徒を対象に自己有用感の状況を調査した結果、本校や全国の傾向と同様に、学年が上がるにつれ、自己有用感が低下している傾向が見られている。また、自己有用感の構成要素を「存在感」「承認」「貢献」の３つの要素で構成されていることを明らかにし、そのうち学級において「存在感（他者や集団の中で、自分は価値のある存在であるという実感）」が相対的に低いことが示されている。この「存在感」を高め、自己有用感を育んでいく手立てとして、他者（学級の仲間、教師、家族など）からの認めや、行事等の成就感を味わうことが効果的であると言われている。

このことから、学校生活の中で、他者（学級の仲間、教師、家族など）からの認めや、行事等の成就感を味わう機会が保障されていると、自己有用感や自己実現への意欲の高まりはある程度期待できる。しかし、児童生徒たちの周りの環境も変化しており、常に他者からの認めがあるという保障がなくなってきている現状がある。これからは、他者からの認めだけではなく、自分で自分に問うたり、自分で自分を認めたりできることも必要であると考える。そこで、このカリキュラムに自分を見つめたり、どうしたからよかったのかと振り返ったりする、児童生徒が主体的に自己の存在感を確かめる行為に目を向け、自身の変容や成長を自覚することを位置付けることにより、自分らしさを生かし、他者や社会を受け入れながら学びを進め、自分と社会の未来に夢と責任をもつことができるようになると考える。

これらのことは、このカリキュラムだけではなく、各教科等全ての教育活動で育成する。さらに、その中で自分が学んだことを蓄積し、自身の変容や成長を自己評価できるようにする。これを、義務教育９年間で一貫して行う。この自己評価の蓄積が自己実現に強く結びついていくと考えている。

また、本校は、特別支援学級を設置している。特別支援教育においては、児童生徒が願いをもって精一杯活動し、他者と関わることが有益であると感じられるよう、新たな体験をしたり、自分の願うことを追究したりするような主体的な生活を送っている。そのため、上述した内容を個の特性や生活経験に応じて柔軟に展開していく。自分の願いをもって活動に打ち込んだり、充実感や身近な仲間や教師と一緒に活動する楽しさを味わったりする時期から始まり、学校内外に視野を広げ、学級の仲間や地域へ願いや活動を発信したり、多くの人から認められたり、感謝されたりする経験を味わえるようにする。さらに、作業学習で育む勤労観とも関連付け、余暇活動にも着目し、状況に応じてどう過ごしていくかを考えられるようにし、実社会で生きていくための力を育んでいく。

以上を踏まえて、本研究の仮説を以下のように定める。

○　実社会・実生活にあるテーマに対して探究的で創造的な学びを位置付けることで、児童生徒はどんな状況でも「自分はどう生きるか」を考え、判断し行動することができ、自己実現に向かうために必要な資質・能力を実践的な場面で育成することができる。
○　実社会・実生活にある「ジレンマ」や「エラー」に対して、他者と共に道徳的な議論を繰り返すことにより、他者を受容して共感的に理解し、他者と自分の幸せのために何ができるのかを考え、行動につなげる実践的な道徳性を養うことができる。
○　児童生徒が自身の変容や成長を実感することにより、自分らしさを生かし、他者や社会を受け入れながら、自分と社会の未来に夢と責任をもって行動しようとすることができるようになる。
○　９年間にわたり、多様な分野や社会で活躍し貢献する人々との出会いを通して、キャリア形成していくことで、児童生徒は多様な価値観から自分の生き方を見つめ、目標をもって学び続けることができる。
○　全ての教育活動で、自己実現に向かうために必要な資質・能力を育成するためのカリキュラムづくりの方法原理や、教師の指導原理を見いだし、実践していくことで、児童生徒の自己実現に向かうために必要な資質・能力を効果的に育成することができる。

なお、本校において「ジレンマ」とは、二つ以上の価値で葛藤すること、「エラー」とは、児童生徒にとって探究の中でうまくいかないこと、乗り越えるべき壁と定義している。

《引用・参考》
(1)　樟本千里・伊藤順子・山崎晃「幼児・児童の自己制御機能と自己実現との関連」『広島大学大学院教育研究科紀要　第三部教育人間科学関連領域』52、363-369、2004
(2)　畠山美穂。倉盛美穂子・山崎晃「幼児の自己実現―社会的行動との関連から」『幼年教育研究年報』23、43-48、2001
(3)　栃木県総合教育センター「高めよう！自己有用感～栃木の児童生徒の現状と指導の在り方～」（平成25年３月）

２　教育課程の特例

（１）で設定した学びの実現に向かって、本研究では、「自己実現に向かう児童生徒」を願い、学校教育全体で直接的に育むために、「小学校学習指導要領」「中学校学習指導要領」に定められていない新領域「どう生きるか」を創設する。「どう生きるか」は、本研究の教育課程の中で軸となるものであり、各教科や領域を含め、全教育活動で自己実現に向かうために必要な資質・能力を育むことを目指すものである。

「どう生きるか」の年間時数は表Ⅳ－４のとおりである。生活科、総合的な学習の時間、特別の教科道徳の時間の総時数を「どう生きるか」に移行する。

（表Ⅳ－４）各学年の「どう生きるか」の年間時数

第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年	第７学年	第８学年	第９学年
136 時間	140 時間	105 時間	105 時間	105 時間	105 時間	85 時間	105 時間	105 時間

３　編成した教育課程の特徴

（１）　資質・能力について

①　自己実現に向かう児童生徒の姿

主題設定の経緯を含め、今後の情勢や児童生徒の実態から、私たちは自己実現に向かう児童生徒を次のように考えた。

○　自分の願いをもって、願いを達成するために学び続ける子
○　他者の考え方に共感し、人・もの・こととのジレンマやエラーを解決していく子
○　自分のよさを生かして、人や社会に貢献していく子

②　「自己実現に向かうための資質・能力」の整理

ア　研究開発一年次における「自己実現に向かうための資質・能力」

①の姿に迫るために必要な資質・能力を「自己実現に向かうための資質・能力」とし、その定義を試みた。

研究開発一年次では、「知識・技能」「主体的な問題解決力」「協働的な関係構築力」「貢献する人間性」の４つを資質・能力として設定した。

（表Ⅳ－５）研究開発一年次における「自己実現に向かうための資質・能力」

知識・技能	主体的な問題解決力	協働的な関係構築力	貢献する人間性
〈知識〉 学習者が事実に対して、学びを通して概念形成し、原理・一般化したもの。 〈技能〉 ・知識を活用する技能 ・実用的な技能	どんな状況でも自分で何ができるのかを考え、困難を乗り越えて行動することができる。	他者を受容して共感的に理解し、他者と力を合わせて考え、行動することができる。	自分らしさを生かし、自分や他者、社会を受け入れ、自分と社会をよりよくするために行動している。

その結果、指導計画を立てる際、教師が計画する学習活動に意図性や計画性をもたせて実践することができた。しかし、それぞれの力を発揮した姿の捉えが教師によって違うこと、その力を育むことができたのかを全体として共有することができないという課題が残った。また、これらの資質・能力と学習指導要領に示されている三つの資質・能力との差異や関係性について、議論を重ねつつ明示することを試みたが、論理的に説明できるところまでには至らなかった。

イ　研究開発二年次～四年次における「自己実現に向かうための資質・能力」

まず、「自己実現に向かうための資質・能力」と学習指導要領に示されている三つの資質・能力との差異や関係性について、「自己実現に向かうための資質・能力」は、学習指導要領における学習の基盤となる資質・能力と捉え、学習指導要領に書かれている資質・能力の三つの柱「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」と、「どう生きるか」で中心的に育みたい「自己実現に向かうための資質・能力」を各教科等に系統的かつ横断的に紡いでいくものとした。

また、研究開発一年次では「知識・技能」「主体的な問題解決力」「協働的な関係構築力」「貢献する人間性」の四つとしていた資質・能力を「問題解決力」「関係構築力」「貢献する人間性」の三つであるとした（表Ⅳ－６）。

（表Ⅳ－６）研究開発二年次～四年次における「自己実現に向かうための資質・能力」

問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現するなど、どんな状況でも自分で何ができるのかを考え、困難を乗り越えて行動する。	他者を受容して共感的に理解し、他者と力を合わせて考え、行動する。	自分らしさを生かし、自分や他者、社会をよりよくするために行動しようとする。

「知識・技能」を外した理由は、探究的な学びには知識及び技能は必要であるが、カリキュラムの特徴から、毎年学習内容が変化していくため、どのような知識・技能が必要であるかをまとめても、次年度には参考程度の情報になってしまい、労力の割に合わないものになってしまうからである。そこで、構成概念という形でまとめることで、各カテゴリーで必要な知識及び技能を整理しようとした。構成概念をはっきりさせることによって、「自己実現に向かうための資質・能力」を育むために必要な要素であり、資質・能力を育みやすくなると考えた。

③　「どう生きるか」の目標

「自己実現に向かうための資質・能力」を直接的に育むため、Ⅳ－１－（２）研究仮説で設定した三つの要素を取り入れた学びの場として新領域「どう生きるか」について、次のとおりに目標を設定した。

「どう生きるか」の目標 実生活や実社会の課題を自分ごととして解決する過程において、ジレンマやエラーを乗り越え、自己の在り方や生き方についての考えを深め、個人の体験や経験、客観的な情報や科学的根拠、道徳的諸価値を基に、主体的・協働的に納得解や最適解を導いていくことを通して、自己実現に向かうための資質・能力を育成する。 （１）実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現するなど、どんな状況でも自分で何ができるのかを考え、困難を乗り越えて行動する「問題解決力」を育むことができるようにする。 （２）他者を受容して共感的に理解し、他者と力を合わせて考え、行動する「関係構築力」を育むことができるようにする。 （３）自分らしさを生かし、自分や他者、社会をよりよくするために行動しようとする「貢献する人間性」を養う。

④　自己実現に向かうための資質・能力を発揮している姿の整理

①で考えた自己実現に向かう児童生徒の姿に迫るために必要な資質・能力を「どう生きるか」で直接的に且つ、教科等横断的に育むためには、教師の指導や学習評価を児童生徒の姿を基に考えていく必要がある。そのために、①の姿をより具体的に、実際の授業の中で資質・能力を発揮した姿として描くことを目指した。

ア　（研究開発一年次）自己実現に向かうための資質・能力の細項目化

研究開発一年次では、「自己実現に向かうための資質・能力」として設定した四つの資質・能力のうち、「主体的な問題解決力」「協働的な関係構築力」「貢献する人間性」について細項目に分けて示し、児童生徒の姿として捉えようと試みた。（次ページ表Ⅳ－７）

その結果、教師が指導計画を立てる際に、児童生徒の姿をイメージするための参考資料として利用することはできた。しかし、それぞれの細項目の裏付けが不十分であることや、それぞれの力を育むことができたかどうかの評価を全職員が同じように見届けたり、共有したりすることができないという課題が残り、より具体的な児童生徒の姿として示す方向性を確認した。

（表Ⅳ－７）　三つの資質・能力の細項目化（研究開発一年次）

自己実現に向かう資質・能力	資質・能力の細項目	
主体的な問題解決力	【問題解決のプロセスを歩んでいく力】 ・問題発見する力 ・計画する力 ・意思決定する力 ・実行する力 ・自己を省察して、調整する力	【よりよい解決のために必要な力】 ・批判的思考力 ・ジレンマやエラーを乗り越える力 ・最適解や納得解に導く力
協働的な関係構築力	・相手のことを共感的に理解する力 ・自分の考えを相手に理解してもらう力 ・合意形成に向かう力 ・リーダーシップ ・マネジメント力	
貢献する人間性	・感性、芸術性を大事にして様々なことに興味・関心がもてる態度 ・他者や社会に貢献しようとする態度 ・自己有用感の高まり	

イ　（研究開発二年次）自己実現に向かうための資質・能力を発揮している姿と、その内面に働く子供の状態の描き出し

（表Ⅳ－８）　三つの資質・能力及び資質・能力が発揮されている姿（研究開発二年次）

自己実現に向かうための資質・能力	資質・能力が発揮されている姿	教師が見届ける視点
問題解決力	・自分の問題をもち、問題を解決するために考え、判断し、行動する ・あきらめずに最後までやりぬく ・今の自分に満足することなく、自分の考えをさらに拡げ、深める	・思いや願いをもつ ・問題を発見する ・活動を計画する ・計画を実行する ・思いや願い、考えを貫く ・批判的に捉え、判断する ・自分のアプローチを柔軟に変えていく
関係構築力	・他者の考えを理解し、対話を通して人・もの・こととのジレンマやエラーを乗り越える	・寄り添う ・折り合いをつける ・分かち合う ・共に向かう
貢献する人間性	・自分の長所と短所、相手が行っていることやものごとの価値に気付き、相手や社会に対して敬意をもって自分にできることを考え行動する	・自分を認める ・相手や社会へ敬意をもって働きかける ・新しいものを創り出す

研究開発二年次の研究では、研究開発一年次の課題から、細項目化した力を、授業や生活の中で児童生徒が資質・能力を発揮している姿として描き直し、児童生徒がどのような姿を目指すのかについて明らかにしようとした。また、「自己実現に向かうための資質・能力」が身に付いたかどうかを全職員が同じように見届けるようにするために、「教師が見届ける視点」として整理を行った。

こうすることで、教師が授業の中でどのような姿を目指すのかが明確になった。また、児童生徒が資質・能力を発揮しているときの教師が児童生徒の姿を見届ける視点を明らかにしたことで、授業研究会等で、その視点に基づく論点で討議することがしやすくなり、授業の質を高めることにつなげることができた。

しかし、授業実践をしていくと児童生徒が資質・能力を発揮している姿は一様でないことが職員間の姿の共有の上で課題となり、学年の発達の段階に応じて、児童生徒が資質・能力を発揮し

た姿をさらに詳しく描くことが必要となった。

ウ　（研究開発三年次～）学年の発達に合わせた自己実現に向かうための資質・能力を発揮している姿の整理

研究開発三年次の研究では、前年度の課題を踏まえ、表Ⅳ－９に示すようにより学年の発達の段階に合わせた三つの資質・能力を発揮している姿を描き、それを踏まえて各学年で指導計画を立て、資質・能力を育んでいくことを考えた。

なお、特別支援教育においては、表Ⅳ－９のような姿を描くことは困難である。一人一人の実態に合わせた目指す姿を描き、その姿に迫るために、どんな資質・能力を身に付けていけばよいか、段階を示すようにする。その段階も、エレベーターのように順番に上がっていくのではなく、行ったり来たりを繰り返しながら成長していくことも加味して姿を描くようにしている。

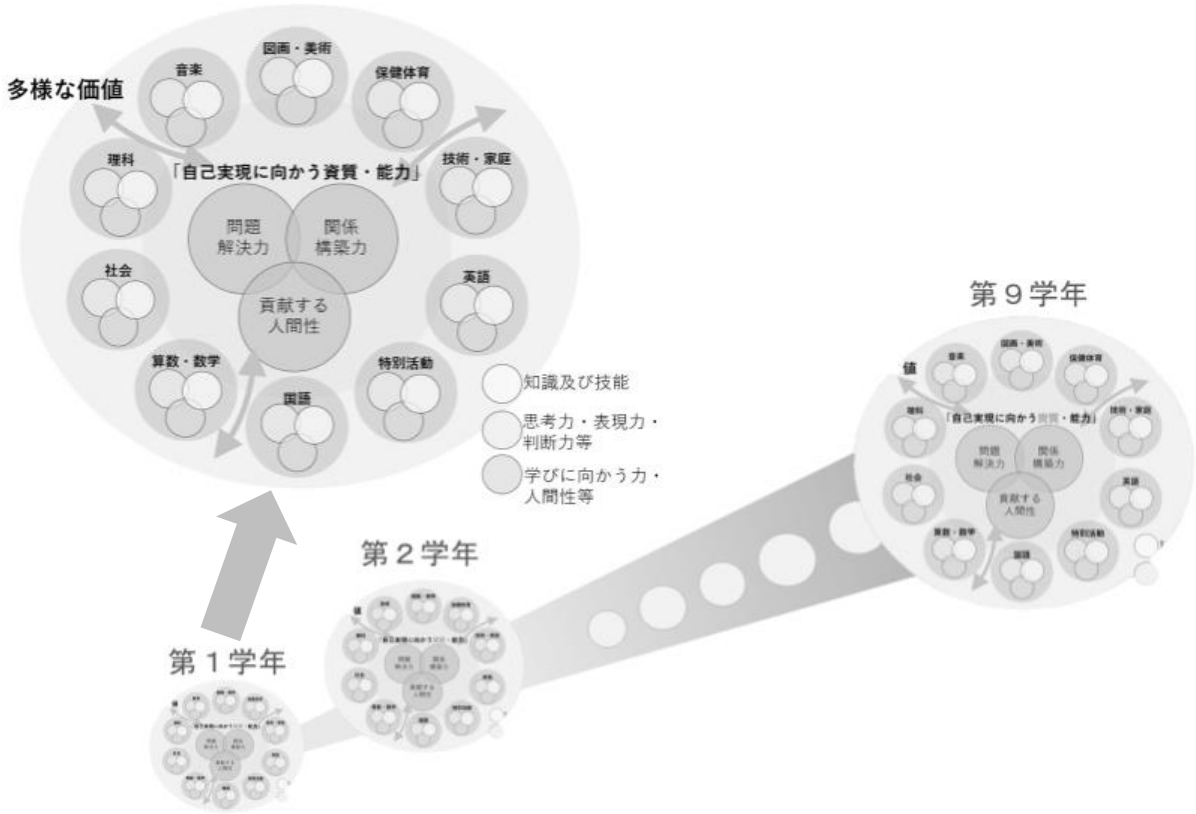
（表Ⅳ－９）学年の発達に合わせた三つの資質・能力が発揮されている姿（研究開発三年次）

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	7年生	8年生	9年生
問題解決力	学級の仲間と共通の願いをもち、願いを達成するために、行動することができる。		学級の仲間と共通する、または、問題別グループで問題を見いだし、解決するための方法を考えて、問題解決に向かって行動することができる。（探究の形・サイクルを身に付ける）		問題別グループで問題を見いだし、問題が解決できなかったときにも、多様な考え方をもとに、問題解決に向かい続けることができる。（探究活動に必要な資質・能力を身に付ける）			個人で問題を見いだし、自立した探究（問題解決のために計画から実行・振り返りまでを行う）ができる。	
関係構築力	人・もの・ことと深い関わりをつくることができる。また、学級の仲間と考えを分かち合いながら、ジレンマやエラーを乗り越えることができる。		情報をもっている人に出会い、関係を作りつつ、情報を集めることができる。また、学級や願い（課題）別グループ内の考えの共通点や相違点を見いだしながら、ジレンマやエラーを乗り越えることができる。		情報をもっている人に出会い、関係を作りつつ、情報を集めることができる。また、問題別グループ内で建設的な話合い活動を通して、考えの折り合いをつけることを通して、ジレンマやエラーを乗り越えることができる。			課題解決に必要な人を自ら選択し、関係を作りつつ、情報を集めることができる。また、考えや価値観の違いが生じたときは、話合い活動を通して合意形成に向かうことで、ジレンマやエラーを乗り越えることができる。	
貢献する人間性	「（他者のために）できた！」「うれしかった！」といった実感を得ることができる。			活動を振り返って、どうしてよかったのかを自ら考えることができる。どうすれば貢献できるかを考えることができる。			貢献できる活動を自ら行おうとする。		

（２）資質・能力を育む学習内容について

①　教育課程の構成

本校で育みたい資質・能力について、学習指導要領の三つの資質・能力との関係性を整理し、「どう生きるか」及び各教科等を系統的かつ横断的に紡いでいきながら育んでいくことできるように構成した。さらに、その中で自分が学んだことを蓄積し、自身の変容や成長を自己評価できるようにする。これを、義務教育９年間で一貫して行う。この自己評価の蓄積が自己実現に強く結び付いていくと考えている。（次ページ図Ⅳ－２）



（図Ⅳ－２）　「どう生きるか」の教育課程の構成

②　「学びのカテゴリー」について

「自己実現に向かうための資質・能力」を育成することを目標にした学びにおいて、児童生徒の興味・関心や生活環境などの実態、発達の段階を考慮し、自分や他者、社会をテーマにした探究領域「学びのカテゴリー」を設定した。

「学びのカテゴリー」を発達の段階を踏まえて９年間通してバランスよく仕組み、各教科等と関連付けて学んでいくことで、実社会・実生活をテーマに探究的に学ぶ中から生まれる「ジレンマ」や「エラー」を児童生徒が乗り越え、自己実現へ向かう学びを連続的・発展的に行うことができるようにした。

この「学びのカテゴリー」の妥当性について、毎年の年度末に「カテゴリーは児童生徒の学びに適したものになっているか」を発達の側面、切実感や自分ごととして捉えるといった意欲の側面、９年間の系統性の側面などから検討を重ねた。

ア　（研究開発一年次）切実感があり、具体から抽象へ進化することを意図した「学びのカテゴリー」

（表Ⅳ－10）　研究開発一年次「学びのカテゴリー」

学年	１～３年生	４年生	５年生	６年生	７年生	８年生	９年生
カテゴリー	植物　人	動物　人	食品ロス	まちづくり	文化	幸せな生き方	

学年	特別支援学級 １・２年生	特別支援学級 ３・４年生	特別支援学級 ５～７年生	特別支援学級 ８～９年生
カテゴリー	野菜栽培体験 仲間との遊び	野菜の育て方	情報 学校の周りの地域	進路 余暇

研究開発一年次、「学びのカテゴリー」を設定するに当たり意図したことは、発達の段階に応じて、９年間の学びが児童生徒にとって切実感があり、未来社会に必要な体験や経験を通して、「自分はどう生きるか」を探究し、資質・能力を育むことができる学びの題材としたことである。また、題材の配列は学年とともに、具体から抽象に内容が進化すること、身近な人・もの・ことから広い空間で多様な人々と関係を作っていくように学びのフィールドの広がりを考慮して前ページ表Ⅳ－１０のように設定した。

１年間の実践を振り返ったときに、カテゴリーをしぼり過ぎてしまうこと（例えば５年生「食品ロス」）により、毎年、同じ実践の繰り返しになってしまい、児童自ら問題を発見し解決していくことが難しく、児童にとって自分ごとの学びになっていかないことが課題として浮かび上がった。

イ　（研究開発二年次）自分ごととして捉え、児童生徒が自ら学びのフィールドを広げることを期待した「学びのカテゴリー」

（表Ⅳ－11）　研究開発二年次　「学びのカテゴリー」

学年	１年生	２年生	３年生	４年生	５年生	６年生	７年生	８年生	９年生
ｶﾃｺﾞﾘｰ	遊び	野菜	花	動物	暮らし	まちづくり	多様性	働く	生きる

学年	特別支援学級　１～４年生	特別支援学級　５～７年生	特別支援学級　8~9年生
ｶﾃｺﾞﾘｰ	遊び・生活づくり	地域・情報	進路・余暇

研究開発二年次では、研究開発一年次の課題であった学びを自分ごととして捉え、かつ探究の幅をもたせ、児童生徒が自ら学びのフィールドを広げられるようにするために、表Ⅳ－１１のように「学びのカテゴリー」を変更した。

年度末の振り返りでは、実践の中での児童生徒の姿をもとに話し合いを行った結果、各学年において、それぞれ設定した課題を自分ごととして捉える姿が増えてきた。一方、９年生の後期の学習において、進路選択の時期と重なって時間的制約があり、目指す児童生徒の姿に迫りきることができないといった課題が見られた。

ウ　（研究開発三年次）発達の段階や系統性を踏まえて見直した「学びのカテゴリー」

（表Ⅳ－12）　研究開発三年次　「学びのカテゴリー」

学年	１年生	２年生	３年生	４年生	５年生	６年生	７年生	８年生	９年生
ｶﾃｺﾞﾘｰ	遊び	野菜	花	動物	暮らし	まちづくり	多様性	社会に生きる	

学年	特別支援学級　１～４年生	特別支援学級　５～７年生	特別支援学級　8~9年生
ｶﾃｺﾞﾘｰ	遊び・生活づくり	地域・情報	進路・余暇

研究開発三年次は、前年度の課題を踏まえ、８・９年生２年間で１つのテーマで進めるように変更し、表Ⅳ－１２のようにした。特に８年生は９年生までを見越したゆとりのあるカリキュラムを仕組むことができ、課題発見の場面や課題設定の場面で時間を使って、生徒にとって自分ご

とになる課題を設定することができた。

一方で、７年生の実践は、いろいろな人に出会って個人追究をする形でカリキュラムを進めたが、多様性という言葉で学習内容をくくろうとしたとき、困難な場面が多かったこと。また、文化・見た目・性差などを７年生の学びで、途中から焦点が当たっていた内容であったが、それらは、７年生に限らず扱うべきものであるといった反省が見られた。さらに、「多様性」は一つ知ったからそれでよいというものではなく、いろんなものを包括して知っていくことが大切になると考えるが、学習を進めていく上では、対象を絞って活動していくことになる。いろいろな人がいる社会に出ることを考えていく８年生、９年生の学びにつなげていくための「学びのカテゴリー」の必要性も反省点として挙がっていた。

エ　（研究開発四年次）構成概念と区別を明確にし、より学びの系統性を意識して見直した「学びのカテゴリー」

研究開発四年次は、課題を踏まえ、第７学年のカテゴリーを「多様性」から「社会」に変更した。

第７学年の学びの性質を「社会を構成する多様な人々に焦点を当てていく」「社会を知る」こととし、人との関係を探究していくことは、社会に向かう入り口であると考え、社会について学べば学ぶほど、いろいろな社会があることに気付くように計画を立てていく。そうすることで、第８・９学年の学びの性質である「社会全体に目を向けていく」「社会をどう生きていくのか考える」ことにつながりをもたせることができる。

「社会」という言葉の捉えが多様であるところが検討の中で話題になった。さらに、教科「社会科」との区別を説明することが求められることも予想された。本校では、社会科における「社会」は「人と人がつながった隙間にあるもの。政治。」と説明し、「どう生きるか」における「社会」は「人と人が集まって生活する場所。子供たちが生きていく場所。世の中。」と説明することで差別化を図ろうとした。

「多様性」の要素についても、「どう生きるか」の学びを考えた上で欠かすことができない。そこで、後述する構成概念の一つとして定義することで、学びに組み入れるようにした。

（表Ⅳ－13）四年次「学びのカテゴリー」とそのねらい

通常学級									
学年	第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年	第７学年	第８学年	第９学年
ｶﾃｺﾞﾘｰ	あそび	野菜	花	動物	暮らし	まちづくり	社会	社会に生きる	
ねらい	あそびを通して、周りの人と仲良くするために、自分はどう生きるかを探究し、資質・能力を育む。	野菜を育て、収穫の喜びを味わうことを通して、自分はどう生きるかを探究し、資質・能力を育む。	花を栽培し、全校を花でいっぱいにする活動を通して、自分はどう生きるかを探究し、資質・能力を育む。	飼育している動物たちの「命」と向き合うことで、自分はどう生きるかを探究し、資質・能力を育む。	身近な暮らしにある問題の発見、解決を通して、自分はどう生きるかを探究し、資質・能力を育む。	身近なまちの問題を発見し、解決していく中で、自分はどう生きるかを探究し、資質・能力を育む。	社会についての問題を発見し、解決していく中で、自分はどう生きるかを探究し、資質・能力を育む。	多様な価値が在る社会の中で、自分はどう生きるかを考え、行動していくために、自分でテーマを見付けて探究し、資質・能力を育む。	

特別支援学級					
学年	第１・２学年	第３・４学年	第５・６学年	第７学年	第８学年	第９学年
ｶﾃｺﾞﾘｰ	遊び・生活づくり		地域・情報		進路・余暇	
ねらい	仲間と一緒にできる喜びや生活をつくっていく楽しさを味わうことを通して、自分はどう生きるかを探究し、資質・能力を育む。		学校の周りの地域についての情報収集・情報発信を通して、人と関わりを楽しみ、社会の中で自分はどう生きるかを探究し、資質・能力を育む。		自分の描く夢や希望を基に、実社会とつながる進路や生き方を充実させる余暇活動について探究し、資質・能力を育む。	

③　構成概念について

探究活動には知識及び技能は必要である。研究開発二年次当初までは、現行の三つの自己実現に向かうための資質・能力と並列で「知識・技能」が定義されていたが、カリキュラムの特徴から、毎年学習内容が変化していくため、知識・技能をまとめる作業は、実態に合わないものになってしまう。そこで、概念という形でまとめることで、各カテゴリーで必要な知識及び技能を整理しようとした。構成概念をはっきりさせることによって、カテゴリーの学びをはっきりさせることができ、自己実現に向かう児童生徒を育みやすくなると考えた。

（表Ⅳ－14）「どう生きるか」で設定した構成概念一覧

<table>
<tr><th>学年</th><th>1年生</th><th>2年生</th><th>3年生</th><th>4年生</th><th>5年生</th><th>6年生</th><th>7年生</th><th>8年生</th><th>9年生</th></tr>
<tr><td>人・もの・こととの関わり方・態度</td><td>試行錯誤</td><td colspan="3">献身性</td><td colspan="3">共感</td><td colspan="2">社会参画</td></tr>
<tr><td>探究の過程</td><td colspan="2">充実感</td><td colspan="2">有限性</td><td colspan="4">多様性</td><td colspan="2">ウェルビーイング</td></tr>
</table>

<table>
<tr><th>学年</th><th colspan="2">特別支援学級　1～4年生</th><th colspan="2">特別支援学級　5～7年生</th><th colspan="2">特別支援学級　8～9年生</th></tr>
<tr><td>人・もの・こととの関わり方・態度</td><td colspan="2">繰り返し関わる</td><td colspan="2">関わりを広げる</td><td colspan="2">生きがい</td></tr>
<tr><td>探究の過程</td><td colspan="4">充実感</td><td colspan="2">将来</td></tr>
</table>

上段は児童生徒が身に付けてほしい「人・もの・こととの関わり方・態度」に関する構成概念である。下段は各カテゴリーの「探究の過程」において必要だと考えられる構成概念である。

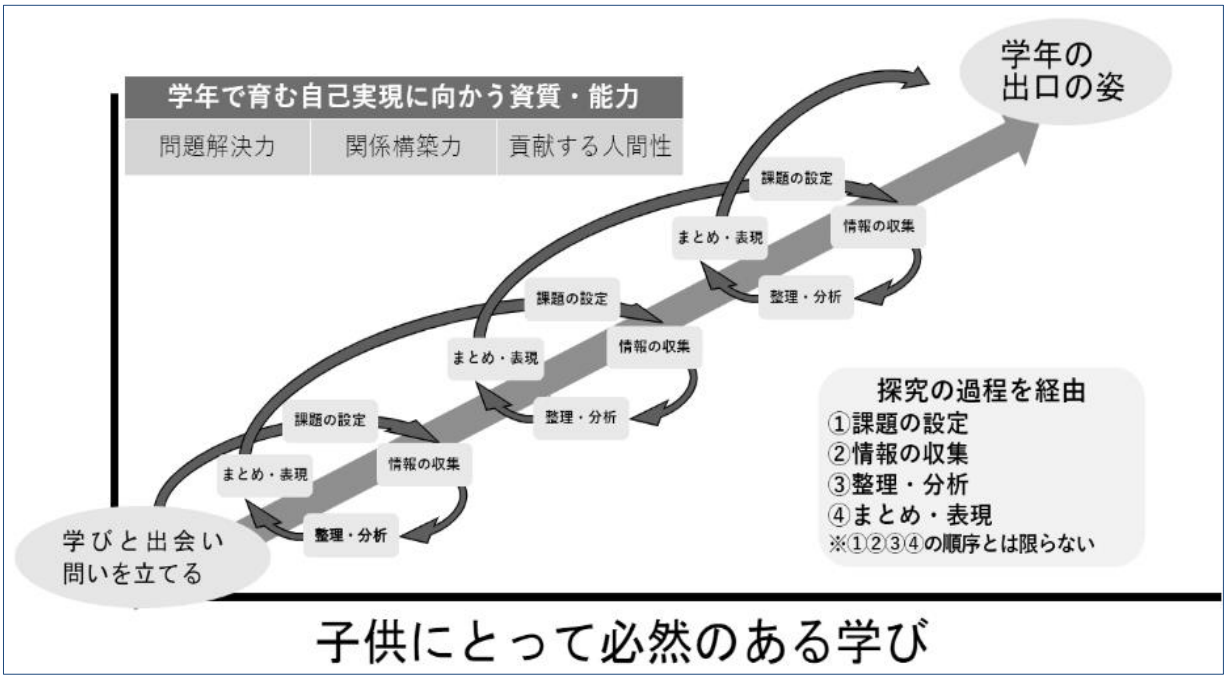
（表Ⅳ－15）「どう生きるか」で設定した構成概念の定義

学年	概念名	定義
1	試行錯誤	願いを実現するために、いろいろなことを試すこと
1・2	充実感	やりきった後には、よかったなあと感じられること
2～4	献身性	自分の生活の中に「人・もの・こと」を据え、その対象に力を尽くすこと
3・4	有限性	命には限りがあること
5～7	共感	他者の体験・考え・主張などを、自分のことのように感じること
5～7	多様性	違いと同じを認識できたり、違いを越えた同じを実現したりすること
8・9	社会参画	社会の様々な事柄に興味をもち、自分の思いや考えを提案したり、様々な活動に自ら関わったりすること
8・9	ウェルビーイング	どうすればすべての人が、肉体的、精神的、そして社会的に満たされ、よりよい状態を実現できるか考え、行動すること
特1～7	充実感	やりきった後には、よかったなあと感じられること
特1～4	繰り返し関わる	「人・もの・こと」に繰り返し関わっていくこと
特5～7	関わりを広げる	様々な「人・もの・こと」へ、関わっていく対象を広げていくこと
特8・9	生きがい	体験を通して、「役に立ったなあ」や「自分はこんなことができるんだ」と感じられること
特8・9	将来	これからの進路や生活のために必要な知識・技能、及びそれに関わること

④　学習過程の整理

ア　（～研究開発二年次）探究サイクルをベースとした学びの確立

「どう生きるか」の学びは、実社会・実生活をテーマにした探究的な学びである。そこで、総合的な学習の時間等の基盤となっている「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の過程を回していく、いわゆる探究サイクルをもとに、「どう生きるか」の学びを確立しようとした。その過程の中で「子供にとって必然のある学びとは何か」「道徳的諸価値を指導の中にどう位置付けていくのか」などの、どう生きるかとしての学びの色付けを行った。（図Ⅳ－３）



（図Ⅳ－３）　二年次までの「どう生きるか」学習過程

イ　（研究開発三年次）「どう生きるか」の学習過程における特徴の整理

前年度までの研究の蓄積を踏まえ、「どう生きるか」の特徴が分かるように学習過程を整理しようと試みた。

まず、「どう生きるか」の学びの特徴を大きく三つに整理した。

一つ目は、「どう生きるか」は探究サイクルの過程を行き来して深めていく学びである。最初に課題の設定は行うが、それを単元の出口まで進めていくのではなく、情報の収集や整理・分析を行っているときにも課題を見直して修正していく学びであるとした。これによって、児童生徒は切実感や必然性をもって学びを進められると考えている。

二つ目は、「ジレンマ」や「エラー」を想定した学びである。実際に体験して集めていく形の情報の収集や集めた情報を比較したり分類したりしながら整理・分析を進めていく中で、児童生徒は「ジレンマ」や「エラー」にぶつかる。これは、偶然出会うものも存在するが、教師がある程度想定した「ジレンマ」や「エラー」であることによって、その後の学びをより深いものにしていけるようにする。

三つ目は、道徳的諸価値と向き合うための時間を確保した学びである。「どう生きるか」の目標は、問題解決の過程で生じる「ジレンマ」や「エラー」を乗り越えるために、道徳的諸価値を基に、主体的・協働的に納得解や最適解を導いていくことを目指している。教師は、「ジレンマ」や「エラー」を乗り越えるために必要な道徳的諸価値を想定し、それを単元計画の中に位置付け、道徳的諸価値を基に考える時間を十分に確保することによって、児童生徒は自ら納得解や最適解を導くことができるようにする。

そして、探究サイクルの枠組みは維持した中に、内省という過程を位置付けた。内省を位置付けることにより、児童生徒が主体的に自己の存在感を確かめる行為を通して、自身の変容や成長を自覚することにより、自分らしさを生かし、自分と社会の未来に夢と責任をもてるような人になることを目指す。内省は単元の構造によって、内容のまとまりごとに位置付けるものであり、どの学習過程でも行う可能性がある。また、内省の仕方も、発達の段階に合わせて、学習活動の振り返りを行ったり、今後の生き方について自分自身を見つめたりするなど多岐にわたる。

ウ　（研究開発三年次～）「自己実現に向かうための資質・能力」を育む学習過程

「どう生きるか」の学びをはっきりさせた上で、総合的な学習の時間との差異を明確にして指導にあたるため、「どう生きるか」の学習過程について、探究サイクルをベースとして明らかにしようとした。指導計画を立てる上で意識したいことを「切実感・必然性」「出会いの深まり」「『ジレンマ』や『エラー』の焦点化」「多様な仕掛け」「内省」というキーワードとして設定し、全職員で共有した。

（ア）　切実感・必然性

児童生徒が探究課題を設定する場合、その課題に切実感や必然性がなければ、児童生徒は他人事のように考えたり、課題意識を単元の終わりまで継続させたりすることが難しく、学びを深めることはできない。そこで、切実感や必然性が生まれるように、例えば、学校内外の人に実際に会ったり、ものを実際に見たりする場面を設定し、児童生徒が願いや疑問をもてるように事前に視点や出会う目的を学級全体で確認する。その裏側で、教師は意図的な出会いを仕組むために、出会う人に学びの目的などを事前に伝えておくといった手立てを講じる。

カテゴリーが野菜や花、動物といったものであれば、前年度からの引継ぎを利用し、「〇年生のようにやってみたい。」という憧れから出発することも考えられる。そして、まずは活動をやってみることによって、おそらく出会うであろう数多くのジレンマやエラーから学びを深めていくといった学習計画を描くこともできる。

学年が上がるにつれて、具体物から抽象的なカテゴリーに変化していくので、学びの出発の仕方は異なってくる。例えば、「〇〇（カテゴリー名）とは？」の発問からブレーンストーミングを行い、思考ツールを使ってまとめる活動を位置付け、ブレーンストーミングから出た児童生徒が感じている疑問や、「もっとこうしたい」という願いを出発点として「どうして〇〇を学びたいのか」「〇〇のために何ができるのか」と問うことによって、今後の学びを進められるようにする。また、児童生徒の願いを実現するためにプロジェクト活動を立ち上げ、学習の出口の像をはっきりさせる工夫も考えられる。

（イ）　出会いの深まり

一般的に情報の収集と聞くと、観察や体験、本やインターネットを手段として想像するが、どう生きるかの学びは、自己の生き方を見つめる学びであるので、課題の設定の時に出会った人や、実際に見たものと関わること深めていくことによって、考え方や価値に気付き、自分の生き方と比べたり、自分の中へ取り入れたりするようにしていく学びをつくる。

そのために、学び始めは様々な対象に出会うことから始めるが、学びを進めていくうえで、児童生徒が自ら対象を選び、願いの実現に向かって何をすればよいかを確かめながら情報を集めていくことで、相手意識や目的意識の醸成を行う。

また、誰に出会いたいのかだけではなく、目的や方法、内容までの計画や今後の見通しを児童生徒で考え、準備や出会いを児童生徒が中心に進めることで、自分ごととして捉えることができることを目指し、発達の段階や学びの進度などを見極め、適切に指導・援助できるようにする。その中

で、事前に児童生徒の疑問を講師に伝えるなど、出口を見据えながら、講師との対話の中身についてよく打ち合わせすることで、児童生徒のもっている課題についての対話ができるように準備する。そして、対話をする中で、自分たちが設定していた課題を見直し、修正できるような時間も位置付け、学びに柔軟性をもたせることも意識する。

また、集めた情報を、自分たちの生活や生き方と結び付け、児童生徒が実践したり、社会に参画したりする糸口を得られるような意見を集められるように促すことや、専門家の考えを鵜呑みにするのではなく、「自分だったら…」「計画に合わせて考えると…」など、批判的思考を尊重する指導も合わせて行っていく。

（ウ）　「ジレンマ」や「エラー」の焦点化

課題を設定するときや、情報を収集するときに、児童生徒は数多くの「ジレンマ」や「エラー」に遭遇する。教師は、児童生徒がどんな「ジレンマ」や「エラー」に出会ったのかを集めておき、どう乗り越えていくのかの道筋を描いておく。児童生徒が設定した課題を解決するためには、収集した情報を整理・分析する際に、「ジレンマ」や「エラー」を乗り越える必要がある。そのときに、道徳的諸価値をもとに、事柄や価値そのものを議論する学びを通して解決してほしいと願っている。つまり、整理・分析の学習過程では、教師と児童生徒は「ジレンマ」や「エラー」の焦点化を図り、道徳的諸価値と向き合う時間をつくることが大切となると考えている。

まずは、自分の考えを整理するために、思考ツールを用いたり、探検マップや探検図鑑を作成したりするなど工夫の仕方を学ぶ必要がある。その中でグラフを使って視覚的に捉えやすいようにしたり、探究前の素朴な考え、広がった考え、深まった考えを追記したりすることで、内容が充実するようにする。

さらに、個人やチーム毎に調べてきたものを共有する場を設定し、どんな手段がより有効なものかを分析、判断する場面をつくる。そのときにその手段は「願い」の実現につながるかどうかを吟味したり、道徳的諸価値に基づいて、有効なものであるかを判断したりする。例えば、「命を大切にするとはどうすることか」など道徳的諸価値そのものを問いとして考えたり、「そもそも、なぜ落書きを消す必要があるのか」といった課題の設定自体に立ち返って考えたりするときに、道徳的諸価値に基づいて考えられる。

学級全体で話し合って納得解や最適解を導くときには、教師のかじ取りを効果的に行い、児童生徒が自分事として考えられるようにする。例えば、曖昧な質問・発言・根拠や、要点がつかめない発言に対して教師が問い返したり、問い直したりすることや、児童生徒が考えの立場をはっきりさせて挙手することなど、意見や考えが交流できるような手立てが考えられる。さらに、この話合いの出口を想定したときに、拡散的に終わらせるように向かうのか、収束させる方向に向かうのかをはっきりさせて、展開させていく必要がある。

そして、整理・分析したことで、新たな問いを見つけ情報の収集をさらに続けたり、次の専門家との対話の計画を立てるなど、活動への見通しをもったりできるようにする。見通しをもつ中で大切にしたいのは、課題の設定時に考えた探究テーマの筋に沿って考えられているかと、常に立ち返るところはどこかを明確にしておくことや、これからの自分の生き方について考える材料やきっかけは何かを明確にしておくことである。

（エ）　多様な仕掛け

課題の設定をする際に、自分の願いの実現に向けて何をすればよいのかを考えているので、今まで集めてきた情報をもとに実行する学習過程が、まとめ・表現に当たる。単に新聞やポスターを作って、仲間に発表するだけでない、多様な仕掛けが考えられる。

この過程で大切にしたいのは、学年の発達や実態に合わせた形であること、相手意識・目的意識

をもたせて活動を仕組むことである。特に、課題の設定時から協力してくれた人に学習の成果を伝え、その人から感想や評価をもらい、達成感を味わう活動は効果が見られる。

プロジェクト活動を立案している場合は、ロードマップを作成し、逆算的に計画を立てられるようにしたり、活動に向けての計画（いつ・どこで・なにを・どうするのか）を具体化したりすることを児童生徒と共有し、何時間、何に使えるか、児童生徒が見通すことができるようにする。児童生徒が見通しをもつために、教師が見通しをもち、できる限り突発的な変更や大人の都合による変更がないようにすることも求められる。

（オ）　内省

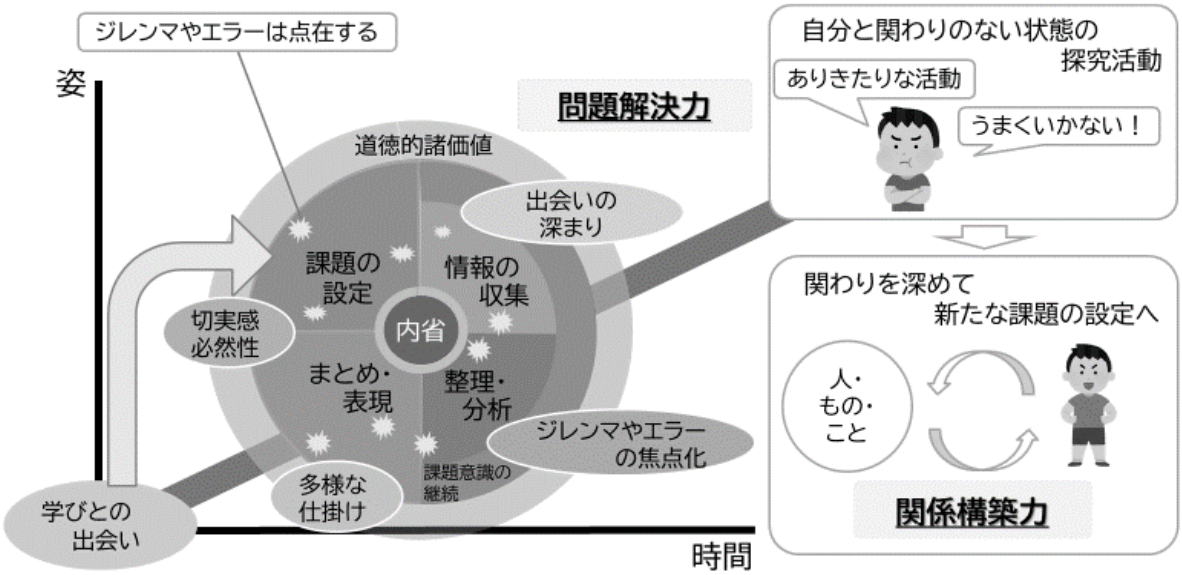
探究サイクルの枠組みを維持した中に、内省という過程を位置付けた。内省を位置付けることにより、児童生徒が主体的に自己の存在感を確かめる行為を通して、自身の変容や成長を自覚する。そうすることにより、自分らしさを生かし、自分と社会の未来に夢と責任をもてるような人になることを目指す。内省は単元の構造によって、内容のまとまりごとに位置付けるものであり、どの学習過程でも行う可能性がある。また、内省の仕方も、発達の段階に合わせて、学習活動の振り返りを行ったり、今後の生き方について自分自身を見つめたりするなど多岐にわたる。

児童生徒が主体的に自己の存在感を確かめることができるように、まず、内省の目的を児童生徒と共有する。内省の内容は、学習活動の振り返り・自分の思い・願い・目標・考え方まで多様である。

内省の仕方を次のように整理し、学習で絶えず自分を見ることができるように時間を確保する。

○「できたこと」「できなかったこと」は何かを整理する
○「なぜできたのか」「どうしてできなかったのか」を考える
○「計画のどの段階に問題があったのか」と見返す
○「修正する必要があることは何か」「どのように修正するのか」と振り返る
○「次はどうするのか」「自分はどうしたいのか」と先を見る
○「仲間のどの意見が参考になりそうか」「どのような意見が心に刻まれたのか」と仲間の姿から得られるものを見つける
○「自分だったら…」と自分に置き換えて考える　など

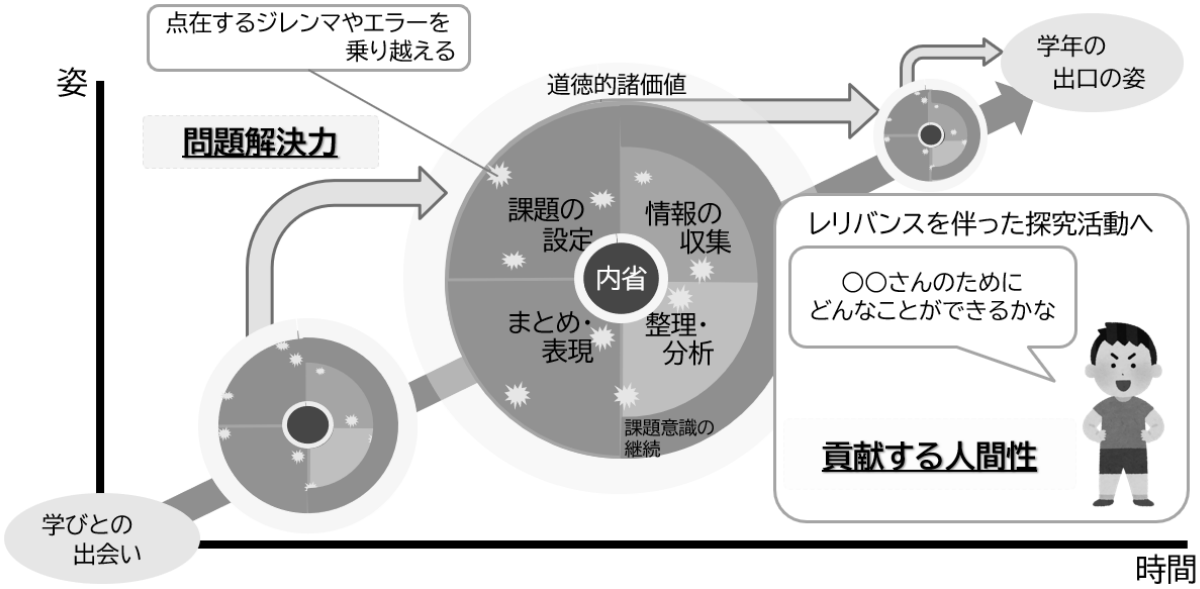
（カ）　自分との関わり（レリバンス）を高める



（図Ⅳ－４）「自己実現に向かうための資質・能力」を育む学習過程（第１単元）

「どう生きるか」の学習で、学年に応じた「人・もの・こと」に出会い、探究活動を始めるが、課題解決のための方法がありきたりな活動しか思い浮かべない児童生徒の実態が見られた。そこで、第１単元（４月から７月までを想定）では、児童生徒は、出会った「人・もの・こと」と関わりを深めていく（レリバンスを高めていく）ことを主たる目的とし、うまくいかなかった経験を基に、新たな課題を設定しようとする時期であるとした。（前ページ図Ⅳ－４）

第２単元以降、新たな探究活動に入るときに、児童生徒は、第１単元で関わりを深めていく（レリバンスを高めていく）ことにより、対象に合わせた課題の解決方法やプロジェクト活動を主体的・協働的に考えるようになり、レリバンスを伴った探究活動の実践ができるようになる。関わりを深めていく（レリバンスを高めていく）ために、「人・もの・こと」と関わり続けていくことによって、相手と親密になり、相手のことを知ることができる。親密になることで、相手が困っていることや悩んでいることなどの本音が聞けるようになる。本音を聞けるようになることで、相手のために「何かできないかな。」という相手意識を伴った行為を考えることができるようになる。この過程を経ることによって、課題がより必然性のあるものになったり、プロジェクト活動が充実したりする。また、内省するときも、対象を思い浮かべながら行うことができるので、内省がより具体的になり、充実したものになると考える。（図Ⅳ－５）



（図Ⅳ－５）「自己実現に向かうための資質・能力」を育む学習過程（第２単元以降）

（３）指導計画について

①　年間指導計画の作成

「自己実現に向かうための資質・能力」を発達の段階に応じて意図的・計画的に育むために、年間指導計画を次のように作成した。（次ページ図Ⅳ－６）

まず、各学年の「学びのカテゴリー」を通して育む「自己実現に向かうための資質・能力」を明確にして、学年の目標を設定することと同時に、学年間のつながりを意識するためにカテゴリーの設定理由を明記した。その後、前年度までの実践の蓄積を基に、学びの基盤となる道徳的諸価値を整理した。そして、学年の最初の学びの出会いの姿、学年終末の出口の活動の姿から、児童生徒が自分ごととして探究していくプロセスを描き、単元配列を行った。

また、各教科等の内容との関連も明確にすることで、教科等で学んだ様々なことを生かして教科等横断的に学ぶことを教師が意識できるようにした。

資質・能力の設定
学年のカテゴリーを通した学びの中で育む資質・能力を設定

カテゴリーの設定理由
学年間のつながりの明確化

学びの基盤となる道徳的諸価値
学びの中で、考え、判断する基となる道徳的諸価値の設定

活動内容
子供にとって必然ある学びになるように、1年間の出口の姿を描き、単元を配列

各教科等とのつながり
どう生きるかと各学教科等の内容のつながりを明確化

（図Ⅳ－６）年間指導計画

②　単元シートの作成

年間指導計画と同様に、「自己実現に向かうための資質・能力」を発達の段階に応じて意図的・計画的に育むために、単元シート（単元指導計画）を次のように作成した。（図Ⅳ－７）

資質・能力の設定
単元を通して育む資質・能力の具体化

活動内容
児童生徒にとって切実感や必然性のある学びになるように、出口の姿を描き、姿に迫るための活動内容の設定
実際の姿を基にした活動内容の見直し（加筆修正欄に記入）

ジレンマやエラー
児童生徒の学びの中で出会うジレンマやエラーの想定
道徳的諸価値を基に考え、判断、議論し、納得解や最適解を導き出す姿

（図Ⅳ－７）単元シート（単元指導計画）

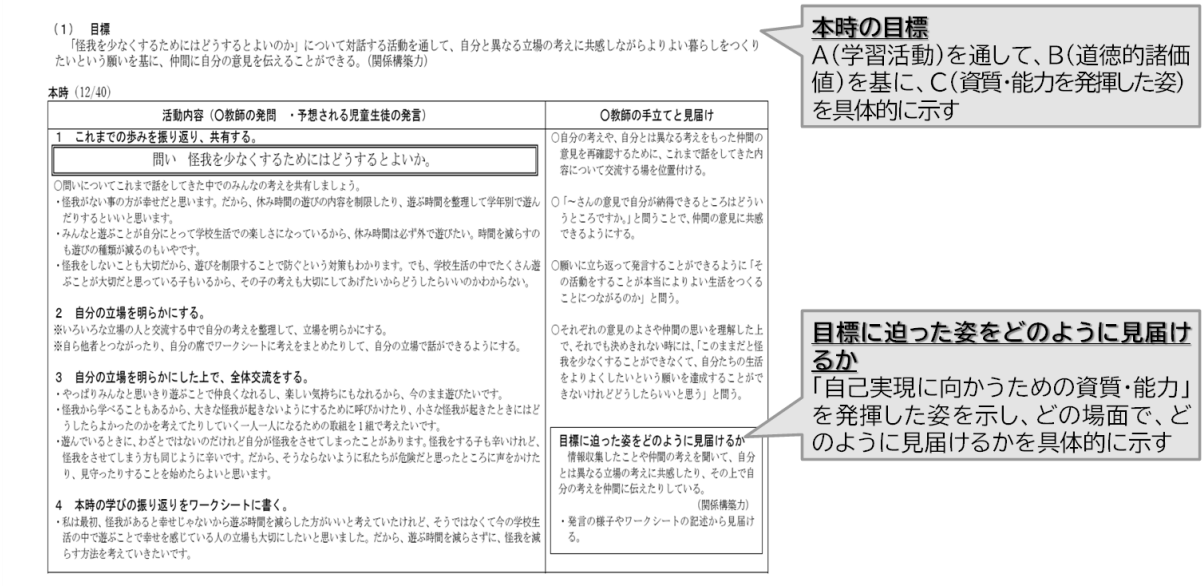
まず、単元において育みたい「自己実現に向かうための資質・能力」を描くようにした。その上で活動内容を考えるが、その活動を行うときに想定される姿も同時に描くようにした。

また、活動内容や年間指導計画で整理した道徳的諸価値を基に、児童生徒がどのような「ジレンマ」や「エラー」に出会うのかを想定し、学習過程に合わせて併記できるようにした。

「加筆修正欄」「実際の姿」の欄を設けて、実際の授業を行ったときの児童生徒の発言や、行った活動を記録することができるようにし、それによって実際の授業がどう修正されたのかが分かるようにした。そうすることで、次の単元、来年度の実践につなげるようにした。

③　単位時間の指導

「自己実現に向かうための資質・能力」を育むため、単位時間における目指す授業像を描くために必要な要素を整理した。



（1）　目標
「怪我を少なくするためにはどうするとよいのか」について対話する活動を通して、自分と異なる立場の考えに共感しながらよりよい暮らしをつくりたいという願いを基に、仲間に自分の意見を伝えることができる。（関係構築力）

本時（12/40）

活動内容（○教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	○教師の手立てと見届け
1　これまでの歩みを振り返り、共有する。 問い　怪我を少なくするためにはどうするとよいか。 ○問いについてこれまで話をしてきた中でのみんなの考えを共有しましょう。 ・怪我がない事の方が幸せだと思います。だから、休み時間の遊びの内容を制限したり、遊ぶ時間を整理して学年別で遊んだりするといいと思います。 ・みんなと遊ぶことが自分にとって学校生活での楽しさになっているから、休み時間は必ず外で遊びたい。時間を減らすのも遊びの種類が減るのもいやです。 ・怪我をしないことも大切だから、遊びを制限することで防ぐという対策もわかります。でも、学校生活の中でたくさん遊ぶことが大切だと思っている子もいるから、その子の考えも大切にしてあげたいからどうしたらいいのかわからない。 2　自分の立場を明らかにする。 ※いろいろな立場の人と交流する中で自分の考えを整理して、立場を明らかにする。 ※自ら他者とつながったり、自分の席でワークシートに考えをまとめたりして、自分の立場で話ができるようにする。 3　自分の立場を明らかにした上で、全体交流をする。 ・やっぱりみんなと思いきり遊ぶことで仲良くなれるし、楽しい気持ちにもなれるから、今のまま遊びたいです。 ・怪我から学べることもあるから、大きな怪我が起きないようにするために呼びかけたり、小さな怪我が起きたときにはどうしたらよかったのかを考えてたりしていく一人一人になるための取組を１組で考えたいです。 ・遊んでいるときに、わざとではないのだけれど自分が怪我をさせてしまったことがあります。怪我をする子も辛いけれど、怪我をさせてしまう方も同じように辛いです。だから、そうならないように私たちが危険だと思ったところに声をかけたり、見守ったりすることを始めたらよいと思います。 4　本時の学びの振り返りをワークシートに書く。 ・私は最初、怪我があると幸せじゃないから遊ぶ時間を減らした方がいいと考えていたけれど、そうではなくて今の学校生活の中で遊ぶことで幸せを感じている人の立場も大切にしたいと思いました。だから、遊ぶ時間を減らさずに、怪我を減らす方法を考えていきたいです。	○自分の考えや、自分とは異なる考えをもった仲間の意見を再確認するために、これまで話をしてきた内容について交流する場を位置付ける。 ○「～さんの意見で自分が納得できるところはどういうところですか。」と問うことで、仲間の意見に共感できるようにする。 ○願いに立ち返って発言することができるように「その活動をすることが本当によりよい生活をつくることにつながるのか」と問う。 ○それぞれの意見のよさや仲間の思いを理解した上で、それでも決めきれない時には、「このままだと怪我を少なくすることができなくて、自分たちの生活をよりよくしたいという願いを達成することができないけれどどうしたらいいと思う」と問う。 目標に迫った姿をどのように見届けるか 情報収集したことや仲間の考えを聞いて、自分とは異なる立場の考えに共感したり、その上で自分の考えを仲間に伝えたりしている。（関係構築力） ・発言の様子やワークシートの記述から見届ける。

（図Ⅳ－８）単位時間の指導（指導案）

まず、年間指導計画や単元指導計画で位置付けた「自己実現に向かうための資質・能力」に基づいて、本時の目標を具体的な姿で描いた。描き方は、一単位時間の学習活動の中で、どのような「ジレンマ」や「エラー」が生じるかを想定し、それらを乗り越えるために必要な道徳的諸価値をはっきりさせて、「自己実現に向かうための資質・能力」を発揮した姿を詳しく示す形とした。また、本時の中で描いた「自己実現に向かうための資質・能力」を発揮している児童生徒の姿を見届ける方法も具体的にした。さらに、「自己実現に向かうための資質・能力」を育むための手立てを位置付け、教師が意図的に育んでいることを分かるようにした。（図Ⅳ－８）

（４）学習評価について

①　系統性を意識したポートフォリオの活用

「どう生きるか」を通して児童生徒が自分の探究活動の実態を具体的に振り返り、成果を実感したり、課題の改善につなげたりするため、また、教師が「自己実現に向かうための資質・能力」をどのくらい育むことができたのかを見届けるためにポートフォリオを活用した。

ポートフォリオの基本となるワークシートについては、各学級で学習活動が異なるため、児童生徒の実態や学年の発達に応じて学びを振り返ることができるように各学級担任が作成した。

例えば、第１学年及び第２学年は、自己課題や課題に対するメモ、振り返りを記録していくことは難しい。しかし、学びの対象と繰り返し関わる中で、多くの発見をしたり、自分の思いや考えを生み出したりしていく。その発見や自分の思いや考えが可視化できるように、動画を撮ったり、絵日記を書いたりして、児童の内面が素直に表現された記録を残していくようにした。

（表Ⅳ－16）第１学年児童のポートフォリオ（動画で記録したものを文字に起こしたもの）

（Ａ児）

授業の内容	振り返り
９月の遊びの計画	私は、９月の加納城址公園で、木の実のお店屋さんをやりたいです。
９月の遊びの振り返り	私は、９月に楽しかったことは木の実でお店屋さんごっこです。

	だけど、木の実はいっぱいあったけど、お店屋さんごっこはあまりできませんでした。 だけど、楽しかったです。
１０月の遊びの計画	私が次やりたいことはお花摘みです。どうしてかというと、お花がきれいだからです。
１０月の遊びの振り返り	私は、同じ木の実でお店屋さんチームの友達と一緒に遊べて楽しかったです。いっぱい木の実が採れました。
１１月の遊びの計画	私が１１月の遊びにしたいものは秘密基地です。どうしてかというと、おもしろそうだからです。 私が工夫したいことは、知らない秘密基地をさがすことです。
１１月の遊びの振り返り	私は、秘密基地でおうちをつくったり、飾り付けをしたりして楽しかったです。

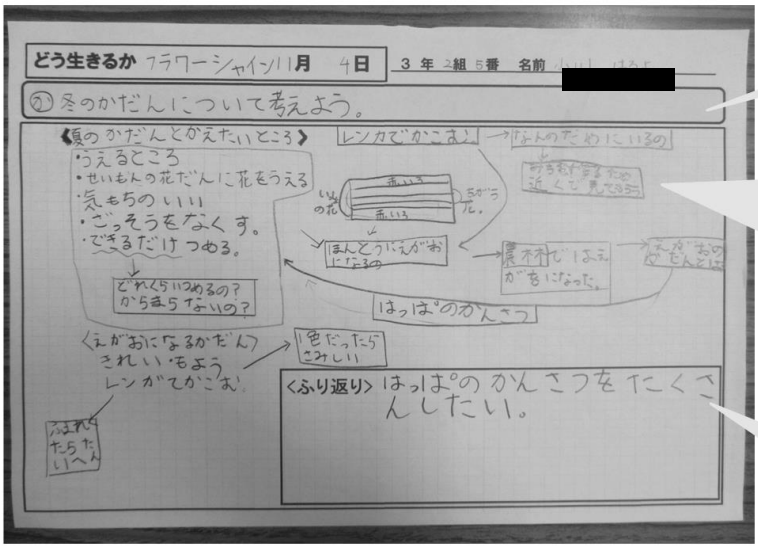
（Ｂ児）

授業の内容	振り返り
９月の遊びの計画	僕は、加納城址公園で虫捕りをしたいです。
９月の遊びの振り返り	僕が一番楽しかったことは、花を集めたり、実を集めたりしたことです。
１０月の遊びの計画	加納城址公園では、自然旅おにごっこをやりたいです。そのわけは、いっぱい（一緒に遊ぶ）友達がいるからです。
１０月の遊びの振り返り	僕が加納城址公園でやりたいことは木登りです。どうしてかとういうと、何か木登りが楽しそうだったからです。
１１月の遊びの計画	次やりたいことは、虫さがし・観察です。今度の虫さがし・観察で工夫したいことは、虫をいっぱい捕まえて、虫眼鏡を使って一匹一匹いっぱい観察したいです。
１１月の遊びの振り返り	今日、加納城址公園で楽しかったことは、自然旅ごっこで「ひっつきボンボン」をいっぱい付けられたことです。

前ページから続く表Ⅳ－１６は第１学年の実践である。第１学年の授業の終わりに次の遊びの計画や遊んだ後の振り返りを自分のタブレット端末に話しかける形で記録を残した。A児は公園に木の実がたくさん落ちていたことを覚えていて、今度遊びに行くときには、木の実を使った遊びをしたいという願いをもっていた。木の実はたくさんあったけれども、上手く遊べなかったことが分かる。学級担任は、そこで、遊び方に対して支援を入れることで、お店屋さんのチームの友達と一緒に遊ぶことができ、充実感に浸ることができた。B児は虫捕りや自然旅おにごっこという遊びを計画していたが、振り返りでは必ずしもその遊びを行っていないことが分かる。そこには、目の前に広がる楽しい遊びに目移りする様子であったり、仲間と共に遊びに夢中になることで、遊びの内容が変化していったりしたことが容易に想像できる。このように、ポートフォリオの残し方を工夫することで、児童の学びを具体的に捉えることができた。

第３学年以降は、発達の段階に応じて、自己課題や課題に応じたメモ（自身の行動とその内面、納得したこと、新たな問い、生じた「ジレンマ」や「エラー」、新たな発見、新たな出会い等）、課題に対する振り返りを記録していくようにした。同時に、記録する意味が感じられるように、記録をすることが学びの中に位置付いている環境づくりにも心掛けた。

ポートフォリオを活用することで、次に示すルーブリック評価表と連携し、指導と評価に好影響を与えたり、児童生徒同士の相互評価に生かしたりすることを目指した。

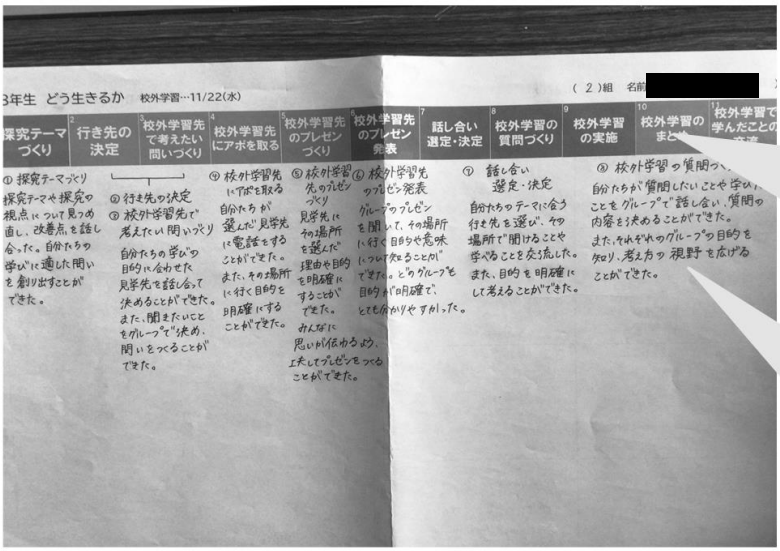


自己課題

課題に応じたメモ
本時の場合、花壇づくりに必要な条件、それに対する疑問や新たな課題が書かれている。

課題に対する振り返り

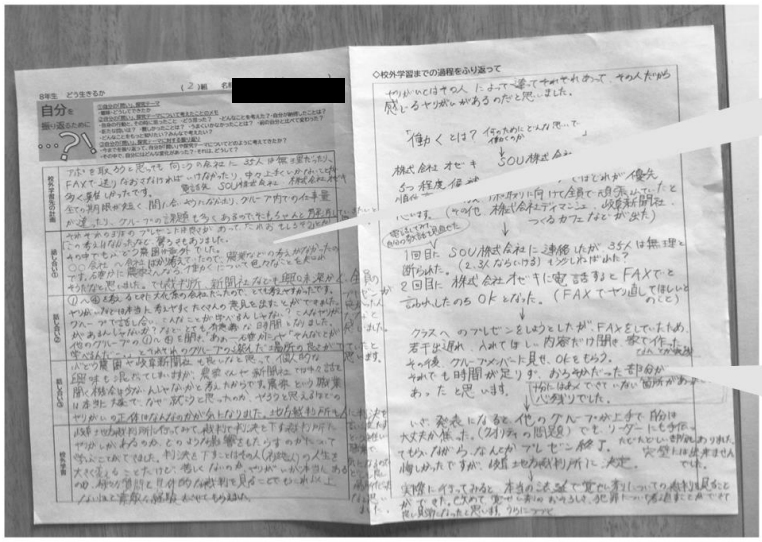
（写真Ⅳ－１）ポートフォリオの例（第３学年）



校外学習を実施するために必要な過程を明記することで、生徒が見通しをもって活動に取り組むことができる。

振り返り
その時に行動したこととその値打ちを合わせて書くことにより、価値に気付く。

（写真Ⅳ－２）ポートフォリオの例（第８学年）



振り返り
自分の気持ちを素直に書く。

課題に応じたメモ
ところどころに振り返りを記述していく。

（写真Ⅳ－３）ポートフォリオの例（第８学年）

写真Ⅳ－１～３はポートフォリオの具体例である。課題に応じたメモを取るときにどうすれば分かりやすく、また自分の思考を整理しやすくまとめることができるかを指導したり、学びの振り返り（内省）もどのように記述すればよいかを合わせて指導したりすることを意識した。その結果、下学年では、振り返り（内省）の記入欄を設け、振り返り（内省）をすることをはっきりさせて記述したほうがよいことが書きやすく、学年が上がるにつれて、授業の終わりにだけ振り返り（内省）をするのではなく、即時的に内省ができるようにすることを促し、振り返り（内省）の欄を設けずに多様な振り返り（内省）ができるように配慮した。

②　「どう生きるか」の特性に合わせた学習評価（ルーブリックの作成）

資質・能力が育まれたかどうか、年間を通してどのように児童生徒は成長したのかを見届けるための指標が必要である。「どう生きるか」で設定される探究的な学びは、それぞれ展開や出口の形が異なるため、全職員で資質・能力が育まれたかどうかを検証することは、画一的な方法、例えば、点数化（いわゆるペーパーテスト）や学年統一の作品による評価には馴染まない。一方で、教師の単なる主観による評価に陥ることも避けなければならない。

そこで、目標となるパフォーマンスを収集し、整理すれば、全職員で理解が進むと考え、「自己実現に向かうための資質・能力」がどのようなものであるか、どう育めばよいかを全職員で共有できる方法として、ルーブリックを用いた評価方法を採用した。

探究的な学習の場合、学習者自身が問いを設定することが重視され、単一の作品で適切なルーブリックを作ることは困難であるため、「どう生きるか」のルーブリック評価表は、各学年年間１枚とし、「自己実現に向かうための資質・能力」である「問題解決力」「関係構築力」「貢献する人間性」ごとに３段階（素晴らしい・よい・がんばろう）とした。（次ページ表Ⅳ－１７参照）

単元の終わりごとに、ルーブリック評価表の見直しを行うことで、学習評価の充実を図るとともに、全職員で資質・能力を発揮した姿を共有することに努めた。

（表Ⅳ－17）ルーブリック評価表の一例（第７学年）

	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
3 （素晴らしい）	**自分が考えたことだけでなく、講話で知ったことや調べて分かったこと、実際に話したことなどの具体的な根拠を元に、他者の考えや価値観を尊重しながら、客観的な事実を踏まえて自分の考えを書くことができる。（２にプラスして、具体的な根拠が加わる。）** ・ 講師の話を聞いてなりゆきやその時の感情で、動物を飼ってはいけないということが分かった。不妊手術など、動物にとって嫌なことをすることもあると思うけど、それ以上に動物にとって楽しいことや嬉しいことを最大限にしてあげて、その生き物の命を背負えるようにしたい。 ・ 高齢者の方たちの話を聞いて、その大変さを知ることができた。例えば、財布からお金を出しづらかったり、字が書きづらかったりすることが分かった。これまではレジなどで、高齢者の人たちにイライラしている自分がいたけど、次からは、少し待って、何か手伝えるようにしようと思う。 ・ 外国人の方と実際に対話をしてみて、自分が思った以上に言葉の壁が厚いということが分かった。話がもっとよく伝わるように、「やさしい日本語」を、意識して使えるように心がけようと思った。	**実社会で活動する人や仲間の考えを聞いたり、自分の考えを筋道立てて伝えたりする中で、対立やジレンマに対して、互いに納得できる考えを創り出したり、双方の考えを取り入れたりしながら自分の考えをもって、他者のために活動することができる。（２にプラスして相手との納得解をつくったり、相手を受け入れたりする表記が示されている。）** ・ 岐阜駅には、多様性に対応するためのたくさんの配慮や設備があった反面、点字ブロックの上に駐輪する人がいるなど、市民の思いやりが行き届いていないところが見つかった。たくさんの人がよりよく生きられる工夫を増やすだけでなく、自分たちの意識も変えていきたい。そのために、ぼくはまず、仲間の話をよく聞くことから行動を始めている。さらに、そのような方たちの話を直接聞きたいと思った。 ・ 岐阜市には英語や韓国語などの、外国の言葉での案内があった。しかし、岐阜市にはベトナム人ブラジル人が多いことが分かった。英語が読めない人たちのために、それらの言葉をもっと掲示したいと思ったし、なぜその表記がないのかももっと知りたいと思ったので、インターネットで調べてみたが、答えがなかった。もっと詳しく調べてみたい。	**自分や身近な社会のよさに気付き、よりよい社会にするために努力する人々に敬意をもちながら、自分にできることを、仲間や社会に生きる人々と共に行動しようとしている。（２にプラスして、誰かの役に立ちたいという思いを表現しながら、それを行動への要因としてつなげている。）** ・ 私にとって、戦争、子供兵、地雷などの言葉は自分には関係ないと思っていた。しかし、今世界中では子供兵となって、戦争に参加している子供がいることを知り、自分たちとの違いを感じた。私たちは、今このような現状がある中で、知ることや考えること、感じること、そして自分なりに動くことが大切だと思った。私は、はがきの書き損じで、募金ができることを知ったので友達に呼びかけながら、みんなでやってみたい。 ・ 障がい者の方たちも色々な人がいることが分かった。これまでは障がい者を一くくりに考えていて、その人の中身まで見れていなかったから、人の中身を見るようにしたら多様性につながると思う。偏見をもたず、誰もが生活しやすい環境にするために、ポスターを作って掲示することなどを通して、人から偏見をなくすための活動をしてみたい。
2 （よい）	**他者の考えや価値観を尊重しながら、自分の知識だけを踏まえて、考えや思ったことなどを書くことができる。** ・ 不妊手術など、動物にとって嫌なことをすることもあると思うけど、それ以上に動物にとって楽しいことや嬉しいことを最大限にしてあげて、その生き物の命を背負えるようにしたい。 ・ 高齢者が大変だということは何となく分かっていたつもりだった。その方たちの立場に立って行動できる人になりたいし、もっと多くのことを調べていきたいと思った。 ・ 外国人の方たちが日本に住んでいて、満足している人が多いと考えていた。しかし、その方たちに対する差別もあることが分かり、日本人はより外国籍の方のことを理解した方がよいと思った。	**実社会で活動する人や仲間の考えを聞いたり、自分の考えを筋道立てて伝えたりしながら、自分の考えをもって他者のために活動することができる。** ・ 外国人の方に話を聞いて、これから色々な視点をもって物事を見るようにしたいと思った。それを学校の生活に生かしたいし、自分の周りの外国の方々ともうまく接していきたい。外国人ではないが、実際に班の仲間と対話する中で、相手の意見を理解しようと、要点をメモすることができた。 ・ 障がいのある方の話を聞いて、私は周りをよく見ていきたいと思った。たとえば、電車などで席を譲るなど、その人のためになることをするために、気付いたら声をかけていきたいと思ったので、自分の周りの人を意識するようにしている。	**自分や身近な社会のよさに気付き、よりよい社会にするために活動している人々の思いを知り、自分にできることを具体的に考えて行動しようとしている。** ・ 高齢者の立場になって高齢者体験を体験してみると、普通にできることも、年をとるとあまり出来なくなることが分かった。なので、今の生活で自分にできる勉強や友達関係をよくすることなど、毎日を大切に生きていきたい。 ・ ○○さんは障害をもっていても、大変なことを頑張ろうとしている。自分も苦手な勉強や食べ物の好き嫌いなどから逃げず、多くのことを頑張っていこうと思う。 ・ 高齢者の方は、体の都合で動きにくいということを実感した。コンビニやバスの乗車時に、高齢者の方たちが困っていたら助けるようにしたいと思った。また、その意識をもって、普段からそのような方を探すことをやっていきたいと思った。
1 （がんばろう）	**自分の考えや思ったことなどを書くことができる。** ・ 動物が殺処分されてかわいそう。 ・ 外国人の困り感を知れてよかった。 ・ 自分にとって当たり前なことが、普通ではないことが分かった。 ・ 外国人には優しくしないといけないから、今度会ったらそうしていこうと思った。）	**実社会で活動する人や仲間の考えを聞いたり、自分の考えを伝えたりしながら、自分の考えをもって活動することができる。** ・ 外国人の方に話を聞いて、もっとその内容を知りたいと思ったので、インターネットで調べることができてよかった。 ・ 障がいのある方の話を聞いて、大変さが伝わった。この講話を聞けてためになったからよかった。分かったことをメモで残すことができたので、役立てていきたい。	**自分や身近な社会のよさに気付き、自分にできることを考えようとしている。** ・ 自分の近くにも外国人や高齢者がいて、接することもあるので、なるべく優しくしていこうと思った。 ・ 講話を聞いた○○さんの大変さが分かった。体に障がいがあるということは大変なことなので、自分にできることを探していきたい。 ・ 今日対話した○○さんは、一生懸命頑張って活動をしていることが分かった。とてもすごいと思った。
0	・ 活動が行われていない。	・ 活動が行われていない。	・ 思いがもてていない。

③　教師と児童生徒が共有するための教室掲示の常掲

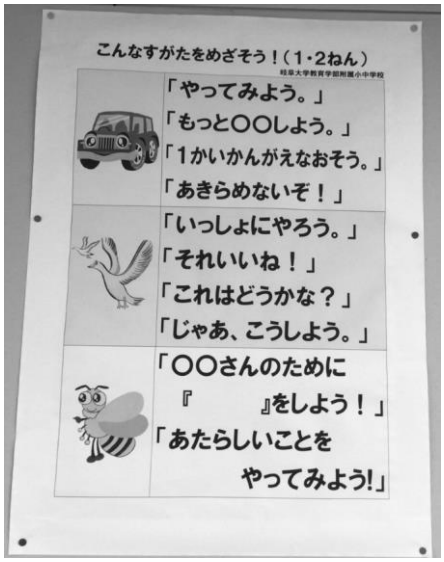
令和５年度の教師への質問紙調査の中で、「どう生きるか」の指導を進めていく上で資質・能力が付いているかどうか、自身の指導方法が正しいかどうか不安であるという気持ちをもつ教師がかなり多くいることが明らかになった。教師が不安な気持ちのまま指導を続けることにより、児童生徒に対して適切な価値付けを行うことができず、児童生徒が資質・能力が伸びたことの自覚につながらないと考えた。

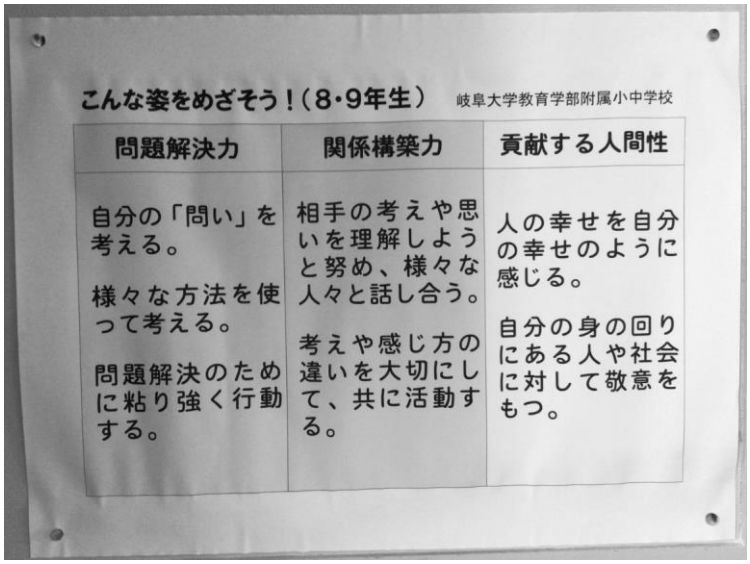
この教師も子供も不安な中で学びを進めている状態は、学びの目標を教師も子供も分かっていないことであると捉えた。これまでに「目指す子供の姿」「資質・能力」「発揮してされている姿」「教師が見届ける視点」「学年別の発揮した姿」等を明らかにしてきたが、この仕組みや内容が教師に分かりづらいことが見えてきた。

そこで、不安が解消された状態で学びを進めるために、教師も子供も何のためにどう生きるかの学びをするのかが共有されており、同じ方向を向いて学びを進めている状態をつくり出す必要があると考え、教師と児童生徒が共有できる目標となる言葉を、いつも見える状態（掲示物として常掲してある状態）にしようとした。

まず、目標となる言葉をルーブリックの記述語を基にして、それぞれの学年の児童生徒が分かるような言葉に置き換えることを試みた（写真Ⅳ－４、次ページ表Ⅳ－１８参照）。そして、それらの言葉を用いて教師と児童生徒が共有を進め、「こういう力（自己実現に向かうための資質・能力）を付けるために、こんな学びをしているよ。」「この学びを続けていけば、将来の〇〇につながるよ。」という説明を学年に応じた形で行ったり、「どう生きるか」の学びの場面だけでなく、日常生活の中でも掲示に基づいて児童生徒に価値付けたりするようにした。

さらに、いつも見える状態にしておくことで、教師がどんな力を育てているのかを意識して授業に臨むことや、振り返り（内省）の場面などで、どの程度効果があがっているか子供が自覚できるようにする。



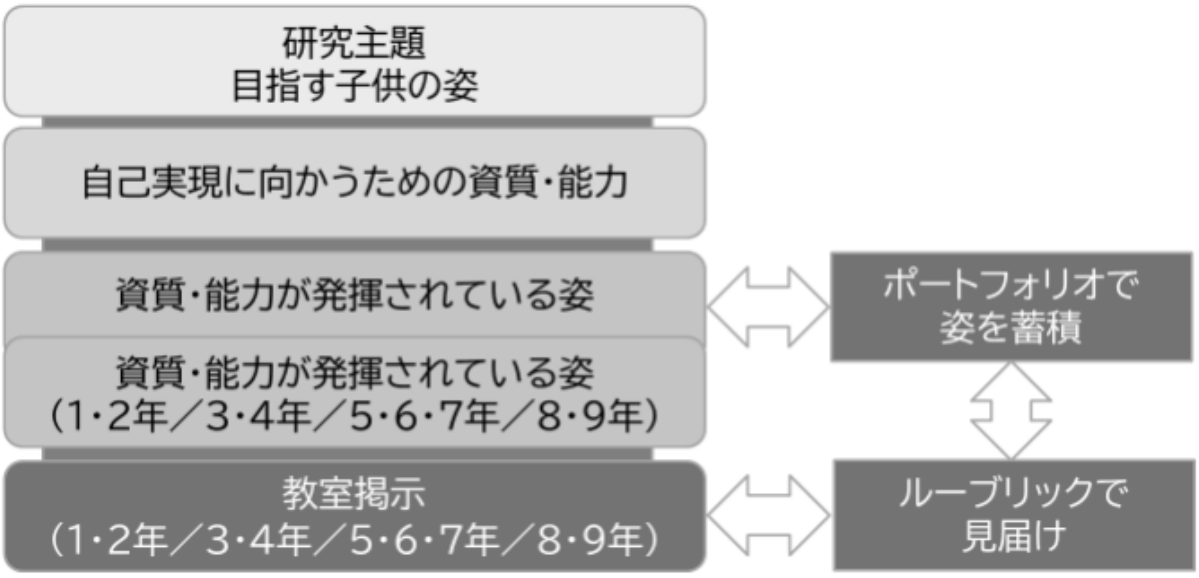


（写真Ⅳ―４）常掲してある教員と児童生徒が共有するための教室掲示
（左：第１・２学年、右：第８・９学年）

（表Ⅳ－18）教員と児童生徒が共有するための教室掲示一覧

	第1・2学年	第3・4学年	第5～7学年	第8・9学年
問題解決力	「やってみよう。」 「もっと〇〇しよう。」 「１回かんがえなおそう。」 「あきらめないぞ！」	・問題を見付ける。 ・解決する方法を考える。 ・あきらめず何度も行動する。	・自分の問いをもつ。 ・問題解決に向けて自分なりの願いをもつ。 ・問題をどのように解決すればよいか考える。 ・問題解決のために粘り強く行動する。	・自分の「問い」を考える。 ・様々な方法を使って考える。 ・問題解決のために粘り強く行動する。
関係構築力	「いっしょにやろう。」 「それいいね！」 「これはどうかな？」 「じゃあ、こうしよう。」	・相手の考えや気持ちを理解する。 ・お互いが気持ちよく行動する。	・自分の考えを伝える。 ・願いや考えを聞いて、それに対して感想をもつ。 ・考え方や感じ方の違いを大切にして、活動する。	・相手の考えや思いを理解しようと努め、様々な人々と話し合う。 ・考えや感じ方の違いを大切にして、共に活動する。
貢献する人間性	「〇〇さんのために『　』をしよう！」 「あたらしいことをやってみよう！」	・お互いのよさに気付き、自分にできることを見付けて行動する。	・互いのよさや頑張りを認め合う。 ・自分の周りにある人や社会のために考えて行動する。	・人の幸せを自分の幸せのように感じる。 ・自分の身の回りにある人や社会に対して敬意をもつ。

「どう生きるか」の目標を具現化するために、整理したものの関係を図に表すと、図Ⅳ－９のようになる。研究主題や目指す子供の姿は抽象的な表現であり、そこから下へ降りていくにつれて、より児童生徒の姿が具体的になっていく。児童生徒の姿をポートフォリオとルーブリックを用いて見届け、資質・能力が適切に身に付いているかどうかを検証していく。



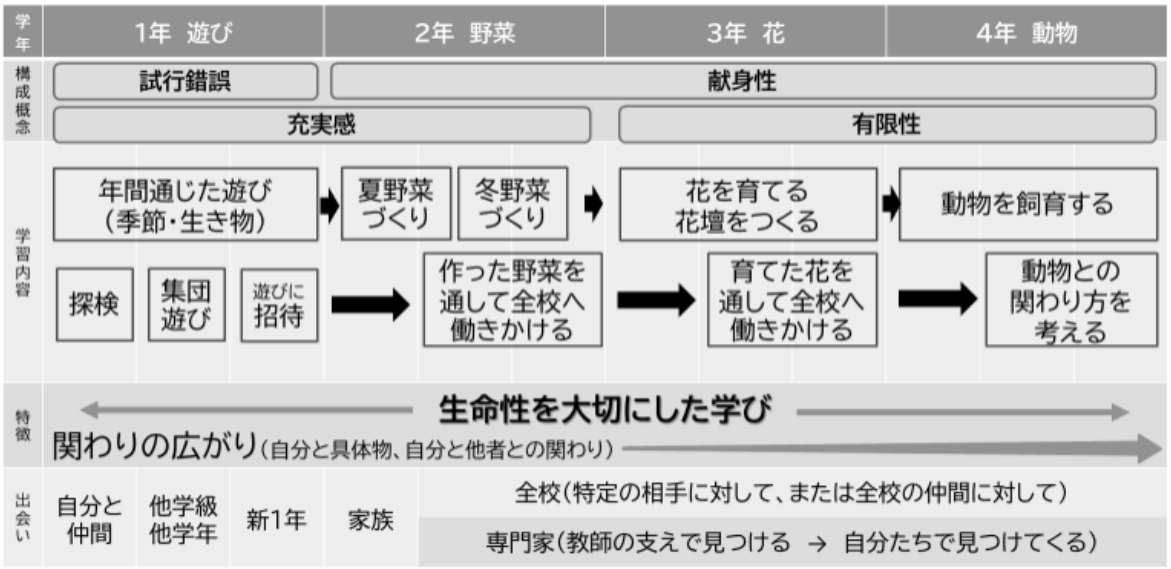
（図Ⅳ－９）どう生きるかの目標を教師と児童生徒で共有し、学びを進めるために準備したもの

４　Ⅰ部（第１学年～第４学年）で実践した教育課程の内容

（１）　Ⅰ部のカリキュラム全体像

Ⅰ部（第１学年～第４学年）のカリキュラムの特徴は、第１学年は遊ぶ活動、第２学年は野菜をつくる活動、第３学年は花を育てる活動、第４学年は動物を飼育する活動を年間通じて行い、最初は育てたり飼育したりするなど、対象に深く関わる（レリバンスを高める）活動が中心となる。そして、学びが進むにつれて、それらの対象を通して全校に働きかけるといった学習内容に発展していくのが特徴である。（次ページ図Ⅳ－１０）

また、生命性（体験のあとになって、「ああ！」とか「おお！」としか、言葉にならざる表現でしかこの世界につなぎ留められない溶解体験）を大切にした遊びや栽培・飼育体験によって、生きている世界との連続性を生み出し、喜びを抱かせることをねらいとしている。



（図Ⅳ－10） Ⅰ部（第１学年～第４学年）のカリキュラム全体像

（２）第１学年の実践

①　第１学年のカテゴリーの設定

第１学年では、「どう生きるか」との出会いの学年であるため、以下の二点を大切にしてカテゴリーを設定した。一つ目は、幼児期までの経験と円滑に接続できることである。二つ目は、身近な人や自然と関わりをもちながら探究できることである。これらを大切にして、第１学年のカテゴリーを「遊び」と設定し、探究を進めることとした。

②　第１学年で育みたい資質・能力

（ア）　問題解決力

願いに合った遊びを目指すことを通して、よりよい遊びになるように工夫したり、自分ができることを考えたりし、やり切ることができるようにする。

（イ）　関係構築力

遊びの中で生じる「ジレンマ」や「エラー」に対して、より願いに合った遊びに近付けるための話合い活動を通して、仲間の考えを肯定的に聞き、よりよい考えを生み出し、活動することができるようにする。

（ウ）　貢献する人間性

願いに合った遊びを目指すことを通して、自分のよさに気付き、自分や仲間が幸せになるための方法を考え、仲間と共に行動しようとする態度を養う。

③　第１学年で形成したい構成概念

（ア）「人との関わり方・態度」に関する構成概念

試行錯誤・・・【定義】願いを実現するために、いろいろなことを試すこと

（イ）「探究の過程」において必要だと考えられる構成概念

充実感・・・【定義】やりきった後には、よかったなあと感じられること

④　第１学年の実践の具体的内容

（ア）　単元「いきものとなかよし」について

岐阜大学教育学部附属小中学校から南へ 500m ほど進むと、加納城址公園がある。江戸時代、加納藩の藩主家の居城であった城跡であり、国の史跡に指定されている。公園と呼ばれているが、ブランコや滑り台といった遊具は無く、約 15000 ㎡の広大な土地に草木が生い茂り、四季の変化に伴って生き物が表情を変える豊かな自然に包まれた場である。

また、本校の児童は、30 ヶ所を超える就学前教育機関から入学してくる。どの就学前教育機関でも遊びを大切にしてきているが、その遊び方や内容、子どもたちの経験は多様である。遊ぶ意義や教育的意義が重視された遊び、遊びこむことを大切にした遊びなどがある。そのため、入学当初は、児童が経験し培われてきた感性や知識及び技能は様々であった。

加えて、岐阜市内等の異なる区域から通学してくるため、入学当初から児童全員で共有できるような「わたしたちのお気に入りの場所」が無いことも本校の特徴である。そのため、年度始めに学年全員で加納城址公園へ行き、近くに魅力的な公園があることに気付くことができるよう計画した。

初めて加納城址公園に行ったのは、５月上旬である。４月の「どう生きるか」の単元「がっこうであそぼう」では、学校の運動場を散策した。タンポポやサクラを見たり、ダンゴムシを捕まえたりしながら、児童が春の自然を肌で感じることができた。「もっと、たくさんの生き物と出会えそうな公園へ行こう」と教師が提案し、一回目の校外学習ではあえて遊びの計画を立てずに公園へ向かった。その理由は二つある。一つは教師が児童の実態を掴むためである。もう一つは、遊びを制限するのではなく、各々が遊びたいように遊んでよいことを実感させるためである。

校外学習で公園へ着くと、すぐに走り回る児童、虫さがしを始める児童、どう遊んでよいか分からず何となく仲間についていく児童など、児童の様子は多様であった。また、一人で木の幹にある樹洞をじっと見ている児童がいる一方で、５、６人で集まり、長いU字型の木の枝をブランコとして順に集団で遊びながら楽しさを共有している児童も見られた。このように動と静、個と集団のコントラストが観察できた。

力強く根を張り、空高くまで背を伸ばす大木に触れ、自然と一体化している「溶解体験」に没入する児童、気の合う仲間と好きな遊びを共有することで他者（集団）との境界が溶けたように遊びこむ児童の姿が見られるこの加納城址公園との出会いは、彼らの心に残るものであったと見取ることができる。何故なら、遊び終えた後の振り返りで、「みんなと実がついている木を揺らして、木の実を落として遊んだのが楽しかったよ」「昨日、雨が降ったから木に（雨の）雫のかざりがついていてきれいだったよ」という声があったからだ。「自然を生かした遊びをする」「加納城址公園だからこそできる遊びをする」ことを、これからの単元で大切にしていきたいという願いを教師と児童が共有して本単元がスタートした。

本単元は毎月、加納城址公園へ行くことで、四季の変化による自然の移り変わりを体感できることも魅力の一つである。年間を通して遊びを繰り返し体験することで、遊びが更新され、生き物の変化があることにも気付き、「生」を感じたり、加納城址公園が児童一人一人にとって愛着のある場所になったりするのである。

繰り返し加納城址公園で遊び、様々な気付きを獲得していくことで、７月からは遊びを計画して向かうように試みた。前回と同じ遊びをしながらより楽しくなるように工夫する姿や、仲間の遊びを真似て自分の好きな遊びを見つけたり、気の合う仲間と遊ぶ楽しさを見いだしたりする姿を目指したためである。

また、どの月でも必ず同じ場所で集合写真を撮り教室に掲示した。そうすることで、単元を振り返りながら自然の変化を可視化できるからである。さらには、児童が自分自身の変容も気付くことができるからでもある。３月には、児童が「加納城址公園は、わたしたちのお気に入りの場所」と感じ、次年度の新一年生に紹介したくなるような姿も想定した。

（イ）　児童の遊びの変容が見られた場面

児童の遊びは多様である。遊ぶ回数を重ねたり、季節が変わったりするごとに新たな気付きがあり、児童が計画した通りに遊ばない姿もあった。

児童Ａは、歴史への興味関心が強い児童である。普段の休み時間も「侍ごっこ」という遊びをしていた。そこで、７月の計画を立てるとき、迷わずに「侍ごっこ」と決めた。自然を生かした遊びにするため、「草木に隠れながら・・・」と呟いていた。当日、彼の手には段ボールを切り抜いた自作の刀があった。

しかし、授業が始まると、普段の休み時間と違って一緒に「侍ごっこ」をする仲間がいなかった。他の児童は大地を駆け回りながら蝶を追いかけたり、「秘密基地づくり」と称して茂みの中に向かってしまったりしていたのだ。教師が、「今日はどうする」「別の遊びに変えてもいいんだよ」声をかけると、児童Ａは刀を置き、茂みの中へ入って行った。児童Ａが計画に固執せず、自分が楽しめる遊びに没入できるよう、柔軟に修正できるように声をかけた。

９月の遊びを計画するとき、児童Ａは「木登り」を計画した。教師が、「落ちると危ないね。大きな怪我をしてしまう遊びは難しいね」と伝えると、児童Ａは「ヘルメットを持っていけばよさそうだ」と、遊びを実現するために工夫し、家へ帰って両親の許可をもらってきた。

そして、遊びの当日、児童Ａは木登りができそうな木を見付け、ヘルメットを被りながら登り始めた。同じ遊びを選択していた仲間と一緒に登ることができるように、ロープの端を枝に巻きつけ、次に登ってくる仲間へもう一方の端を渡していた。一緒に登ったときの笑顔は、まさに自然や他者（集団）との境界が溶けた「溶解体験」の瞬間であった。

児童Ａは 10 月と 11 月も木登りをした。ロープがないときは蔓をさがして引き抜き、ロープ代わりに用いた。自然の中で遊びこむからこそ、自分の願いを実現するために問題を解決しようとする力が養われた。

他の児童は、「木の実でお店屋さん」「お花を摘んでお花屋さん」「秘密基地」「虫さがし」「自然旅ごっこ」と称した遊びを展開してきた。どの遊びも、自然を生かしながら一人一人の個性が表出された遊びであった。季節によって思いどおり遊べなかったときは、別の遊びを見いだしたり、計画を修正したりする柔軟に工夫する姿も見られた。

（ウ）　「ジレンマ」や「エラー」と道徳的諸価値による価値判断が見られた場面

本単元の中での最大の「エラー」は「計画通りの遊びができない」ことである。この「エラー」を乗り越えるときには問題解決力が発揮される。一方で、「ジレンマ」を乗り越えるときには、主にこれまでの経験や体験、道徳的諸価値を基に判断していく。

「木の実でお店屋さん」をしていた児童Ｂは同じ遊びをしている児童Ｃ、児童Ｄと木の実を探していた。センダンの木の下に緑色の木の実が落ちていることに気付くと目を輝かせながら拾い始めた。少しすると、木の実が落ちていた場所のすぐ上にセンダンの枝が伸びていてたくさん実っていることに気付いた。三人とも「これを落とせば実がいっぱい手に入る」と考えていた。児童Ｃ、Ｄはジャンプして掴もうとしたり、落ちている枝を拾い、何とか落とせないか試行錯誤したりしていた。その中で、児童Ｂはやや躊躇っているように見えたため、次のような対話をした。

〈木の実を採ることに躊躇う児童Ｂと教師の対話〉

教　師：どうして採ろうとしないのかな。一緒に採ったらどう。

児童Ｂ：だって、かわいそうだもん。

教　師：そっか。何がかわいそうなの。

児童Ｂ：木だよ。だって、一生懸命（実を）つくったのに、こんなに採ったらかわいそうだと思うの。

教　師：たしかにそうだね。でも欲しいもんね。きっと、他の二人も木の実が欲しいから採ろうとしているよね。二人にも話してみよう。

児童Ｂの中にある「木の実を採って遊びたい」という願いと「命ある植物を大切にしたい」という願いの間で葛藤していることが分かった。どちらの思いにも共感したうえで、児童Ｃ、Ｄに児童Ｂの思いを伝えた。もちろん、「どう生きるか」の学習では、道徳的諸価値を教師が押し付けたり、強い誘導をかけたりすることは極力避けている。教師も、児童とともに探究をする伴走者だからである。三人は短い話合いの中で、「他の場所に落ちている木の実を探そう」という全員が納得する結論を見いだし、別の場所へ移動していった。

６月の遊びでは、児童Ｅがひたすらダンゴムシを探していた。遊びを終える頃には両手いっぱいにダンゴムシを捕まえていた。ダンゴムシをもつ児童Ｅを見た周りの児童が、「そんなに捕まえてどうするの」と問うと、児童Ｅは「ダンゴムシを持ち帰りたい」と伝えた。児童Ｅは長い時間をかけて捕まえたダンゴムシを逃すことが惜しかったのだ。家や学校で飼いたいという想いもあった。けれど、仲間と話し合う中で、「最後まで飼えなくてダンゴムシが死んでしまうかもしれない」という結論に至り、生き物の命を大切にする判断をし、ダンゴムシを元いた場所に戻した。

同様に、お花摘みをしていた児童が必要以上に花を摘もうとしなかったり、柵を越えたり石畳に登ったりしないという公園の約束を守ったりしている姿を見たとき、「～と願っていたのに、どうして～しないの？」と教師が問い続けることで児童が価値判断した基準を自覚させることができた。その判断を価値付けたり、全体に広めたりすることも資質・能力を育成していく一つの手立てだと考察できる。

（エ）　生命性を深めた学びの場面

児童Ｆは、秘密基地をつくって遊ぶチームの一人であった。これまでの授業では、丘の中腹にある茂みの中で、他の仲間に見られないような場所を秘密基地のベースとしていた。しかし、今回は公園の中でも人目につくところに生えている木を拠点に、同じチームの児童と遊びに没入していた。児童の背の高さほどにある樹洞が児童Ｆを魅了したのだ。その樹洞に、公園中で拾ってきたお気に入りの紅葉した葉やくねくねとした螺旋状の枝をぶら下げたりして遊んでいた。これまでの秘密基地遊びとは異なった遊び方であったが、自然の中に溶け込みながら遊びこむ様子を見ていると、この大木が児童Ｆにとって特別な、愛着のあるものとなったことが想像できた。児童Ｆが、この大木と一体化した「溶解体験」の瞬間であった。

児童Ｇは、この日「虫さがし」をしていた。同じチームの仲間とともに、自然の中を散策して虫をさがしていたが、しばらくすると、彼は満面の笑みで教師の前に現れた。そのズボンと靴には大量の「くっつきボンボン」（アレチヌスビトハギの種子のこと）が付いていた。「見て！くっつきボンボンがいっぱい！」と、周りの子に自慢しながらケラケラと笑い合っていた。児童Ｇは、10 月の授業でも同様の遊びをしており、「前よりもくっつきボンボンが減ったな」と季節による変化を実感していた。

10 月の授業後は、学校へ帰り、業間や昼休みの時間を全て費やしてアレチヌスビトハギの種子を取り除いていた。それでも取り切れず、家へ帰った後、母親とも一緒に取った。それだけ大変な思いをした経験があるにも関わらず、この日も草むらの中に自ら入っていき、ズボンの色が分からなくなるくらいいっぱいにアレチヌスビトハギで遊んできた。「この後、取るのが大変だな」「おうちの人に何て言われるかな」といったことを考えることなく、ひたすら自然と一体化する遊びに没入していた。そして、そのズボンを近くの仲間や授業者、同行した他の教師に見せたり、ズボンを擦り付けて「くっつきボンボン」を移し変えたりすることが何よりも楽しかったようだ。

おそらく、上述のような体験は、社会生活を営む上で役に立つ有用な知識や技能ではないだろう。しかし、この日の振り返りでは、「今日楽しかったことは、くっつきボンボンをつけたことです」と語った。気の合う仲間と好きなことをして楽しめたこの瞬間、児童Ｇはきっと「生きるに値する時間が人生にある」ことを実感したに違いない。10 月の時とは違う花を見つけて喜んだり、思うように虫を見つけられず別の遊びに切り替えたり、仲間と一緒になって自然の中へ溶け込んでいく児

童（＝生命性を大切にした学びに向かう児童）をたくさん見ることができた。

⑤　実践の検証

繰り返し加納城址公園へ通ったが、どの季節に公園を訪れても児童たちは自然遊びに没入した。行く度に新たな気付きがあり、いつも児童たちは「もう終わりなの」「もっと遊びたい」と声を漏らしていた。遊びの場が教室や学校内だけでなく、自然に触れられる加納城址公園に設定したことが、児童の主体的に遊ぶ姿につながっている。

また、保護者から、連絡帳や電話で「どう生きるか」に関わるコメントをもらった。

まず、連絡帳でのコメントは、ゴールデンウィーク後であり、以下の内容であった。

「息子が、『どうしてもゴールデンウィークに加納城址公園へ行きたい。お母さんたちに見せたいものがある』と言うので、家族で行ってきました。自然に包まれてとても素敵な場所でした。何より、息子が嬉しそうにクラスの子たちと遊んだ内容を説明してくれて、とても嬉しかったです。」

児童が言葉ではうまく説明できないような体験を家族と共有したくて、どうしても現地へ行きたいという児童の思いが溢れていたに違いない。

次に、別の保護者からは、電話で「大変素敵な経験をさせていただいていて感謝しています。私の知らない娘の姿を知ることができました。地域にママ友がいますが、このような教育活動を小学校でされていることは聞いたことがありません。とても意義のあるものだと思い、感謝しています。」というお話をもらった。加納城址公園へ行く度に、「くっつきボンボン」を付けて帰ってきたり、服を汚してきたり、遊びに必要な道具を一緒に準備したりすることは、保護者にとって負担は小さくないはずである。しかし、それ以上に遊びこむことから得られる感情や学びには、教育的価値があることに保護者が気付いたと思われる。

また、遊びが計画通りいかないときがあっても、諦めずに楽しむことができるよう工夫する力や、仲間と協働して遊ぶ力、自然や仲間を大切にしようとする人間性が養われた。それらの力が、他の教育活動、体育的行事や学級遊びの中でも発揮された。

本校のスタートカリキュラムでは、新領域「どう生きるか」の学習において、児童の姿を各教科の概念で見取ったり、教科で育む資質・能力と結び付けたりするだけではなく、幼児期の学びの上に実践を積み重ねることを大切にしてきた。だからこそ、児童が主体的に探究したり、ときには仲間とともに共主体となったりしながら、「生命性」を深める教育活動を展開することができた。また、何度も加納城址公園を訪れ、自然との境界が溶けていく体験を繰り返すことで、公園に対して愛着が湧き「わたしたちのお気に入りの場所」となった。

この活動の留意点として、まずは、安全面への配慮は十分にしていく必要があることである。これまでの実践で大きな怪我をすることは無かったが、加納城址公園は整地されたような公園ではないため、安全に遊ぶことができるよう、長袖長ズボンを推奨したり、遊び方によってはヘルメットを持参したりすることが必要である。

また、遊びを計画する時間と振り返る時間を設けてきたが、それらの方法には、それぞれの視点や実施するタイミングなどにおいて検討の余地がある。児童が遊びに没入するときにこのような時間を位置付けると、児童と公園の間に境界がつくられてしまう。言葉にならざる体験をどのような形で振り返り、次の遊びや日常生活につなげていくことができるのか、検討が必要である。

岐阜大学 GIFU UNIVERSITY

2年生　どう生きるか「野菜」

願い・野菜の決定 → 野菜の世話 方法の選択・問題についての対話 → 野菜の収穫 振り返り・今後の見通し → 願い・野菜の決定 栄養教諭との対話・願いの明確化 → 野菜の世話 方法の選択・問題についての対話 → 見つめ直す 農家の方から方法や生き方を学ぶ → 収穫・給食への提供 食べた人の声から達成感を味わう・願いの明確化

自分が育てたい野菜をつくろう

・自分の好きな野菜をつくりたい
・家族に食べてほしい

・収穫できてうれしい
・食べたらおいしかった
・家族に喜んでもらえた

・方法がわからない
・野菜が大きくならない
・野菜を虫から守りたい

・思ったよりも野菜がたくさん収穫できなかった
・夏休みにお世話に進んで来ることができず、収穫できなかった

虫から野菜を守るために
ボール遊びから守るためにどうする？
自分も相手も考えた伝え方はどうすれば良い？

野菜を給食に出して、全校を笑顔にしよう　Part1

・前の2年生みたいに野菜を給食に出したい
・全校を笑顔にしたい
・おいしい野菜をつくりたい

・全校に喜んでもらえた
・嫌いな子も食べ切ってくれた
・コマツナと向き合い、仲間と協力して良かった

・なかなか芽が出ない
・大きくならず、給食に間に合わないかもしれない
・これ以上どうしたら良いかがわからない

育ってないチームが困っている。みんなはどうする？
足りないときは、農家さんのコマツナを入れるのか？
コマツナと向き合えている自分になれているのか？

Part2へ

・その子が食べられる分を食べてほしい
・もっと一人一人の思いを知ること、こちらの思いを伝えることを大切にしたい

・食べ残しがあったからもっと食べ残しを減らしたい

食べ残しを減らすためにはどうする？
同じクラスでコマツナを残した仲間の気持ちを考えたとき、本当に食べ切ることが大切なのか？

GIFU UNIVERSITY Elementary / Junior High

①　第２学年のカテゴリーの設定

第１学年では、「遊び」を通して、自分が興味・関心をもった対象に楽しみながら関わり、自分の世界を広げてきた。第２学年では、「野菜」をカテゴリーと設定した。「野菜」というコンテンツが、児童にとって身近であり、収穫や食べたときの喜びを味わえたり分かち合えたりできるよさが、児童の発達段階に適していると考えたからである。一人一人が願いをもち、試行錯誤をしながら探究を進めた先に、「できた」「やってよかった」という達成感を味わうことで、探究することのよさを実感する子を生み出したい。

②　第２学年で育みたい資質・能力

（ア）　問題解決力

願いに合った野菜を栽培する活動を通して、見通しをもちながら試行錯誤を続けたり、実現可能かどうかを立ち止まって考えたりし、やり切ることができるようにする。

（イ）　関係構築力

願いに合った野菜を栽培する中で生まれたジレンマやエラーについて考える活動を通して、解決するために必要なことを伝え合い、よりよい考えを生み出し、活動できるようにする。

（ウ）　貢献する人間性

願いに合った野菜を栽培する活動を通して、育てる喜びや人を幸せにする良さに気付き、自他のために行動する態度を養う。

③　第２学年で形成したい構成概念

（ア）「人との関わり方・態度」に関する構成概念

献身性・・・【定義】自分の生活の中に「人・もの・こと」を据え、その対象に力を尽くすこと

（イ）「探究の過程」において必要だと考えられる構成概念

充実感・・・【定義】やりきった後には、よかったなあと感じられること

④　第２学年の実践の具体的内容

「自分が好きな野菜を育てたい」「家族に食べてもらいたい」といった、何のために育てるのか、誰に食べてもらいかをはっきりさせて野菜づくりを始めた。野菜を育てるための知識（例えば、畝の作り方や野菜の植え方）を調べ、土づくりや畝作り、野菜の苗植えを進めた。世話を続けて行う中で、よりよい世話の方法を考え、自分で選択して世話を続ける活動、畑に入ってくるボールからどうやって野菜を守るかを考える活動、鳥や虫から野菜を守るために何ができるのかを仲間と話し合う活動などを通して、願いの実現に向かっていく。そして、自分の手で育ててきた野菜を収穫し、収穫できた喜びや家で野菜を食べておいしかった実感を得ることで、これまでの取り組みを前向きに捉え、野菜づくりに対する充実感を得ることができた。

夏休み以降は、４月の児童の願いの中の言葉から「全校のために野菜を育てるプロジェクト」を実施することを決めた。給食に自分たちが収穫した野菜を使ってもらうために、調理室の見学や栄養教諭や調理員との対話を通して、食の安全を守る思いに気付いたり、より安全で美味しい野菜づくりを目指すために、外部人材と出会い、新たな解決方法を知ったりした。しかし、収穫された野菜が実際には虫に食べられていたため、全て使うことができず、給食で提供する量が足りていなかった事実を知り、その問題をどう乗り越えるかを考える場面も経験した。改めて収穫した野菜を栄養教諭や調理員に確かめて認めてもらい、これまでの取組の達成感を味わうことができた。

年度末には１年生と一緒に収穫体験をしたり、野菜の栽培の工夫を伝えたりする活動を通して、一緒に活動する１年生の言葉や嬉しそうな様子から、自分の成長を実感した。

（４）第３学年の実践（図Ⅳ－12）

①　第３学年のカテゴリーの設定

第２学年では、野菜栽培で試行錯誤を繰り返し、願いをもちながら仲間と共に活動することのよさを味わってきた。第３学年では、花の栽培を通して自分の願いだけではなく、他者の考えを受容しながら活動を進めることを大切にし、人のためになる経験を積むとともに、自分や仲間を幸せにする方法について探究していく。これまでの学びの過程とつながりをもちつつ、他者や自然についてより理解を深めることができ、児童の自己実現に向かうために必要な資質・能力を効果的に育むことができると考え、カテゴリーを「花」と設定した。

②　第３学年で育みたい資質・能力

（ア）　問題解決力

花の栽培を通して出会った問いをもとに、自分や仲間の幸せを生み出すために自分にできることを考え、やりきることができるようにする。

（イ）　関係構築力

花の栽培を通して、仲間の考えを肯定的に聞いたり自分の考えを相手や目的を意識して伝えたりしながら、ジレンマやエラーに対する互いに納得できる考えを生み出し、活動することができるようにする。

（ウ）　貢献する人間性

花の栽培や様々な人との触れ合いを通して、自分の長所や仲間の頑張りに気付き、自分や仲間の幸せを生み出す方法を考え、仲間と共に行動しようとする。

③　第３学年で形成したい構成概念

（ア）「人との関わり方・態度」に関する構成概念

献身性・・・【定義】自分の生活の中に「人・もの・こと」を据え、その対象に力を尽くすこと

（イ）「探究の過程」において必要だと考えられる構成概念

有限性・・・【定義】命には限りがあること

④　第３学年の実践の具体的内容

４年生から引き継いだ花壇や「かぞく」（異年齢集団）の４年生にもらった種をどうするか考えることから出発した。それらに加え、自分たちが調べて育てたいと願いをもった花を育てようとした。間引き、暑さ対策、水不足対策、虫対策、茎が折れてしまった花に対するケアなど様々な困難を乗り越えるために、また、全校の仲間に楽しんでもらうためによりよい花壇を作るために、必要な情報を集めたり、専門家に電話をして聞いて解決しようとしたりした。

花で仲間を笑顔にするために、イベントを計画したり、フラワーアレンジメントを作成したり、フォトスポットを校内に設置したりする活動を計画した。実際に活動した後に、振り返りを行い、自分のチームの活動を見直し、さらに明るく元気にするための活動を考え、準備を進めるといった探究サイクルを回していった。

年度末の締めくくり活動として、２年生や４年生を対象とした「思いを受け継ぐ会を計画した。２年生には、来年度の花壇づくりや花を育てる活動に対する心構えを伝えること、４年生には、一年間の活動を通して学んだことや感じたことを含めて、感謝の思いを伝える内容をまとめ、自分自身の成長を実感できるようにした。

どう生きるか『動物』　4年3組の実践

「飼育動物の幸せを考えて飼育活動をするには、もっと動物達のことをことを知らないといけない。」
「動物に関わる仕事をしている人を調べて、その人達にアドバイスをもらいたい。」

・調べていく中で、動物と関わる人の中には、動物の命を奪っている人もいることを知る

「私は動物の幸せを考えながら飼育動物と関わっているから、私達みたいに動物と関わる人が動物の命についてどう考えているのか知りたい。」

・学びの対象との出会いから課題の設定
・切実性のある学び

単元テーマ：自分達にとっての動物の命とは

動物に関わる人達との出会い（獣医師、保健所、猪鹿庁、食肉加工センター）

「猪鹿庁の人は、“自然や動物が好きだから動物をとっている”と言っているけれど、本当にそれでよいのかな？保健所の人のように“１匹でも多くの動物の命を救いたい”と言っている人もいるのに・・・動物の命を奪うことはよいのかどうかわからなくなってきた。」

・動物の命を考える中で、切実感から生まれた外部人材との出会い

「人間の命は大切にして、動物の命を大切にしないのはおかしい。動物の未来を消しているし、動物からしたら悲しい。」
「意味もなく奪うのはダメだけど、意味があって奪うのであれば仕方がない。」

「人間も動物も一緒に生きていかないといけない。」（共生）

・ジレンマとの出会い

あなた達にとっての動物の命って何？

「大切にしなければいけない、人間の責任の上にある、自分達に必要、支えてくれる

・単元テーマにおける自分達の答えを導き出す

C：動物に関わる人達は、それぞれの立場で動物の命に責任をもって関わっている。
T：みんなにとっての身近な動物は？
C：シャイニー・サン・マシュマロ・ツリー・げんき・みらい
T：みんなの飼育動物に対する責任って何？
C：幸せな生活をさせてあげること

責任

T：動物達から食べ物として命を与えてもらっているのはわかったけれど、飼育動物からも何かもらっているの？
C：癒しとか元気、可愛さなどをもらっている。
『動物→人間』

助けられている　支えられている

単元テーマ：飼育動物達のために自分は何ができるか

・新たな単元テーマの設定

①　第４学年のカテゴリーの設定

第３学年では、花の生命の美しさや尊さを実感してきた。そんな児童だからこそ、飼育動物に対する生命の重みと育てることへの責任を強く感じることができると考えた。第４学年では、飼育活動を通して、「自分の願い」から「自他の願い」というように視野を広げることで見えてきた問題の解決を目指して、今まで以上に飼育動物と関わり、動物のために自分は何ができるかを試行錯誤し、対話をする中で、動物の幸せを考え、自分はどうすべきかを探究した。

②　第４学年で育みたい資質・能力

（ア）　問題解決力

動物や人との関わりを通して出会った問いをもとに、自分や仲間、動物達が幸せに生きるために自分にできることを考え、やり切ることができるようにする。

（イ）　関係構築力

動物との関わりや動物に携わる人との交流を通して、根拠を基に自分の考えを伝えたり、仲間の考えを肯定的に聞いたりしながら、ジレンマやエラーに対して互いに納得できる考えや最適解を生み出し、活動することができるようにする。

（ウ）　貢献する人間性

自分と他者、自分と動物との関わりから、命の尊さやこれからの自分の生き方を見つめ直し、自分らしく行動しようとする態度を養う。

③　第４学年で形成したい構成概念

（ア）「人との関わり方・態度」に関する構成概念

献身性・・・【定義】自分の生活の中に「人・もの・こと」を据え、その対象に力を尽くすこと

（イ）「探究の過程」において必要だと考えられる構成概念

有限性・・・【定義】命には限りがあること

④　第４学年の実践の具体的内容

年度始めは、飼育活動のやり方を確かめ、自分たちだけでスムーズに飼育活動ができるようにすることと、動物との距離を縮めるために、動物と関わりを増やしていくことを目指した。その活動の中で、どんなことを大切に活動していくとよいのか、飼育活動でうまくいっていないことは何かを話し合い、改善する方法を交流した。

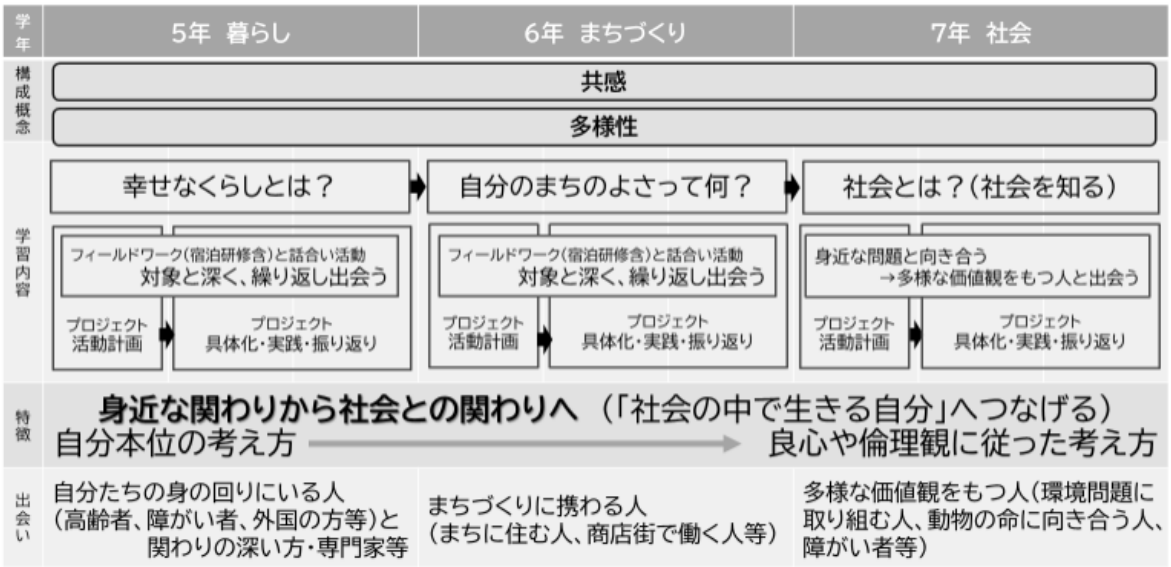
動物たちの命や幸せを考えたとき，自分たちは動物に対してどんなことができるのか考え、個人やチームで調査活動を進める中で、動物に関わる人の中には、動物の命を奪っている人の存在を知り、「自分たちにとって動物の命とは」というテーマを設定し、探究活動を深めていった。

獣医師、猪鹿庁（里山を保全するために活動している団体）、岐阜市保健所の職員、動物園の飼育員など、動物と関わる仕事をしている人の講話から、動物との関わり方について学び、「動物の命」とは何か、を考えた。児童は「『命を大切にする』という思いは、同じだけれど、考え方や関わり方はそれぞれ違うことが分かりました。」「『好きだから動物の命を奪う』という猪鹿庁の方の考え方はよく分かりません。」という考えをもち、命に対する考えを深めていくことができた。それと同時に、飼育している動物たちにも目を向け、こうしたいという思いをもち、動物たちに対する様々な工夫を行動に移していった。

年度の終わりには、３年生に飼育動物の引き継ぎを行う際に、１年間の学びを振り返り、「動物の命に対して責任をもって関わること」、「自分たちが動物たちを飼育してあげているのではなく、動物たちからも癒されたり、元気をもらったりという形で、助けられたり、支えられたりしてわたしたちは生きていること」を伝えることができた。

５　Ⅱ部（第５学年～第７学年）で実践した教育課程の内容

（１）Ⅱ部のカリキュラム全体像



（図Ⅳ－14）Ⅱ部（第５学年～第７学年）のカリキュラム全体像

Ⅱ部（第５学年～第７学年）のカリキュラムの特徴は、第５学年は身近な人の暮らしを見つめる活動、第６学年はまちづくりに携わる人やその社会を見つめる活動、第７学年は多様な価値観をもつ人とその人たちが住む社会に見つめる活動を年間通じて行い、宿泊研修を含んだフィールドワークと話合い活動を繰り返して、学びを深めていく指導計画を立てていくところである。

Ⅰ部は主に校内での活動が中心であったが、Ⅱ部は、身近な関わりから社会との関わりへと視野を広くしていく学びへと移していく。年度の始めに計画したプロジェクト活動を修正したり、実践して振り返ったりすることを通して、自分の在り方や生き方を見つめられるようにしていく。

（２）　第５学年の実践

①　第５学年のカテゴリーの設定

第５学年では、自分や身近な人の「暮らし」をみつめていく中で、地域にいる様々な人の暮らしに興味・関心を抱くようにする。そして、地域の人々と繰り返し関わることを通して、児童の中に願いが生まれ、プロジェクトが立ち上がる。そのプロジェクト活動で、新たに見つけたり、出会ったりした事実から問題を見いだし、解決に向けて、主体的・協働的に学びを進める。

②　第５学年で育みたい資質・能力

（ア）　問題解決力

暮らしを見つめ、よりよい暮らしを創造していく中で、自分で課題を立て、自分にできることを何かを考え判断し、解決に向けて実行することができるようにする。

（イ）　関係構築力

暮らしを見つめていく中で、また、ある人の暮らしをよりよくするためのプロジェクト活動の目的に応じて、他者とつながり、自分の考えを発信したり、他者の考えに共感したりしながら、互いに納得できる考えを生み出し、活動につなげることができるようにする。

（ウ）　貢献する人間性

暮らしにおける問題を「自分ごと」のように思い、少しでもその暮らしをよりよくするお手伝い

がしたいという態度を養う。

③　第５学年で形成したい構成概念

（ア）「人との関わり方・態度」に関する構成概念

共感・・・【定義】他者の体験・考え・主張などを、自分のことのように感じること

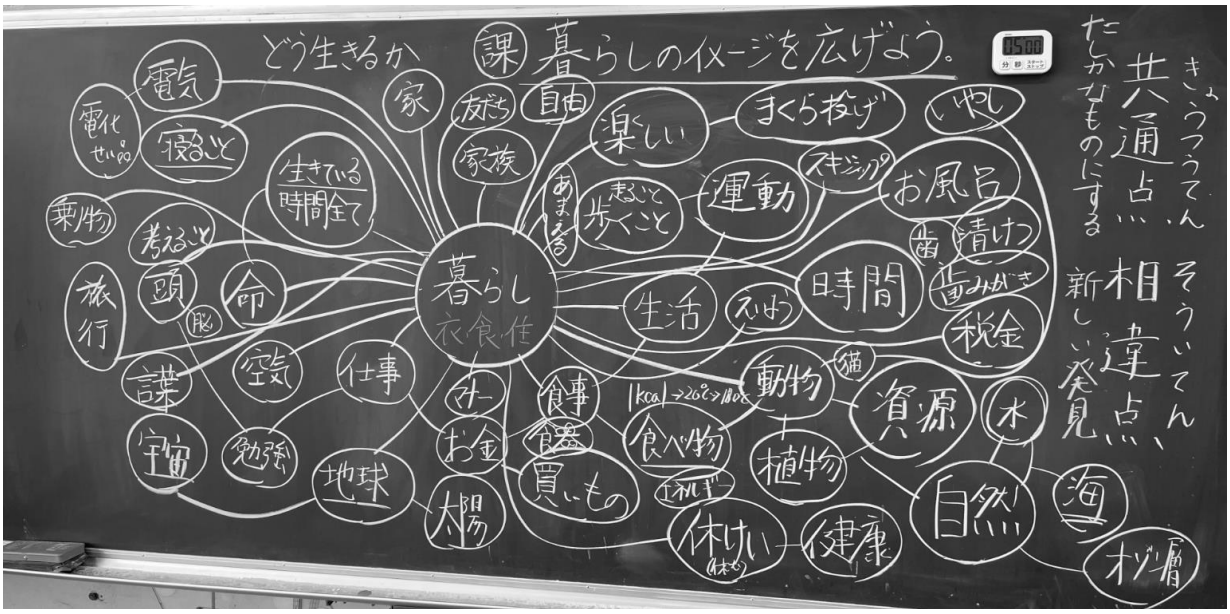
（イ）「探究の過程」において必要だと考えられる構成概念

多様性・・・【定義】違いと同じを認識できたり、違いを越えた同じを実現したりすること

④　第５学年の実践の具体的内容

（ア）「暮らしのイメージを広げよう」（課題の設定～情報の収集）

４月、第５学年の「どう生きるか」がスタートした。まずは児童にとって、探究領域「暮らし」が切実な学びとなっていくことを目指した。児童が学びの主体者となって、自ら学びの対象を決定していくことは、児童が学びに対して意味や意義をもつことにつながると考えた。そこで、児童の知的な興味・関心から生まれた問いを大事に、その問いを解決しながらフィールドワークに出て、そこに暮らす人と出会い、学びの対象を児童自ら決定していくこととした。４月の「暮らし」の学習スタート時に、児童に知的な興味・関心を抱かせ、そこから主体的な問いが生まれることを意図し教師は「みんなにとって『暮らし』ってどんなイメージですか」と問うた。



（写真Ⅳ－５）単元開始時の児童の暮らしに対するイメージ

児童は、「生活イコール暮らしなのだと思う」や「寝ること」、または「食べること」や「遊ぶこと」など、暮らしのイメージを広げていった。次第に「家で毎日やる枕投げが僕の暮らしの幸せです」や「ゲームをしているときが暮らしの幸せかも」と自分の暮らしの幸せを語り始めた。互いに自分の暮らしの幸せを語り合う中で、「一人一人の自分が思う暮らしのイメージや幸せなところが違って面白かった」とまとまった。単位時間における学習活動の最後に「自分たち子供世代と大人（親）世代とでは、暮らしのイメージは違うのだろうか」と児童の中から問いが生まれたのである。そこで次に、授業参観で保護者にインタビューをして情報の収集を行うことにした。

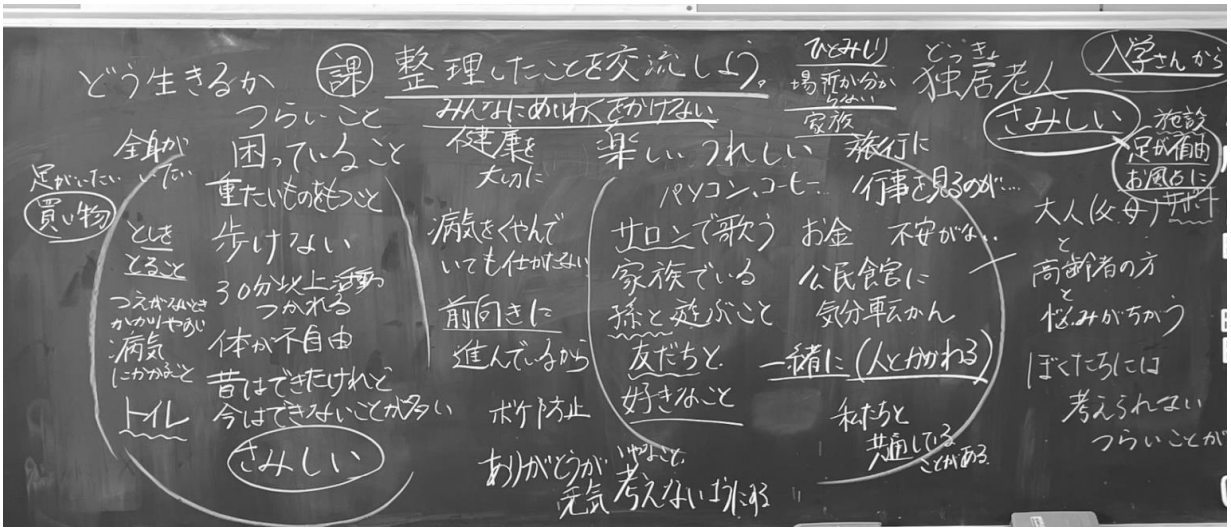
児童は、４月の授業参観で「自分たち子供世代と大人（親）世代とでは、暮らしのイメージが違うのだろうか」という問いの解決のために保護者にインタビューを行った。インタビューを通して得た情報を学級全体で共有し、整理・分析の時間にまとめていくことにした。この時間の振り返り

で児童は学級の仲間に次のように語った。

児童Ｈ：	今日はみんなでゲットした大人世代の情報と子供世代とを比べて、共通点・相違点で整理したんだけれど、そこから私が見えてきたことは、自分たち子供の暮らしのイメージって、自分のことについてが多いけれど、親は自分のことよりも家族の幸せを願っていることが分かりました。このことから、子供と親は立場が違うから、暮らしのイメージが違うのかもしれないと思いました。
児童Ｉ：	そう思うと、子供、親まで見てきたから、次はおじいちゃんおばあちゃんの暮らしについて知ってみたい。立場がまた変わるから暮らしも違うかも。

このように、児童は「高齢者の暮らしとは」という新たな問いをもつことができた。しかし、学校に高齢者の方が来校する機会はめったにない。どのようにして情報の収集を行うべきか困る児童に、教師は「おじいちゃんおばあちゃんに会って話を聞くために、学校の外に出てみませんか」と加納の町にフィールドワークに出る機会を促すことを試みた。すると児童は、「早く外に出て、高齢者に会って話を聞いてみたい」と話が盛り上がっていった。その後、フィールドワークへ出て、「高齢者いきいきサロン」の活動に参加し、高齢者と一緒に体操したり、歌ったりして距離が近くなったところで、インタビューする機会を得た。児童は、自分たちから生まれた問いを解決する活動だけあって、積極的に高齢者と関わり情報の収集を行った。

（イ）「情報を整理して交流しよう」（情報の整理・分析～新たな課題の設定）



（写真Ⅳ－６）情報の整理・分析（板書）

フィールドワークの後、教室にて収集した情報を整理・分析する活動を行った。学級の仲間で情報を共有し、整理・分析すると、児童の中で、「おじいちゃんおばあちゃんはとっても幸せだと言っていた」「体が年老いてきたけれど、今は好きなことに時間をいっぱい使えると言っていて、とても幸せそうだった」など高齢者もとても幸せな暮らしをしているのだとまとめはじめた。しかしそのとき、ある児童が次のように語った。

児童Ｊ：	ちょっと待って、私は高齢者の方はみんな幸せだとは思わない。確かに幸せな人もいるけれど。私のおじいちゃんは、去年までは、とっても元気なおじいちゃんだったのだけれど、今年になってから急に体が不自由になって、「つらい」とか「苦しい」とか言っていて、前のおじいちゃんとは変わっちゃった。私から見て、今は幸せとはいえない。だから体の不自由な高齢者の方の暮らしは、（高齢者いきいきサロンにいた方とは）また違うんじゃないかなと思います。
児童Ｋ：	確かに、高齢者の暮らしをもっと知るためにも、体が不自由なおじいちゃんおばあち

ゃんに会って話を聞いてみたいです。
児童Ｌ：仲良くなった〇〇さん（外部講師）にお願いしたら、そういう高齢者の方とつないでもらえるのかなあ。お願いしたい。電話できるかなあ…。

ある児童が、「体の不自由な高齢者の暮らしとは？」という新たな問いを生み出した。その問いの解決に向けて、フィールドワークで出会った外部講師に電話で連絡し、体の不自由な高齢者とつないでほしいとお願いをすることにした。そして、学校から歩いて 12 分ほどの場所にある高齢者施設を紹介してもらった。紹介してもらった児童は、問いを解決するために高齢者施設へ学びに行くことを自分たちで決めた。

高齢者施設を訪問した児童は、そこで初めて施設にいる高齢者と話した。高齢者は、一人一人違った様子であった。話しかけても答えが返ってこない人や、自分の孫やひ孫ぐらいの子供たちがきてくれたと笑顔で話す人や、一緒に遊んだり話をしたりすることが嬉しくて、涙を流して喜ぶ人もいた。児童は初め、一度会って話を聞いて問いを解決しようとしていた。しかし、悲しそうな様子の人や喜んでくれた人の表情が忘れられず、「また行きたい。もっと一緒に過ごしたい」と活動の振り返りで話す児童が多くいた。そこで次回も高齢者施設へフィールドワークに出かけることにした。

このように、４月から５月にかけて、児童の問いを大事にしながらフィールドワークを実施したことによって、児童は自らの問いを解決すべく、学びの対象を「自分」から「親」、そして「高齢者」と変えていった。知的な興味・関心のまま歩み、自ら定めた学びの対象であるだけに、「もっと知りたい、もっと関わりたい。」という願いが自然と湧き起こっていることが、児童が学習で話す振り返りの内容や、楽しみにしている様子が分かる生活日記の記述などから伺うことができた。

（ウ）プロジェクト活動を決めよう（整理・分析～まとめ・表現）

毎週水曜日に、高齢者と継続的に関わることができた児童は、高齢者の本音を聞きたいと仲良くなることを目指した。一緒にあやとりをしたり、絵を描いたり、肩を揉んだり、また、施設職員と一緒に自宅を訪問して、施設までの道のりを一緒に散歩したりしながら会話を弾ませていった。

継続的に関わることを通して、児童と高齢者との距離は近くなり、お互いが毎週水曜日を楽しみにするようになった。次第に児童に心を許すようになった高齢者から、これまで「楽しいよ」「嬉しい」と話していた内容とは異なり、「つらい」「さみしい」という言葉が出てくるようになった。

その後、収集した内容を学級で共有し、整理・分析していたときの話合いの場面である。

児童Ｍ：僕は、昨日〇〇さん（高齢者）と話をしていたのですけど、〇〇さんが「つらいときがある。」、「さみしいことがたくさんある。」って話してくれて、僕はその言葉が今も頭から離れません。
児童Ｎ：私も同じで。私の場合は□□さんが「毎日つまらない」って言っていました。□□さんのことを思うと、一緒にいてとても悲しくなりました。
（中略）
児童Ｏ：じゃあ。私たちがおじいちゃんおばあちゃんの幸せな時間を少しでもつくるお手伝いをしようよ。
児童Ｐ：うん。それ名案だ。おじいちゃんとおばあちゃんを僕たちで幸せにしようよ。

話合いの場面から、高齢者と継続的に関わることを通して、前はおじいちゃん、おばあちゃんと呼んでいた児童は、高齢者の名前で呼ぶほど、心の距離が近くなっていったことが分かる。さらに、話合いの内容から高齢者の問題に対して自分たちにできることはないかと考えている様子から、児童にとってこの学びの切実性が高まってきているといえる。

そして、児童は、「おじいちゃんとおばあちゃんの幸せな時間をつくるお手伝いをしたい」と願い、プロジェクト活動を行うことにした。

プロジェクト活動の内容は、高齢者と関わる中で決めていった。例えば、片方の腕がない高齢者

に関わる児童は、その高齢者のために何かしたい気持ちが高まってきているものの、話しかけても返答がないことに難しさを感じていた。「〇〇さんは、どんなことが楽しいのかなあ」という問いが解決できないままでいた。しかし、「認知症の方は、自分の言葉にするまでに時間がかかるから、そのときは、ゆっくり待ってあげるとよい。」という知識及び技能を習得した児童は、習得したことを活用しようと、話しかけた後、返答をすぐに求めるのではなく、顔に耳を近づけてずっと待つことにした。すると、自分の名前や好きな色、困っていること、自分が今やってみたいことなどを話してくれるようになった。そして、児童は「最近は運動ができなくなった。腕が無くて、ボールが投げられなくなった。ボールをとばしたい。」という願いを聞き、そのニーズに応えたいと切に願い「ボールとばしプロジェクト」を立ち上げて活動することになった。

児童は、自発的に施設の方に声をかけ、ボールをとばせるようにするための方法を相談した。施設職員から握力がないため、ボールが握れないこと、補助しながらであれば引っ張ることはできると意見をもらった。児童は施設職員と一緒に、ボールをとばせる方法について考えた。児童は教室に戻ると、直ぐに考えてきたことを基に、ボールとばしの器具を試作して、ボールをとばしてみた。そして、引っ張ってボールをとばせる筒状の器具を完成させた。（写真Ⅳ－７）

児童は、施設でボールとばしプロジェクトを実行した。片方の腕のない高齢者は紐を引っ張ってボールをとばすことができた。その後、その人は、時間が経ってから「ありがとう」と児童に伝えた。児童は、嬉しそうな表情を浮かべた。

このように、学級の個々の児童のプロジェクト活動は、特定の相手を設定して継続的に関わり続ける中で、相手のニーズを探り、試行錯誤しながらそのニーズに合ったプロジェクトを行う認識の中で行われた。児童は、「相手のニーズに応じたプロジェクトを行うことで、暮らしの中に幸せな時間をつくるお手伝いができた」という実感をもつことができた。

（写真Ⅳ－７）器具の試作をする児童

⑤　実践の検証

成果の一つ目は、「児童の問いを大事にしたフィールドワーク」の実現である。このフィールドワークにおいて、児童がどこに行っても「高齢者の暮らし」の本質と向き合える場づくりが必要不可欠だと考えた。そこで、外部人材と空間（どこに誰がいるのか）と時間（いつ何をしているのか）を調整してフィールドワークの環境づくりを行った。その結果、児童は主体的な判断のもと、自分の足で校外に出て、高齢者の暮らしの現実を知ることができた。また児童が、自分の知りたい情報を自分の目で、自分の手足で収集したことで、高齢者の暮らしについての自分の問いが解決し、また新たな問いが生まれることにもつながった。

二つ目は、児童が高齢者の暮らしに対して切実な学びとなっていくための「学びの対象との継続的な関わり」を生み出したことである。施設にいる高齢者と児童が、毎週一緒に遊んだり話したりして、同じ時間を過ごすことができる環境を実現することで、児童は高齢者と互いに名前を呼び合い、楽しく過ごせる関係をつくることができた。高齢者は児童に心を許し、心を許した高齢者の「つらい」「さみしい」という声を、児童は自分ごととして受け止めて、何かできることはないかと強い思いをもつことができた。まさに児童にとって高齢者の暮らしについてというテーマが切実な学びとなっていったことがいえる。

三つ目は、高齢者自身の問題を自分ごとと捉え、願いをもち、主体的にプロジェクト活動を立ち上げることができた点である。児童がプロジェクト活動を通して、高齢者のニーズに応じた本質的

な探究ができるようにと、外部人材と協力して、児童が「外部人材との協働的探究学習」を行える環境づくりを行った。そうしたことで、児童だけでは知り得ることができなかった知識及び技能を習得・活用・発揮することにつながり、答えのない問いに対して納得解や最適解を導き出す経験がたくさんできた。

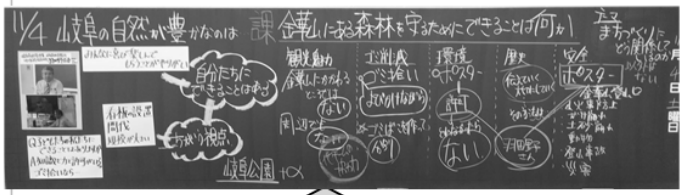
課題として、児童が求める学習内容に応じた地域人材の人数の確保が不可能な場合が挙げられる。児童数に対して地域人材の人数が足りず、複数の児童の求めるタイミングが重なったとき、協働的探究学習が成立することが難しい場面もあった。児童の学びに効果をもたらす人材数の確保が課題である。

子供が真剣に自分事として考える。本当に岐阜のまちを暮らしやすいまちにしたいと考えている。
【エラー】自分（たち）がやりたいと思っていることは無意味だったり、無理かもしれない。プロジェクトチームを考え直す？テーマを変える？
【ジレンマ】自分（たち）が思っていることと、岐阜のまちに住む人・訪れる人との認識にずれがある。やりたいこと、伝えたいことじゃないところで要求があるようだ。

そもそも本当に岐阜のまちを住みやすいまちにしたいのか。
・本当にしたい。
・岐阜のまちのために貢献したい。

ポスターやパンフレットを使って本当に岐阜が住みやすいまちになるのか。
そもそもポスターやパンフレットをどのくらい真剣に見るのか。
自分たちもポスターやパンフレットを見て、どの位の割合で行動を変えることはあるか。

交通広告は道行く人が対象で、最も評価ができない。エラー



岐阜森林管理署 岐阜森林事務所 地域統括森林官 羽田野佳春さん
子ども「私たち小学生にできることはありますか。」
羽田野さん「知識や力がないから、ゴミ拾いくらいしかない。」エラー

どうしてみんなの意見をまとめることができなかったのか。
・質問がざっくりしていた。
・まとめることまで考えていなかった

そもそも本当に岐阜の魅力を知りたかったのか
・本当に知りたい

じゃあ、調査をやり直すか？

調査をやり直すのではなく、結果から岐阜のまちのよさに目を向けてみよう。
【課題設定の見直し】

調査結果を踏まえて自分たちができることは何か。

調査から様々なことが分かったけど、どのようにまとめればいいか分からない。
エラー

ポスターやパンプレットを作って、注意喚起をしたい。

調査をやり直す？

岐阜のまちは自然が豊かだ。岐阜のまちで自然が豊かなところは金華山だ！【課題設定の見直し】

金華山へ行って、何で金華山の自然が豊かなのかを調べに行こう。

なぜ金華山の登山道にはゴミが少ないのだろうか。
なぜ、こんな看板がたてられているのだろうか。
なんでこんなところに防火用水があるのか。
ここは登山者が落ちないようにロープを張っているのだと思う。
何で岐阜にある金華山なのに、名古屋が関係しているのだろうか。
→金華山で働く人に聞いて明らかにしたい。

まず岐阜市について調べよう。そして、各プロジェクトチームの調べたことを聞いてみよう。

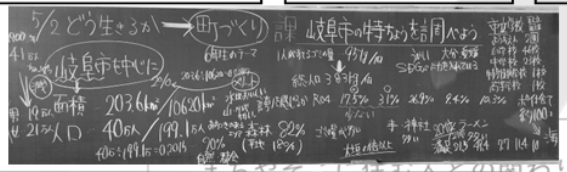
奈良・京都へ行くから、奈良や京都のまちについて調べてみよう。

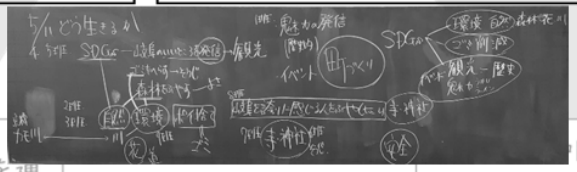
奈良・京都で何を見たり、聞いたりするといいのか。

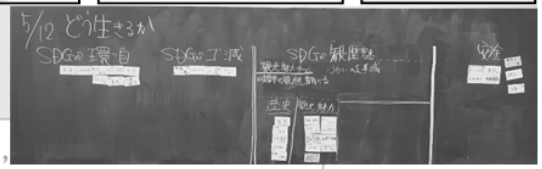
奈良や京都で聞く前に、まず自分たちのいる岐阜のまちについて、自分たちの思いや考えたこと、調べたことだけではなくて、他の人たちはどう思っているのか調査してみよう。

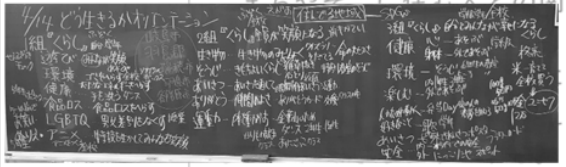
調査する内容（どこで・いつ・なにを・誰に・どのように）を決めよう。

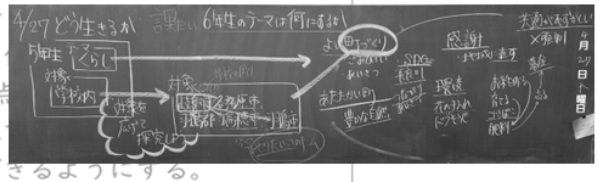
岐阜の魅力は何だと思いますか。











第６学年ではカテゴリーを「まちづくり」とし、対象の範囲を地域に広げて探究的活動に取り組む。その過程において、子供は、学校からさらに外にある地域に関わる人・自然・文化へと認識を広げ、地域の人々の幸せを考えたまちづくりに向けて、自分にできることは何かを考え、行動していく。

第５学年では、学校生活の身近な暮らしにある「人・もの・こと」に繰り返し関わりながら、探究的活動に取り組んできた。

①　第６学年のカテゴリーの設定

第５学年では、学びのカテゴリーを「暮らし」として、ある人の暮らしを見つめる中で見えてきた問題の解決を通して、一人一人の暮らし方が違えば、生きがいも違うことを学んできた。その学習経験が、第６学年の「まちづくり」において、まちにある問題を解決していくときに、そのまちに住む〇〇さんのことを頭に思い浮かべながら、切実な思いでまちづくりを行うという本質を極める探究の実現につながると考えた。

②　第６学年で育みたい資質・能力

（ア）　問題解決力

まちの「人・もの・こと」をみつめ、問題を発見し、その問題を解決するために、自分で課題を立て、自分にできることを何かを考え判断し、解決に向けて実行することができるようにする。

（イ）　関係構築力

まちの「人・もの・こと」をみつめていく中で、よりよいまちづくりをする目的に応じて、他者とつながり、自分の考えを発信したり、他者の考えに共感したりしながら、互いに納得できる考えを生み出し、活動につなげることができるようにする。

（ウ）　貢献する人間性

まちで発見した問題を「自分ごと」のように思い、少しでもそのまちの「人・もの・こと」をよりよくしたいと心から願い、実際に動き出そうとする態度を養う。

③　第６学年で形成したい構成概念

（ア）「人との関わり方・態度」に関する構成概念

共感・・・【定義】他者の体験・考え・主張などを、自分のことのように感じること

（イ）「探究の過程」において必要だと考えられる構成概念

多様性・・・【定義】違いと同じを認識できたり、違いを越えた同じを実現したりすること

④　第６学年の実践の具体的内容

「岐阜のまちをよりよいまちにしたい」という探究テーマを設定し、まず、岐阜のまちについてどう思うか、岐阜駅に訪れた人にインタビューをする活動を行った。同時に宿泊研修先の奈良や京都で、「奈良のまち」「京都のまち」についてどう思っているか、観光客や地元で働く人、地元に住んでいる人にインタビューし、集めた情報を比較することで、「岐阜のまち」についての良さと課題を明らかにしようとした。

インタビュー活動で得た情報から「『岐阜の自然が豊かである』と言われているのはなぜか」と問いをもった。そこで、岐阜市の自然に目を向けると、豊かな自然として長良川や金華山があることに気付いた。児童は「岐阜の自然が豊かである」と言われている理由は何かを探るために、実際に金華山の七曲登山道やめい想の小径登山道へフィールドワークに出掛けていった。実際に登山をして気付いた発見を学級で共有する中で、この自然が豊かな山をどのように管理しているのかを直接聞いてみたいという願いをもった。そこで、岐阜森林事務所で働く人から、どのような仕事しているのかを聞いたり、自分たちの疑問を質問したりすることで解決を図ろうとした。ある児童は「この自然が豊かな山を守るために、わたしたちができることはないですか」と尋ねた。返ってきた答えは「力や知識がないから、ゴミ拾いくらいしかない」というものであり、児童は大きな衝撃を受けた。

この出会いを通して、児童たちは、実際にゴミ拾い活動を行うだけでなく、自然が豊かな山を守ることを啓発するリーフレットやポスターを作成して、近隣の施設に置かせてもらったり、貼らせてもらったりする活動をつくり出し、実行することができた。

（４）　第７学年の実践（図Ⅳ－15）

（このプレゼン内容は、カテゴリー「多様性」の時に作成したものです。）

①　第７学年のカテゴリーの設定

第６学年では、「人と人とのつながり」や「自然」について考えることを通して、地域の幸せにつながるまちづくりについて探究を続けてきた。第７学年ではカテゴリーを「社会」とし、対象の範囲を地域に広げて探究的活動に取り組む。その過程において、生徒は、まちからさらに外にある地域に関わる人・自然・文化へと認識を広げ、対話活動や実践を通して、社会を創ることの意義について考え、自分にできることは何かを考え、行動した。

②　第７学年で育みたい資質・能力

（ア）　問題解決力

人々との関わりを通して生み出された問いをもとに、自分で課題を立て、自分にできることは何かを考え判断し、解決に向けて実行することができるようにする。

（イ）　関係構築力

様々な人の意見や仲間の考えを肯定的に聞いたり、自分の考えを筋道立てて伝えたりしながら、対立やジレンマに対して、互いに納得できる考えを創り出したり、双方の考えを取り入れたりしながら活動することができるようにする。

（ウ）　貢献する人間性

自分や身近な社会のよさに気付き、よりよい社会にするために努力する人々に敬意をもちながら、自分にできることを考え、仲間と共に行動しようとする態度を養う。

③　第７学年で形成したい構成概念

（ア）「人との関わり方・態度」に関する構成概念

共感・・・【定義】他者の体験・考え・主張などを、自分のことのように感じること

（イ）「探究の過程」において必要だと考えられる構成概念

多様性・・・【定義】違いと同じを認識できたり、違いを越えた同じを実現したりすること

④　第７学年の実践の具体的内容

まず、「社会」とは何かをイメージし、話合いや若狭での宿泊研修での漁師の方との対話を通して、生徒たちの知的な興味・関心を広げようとした。

若狭での宿泊研修での漁師の方との対話では、「食」を通して自分たちと漁師の方がつながっていることに気付き、漁師の方の思いに存分に触れた。生徒は漁師の方との対話の中で「残さず食べてほしい。」という思いを語ったところに注目し、「自分たちの身の回りの食に関わっている人はどんな思いなのか」を知りたいと願った。

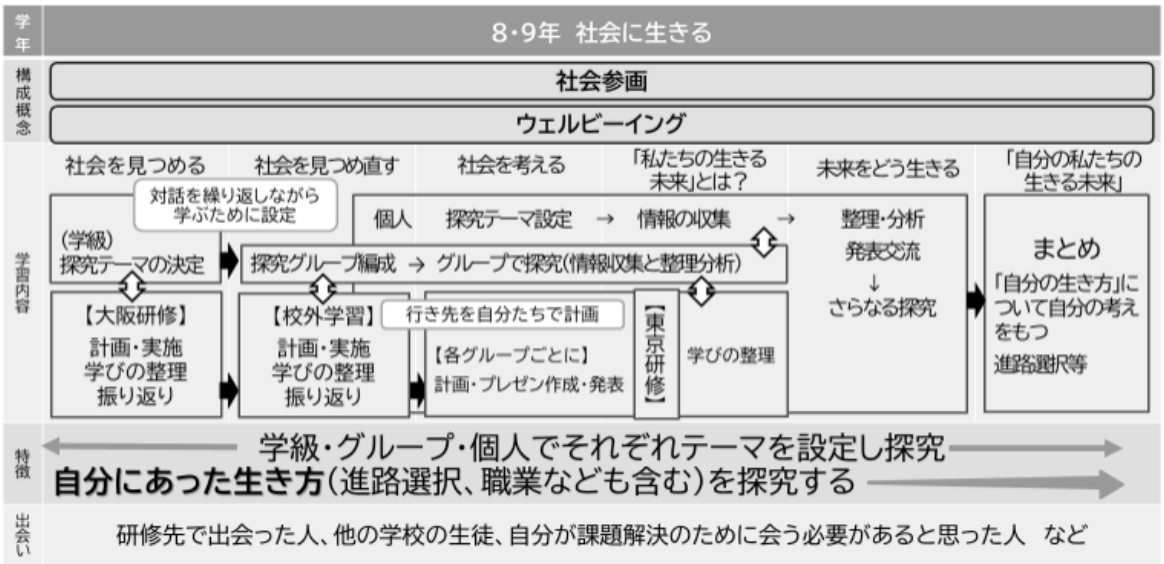
たくさんの人たちと出会うことで、たくさんの価値観に出会い、「食」に関して自分たちはどうしていけばよいかを考える場面を設定した。集めてきた情報を整理し、食べ物を「残さず食べる」方がよいのか、「残したい。」という思いや「残す文化」を大切にするべきなのかを議論した。

議論を通して、「フードロス」という社会問題に目を向けることになった。自校のフードロスについて、自分たちにできることは何かを話し合い、自分たちが考えた取組を全校に発信するための準備を行った。

発信する活動を終えて、自分たちの周りには「食」以外でつながっている社会もあることに気付き、新たな課題をもつことができた。

６　Ⅲ部（第８・９学年）で実践した教育課程の内容

（１）Ⅲ部のカリキュラム全体像



（図Ⅳ－16）Ⅲ部（第８・９学年）のカリキュラム全体像

Ⅲ部（第８・９学年）のカリキュラムの特徴は、学級単位で実施する探究から、個人の課題をベースにしたテーマ別グループ探究へ移行する指導計画を２年間かけて行うところである。年間を通して学級の仲間と対話を繰り返しながら学んでいくために設定する探究テーマ（サブテーマ）や探究の視点を設定して、宿泊研修や校外学習、話合い活動を繰り返して、学びを深めていく指導計画を立てていく。（図Ⅳ－１６）

Ⅱ部で社会の仕組みやその中で生きる人々を知ることで、Ⅲ部では、様々な人が生きる社会の中で自分はどう生きていくのかを進路選択を含めて見つめられるようにする。

（２）　第８学年の実践

①　第８学年のカテゴリーの設定

第８・９学年の学びのカテゴリー（探究領域）は、図Ⅳ－１６に示すとおり「社会に生きる」である。生徒は第７学年までに、様々な問題と出会い、解決していく過程で、自分を取り巻く社会で生きる人々は、いろいろな見方や考え方をもって生きていることを理解しながら学んできた。自分の得意なことや苦手なことが認識できるようになり、自分の将来のことも考える時期である。第８学年では、これまで学んできたことを生かし、多様な価値観をもつ人が生きる社会で「自分はこれからどう生きていきたいのか？」を考え、自身の将来を見据える。将来を考える中で、自分に必要なものや磨くべきこと等を模索し、判断し、それらを確立させるため行動する姿を具現させたいと考えた。

②　第８学年で育みたい資質・能力

（ア）　問題解決力

実社会や実生活の中にある問題に対する問いを生み出し、その問いを解決するために何ができるか、様々な視点や立場から考え行動することができるようにする。

（イ）　関係構築力

仲間や実社会に生きる人の考えを共感的に受け入れ、それぞれの願いや考えを踏まえた上で、他者と協働しながら納得解や最適解を導こうとすることができるようにする。

（ウ）　貢献する人間性

自分や社会を見つめ直し、社会に生きる人々に敬意をもちながら、自分にできることを考え、他者と共に社会のために行動しようとする態度を養う。

③　第８学年で形成したい構成概念

（ア）「人との関わり方・態度」に関する構成概念

社会参画・・・【定義】社会の様々な事柄に興味をもち、自分の思いや考えを提案したり、様々な活動に自ら関わったりすること

（イ）「探究の過程」において必要だと考えられる構成概念

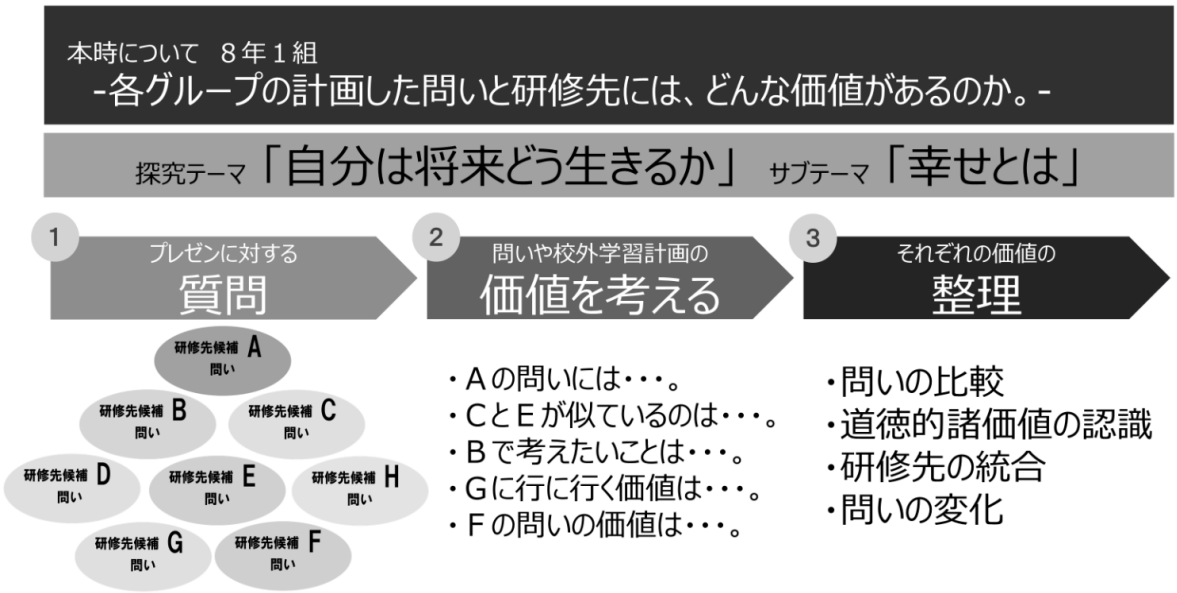
ウェルビーイング・・・【定義】どうすればすべての人が、肉体的、精神的、そして社会的に満たされ、よりよい状態を実現できるか考え、行動すること

④　実践の具体的内容（８年１組）

（ア）　幸せとは（課題の設定）

８年１組では、「大阪には何があるか」という視点をもって、大阪研修に出かけ、町工場で働く人との出会いや様々な施設での体験活動から「誰もが幸せな社会とはどんな社会か」という探究テーマを作り出した。

「幸せとは何か」を仲間と対話するなかで、本当の幸せとは何かを深く考え、社会にも目を向け、地域の特産品の開発に副業で取り組む人や長良川の自然環境の保護に取り組む人とも「幸せとは何か」を対話してきた。もっと幸せについて様々な視点から考え、自分の生き方を考えることができるように、仲間と問いを創り出し、探究した。（図Ⅳ－１７）



（図Ⅳ－17）８年１組実践概念図

（イ）　校外学習先を決める（情報の収集～整理・分析）

問題解決力の育成を企図し、各グループの問いと校外学習計画には、どんな価値があるか話し合うことを通して、学級の探究テーマ「自分は将来どう生きるか」との関連を基に、どの価値から探究テーマに迫るとよいか考える場を設定した。

生徒は探究テーマ「自分は将来どう生きるか」を基に、将来の生き方や幸せに生きるとはどういうことかを考えている。そこで、仲間の話を聞くことで何を考えることができるのか、選んだ校外

学習先へ行くことにどんな意味や価値があるのかを考え、行き先を決めることをねらった。

本時に生徒は、ただ行きたいという思いだけでなく道徳的諸価値も交えて話すようになった。例えば、大日コンサルタントへ行きたいグループは、鵜飼大橋の建設を通して伝統と今をどう共存させるか、と伝統や岐阜についても言及した。このグループは１回目の校外学習で、「名古屋へ行きたい」という思いから始まったために校外学習先が決まらず、何もできなかった。その失敗から、自分たちの願いを「伝統とどう関わっていくかを考えたい」と明確にし、行く意味や価値について語った。２回目の校外学習を計画したことで、１回目の校外学習までの行程が教材となり、グループの問いを考え直すきっかけとなった。

しかし、本時でその問いが他のグループに理解されない場面があった。それは、探究テーマが「自分が」どう生きるかを考える主観になっており、自分に関わりのないものであると、理解しようとはするが、そこへ行く必然が失われてしまうからである。その後の校外学習先を選定する際にも、生徒が規準とする視点がなく、「食べるところへ行きたい」と気持ちの面が上回ってしまうことがあった。教師の探究テーマに沿ってほしいという思いと、生徒の「〇〇したい」という意見がかみ合わず、折り合いをつけるのが難しかった。

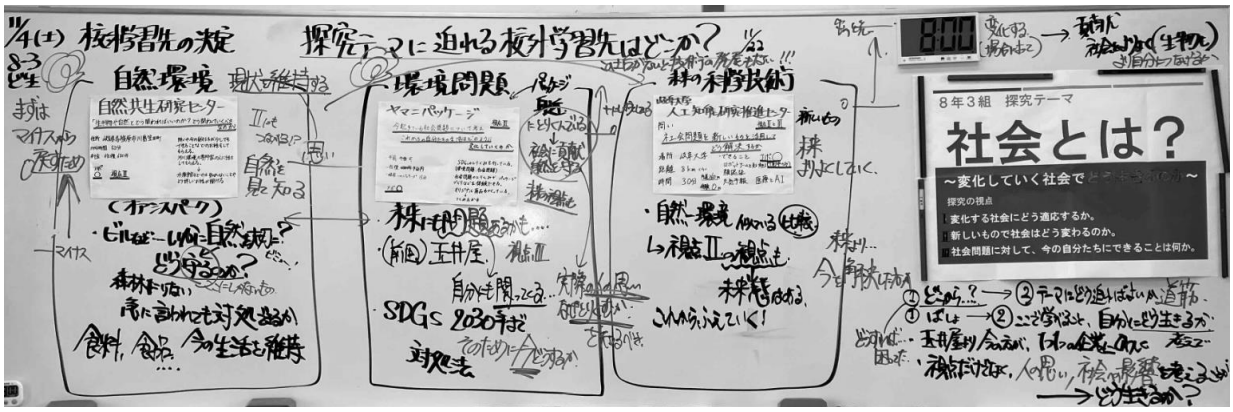
実践の中で、探究テーマや視点の設定を丁寧に行うことで、生徒の校外学習先の選択がよりスムーズになったのではないかと考える。生徒の考えたいことを、丁寧に一緒に考えることで、「幸せ」の定義が共有され、それを拠り所として考えることができたのではないかと考える。

⑤　実践の具体的内容（８年３組）

（ア）　社会とは何か（課題の設定）

８年３組では、「自分はどんな関わりの中で生きているか」の視点をもって大阪研修へ赴き、様々な体験活動を行う中で社会に生きる人々と出会い、「変化していく社会の中で自分はどう生きるか」という学級の探究テーマを設定した。テーマを設定する過程で「社会とは何か」を仲間と対話し、自分を取り巻く社会にアプローチできる多様な視点に気付くことができた。どのような視点からどんな問いをもち、どんな研修先を選択すれば、自分が生きていく社会を捉えることができるのかを協働的に考え、自分の生きる「社会」と、その社会でどう生きるかを見いだそうとした。

（イ）　変化していく社会の中で自分はどう生きるか？（情報の収集～整理・分析）



（写真Ⅳ－８）８年３組の実践における板書構造

問題解決力の育成を企図し、学級の探究テーマ「変化していく社会の中で自分はどう生きるか？」に迫るための校外学習先を２つ選定することを通して、その校外学習先に行くまでの時間や距離など現実的な条件を考慮した上で、最も学級の探究テーマに迫ることのできる問いと活動を見いだし、全員が納得できる校外学習先を選定する場を設定した。その際には、各校外学習先に備わる道徳的諸価値に着目した議論を展開させた。写真Ⅳ－８は本時における板書構造であるが、「自然環境」「環境問題」「科学技術」といったよりよい社会の創造に関する視点や、「社会をよりよく」「自

然を守る」「人の思い」といった自分自身の生き方に関わってくる道徳的諸価値を板書している。議論では、道徳的諸価値を前面に立てながらそれらを比較し、「ジレンマ」を浮き彫りにする中で協働的な検討を重ね、納得解を導いた。すなわち、単に目的地を選定するのではなく、生徒自身及び学級において重視したい社会や生き方に関わる道徳的諸価値を納得解として導出し、それに付随する結果として目的地が選定されたと理解することが可能である。こうした本時は、探究的な学びの過程に「ジレンマ」や道徳的諸価値を織り込み、「どう生きるか」の学びを深めたといえる。

生徒はまず三つまで絞られた提案が探究テーマに迫るために必要な場所なのかを考えた。「自分の生活に直結する自然を守るためには自然を知るべき」「自然破壊が昔に比べて増加傾向にある現状を打開するため考えるべき」「科学技術はこれから更に発展し、自分の生活に直結してくるため学ぶべき」との答えを見いだした。

提案された場所と探究テーマとの繋がりは明らかになったものの、三つともに価値があると感じているからこそ二つに絞ることは難航した。「どうやって二つに絞る？」と生徒に問うたとき、「二つの場所自体に繋がりがあった方がいい。僕はこれがいいって思うけれど、みんなにも聞いてみたい。」との声が上がり、近くの生徒で対話する時間を設けた。そうすることで個々の考えが表出され、「自然と環境は密に繋がり、自然が守られていないと科学技術は発展しない」との理由から、人工河川を用いて環境保全研究に取り組む自然共生研究センターと環境問題に会社をあげて取り組むヤマニパッケージに行くことに決定した。

決定後は「１回目の行き先を決めた時の自分と、今（２回目）の行き先を決めた時の自分とを比べる」視点を与えた上で決定までの過程を振り返った。「問題の解決に向かうための道筋が分かってきた」と話す生徒や「校外学習等で学ぶことが自分自身にどう生きてくるのか？という視点で考えることができた」と探究テーマに迫ることを通して自分の生き方を考えようとしている生徒が見られた。

⑥　実践の検証

第８学年の実践の成果として、次の三つが挙げられる。

一つ目は、問題解決力との関連において、探究テーマ（サブテーマ・探究の視点）を生徒と創り上げることで、どのように探究していくかを生徒と共有できたことである。これについては、校外学習を自分たちで選定する場面において、探究テーマにどのように迫るか、どの探究の視点から考えているのか、どんな価値があるのかを考える姿があった。また、探究テーマに迫っていることを生徒が自覚できるように、探究のサイクル全体を振り返る「まとめ」を実施した。自分たちの探究のよかったところ、課題を把握する姿があった。

二つ目は、関係構築力において、生徒が探究テーマと自分の興味や関心を関連付けて、学ぶ意味や意義を見いだすことができたことである。校外学習先に電話をかけてアポイントメントを取った上で、仲間に校外学習先をプレゼン発表する場面では、教材との出会いや関係、学ぶ意味や意義を、生徒が探究テーマを基につくる姿があった。また、校外学習では、事前に考えた質問を基に対話やインタビュー活動を行い、相手の思いや願いを共感的に聞いたり、相手の立場に立って考えたりする姿があった。

三つ目は、貢献する人間性との関連において、生徒が探究の中で内省する場面を意図的に位置付けることができたことである。「幸せとは何か」「働くとは何か」「社会とは何か」を対話する活動を、単元の入り口と出口で実施した。その中で、８年生になった頃の自分と、今の自分（８か月後）を比較しながら内省して、どのような変容があったか、どうして変わったのかポートフォリオなどを参考に深く考える姿があった。

一方、課題としては、次の二つが挙げられる。

一つ目は、実社会・実生活の中にある「ジレンマ」や「エラー」を生徒が実感し、納得解や最適

解を導く過程の充実である。生徒が感じている、もしくは思い悩んでいることを丁寧に見取り、学級全員で考える機会を設けたり、専門家などに話を聞く機会を柔軟に作ったりしたい。そのためには、時間数の確保や予定調整などがタイムリーに行えないといった問題もある。ICT の活用はもちろんであるが、実際に現地に赴き、対面で会話をする経験も大切である。双方のよさを生かしながら、「ジレンマ」や「エラー」と向き合う時間を大切にしていきたい。

二つ目は、生徒の探究に対する教師の支援の在り方の工夫である。教科とは違う支援の在り方が必要で、教師の探究をガイドする手立てを更に工夫する必要がある。具体的には、生徒の考えたいこと、伝えたいことを教師が聞き分けたり、整理したりすることである。また、生徒の発言や記述を道徳的諸価値などの視点から見取り、個の成長を価値付けるなどの手立てを工夫していくことが必要である。

（３）　第９学年の実践（図Ⅳ－18）

どう生きるか
９年「未来に生きる」

問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
自分の考えについて、多面的多角的に吟味していくなかで、自己の生き方を見つめ、よりよい生き方について探求しようとする。	仲間や実社会に生きる人の考えを共感的に受け入れ、それぞれの願いや考えを踏まえた上で、相手と協働して納得解や最適解を導こうとすることができるようにする。	社会の様々な事柄や他者の生き方について関心をもち、生き方に触れる過程で、よりよい自己の生き方を見つめようとする態度を養う。

第一期「私たちの生きる未来とは」

《生徒の考え》
社会問題には様々なものがあり、また一つの解決策で、すべての問題が解決するようなことではないと感じた。しかし、それぞれの問題は、一人ひとりの意識で変えられる部分もあり、私たちのこれからの生き方が重要なのだと考えた。それぞれの分野で活躍する人たちの生き方が参考になった。まだそれぞれの問題への探究が十分でないので、問題を整理して、自分がさらに探究していきたいことを考えていきたい。

《テーマ分け》
・男女格差の問題・世界の貧困問題
・世界の環境問題・共生の問題
・生命の問題
の５つに分かれて、探究活動を行う。

《手立て》
東京研修の中で、社会問題に取り組むリディラバという団体と出会い、ワークショップを通じて、どのような社会問題があり、解決するにはどうするといいのか考えるきっかけを与える。

《問い》
私たちの生きる未来はどのような未来か。明るい未来か、暗い未来か。
これからの生活を見つめる中で、現在でも課題になっていることは何か。

《生徒の考え》
明るい未来になる部分もあるが、暗い未来になる部分もある。現代社会の抱える課題とはどのようなことがあるのか、詳しく知りたい。

第二期「未来をどう生きる（男女格差の問題チーム）」

《今後の動き》
雇用・家庭生活・賃金の問題はつながっていることが分かった。自分たちの生活に直結することなので、どのような生き方を自分がしたいか。また、パートナーとの折り合いの付け方をどのようにするといいのか。社会制度として、より良い方法はないのか考えていきたい。

ジレンマ
差をなくすことがよりよい生活につながるのか。性別による役割分担により、社会生活が成り立っている事実との関わり

《手立て》
岐阜市女性センターの方や岐阜大学の専門家に話を聞き、自分たちがさらに探究したいことについてポスターを作成し、ポスターセッションを行う。

《考え》
・あっていい差（身体的な差、男らしさ・女らしさなどの良い面、宗教・文化的な差）
・なくしたほうがいい差（人から押し付けられる考え方、当たり前にある性別への意識）
・なくさないといけない差（男女間にある役割の固定概念、職業や賃金の差別）

《問い》
男女にはそもそも差があるのか。その差はどのようなものか。すべての差はなくさないといけないのか。あってもいい差はないのか。

①　第９学年のカテゴリーの設定

第８学年までに、様々な人との関わりや様々な問題との出会いを通して、多様な価値観をもつ人が生きる社会で「自分はこれからどう生きていきたいのか」について考えてきた。第９学年は、自分の進路を考える時期で、自分の未来や生き方についてさらに深く考え始めている。これまで学んできたことを生かし、自分の未来や生き方が満たされたものになるように社会と関わり、その中で自分をどう生かすかを考え、自分の生き方を見つめ直していきたいとこのカテゴリーを設定した。

②　第９学年で育みたい資質・能力

（ア）　問題解決力

実社会や実生活の中にある問題に対する問いを解決するために何ができるか様々な視点や立場から考え、よりよい生き方となるよう行動することができるようにする。

（イ）　関係構築力

仲間や実社会に生きる人の考えを共感的に受け入れ、それぞれの願いや考えを踏まえた上で、他者と協働しながら納得解や最適解を導こうとすることができるようにする。

（ウ）　貢献する人間性

自分や社会を見つめ直し、社会に生きる人々に敬意をもちながら、自分にできることを考え、他者とともに社会のために行動しようとする態度を養う。

③　第９学年で形成したい構成概念

（ア）「人との関わり方・態度」に関する構成概念

社会参画・・・【定義】社会の様々な事柄に興味をもち、自分の思いや考えを提案したり、様々な活動に自ら関わったりすること

（イ）「探究の過程」において必要だと考えられる構成概念

ウェルビーイング・・・【定義】どうすればすべての人が、肉体的、精神的、そして社会的に満たされ、よりよい状態を実現できるか考え、行動すること

④　第９学年の実践の具体的内容

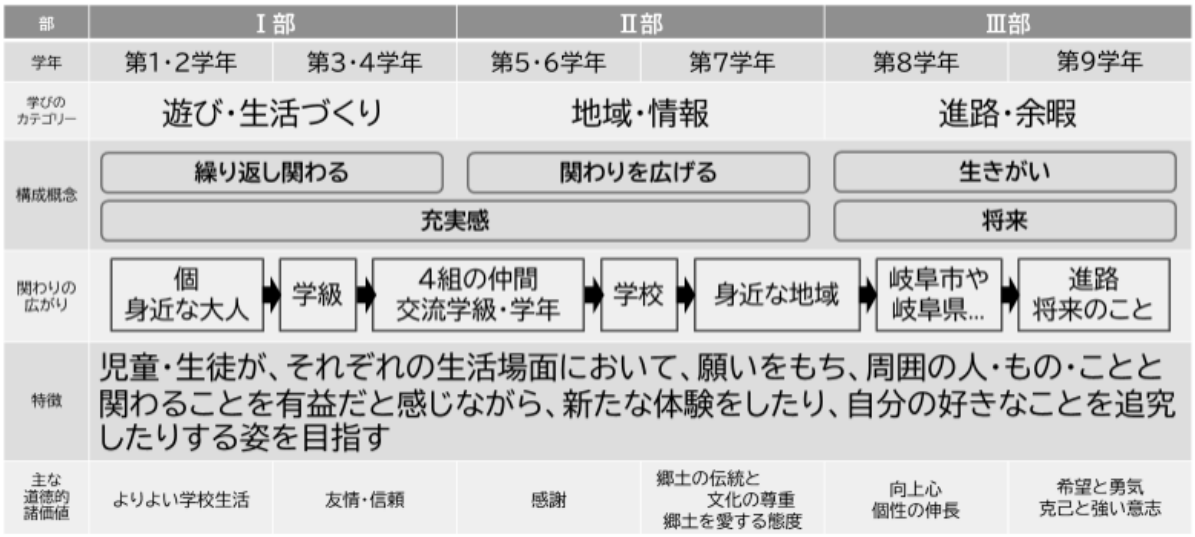
年度の始めに、私たちの「生きる未来」について、「私たちの『生きる未来』は明るいのか、暗いのか」「これからの生活を見つめる中で、現在でも課題になっていることは何か」を考えることから始めた。生徒は「明るい未来になる部分もあるが、暗い未来になる部分もある。現代社会の抱える課題とはどのようなことがあるのか」と考え、宿泊研修先である東京にて、「男女格差の問題」「世界の貧困問題」「世界の環境問題」「共生の問題」「生命の問題」とテーマ別にワークショップへ参加した。それを通して、ある生徒は「社会問題には様々なものがあり、また一つの解決策で、すべての問題が解決するようなことではないと感じた。しかし、それぞれの問題は、一人ひとりの意識で変えられる部分もあり、私たちのこれからの生き方が重要なのだと考えた。それぞれの分野で活躍する人たちの生き方が参考になった。まだそれぞれの問題への探究が十分でないので、問題を整理して、自分がさらに探究していきたいことを考えていきたい。」とまとめた。

東京研修後も例えば、男女（雇用と家庭生活）のチームでは、「男女にはそもそも差があるのか。その差はどのようなものか。すべての差はなくさないといけないのか。あってもいい差はないのか。」という問いを立て、男女の間にある不当な「差」に注目してテーマ別に探究学習を進めた。途中、岐阜市女性センターの人や岐阜大学の専門家に話を聞いたり、自分たちがさらに探究したいことについてポスターを作成し、ポスターセッションを行ったりした。

年度末には、これからの未来を自分はどう生きていきたいか考え、プレゼンテーションを作成し、８年生に対して自分の未来への展望を語った。

７　特別支援教育部で実践した教育課程の内容

（１）　特別支援教育部のカリキュラム全体像



（図Ⅳ－19）特別支援教育部のカリキュラム全体像

①　特別支援教育部のカテゴリーの設定

第１・２学年では、自分一人で願いをもって遊ぶところから、学級、学年へと、遊ぶ仲間が広がる。遊ぶ仲間が広がることで、一緒に取り組むよさを感じる。遊ぶ過程において、仲間と仲良く遊ぶためにどうするとよいか、よい姿をまねして、願いを実現していくことを目指す。

第３・４学年では、自分が育てたい作物を作り、収穫したものを仲間と共有する活動を通して、自分の活動は自分だけでなく、周りの仲間も喜ぶことができることを経験する。その経験をもとに、仲間とよりよい関係をつくるために自分にできることはないかを自分なり考え、その願いを実現していく。

第５・６学年では、今までの学年までで、自分たちの願いに基づいて身近な仲間や教師と関わることの楽しさを少しずつ感じ始めてきた児童たちが、地域の施設や人との関わりをもつことで、興味関心を広げたり、地域に愛着をもったりすることを目指した。第７学年では、地域の範囲をさらに広げ、岐阜市を探検する活動を通して、地域の良さに気付き、地域への愛着を感じられるようにした。そして、自分の興味関心を広げること、地域への愛着をもつことが、第８・９学年での「進路・余暇」の学習に繋がっていくことを意図した。

第８学年では、職業生活に必要な自己理解（得手不得手や特性など）を深めたり、自分の適性に気付いたりすることができるようにすることを目指す。職業体験や職場見学等を通して、やりがいや充実感、達成感を感じるとともに、職業の意義を知り、将来を見通した進路を考えることができるようにする。様々な余暇活動を仕組み、仲間と一緒に活動することを通して、興味を広げたり、自己選択や自己決定をしたりすることができるようにする。

第９学年では、卒業後の進路先や職業について調べることを通して、自分の進路について理解をする。その中で興味をもった職業について体験することを通して、働くことの意義や、やりがいを学んでいく。また、仲間と一緒に様々な余暇活動を行うことを通して、自分の好きな時間を有意義に過ごす楽しさも味わっていく。ときには身近な人と相談しながら、自己選択、自己決定することを通して、自分の将来の生き方を考えていくことを目指す。

②　特別支援教育部で育みたい資質・能力

（ア）　問題解決力

第１・２学年	自分の願いをもって、遊び方や遊ぶものを考え、思う存分遊びに取り組み、楽しむことができるようにする。
第３・４学年	自分の願いをもって、遊びを決めて実行したり、どんな野菜を作り、収穫した野菜をどうしたいかを考えたりできるようにする。
第５・６学年	学校の周りを探検する中で、疑問に思ったことを解決しようとすることができるようにする。
第７学年	地域の人や場所について興味・関心をもち、願いの実現に向けて取り組むことができるようにする。
第８学年	自分の願いをもち、願いの実現に向けて、自分で考えて行動することができるようにする。
第９学年	自分の目指す姿を決めることを通して、願いをもって活動に取り組むことができるようにする。 願いの実現に向けて試行錯誤することを通して、よりよい自分になるために自己選択をして、行動することができるようにする。

（イ）　関係構築力

第１・２学年	仲間や教師と一緒に遊び、仲間と関わることのよさを感じたり、仲間や教師と親しみ、関りを深めたりすることができるようにする。
第３・４学年	仲間や先生と相談し、役割分担をするなどして協力しながら活動に取り組むことができるようにする。
第５・６学年	自分の好きなことや仲間の好きなことを知り、みんなの思いを大切にして行先や活動内容を決めることができるようにする。
第７学年	願いの実現に向けて、仲間や教師と一緒に活動に取り組むことができるようにする。
第８学年	願いの実現に向けて仲間と一緒に活動に取り組み、よりよい方法を見つけて行動することができるようにする。
第９学年	自分や仲間のよさや課題を知ることを通して、自他の願いの実現に向けて助言し合いながら取り組むことができるようにする。 仲間と共に活動に取り組む意義を感じることを通して、相手や場面に相応しい言動をとることができるようにする。願いの実現に向けて試行錯誤することを通して、よりよい自分になるために自己選択をして、行動することができるようにする。

（ウ）　貢献する人間性

第１・２学年	交流学級や特別支援学級の仲間を遊びに招待し、遊びを進めながら一緒に楽しもうとする態度を養う。
第３・４学年	交流学級の仲間や特別支援学級の仲間へ自らはたらきかけ、ともに楽しもうとする態度を養う。
第５・６学年	地域を探検する中で、関わった人々への感謝の気持ちをもち、相手のために活動しようとする態度を養う。
第７学年	地域の人や地域の良さに気付き、地域への愛着、感謝する心情や態度を養う。
第８学年	自分と社会とのつながりを実感し、生活に生かそうとする態度を養う。 人とつながって生きていることに気付き、社会の一員として何ができるかを考えて行動する態度を養う。
第９学年	体験的な学習を通して、自分と社会とのつながりを実感し、自分の生活に生かそう

	とする態度を養う。 企業の人やお客さんに関わることを通して、仲間や社会で生活する人が喜ぶ方法を考え、仲間と共に行動しようとする態度を養う。

③　特別支援教育部で形成したい構成概念

（ア）「人との関わり方・態度」に関する構成概念

学年	概念名	定義
１～４	繰り返し関わる	「人・もの・こと」に繰り返し関わっていくこと
５～７	関わりを広げる	様々な「人・もの・こと」へ、関わっていく対象を広げていくこと
８・９	将来	これからの進路や生活のために必要な知識・技能、及びそれに関わること

（イ）「探究の過程」において必要だと考えられる構成概念

学年	概念名	定義
１～７	充実感	やりきった後には、よかったなあと感じられること
８・９	生きがい	体験を通して、「役に立ったなあ」や「自分はこんなことができるんだ」と感じられること

（２）　特別支援教育部（第８学年）の実践の具体的内容（次ページ図Ⅳ－２０）

まず、将来の夢について交流する中で、仕事について目を向け、インターネット・本・インタビューを通して、どんな仕事があるか、調べた。さらに、職場見学する会社や体験したい職業について調べ、職場見学では、詳しく見てみたいことや質問したいことを考え、働く人の様子や思いなどを知ることを確かめた。また、卒業後の生き方についての見通しをもつために、進学先（例えば、高等特別支援学校・特別支援学校高等部など）や一般就労や就労支援事業所（Ａ型・Ｂ型）の雇用形態や仕事内容などについて調べた。それらを通して、見学や体験した職業と自分の得手不得手や特性と比べて、考えることができるようにした。見学先を決定する際も、自ら行き方を調べたり、電話でアポイントメントを取ったりする活動も取り入れた。

見学した就労支援事業所や特別支援学校の活動の中から、今度は、実際に体験したい活動を話し合った。窓ふきの活動の基本的な手順や方法を調べ、活動を繰り返し行うことで、「できた！」「きれいになった」「前よりもきれいになった」「スクイジーを拭くのを忘れる」「なんか線が入る」「力を入れすぎている気がする」といったことに気付き、よりよい方法を確かめた。

この窓ふき活動を、校内の至る所で実際に行い、評価を得ることを繰り返した。例えば、他の特別支援学級の教室で実践したときに認めてもらったときには、生徒は「色んな先生がほめてくれて嬉しい」「窓が一番きれいだと言われて、すごく嬉しかった」という充実感を得ることができた。

また、清流高等特別支援学校ビルクリーニング班の先輩の話を聴いて、「やっぱり、力を入れすぎると音が鳴るんだ」「４つのポイントに気を付けてやってみよう」など、自分たちの活動をよりよくするためのポイントを知ることができた。

これらの活動を繰り返していく中で、学校内で活動したい場所を考える姿が見られるようになり、「８年生の教室をやりたい」「学校の汚い窓を探してやりたい」「お母さんにやってほしいって言われたから、大掃除の時にやろうと思う」といった、貢献したいという態度につなげることができた。

8年4組「進路・余暇」　職業体験をしよう　～窓ふきに挑戦しよう～

出会い

エスポアール（就労）

【見学のポイントを明らかにする】
「掃除の人が食事場を黙々と丁寧に拭いていてすごいと思った」
「時間をかけてもくもく掃除をしていた。僕も見習いたい」
【見学時の録音した生の声を聞き、　もう一度確認する】

羽島特別支援学校

【見学のポイントを明らかにする】
「下駄箱や窓をふいていた。プロの人が使う道具を使っていた」
「床はトレッシャーを使うんだ」
「窓ふきをやってみたい」
【校内で挑戦する活動を決める】

今できること～働く人になるために

・おちこまないで、きりかえる。
・さい後まで、やりとげる。
・自分でやりとげる。
・言葉づかいに気をつける。
・失敗しても、きりかえる。

活動する→見つめ直す(ｴﾗｰ・ｼﾞﾚﾝﾏ)

道具

「早く使いたい。やってみたい」
【道具の使い方と手順を伝える】
【実際に見本を見せる】
「低いところは、(棒を)取った方がやりやすいと思う」

３回の活動場所

8年4組→体育館→生徒玄関

【活動後に感想の時間を設ける】
「できた!」「きれいになった」
「前よりもきれいになった」
「スクイジーを拭くのを忘れる」
「なんか線が入る」
「力を入れすぎてる気がする」
【先生からの評価をお願いする】
【活動のめあてを決める】

窓ふきのめあて

・よごれを確認しながらやる。
・気をぬかずに集中してやる。
・力加減を考えながらやる。
・はしまでていねいにやる。
・かどまできれいにする。

活動の場所

５・６年４組→７年４組

【評価をお願いし、一番きれいな窓を生徒に伝える】
「色んな先生がほめてくれて嬉しい」
「窓が一番きれいだと言われて、すごく嬉しかった」

【他者評価から、友達のやり方を見て学ぶ】
【見るポイントを伝える】

友達の様子から

「集中をしていた」
「スクイジーをしっかり拭いていた」
「水滴がまだついているときに、何回も拭いていた」

清流高等特別支援学校
ビルクリーニング班
先輩の話から

「そうなんだ」
「やっぱり、力を入れすぎると音が鳴るんだ」
「4つのポイントに気をつけてやってみよう」

広げる

学んだことを活かす

【毎時間、活動前に4つのポイントを確認する】
「体を使ってやると音がしなかった」
「ワイパーの角を合わせるのは、やっぱり難しい」
「前よりきれいにできるようになった気がする」

貢献する

【学校内で活動したい場所を考える】
【授業参観で活動し、保護者からの願いを聞く】
「8年生の教室をやる」
「学校の汚い窓を探してやりたい」
「お母さんにやってほしいって言われたから、大掃除の時にやろうと思う」

（図Ⅳ―20）　特別支援教育部（第８学年）の実践

Ⅴ　研究開発の結果及びその分析

１　児童生徒への効果

（１）調査方法

児童生徒の実態や学習の効果に関わる成果と課題を考察することで、研究開発の改善につなげることを目的とし、「学習・生活アンケート」という名称で質問紙調査を実施した。方法は、Microsoft Forms を使い、児童生徒はタブレット端末を用いて回答する形で実施した。

質問紙調査の内容を表Ⅴ－１に示した。これらの質問に対し、「とてもそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の４件法で回答を求めている。この質問紙調査は毎年同時期に実施し、比較ができるようにしているが、研究開発一年次から二年次にかけて内容の見直しを行っている。その結果、文章の記述等を児童生徒に分かりやすくなるように修正した部分があるが、調査内容に大きな差はないとし、経年比較の材料として扱っている。

（表Ⅴ－１）児童生徒質問紙調査項目

資質・能力	ラベル	質問
問題解決力	主体性	学校や普段の生活の中で、問題を解決する方法を自分で考えて行動することができていますか。
	粘り強さ	学校や普段の生活の中で、上手くいかないことがあっても、あきらめずに最後までやり抜くことができていますか。
	ｱﾌﾟﾛｰﾁの多様性	いろいろな考え方で、問題を解決することができていますか。
関係構築力	他者理解	相手と活動するときに相手の思いや考えを分かろうとしながら、聞いていますか。
	対話の仕方	自分の気持ちや考えが相手に伝わるように、伝え方を工夫していますか。
	協働性	周りの人との考え方や感じ方の違いを大切にして、力を合わせて取り組んでいますか。
貢献する人間性	自他の価値	お互いのよさや得意なことを認め合い、生かすことができていますか。
	積極性（他者）	誰かを進んで助けたり、支えたりしていますか。
	積極性（社会）	地域や社会のために自分にできることをしていますか。
	自己有用感	人や社会に貢献することを通して自分のよさを実感することはありますか。

（２）結果

次ページの表Ⅴ－２は「自己実現に向かうための資質・能力」に関する児童生徒を対象とした質問紙調査の結果である。児童生徒の回答のうち、「とてもそう思う」または「少しそう思う」と回答した割合（以下「肯定的な回答」とする）の合計である。

結果は、「問題解決力」「関係構築力」の項目では、全校児童生徒の９割以上が、「貢献する人間性」でも８割以上が肯定的な回答をしている。また、増加した項目や減少した項目の傾向を分析したが、学年によって大きく異なり、全体的な傾向を示すことはできなかった。

（表Ｖ－２）「自己実現に向かうための資質・能力」に関する児童生徒質問紙結果

質問項目	肯定的回答			
	Ｒ６	Ｒ５	Ｒ４	Ｒ３
【問題解決力・主体性】	94%（±０%）	94%（＋１%）	93%（－１%）	94%
【問題解決力・粘り強さ】	93%（＋１%）	92%（±０%）	92%（＋１%）	91%
【問題解決力･アプローチの多様性】	90%（＋１%）	89%（±０%）	89%（＋１%）	88%
【関係構築力・他者理解】	94%（－１%）	95%（＋１%）	94%（－２%）	96%
【関係構築力・対話の仕方】	91%（＋１%）	90%（±０%）	90%（－１%）	91%
【関係構築力・協働性】	92%（±０%）	92%（－１%）	93%（－１%）	94%
【貢献する人間性・自他の価値】	94%（＋１%）	93%（±０%）	93%（＋１%）	92%
【貢献する人間性・積極性（他者）】	92%（±０%）	92%（－２%）	94%（＋２%）	92%
【貢献する人間性・積極性（社会）】	81%（＋３%）	78%（＋１%）	77%（＋３%）	74%
【貢献する人間性・自己有用感】	84%（－１%）	85%（＋４%）	81%（－３%）	84%

表中の（　）内の数値は前年度からの増減を示す。

（３）考察

肯定的な回答の割合は、令和４年度から令和６年度までほぼ同じ水準であり、多くの児童生徒は、「自己実現に向かうための資質・能力」を授業場面や日常生活、地域や社会の中で発揮していると考えており、「自己実現に向かうための資質・能力」が身に付いたという実感を児童生徒がもっているといえる。特に「地域や社会のために自分にできることをしていますか。」の質問に対して、令和３年度から３年続けて増加しており、児童生徒がもっている「人の役に立ちたい。」という思いを行動に移そうとしていることが読み取れる。

２　教師への効果

（１）調査方法

教師の研究開発実践に対する捉えを明らかにし、成果と課題を考察することで、研究開発の改善につなげることを目的とし、「教職員アンケート」という名称で質問紙及び自由記述調査を実施した。方法は、Microsoft Forms を使い、教師用ＰＣまたはタブレット端末を用いて回答する形で実施した。

質問紙調査の内容を表Ｖ－３に示した。これらの質問に対し、「あてはまる」「どちらかというとあてはまる」「どちらかというとあてはまらない」「あてはまらない」の４件法で回答を求めている。研究開発一年次は実施しなかったが、児童生徒・保護者と同じ視点で調査することにより、経年比較と共に、対象の違いによる比較・分析ができるようにするために、研究開発二年次からこの質問紙調査を実施し、経年比較ができるようにした。

（表Ｖ－３）教師質問紙調査項目

資質・能力	ラベル	質問
問題解決力	主体性	子供は、学校や普段の生活の中で、問題を解決する方法を自分で考えて行動することができていますか。
	粘り強さ	子供は、学校や普段の生活の中で、上手くいかないことがあっても、あきらめずに最後までやり抜くことができていますか。
	アプローチの	子供は、いろいろな考え方で、問題を解決することができていま

	多様性	すか。
関係構築力	他者理解	子供は、相手と活動するときに相手の思いや考えを分かろうとしながら、聞いていますか。
	対話の仕方	子供は、自分の気持ちや考えが相手に伝わるように、伝え方を工夫していますか。
	協働性	子供は、周りの人との考え方や感じ方の違いを大切にして、力を合わせて取り組んでいますか。
貢献する人間性	自他の価値	子供は、お互いのよさや得意なことを認め合い、生かすことができていますか。
	積極性（他者）	子供は、誰かを進んで助けたり、支えたりしていますか。
	積極性（社会）	子供は、地域や社会のために自分にできることをしていますか。
	自己有用感	子供は、人や社会に貢献することを通して自分のよさを実感することはありますか。

合わせて令和５年度には自由記述調査として、「どう生きるかの実践を通して、よかったと思うこと」「どう生きるかの実践の中で、困ったこと・困っていること」を聞き、成果と課題の分析につなげた。

（２）結果

①　質問紙調査

表Ｖ－４は「自己実現に向かうための資質・能力」に関する教師を対象とした質問紙調査の結果である。教師の回答のうち、「あてはまる」または「どちらかというとあてはまる」と回答した割合（以下「肯定的な回答」とする）の合計である。

肯定的な回答の割合について、年々減少している。令和４年度から令和５年度については「主体性」「粘り強さ」の２項目で大きく減少し、令和５年度から令和６年度については「他者理解」「協働性」「自己有用感」の３項目で大きく減少している。児童生徒の質問紙調査の結果と比べて、数値が大きく下回っているのは、「対話の仕方」「積極性（社会）」の２項目であり、この傾向は令和４年度から３年間変わっていないことが分かる。

（表Ｖ－４）「自己実現に向かうための資質・能力」に関する教師質問紙結果

質問項目	肯定的回答		
	Ｒ６	Ｒ５	Ｒ４
【問題解決力・主体性】	８３％（－３％）	８６％（－12%）	９８％
【問題解決力・粘り強さ】	８１％（－５％）	８６％（－12%）	９８％
【問題解決力・アプローチの多様性】	７６％（－６％）	８２％（－２％）	８４％
【関係構築力・他者理解】	８１％（－17%）	９８％（＋５％）	９３％
【関係構築力・対話の仕方】	６７％（－３％）	７０％（－９％）	７９％
【関係構築力・協働性】	８３％（－10%）	９３％（＋３％）	９０％
【貢献する人間性・自他の価値】	８６％（－７％）	９３％（＋１％）	９２％
【貢献する人間性・積極性（他者）】	９０％（－８％）	９８％（±０％）	９８％
【貢献する人間性・積極性（社会）】	４７％（－８％）	５５％（－４％）	５９％
【貢献する人間性・自己有用感】	６４％（－13%）	７７％（－８％）	８５％

表中の（　）内の数値は前年度からの増減を示す。

②　自由記述調査

令和５年度に行った自由記述調査について、「どう生きるかの実践を通して、よかったと思うこと」の回答の一部を以下に示す。

子供たち同士で折り合いをつけて話をしようとする児童が増えた。対象が動物だったため、授業時間外でも積極的に活動する姿が見られ、身近な存在として関わっていくことができた。
まちの人の反応を受けて、何度も話し合いを重ねていくことで、まちづくりが自分ごとになった瞬間を見たとき、感動した。自分たちで「エラー」を乗り越えたり、「ジレンマ」を共有して何度も話し合いをしてひとつにまとめた経験を繰り返ししたりすることで、子供たちが諦めずに話し合う姿が他教科でも見られるようになった。
子供たち自身が楽しみながら学び、生き生きとしている。
子供を学びの主体に置くことができ、学校の教育目標や三つの資質・能力を明確に育むことを意識できた。また、思考を捉え、日々教師も試行錯誤し、力を伸ばすことができた。
自分も子供と悩みながら探究を進めることができ、自分の中の視野も広げることができた。

「どう生きるかの実践の中で、困ったこと・困っていること」の回答の一部を以下に示す。

「どう生きるか」の授業の仕方の正解(ないのかもしれない)が分からない。
自分のやっている授業が本当に「どう生きるか」なのかどうかが、今の段階では分からない。
突発的な動きや願いが予想しにくく、活動がぶれてしまうことがあった。
先が見通せないこと。自分の印象としては、一度走り出すと、意外に修正が効かない。方向性は良かったか？一人一人に力が付いたのか？一年かけてやっただけのものが残ったのか？そういった思いが残る。
明確なものがないため、主観で評価することになること。児童の達成感というか、何をゴールにすればいいのかの設定が難しい。
「どう生きるか」の授業で資質･能力は育まれているかもしれないが、それが日常生活に反映されていない。

（３）考察

質問紙調査の結果から、全体的に「自己実現に向かうための資質・能力」を育むことができているという実感はある程度感じているが、年々その実感が薄れてきていると考えられる。質問紙調査の結果を本校の勤務年数によって分類して比較検討をしたところ、勤務年数４年目以降の教職員は勤務年数１～３年目に比べ、数字を低く評価していることが分かった。考えられることとして、研究を重ねることによって、児童生徒の目指す姿に対して、より高いものを期待するようになってきている可能性がある。

また、「対話の仕方」「積極性（社会）」の２項目で、児童生徒の肯定的な回答に比べ大きく低いことから、自分の気持ちや考えが相手に伝わるように、伝え方を工夫している点や、子供は、地域や社会のために自分にできることをしている点について資質・能力を育むことができていると自信をもって答えることができていないことが課題であるといえる。特に、地域や社会への貢献については、児童生徒の肯定的な回答が増加しているのを踏まえると、教師の自信のなさが顕著であるといえる。

自由記述の結果からは、教師が児童生徒の「どう生きるか」の学びを楽しんでいる様子や積極的に学ぼうとする様子、目指す姿に向けて粘り強く取り組む様子を捉えていること、「どう生きるか」の指導を通して、教師の指導観、指導技術にもよい影響を実感していることが窺える。このことから、教師としての構えの変化や成長を実感する一定の効果があったといえる。

一方で、指導計画を立てるときや実際に指導する場面で、どのように計画を立てればよいか分からないといった声が聞こえたり、この授業でよいのかといった自問をしながら進めていて不安であったりするという声が多くあり、指導計画の立案段階から児童生徒が学んでいる具体的な姿をイメージすることなど、引き続き改善を図るべきことと考えている。

また、時間の制約や謝礼などの費用について、自由さがないことや、日常生活の姿に結びついていないという回答も見られ、このような側面からも実践の改善点として整理する必要があるといえる。

３　保護者への効果

（１）調査方法

保護者の実感から、研究開発の成果と課題を考察することで、今後の改善につなげることを目的とし、「保護者アンケート」という名称で質問紙調査を実施した。方法は、Microsoft Forms を使い、アンケートフォームのＵＲＬ及びＱＲコードを全家庭に送信し、回答を求める形で実施した。

質問紙調査の内容を表Ｖ－５に示した。これらの質問に対し、「あてはまる」「どちらかというとあてはまる」「どちらかというとあてはまらない」「あてはまらない」の４件法で回答を求めている。この質問紙調査は毎年同時期に実施し、比較ができるようにしているが、研究開発一年次から二年次にかけて内容の見直しを行っている。その結果、文章の記述等を分かりやすくなるように修正した部分があるが、調査内容に大きな差はないとし、経年比較の材料として扱っている。また、資質・能力とは異なるが、「『どう生きるか』で学んでいることは、お子さんとの会話の中で話題になりますか。」「『どう生きるか』の学びは大切だと思いますか。」の質問も合わせて聞いている。

（表Ｖ－５）保護者質問紙調査項目

資質・能力	ラベル	質問
問題解決力	主体性	お子さんは、自分で考えて行動することができていますか。増えてきましたか。
	粘り強さ	お子さんは、うまくいかないことがあっても、最後までやりぬくことが増えてきましたか。
	アプローチの多様性	お子さんは、興味をもったことを調べたり、他の人に聞いたりするなど、自分の考えをひろげる姿が増えてきましたか。
関係構築力	対話の仕方	お子さんは、自分の気持ちや考えを他の人にうまく伝えることができていますか。
	協働性	お子さんは、周りの人との違いも大切にして、力を合わせる場面は増えてきましたか。
貢献する人間性	積極性（他者）	お子さんは、誰かのために進んで行動する場面は増えてきましたか。
	自己有用感	お子さんは、自分のよさを話すことができますか。

（２）結果

表Ｖ－６は「自己実現に向かうための資質・能力」に関する保護者を対象とした質問紙調査の結果である。保護者の回答のうち、「あてはまる」または「どちらかというとあてはまる」と回答した割合（以下「肯定的な回答」とする）の合計である。

（表Ｖ－６）「自己実現に向かうための資質・能力」に関する保護者質問紙結果

質問項目	肯定的な回答			
	Ｒ６	Ｒ５	Ｒ４	Ｒ３
家庭で話題になるか	75%（－４%）	79%（＋４%）	75%（－２%）	77%
「どう生きるか」は大切であると思うか	98%（－１%）	99%（＋１%）	98%（＋２%）	96%
【問題解決力・主体性】	88%（－３%）	91%（＋１%）	90%（＋７%）	83%
【問題解決力・粘り強さ】	84%（－２%）	86%（＋３%）	83%（－１%）	84%
【問題解決力･アプローチの多様性】	90%（±０%）	90%（＋１%）	89%（＋13%）	76%
【関係構築力・対話の仕方】	80%（－５%）	85%（＋６%）	79%（＋９%）	70%
【関係構築力・協働性】	92%（±０%）	92%（＋４%）	88%（－３%）	91%
【貢献する人間性・積極性（他者）】	88%（－１%）	89%（＋２%）	87%（±０%）	87%
【貢献する人間性・自己有用感】	71%（＋３%）	68%（＋１%）	67%（＋９%）	58%

表中の（　）内の数値は前年度からの増減を示す。

肯定的な回答は、全ての質問に関して７割以上に達している。「『どう生きるか』は大切であると思うか」については、ほぼ100%の保護者が肯定的な回答をしている。また「自己有用感」の項目では、令和３年度から年々増加している。

（３）考察

「『どう生きるか』は大切であると思うか」については、ほぼ100%の保護者が肯定的な回答をしており、「どう生きるか」の理念に賛同していただき、教育活動を支援していただいていることが分かる。各種通信や学級懇談会、Webページ等で取り上げる頻度を増やしたことで、児童生徒が目指す姿を教師と共有すると共に、保護者の間でも理念が浸透していったと考えられる。

資質・能力が身に付いているかどうかについても肯定的に捉えている傾向が見られ、児童生徒の評価や教師の評価に比べ、児童生徒の姿から、「自己実現に向かうための資質・能力」が身に付いていると保護者が実感しているといえる。

４　質問紙調査の総合的考察

児童生徒の質問紙調査の結果から、児童生徒と保護者において「自己実現に向かうための資質・能力」が身に付いたという実感につながっていると考えられる。教師も全体的に「自己実現に向かうための資質・能力」を育むことができているという実感はある程度感じているが、児童生徒の肯定的な回答に比べ、項目によって差が大きいものがある。

「どう生きるか」は、新領域であるという特性があるため、授業を構想することに難しさを感じたり、児童生徒への指導をどこまで行ってよいか戸惑ったりする教師がほとんどである。だからこそ、教師間で今まで以上に具体的な児童生徒の姿で共有していくことを進めていく必要があると考え、特に第四年次では、その点に重きを置き、取り組んできた。例えば、児童生徒には目指す姿を学年の発達に合わせて分かりやすい言葉で示して共有することで、教師と児童生徒の間で共有できる仕組みを整え、同じ目標に向かって学びを進められるようにしたこと（Ⅳ－（４）－③参照）は、重点に対する取組の一つである。質問紙の結果は、短期間の実践ということもあり伴わなかったが、中長期的な視点に立てば、これらの取組は浸透していくであろうと考えている。

５　総括

以上の研究内容を仮説に照らし合わせて検証した結果をまとめると、次の通りになる。

①　実社会・実生活にあるテーマに対して探究的で創造的な学びを位置付けることで、児童生徒は学びを通して、「自分はどう生きるか」を考え、判断し行動する態度を身に付けることができ、自己実現に向かうために必要な資質・能力を実践的な場面で育成できる。さらに効果的に育むために、保護者への情報提供をより多くすることで、学校と家庭が同じ歩みの中で進めていくことが必要である。 ②　実社会・実生活にある「ジレンマ」や「エラー」に対して、他者と共に道徳的な議論を繰り返すことにより、他者を受容して共感的に理解し、他者と自分の幸せのために何ができるのかを考え、行動につなげる実践的な道徳性を養うことができる。課題として、授業中に出てきた教師側が想定していなかった道徳的諸価値に対して、適切な対応をすることが難しいことがある。 ③　「どう生きるか」の学びを通して、児童生徒が自身の変容や成長を実感することにより、自分らしさを生かし、他者や社会を受け入れながら、自分と社会の未来に夢と責任をもって行動しようとすることができるようになる。 ④　９年間にわたり適切にカリキュラムを編成し、多様な分野や社会で活躍し貢献する人々との出会いを設定することを通して、児童生徒は多様な価値観に触れることができ、その経験を通して自分の生き方を見つめる機会を得て、自分にとって必要なことは何かを確かにして、目標をもって学び続けることができるようになる。 ⑤　全ての教育活動で、自己実現に向かうために必要な資質・能力を育成するためのカリキュラムづくりの方法原理や、教師の指導原理を見いだし、実践していくことで、児童生徒の自己実現に向かうために必要な資質・能力を効果的に育成することができる。課題として、新領域であるという特性があるため、授業を構想することに難しさを感じたり、児童生徒への指導をどこまで行ってよいか戸惑ったりする教師がほとんどであること。また、教師間もしくは教師と児童生徒間で、目指す姿を共有し、同じ目標に向かって学びを進めていく必要があるが、それにはかなりの時間を要すること。が挙げられる。

①　実社会・実生活をテーマにした探究的な学びについて

（児童生徒への質問）

「あなたにとって大切にしたい生き方は何ですか？そのわけもくわしく教えてください。」

私は、住んでいる人の願いを大切にしてまちづくりをしたいと思った。わけは京都の研修の時に住んでいる人の願いを一番に考える事が大切だと学んだから。私は、住んでいる人の願いを大切にする生き方を大切にして「どう生きるか」を学びたいと思う。
違いを認め合うことを大切にしたい。去年の「どう生きるか」で学んで、違いを理解し、認め合うことで誰もが過ごしやすい社会に近づくとわかったから。
私は人との繋がりを大切にして生きていきたい。今年は「人、もの、こととの繋がり」を大切にしていて宿泊研修や「どう生きるか」などで人などにつながっていく中で自分の視野がどんどん広くなっていると思うから。
広い視野と様々な視点を持って物事を考え、すぐに行動することを大切にしたい。多様性という言葉を多く聞いて、自分の価値観だけで判断するのではなく、他の人の考え方も認め合うことも大切だし、何かあった時にはすぐに行動できるような行動力も必要だと思ったから。

「学びのカテゴリー」の内容を踏まえ、自分ごととして捉えている児童生徒が多くいることが記述から分かる。自分から他者・社会へ視野が広がっていくことを自覚したり、自分と他者・社会のつながりを大切にし、自分の生き方について言及したりする内容も見られた。これらの記述から、実生活・実社会をテーマにした「学びのカテゴリー」を設定すること、「学びのカテゴリー」に合わせた探究的な学びを進めていくことは、児童生徒の自己実現に向かうための資質・能力を育むこ

とにつながっているといえる。

（保護者への質問）「本校の「どう生きるか」の学びについて、ご意見をお聞かせください。」

普段の授業のような勉強ではなく、実践して体験して学ぶので記憶に残ったり、育てたものを自分で食べたりして満足度も上がったり、楽しみながら学べるので、進んで取り組めるので、色々考えて吸収してくれると良いなあと思っています。
ひとりっ子ということもあり、家庭では子ども同士で揉まれる環境にありません。高齢の家族の中にいるだけに、どう生きるかの時間は子どもたちや先生、専門家や地域の皆さんの色々な意見を知り、考えて行動する貴重な機会になっています。かぞくでの活動と並行してこのような学びの場をもうけていただいていることに感謝しております。国語や算数と異なり、0点か100点かの世界でない、のびのびとした時間が、本人にとっては学校生活の清涼剤となっています。
「楽しい」ということが子どもの学びに何より重要なことだと思います。いつも飼育している動物の写真や絵を見せてくれたり、様子を教えてくれたりするので、子どもが楽しく取り組んでいるのだろうなと安心しています。
野菜や花を育てたり、ウサギやニワトリなど生き物のお世話をしたりするとき、言葉でコミュニケーションが取れない状況で、どうするのが良いのかを調べる時には専門の先生に教えていただく過程で想像する力、また自分一人ではなく仲間と共に取り組む力などが育っているのだと思います。これからも「どう生きるか」の取り組みで成長してくれるのを楽しみにしています。
息子がいつも「どう生きるか」の授業の話をしてくれるのですが、自分達が小学生の頃に比べて主体的に動いているな、自分や友達の意見もうまく取り入れて活動しているなという印象です。学校外でも自分の意見をしっかり言語化して相手に伝えられるのは、「どう生きるか」や学校生活で培ったものなのかなと思います。
のびのび地域に出掛けて行ったりして、取り組めることをありがたく感じています。生の体験に勝るものはなく、どんどん他の人から、地域から学んできてほしいです。
地域の方や、さまざまな年代の人との交流を通して人とのつながりを大切にしているのがとてもいいなあと感じます。その出会いのなかでいろいろなものをキャッチしてほしいと願います。

保護者は「どう生きるか」の学びについて、児童生徒が話すことを中心に知ることがほとんどである。特に１～４年生までの学びについては、「野菜」「動物」といった目に見える対象を扱っており、児童が話す機会も多く、保護者もその学びについて好意的に受け取り、児童の成長を感じ取っている記述が多く見られた。反対に、学年が上がるにつれ、抽象的な内容が多く、児童生徒が学校の学びを家庭に持ち込んで、一緒に考える機会があり、大変嬉しく思うと回答する家庭もあれば、児童生徒が学校であったことを話すことが少ない家庭では、「学校からの情報がほしい」という記述も見られた。課題は残るものの、総じて、実生活・実社会をテーマにした探究的な学びは、保護者の理解を得ることができているといえる。

②　事柄や価値そのものを議論する学びについて

（児童生徒への質問）

「あなたにとって大切にしたい生き方は何ですか？そのわけもくわしく教えてください。」

自分の意見を大切にできて、いろいろな人たちの意見も大切にできる生き方したいです。 理由は自分の意見も大切だし、他の人の意見も大切だからです。
他の人に任せて意見を考えてもらったりする他人事よりも自分ごとで考えること
大切にしたいのは、人とたくさん話して、人とたくさん関わる生き方です。理由は人とたくさん話して関われば、その人の困っている事や、望んでいる事が分かってきて、それを解決しようとするのが大切だと思うからです。

人の話をしっかりと聞いて、相手が安心できるようにする生き方です。相手や自分のためになるからです。特に、Aさんは人の話をしっかりと聞いていて、だれもが安心できるような状態にしていて、わたしも見習いたいなと思ったからです。
自分で考えることを大切にしたい。相手の考えに縛られ続けるのではなく、自分の考えももつことに意味があると思うから。

他人の話を聞く、他人の意見を大事にする、他人とたくさん話すといった、他者を尊重したい生き方をしたいと回答する児童生徒は数多く見られた。また、あらゆる問題を他人事にせず、「自分の考え・意見をもつこと」が大切にしたい生き方であると回答する児童生徒も見られた。一方で、「自分の意見を押し通すことも必要である」といった内容を回答している児童生徒が若干いることが気がかりであった。

（保護者への質問）「本校の「どう生きるか」の学びについて、ご意見をお聞かせください。」

家で、どう生きるかの時間の出来事をたくさん話してくれるようになりました。野菜をベランダのプランターで育て始め、学校ではこうしているよと教えてくれます。家族で図書館に調べに行くなど、家庭においても有意義なものになっています。
どう生きるかの授業の中ではクラスメートと相談したり、自分たちで調べたり試行錯誤しながら学ぶことができているようで、良いと思います。その学びが家でも活かせるといいと思います。
人間成長としてその学年、年齢において身に付けておく事が必要であろうと思われることに、常に取り組まれている様に感じている。議題があれば必ず話し合う。答えを模索しそれに必ず皆で向かう。大人でもやれていない事が多いと感じる事をこの年齢で挑戦し続けている。
グループディスカッションやディベートなどで主体性や協調性、表現力が築かれつつあると感じます。学んだことを社会に生かせる様な思考力や判断力、豊かな人間性を期待します。
毎回様々なテーマの中で子ども達が自分で考え体験し何が出来るかを考えて話合って、行動している姿に驚いています、ありがとうございます。

保護者の回答の中には、試行錯誤する様子、話し合う様子について言及するものが多く、議論を繰り返す学びについては、肯定的な評価を得たといえる。道徳的諸価値に関する記述は少なく、保護者からの回答では、実践的な道徳性が養われたかどうかを判断することは難しい。

全ての学級において、年間指導計画や単元指導計画、１単位時間の授業を考える中で、「ジレンマ」や「エラー」を乗り越える場面がどのように表れるのか、それを乗り越えるための道徳的諸価値にはどのようなものが考えられるのかをできる限り想定した。児童生徒は、「ジレンマ」や「エラー」にぶつかったとき、道徳的諸価値に基づいて、議論したり判断したりし、納得解や最適解を求めていく姿が多く見られていた。以上のことから、「『ジレンマ』や『エラー』に対して他者と道徳的な議論をする場」は適切に設定されたといえる。

③　自分と社会の未来に夢と責任をもてる学びについて

（児童生徒への質問）

「あなたにとって大切にしたい生き方は何ですか？そのわけもくわしく教えてください。」

周りの人から尊敬される人、さりげなくゴミを拾ったり、何事にも行動できたりする人、自分から行動できる人を目指していきたいです。いっぱい助けてくるお母さん・お父さんみたいな人になりたいです。
いろんな人が困っていた時に助けられるように生きていきたいです。どうしてかというと、人が困っていた時に助けるとお互いが嬉しくなるし、どんな人でもできないものがあるので、そこで助けて協力して生きていけるようにしたいからです。
自分が目指すもの、求めたいものそれがなんなのかをはっきりさせ、それに向かって日々努力

すること。

回答の数は限られているものの、自分の生き方について、夢を語り、そのためにはどのようなことが必要であるかに目を向けている児童生徒もいる。様々な人たちに出会う中で、自分の生き方のモデルになる人に出会えたり、身近な人のよさを再発見し、憧れを抱いたりする児童生徒の回答も見られた。

（保護者への質問）「本校の「どう生きるか」の学びについて、ご意見をお聞かせください。」

３年生くらいまでは、大変大人しく、どちらかと言うと受動的だったのに、生き物や植物のお世話を通して、自分がどう接しているかや、毎日の出来事、頑張ったことなどよく話をしてくれるようになりました。子どもを通して、「どう生きるか」の学習の素晴らしさを日々感じております。
色々な分野について自分の意見をもち、深く考える時間となっているので、すごく大切な授業になっていると家でも嬉しそうに話しています。これから社会に出ても自分と向き合い、切り拓くための力がつくと思います。
自分の将来について真摯に考えたり、社会との共生を小さい頃から学び、考えたりする大切な機会となっていると思います。なかなか課題に対する答えを導き出すのは難しく、手応えを感じるとまではいかないこともあると思いますが、大人になってから気付くこともがあるのでは、と思ったりもします。

保護者の回答から、小さい学年では、自分が「どう生きるか」の学びでどのようなことを頑張っているのかを中心に伝えていること、学年が上がるにつれて、「どう生きるか」の学びに対して、自分はどのような考えや意見をもっているのか、どのような将来を描いていくのかについて、家庭で話題になっていることが分かった。児童生徒の回答と同様に、「どう生きるか」の学びを通して、自分の将来や夢をもつことや、それに対する責任についてまで考えることができているといえる。

④　多様な価値観から生き方を見つめ、目標をもって学び続けることについて

（児童生徒への質問）

「あなたにとって大切にしたい生き方は何ですか？そのわけもくわしく教えてください。」

すべての生き物が幸せな生き方です。この地球に住んでいるすべての生き物が大切にされて幸せになっていれば戦争なども起きないと思うし、すべての生き物が幸せに暮らせていれば世界がもっと明るくなると思うからです。
相手のことを意識し、自分も相手も幸せに過ごせる生き方です。理由は、自分と相手との関わりが大切だと思うし、社会に出ても必要なものだと感じるからです。
たくさんの人を明るい気持ちにされられる人です。誰も嫌な思いをしないために、自分の行動でたくさんの人を笑顔にできたら素敵だと思うからです。
仲間の幸せのために自分ができることを精一杯行い、貢献する生き方です。人に優しくし、誰かのために働くという生き方は社会で必要になると思うからです。
誰よりも努力する。そうすると自分に自信がつき、物事が楽しく感じる。余裕ができ、周りに目を向けることができる。人からじゃなく自分からやってみたい。

①～③のように、具体的な生き方ではないが、「（自分が）幸せに過ごしたい」「（他者が）幸せに過ごせるために自分ができることをしたい（貢献したい）」と、自分の生き方をみつめる記述は、ほとんどの児童生徒ができている。「どう生きるか」の学びで触れる多様な価値観が、児童生徒の生き方を見つめることに影響を与え、どうすればその生き方を実現できるのかまで考えるきっかけになっているのは、確かである。

（保護者への質問）「本校の「どう生きるか」の学びについて、ご意見をお聞かせください。」

我が子は３年生なので、３年生までしか分かりませんが、遊びも野菜も花も、大変興味をもって取り組めたようです。特に野菜については私も知らないようなことまでたくさん調べて教えてくれ、今は野菜がどのような状況なのかを目をキラキラさせながら話してくれました。３年生になっても、家の畑で自分だけで野菜を育てています。勉強では学べない、大切なことを学べていると思います。
何か問題が起きた時に自分でどうしたら良いのかを考えて行動する、自主性がだいぶついてきたかな？と思います。問題があった時でなくても、自分が何かをしたい時にどうすれば出来るかやこれがしたいからこれが必要だ等、考えたり調べたりすることが増えたと思います。この先今までよりそういった機会が増えていくと思うのでこのまま自分で考えて調べてということが続けていけたらと思います。
向上心、希望と勇気、感謝、礼儀、相互理解、思いやりなど、沢山ある学びの基礎を一人一人が１つでも多く身につける事ができれば、今後、社会に出た時必ず生かす事ができると思います。子供達にとってとても重要で大切な学びだと思います。

保護者からの回答の中には、現在「どう生きるか」で学んでいる内容や学び方が、今は困難なものであっても、将来必ず役に立つという構えで、肯定的に捉えているものが多く見られた。

⑤　資質・能力を効果的に育成することについて

（児童生徒への質問）

「あなたにとって大切にしたい生き方は何ですか？そのわけもくわしく教えてください。」

仲間の気持ちを考えて接することです。どうしてかと言うと、相手が嫌だと思う接し方をすると、相手はもちろん、自分も嫌な思いに必ずなるからです。そして、仲間の気持ちを考えて接すると、相手も、自分も気持ちがいいからです。だから、私は友達と接する時は仲間の気持ちを考えて接したいです。
難しい問題もみんなで協力して成功することが大事。 理由は、１人で解決出来ないものも、仲間と協力すれば解決出来るものもあると思うので、今やり始めた、全力プロジェクトも、みんなで協力出来たらいいなと思いました。
人と助け合って生きていきたい。人と助け合うことで、人との関係もよくなるし、仲間と課題にとりくむことで達成感が得られる。
目の前のチャンスは必ず逃さずに、いろんなことに挑戦して自分の成長につなげること。 自分が今まで挑戦した時、自分の成長につながるものが多かったから。たくさんのことに挑戦して、後からやれば良かったって思わないようにしたいから。

自己実現に向かうための資質・能力「問題解決力」「関係構築力」「貢献する人間性」に関わるような回答をしている児童生徒も多く見られた。上記の回答例にあるように、「いろんなことに挑戦して自分の成長につなげる（問題解決力）」「仲間の気持ちを考えて接する（関係構築力）」という回答であったり、「貢献したい」という言葉を用いた回答も多く見られたりした。これらのことから、「どう生きるか」のカリキュラムを適切にデザインすることで、自己実現に向かうための資質・能力が効果的に育まれているといえる。

（保護者への質問）「本校の「どう生きるか」の学びについて、ご意見をお聞かせください。」

動物のことを考えて色々しているが死んでしまうので、皆がどう生きるかで色々見たり触れたりすることがストレスで死んでいるのではないかと家で話してくれました。（餌だけあげている近くの幼稚園のウサギは元気だから）親としては命について考える良い経験になっていると思いますが、本人はどう生きるかが動物にとって良くないのではと葛藤があるようです。

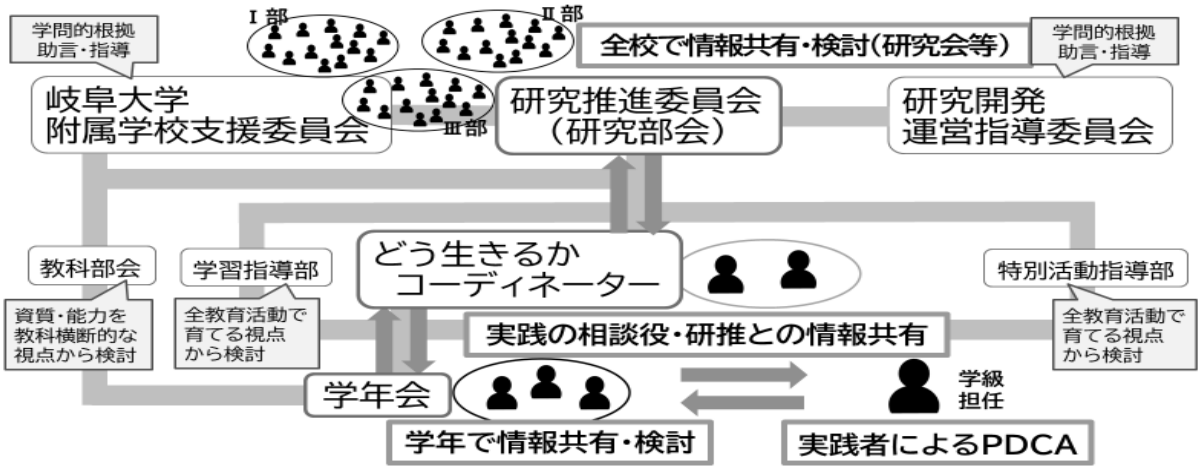
主体的に行動できることはとても良いことだが、周りの友達の意見もしっかり聞くことができている。自分とは違う意見も肯定的に受け止めることができるようになった。
相手の話を聞いたり、周りを見ながら、気持ちを汲みつつも、きちんと自分の意見を伝えたりできるようになって、少しずつ成長してきていること、段取りをして前もって取り組めるようになってきていることを実感しています。
学校全体で、誰かのために、何かのために、行動するという力がとても養われていると思います。学校祭でもそのように実感しました。

児童生徒の回答と同様に、「自分から課題・問題を解決しようとする姿」「相手の話をしっかり聞こうとする姿」「誰かのために、何かのために、行動しようとする姿」が家庭でも見られていることが、保護者の回答からも分かる。さらに、学校行事との関連について回答するものもあり、全教育活動で資質・能力が育まれ、発揮されていることが浸透しつつあるといえる。

これらから、適切にカリキュラムをデザインすることで、自己実現に向かうための資質・能力が効果的に育まれているといえる。

Ⅵ　研究組織

１　組織概要図



２　運営指導委員一覧

氏　名	所　属	職　名	備　考（専門分野等）
石井　英真	京都大学大学院教育学研究科	准教授	教育方法、教育評価
高橋　　純	東京学芸大学教育学部	教授	情報教育、ICT活用
西野真由美	国立教育政策研究所 教育課程研究センター	総括研究官	道徳教育、特別活動、カリキュラム開発
益子　典文	岐阜大学	副学長	教育工学、科学教育
山田　雅博	岐阜大学教育学部	学部長	初等中等教育学、数学科教育
今村　光章	岐阜大学教育学部	副学部長	幼児教育、保育学、環境教育、教育思想
別府　哲	岐阜大学教育学部	附属小中学校統括長	教育心理、発達心理
三島　晃陽	岐阜県教育委員会事務局 教育総務課	教育主管	総合的な学習の時間
堀　　秀樹	岐阜県立岐阜工業高等学校	校長	高等教育担当
藤田　忠久	岐阜市立岐阜小学校	元校長	総合的な学習の時間

第１学年　学びのカテゴリー「遊び」

１年生は、小学校入学前までに遊びを通して、自立心や協同性等が育まれてきた。入学後大きく環境が変わる子供たちの安心感を高め、幼児教育との接続を円滑に行うことができるように、遊びという活動を継続している。また、遊びそのものが子供たちにとって楽しく、面白いという性質もある。遊びを通して、「自分ができることやしたいことを考える」「自分の長所に気付く」など、本校の第１学年で願う姿に迫りながら、自己実現に向かう資質・能力を育んでいる。

「たのしいあそび みいつけた」の単元では、トイレットペーパーの芯を使って様々な遊び方を見いだし、より楽しむことができるように工夫していた。遊び方を試行錯誤することで、充実感を得ることができた。折り紙やぬり絵、絵本づくりなど様々な遊びの中から自分のしたい遊びを決め出し、繰り返し遊んできた。遊びを探究する中で、仲間と遊ぶことの楽しさに気付き、仲間との境界線が無くなるような遊びに夢中になる姿が見られるようになった。

「いきものとなかよし」の単元では、「生き物を大切にしたい」という願いを根底にもちながら、加納城址公園や運動場にある自然の中で遊びに没入している。年間を通じて、加納城址公園や運動場の生き物と関わることで、様々な気付きを獲得しながら自分の求める遊びを探究し続けている。運動場には、各学級に「愛着のある遊び場」ができ始めている。１組はビオトープ、２組は砂場、３組は秘密基地である。３組の秘密基地は、「加納城址公園での遊んだ秘密基地づくりを学校でもしたい」という願いから始まった。木の枝や蔓、石などの身近な自然を生かしながら、自分たちの願いに合った秘密基地『なかよしふぞくきち』をつくっている。生き物と触れ合い、自然や学級の仲間と一体になりながら、夢中になって遊びきる姿を大切にしている。

舟橋　和恵
佐藤　匠
上原　純

１年１組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：遊び　（全136時間）

第１学年の目標	（１）問題解決力に関わって	願いに合った遊びを目指すことを通して、よりよい遊びになるように工夫したり、自分ができることを考えたりし、粘り強く取り組むことができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	遊びの中で生じるジレンマやエラーに対して、より願いに合った遊びに近付けるための話合い活動を通して、仲間の考えを肯定的に聞き、よりよい考えを生み出し、活動することができるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	願いに合った遊びを目指すことを通して、自分のよさに気付き、自分や仲間が幸せになるための方法を考え、仲間と共に行動しようとする態度を養う。
カテゴリー設定の理由	子供たちは、小学校入学前までに遊びを通して、自立心や協同性等が育まれてきた。入学後大きく環境が変わる子供たちの安心感を高めることができるように、遊びという活動を継続していく。また、遊びそのものが子供たちにとって楽しく、面白いという性質もある。「自分ができることを考える」「自分の長所に気付く」など、本校の第１学年で願う姿に迫っていく。	
学びの基盤となる道徳的諸価値	節度、節制・個性の伸長・親切、思いやり・友情、信頼・規則の尊重・よりよい学校生活、集団生活の充実・生命の尊さ・自然愛護	
学びを構成する要素	楽しさ　人　相手　仲間　集団　学校　植物　自然　季節　工夫　言葉　決まり　喜び　達成感	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	がっこうであそぼう（10時間）			たのしいあそび　みいつけた（18時間）		みんななかよし　だいさくせん（20時間）	もっと！みんななかよし　だいさくせん（30時間）			ぼくたち・わたしたちにまかせてよ！（28時間）		
	いきものとなかよし（30時間）											
主な学習活動	○附属小中学校のことを知るために、学校探検に対する願いをもつ。 ○学校探検する。（学級のみんなと→グループの仲間と） ○くわしく知りたいと思ったことを学校の職員にインタビューする。 ○仲間に分かったことを発表する。 ○個人遊びの中から自分が楽しいと思うものを見付ける。 ○２年生からのプレゼントであるアサガオの種に対して願いをもつ。 ○育て方を自分たちで考えたり２年生に教えてもらったりする。 ○アサガオの世話をする。 ○春の生き物と慣れ親しむ。 ○加納城址公園での遊びを見付ける。				よりよい遊びを見付けるために工夫や情報を収集する	○学級の仲間との遊びに対する願いをもち、どんな遊びをしてみたいか考える。 ○遊びの計画・準備をする。 ○実際に遊んで、楽しく過ごす。 ○遊びを振り返る。 ○さらに遊びたい遊びを考える。 ○夏の生き物と慣れ親しむ。 ○加納城址公園で学級の仲間と遊びたいことを見付ける。	○今までの遊びの経験や学びを生かして、他学級や他学年等との遊びに対する願いをもつ。 ○遊びの計画・準備、遊びに誘う準備をする。 ○実際に遊んで、楽しく過ごす。 ○遊びを振り返る。 ○さらに遊びたい相手や遊びを考える。 ○季節イベントに合わせて遊びを計画する。 ○秋の生き物と慣れ親しむ。 ○加納城址公園での遊びを工夫し、他学級、他学年の仲間を誘って遊ぶ。			○かぞく（異年齢集団）や新しく入学する予定の子たちに対する願いをもち、楽しんでもらえるようにするにはどうしらたよいか、何をすればよいかを考える。 ○遊びなどの計画・準備をする。 ○実際に迎えて、楽しく過ごす。 ○やってみた内容を振り返る。 ○冬の生き物と慣れ親しみ、季節による自然の移り変わりを実感する。 ○１年間を通して、自分ができるようになったことを振り返る。		
想定される ●ジレンマ ■エラー 【道徳的諸価値】	■探検の約束を守れず迷惑をかけてしまう。　■自分の好きな遊びが見付からない。 ●仲間と行きたい場所が違って思った場所へ行くことができない。 【礼儀、親切・思いやり、感謝、節度・節制、よりよい学校生活の充実など】 ■水やりなどの世話を忘れてしまう。　■思ったように成長しない。 ●間引きをして芽が減るのが嫌だ。　●植物を採って遊びたいけど採ってよいか悩む。 【生命の尊重、自然愛護など】					■自分から遊びに参加できない。 ■ルールを守ることができない。 ●仲間の考えを受け入れることができない。 【希望と勇気・努力と強い意志、個性の伸長、友情・信頼、公正公平・社会正義など】	■実際にやると、思っていたように楽しめない。 ■会を自分たちで上手に進めることができない。 ●仲間とやりたいことが違う。●仲間とアイデアが対立する。 【善悪の判断・自律・自由と責任、希望と勇気・努力と強い意志、個性の伸長、よりよい学校生活・集団生活の充実など】			■かぞくの好きな遊びがばらばらで内容が決まらない。 ■新１年生が喜びそうな遊びが分からない。 ■自分たちで遊びの準備を進められない。 ■自分の成長が分からない。 ●自分と仲間のやりたいことが両方できない。 【家族愛・家庭生活の充実、個性の伸長、自主・自律、よりよい学校生活・集団生活の充実など】		
人材活用施設	・学校の先生 ・調理員　事務員　警備員 ・学校の校舎 ・かぞく（２年生） ・加納城址公園					・教室 ・砂場 ・グラウンド ・特別教室 ・加納城址公園	・他学級・他学年の仲間 ・相手学級の先生 ・教室・特別教室・体育館 ・グラウンド、砂場 ・加納城址公園			・他学級・他学年の仲間（かぞく） ・新１年生 ・新１年生を迎えることに関わる先生（教頭、部主任） ・体育館 ・加納城址公園		
教科等との関連	・国語：こんなものみつけたよ　どうぞよろしく　としょかんへいこう わけをはなそう　おおきくなった ・算数：10までのかず　なんばんめ　かずしらべ ・図画工作：すきなかたちやいろなあに　すなやつちとなかよし					・国語：しらせたいな　みせたいな ・算数：なんじなんじはん ・音楽：はくをかんじとろう	・国語：みんなにしらせよう　てがみでしらせよう ・算数：たしざん　ひきざん　いろいろなかたち ・音楽：にほんのうたを　たのしもう ・図画工作：おってたてたら　さわりごこちはっけん			・国語：ことばあそびをつくろう　これは、なんでしょう いいこといっぱい、１年生 ・算数：大きなかず　ずをつかってかんがえよう ・体育：ボールあそび　マットランド　からだつくりあそび		

１年１組　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 もっと！みんななかよし　だいさくせん (30)	①遊びの会に向けて遊びを工夫する活動を通して、学級遊びでの体験や経験を基に、粘り強く遊びの計画を立てたり、改善したりすることができるようにする。	①遊びの会に向けて遊びを工夫する過程で、様々な立場の仲間の気持ちに寄り添いながら、遊びの計画を立てることができるようにする。 ②仲間の考えを肯定的に聞き、遊びを改善することができるようにする。	①遊びを工夫する過程で、自分や仲間が笑顔になるために、自分にできることを考え、仲間と共に行動しようとする態度を養う。

活動の計画	○学年の仲間とも遊びたい、もっと多くの仲間と関わりたいと願いをもつ。(関係①) ○「みんななかよし　だいさくせん」の経験や体験を生かして、願いに合う遊びの案を出す。(問題①) （２）	○学年の仲間と楽しめそうな遊びを整理し、遊びの会の計画を立てる。(問題①) ○「自分もみんなも楽しい遊び」という学級の願いを基に、遊びが楽しくなるようにルールや約束を工夫する。(関係①) ○学級の仲間を相手に、遊びを検証する。（貢献①） (16)	○遊びの会を運営し、学年の仲間と遊びを通して関わる。（貢献①） ○実際に遊んでみた感想を聞いたり、自分たちで振り返ったりする。（関係②） (10)	○他にどんな相手と一緒に遊びたいか考え、会を計画する。（貢献①） （２）
		（準備＋遊びの会＋振り返り）×４		
加除修正欄				
想定される姿	・学年集会のゲームを想起し、他の学級の仲間とも楽しく遊びたい。 ・鬼遊びやボール遊びなど多くの仲間で楽しめそうな遊びをしたい。	・遊びの会をするために、ルールをまとめたり、役割分担をしたりして準備をしよう。 ・本当にこのルールでいいかな。遊びの会の前に、学級の仲間に向けて検証したい。	・計画通りに遊びの会ができた。 ・参加してくれた仲間は遊びを楽しんでくれたのか、感想を聞きたい。 ・自分たちで遊びの会を運営することができて嬉しい。もっと他の学級とも遊びたい。	・多くの仲間と遊び、仲良くなれた。 ・４組の仲間とも同じ遊びができるかな。 ・２年生や「かぞく」など、他の学年とも遊びたい。 ・家の人も招待したい。
実際の姿	・他のクラスや学年、全校のみんなと遊んで友だちになりたい。			

●ジレンマ ■エラー	■どの遊びにすれば、みんなが喜んでくれるか分からない。	●自分たちが考えたルールを守ってもらうことに意識がいき、遊びを十分に楽しめない。	■恥ずかしくて、他の学級の仲間に対して思うように話ができない。
	●仲間とやりたい遊びが違う。	■自分の思うように会の役割が決まらない。	■様々な立場の仲間が楽しめる遊びにするために、何を工夫できるか分からない。

１年１組　本時案　（南体育館）

目標

「他学級の仲間と一緒に楽しく遊び、仲良くなりたい」という願いを基にしながら、ルールや遊び方を工夫したり改善したりする活動を通して、遊びに参加する仲間の気持ちを考えて願いに合った遊びの会を行うことができる。（関係構築力）

本時（８/30）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　本時大切にしたいことを共有する。 〇今日の遊びの会でどんなことを大切にしたいですか。 ・みんなが楽しい遊びにすることです。 ・あまり話したことが無い子となかよくなりたいです。 ３くみと１くみのみんなで　たのしくあそび　なかよくなろう	〇願いの実現を目指す会であることを確認するために、「どんなことを大切にしたいですか。」と問う。 〇あそびのじかん（１）では、計画してきた遊び方で自由に遊ぶ中で、改善点に気付くようにするために、遊びの途中で「３組の子も楽しんでいるかな。」と声をかける。
２　計画を基に、遊びの会を行う。 〇準備をして会を始めましょう。 あそびのじかん（１） ※ボールを回すとき、歌に合わせて回す。 ※ボールが止まったら、自分の名前や好きなものを知ってもらうショータイムができる。 **【プログラム】** **あそび：ごろごろどっかん** **①はじめのことば** **②めあてのかくにん** **③あそびのじかん（１）** **～しんかタイム～** **④あそびのじかん（２）** **⑤サークルタイム**	〇遊びを改善する際には、主催者寄りの一方的な思いならないようにするため、「３組の子はどう思っているのかな。」と問い、より相手の気持ちに寄り添うことができるようにする。 〇３組の仲間へインタビューをしようとする児童の姿を価値付け、全体へ広めたり方向付けたりする。
３　困ったことを共有し、遊びを改善する。（進化タイム） ・ボールをわざとゆっくり（速く）回すのは、やめたほうがいいと思います。 ⇒歌に合わせて回してもらうといいです。 ・同じ歌ばかりじゃ楽しくないし、３組が好きな歌も入れるといいと思います。 ⇒好きな歌を聞きに行きます。 ・２クラスで輪になると、ボールがなかなか回ってこなくて楽しくないです。 ⇒一つの輪の人数を少なくすると何回もボールが回ってきてドキドキするので、楽しいと思います。 ⇒チームを分けると、一緒に遊べない子ができるから悲しいです。 ⇒メンバーを変えて、何回も遊ぶのはどうかな。	**目標に迫った姿をどのように見届けるか** 自分たちや遊びに参加する仲間の気持ちを考えて、仲良くなることができるような遊びのルールを工夫し、改善している。（関係構築力） ・遊んだり話し合ったりする場における言動や、振り返りタイムでの感想交流から見届ける。
４　改善点を踏まえ、もう一度遊ぶ。 あそびのじかん（２）	
５　本時の活動を振り返る。 ・３組のみんなと楽しく遊ぶことができました。３組の仲間の意見も聞きながら、もっと楽しく遊ぶことができて嬉しかったです。今度は、休み時間にも一緒に遊びたいです。	〇振り返りタイムでは、遊びを改善したことによって願いが達成できたことを共有するために、振り返る視点を提示する。

１年３組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：遊び　（全136時間）

第１学年の目標	（１）問題解決力に関わって	願いに合った遊びを目指すことを通して、よりよい遊びになるように工夫したり、自分ができることを考えたりし、粘り強く取り組むことができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	遊びの中で生じるジレンマやエラーに対して、より願いに合った遊びに近付けるための話合い活動を通して、仲間の考えを肯定的に聞き、よりよい考えを生み出し、活動することができるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	願いに合った遊びを目指すことを通して、自分のよさに気付き、自分や仲間が幸せになるための方法を考え、仲間と共に行動しようとする態度を養う。
カテゴリー設定の理由	子供たちは、小学校入学前までに遊びを通して、自立心や協同性等が育まれてきた。入学後大きく環境が変わる子供たちの安心感を高めることができるように、遊びという活動を継続していく。また、遊びそのものが子供たちにとって楽しく、面白いという性質もある。「自分ができることを考える」「自分の長所に気付く」など、本校の第１学年で願う姿に迫っていく。	
学びの基盤となる道徳的諸価値	節度、節制・個性の伸長・親切、思いやり・友情、信頼・規則の尊重・よりよい学校生活、集団生活の充実・生命の尊さ・自然愛護	
学びを構成する要素	楽しさ　人　相手　仲間　集団　学校　植物　自然　季節　工夫　言葉　決まり　喜び　達成感	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	がっこうであそぼう（10時間）			たのしいあそび　みいつけた（18時間）		みんななかよし　だいさくせん（15時間）	もっと！みんななかよし　だいさくせん（15時間）			ぼくたち・わたしたちにまかせてよ！（28時間）		
	いきものとなかよし（50時間）											
主な学習活動	○附属小中学校のことを知るために、学校探検に対する願いをもつ。 ○学校探検する。（学級のみんなと→グループの仲間と） ○くわしく知りたいと思ったことを学校の職員にインタビューする。 ○仲間に分かったことを発表する。 ○個人遊びの中から自分が楽しいと思うものを見付ける。 ○２年生からのプレゼントであるアサガオの種に対して願いをもつ。 ○育て方を自分たちで考えたり２年生に教えてもらったりする。 ○アサガオの世話をする。 ○春の生き物と慣れ親しむ。 ○加納城址公園での遊びを見付ける。				よりよい遊びを見付けるために工夫や情報を収集する	○学級の仲間との遊びに対する願いをもち、どんな遊びをしてみたいか考える。 ○遊びの計画・準備をする。 ○実際に遊んで、楽しく過ごす。 ○遊びを振り返る。 ○さらに遊びたい遊びを考える。 ○夏の生き物と慣れ親しむ。 ○加納城址公園で学級の仲間と遊びたいことを見付ける。	○今までの遊びの経験や学びを生かして、他学級や他学年等との遊びに対する願いをもつ。 ○遊びの計画・準備、遊びに誘う準備をする。 ○実際に遊んで、楽しく過ごす。 ○遊びを振り返る。 ○さらに遊びたい相手や遊びを考える。 ○季節イベントに合わせて遊びを計画する。 ○秋の生き物と慣れ親しむ。 ○加納城址公園での遊びを工夫し、他学級、他学年の仲間を誘って遊ぶ。			○かぞく（異年齢集団）や新しく入学する予定の子たちに対する願いをもち、楽しんでもらえるようにするにはどうしらたよいか、何をすればよいかを考える。 ○遊びなどの計画・準備をする。 ○実際に迎えて、楽しく過ごす。 ○やってみた内容を振り返る。 ○冬の生き物と慣れ親しみ、季節による自然の移り変わりを実感する。 ○１年間を通して、自分ができるようになったことを振り返る。		
想定される●ジレンマ■エラー【道徳的諸価値】	■探検の約束を守れず迷惑をかけてしまう。　■自分の好きな遊びが見つからない。 ●仲間と行きたい場所が違って思った場所へ行くことができない。 【礼儀、親切・思いやり、感謝、節度・節制、よりよい学校生活の充実など】 ■水やりなどの世話を忘れてしまう。　■思ったように成長しない。 ●間引きをして芽が減るのが嫌だ。　●植物を採って遊びたいけど採ってよいか悩む。 【生命の尊重、自然愛護など】					■自分から遊びに参加できない。 ■ルールを守ることができない。 ●仲間の考えを受け入れることができない。 【希望と勇気・努力と強い意志、個性の伸長、友情・信頼、公正公平・社会正義など】	■実際にやると、思っていたように楽しめない。 ■会を自分たちで上手に進めることができない。 ●仲間とやりたいことが違う。●仲間とアイデアが対立する。 【善悪の判断・自律・自由と責任、希望と勇気・努力と強い意志、個性の伸長、よりよい学校生活・集団生活の充実など】			■かぞくの好きな遊びがばらばらで内容が決まらない。 ■新１年生が喜びそうな遊びが分からない。 ■自分たちで遊びの準備を進められない。 ■自分の成長が分からない。 ●自分と仲間のやりたいことが両方できない。 【家族愛・家庭生活の充実、個性の伸長、自主・自律、よりよい学校生活・集団生活の充実など】		
人材活用施設	・学校の先生 ・調理員　事務員　警備員 ・学校の校舎 ・かぞく（２年生） ・加納城址公園					・教室 ・砂場 ・グラウンド ・特別教室 ・加納城址公園	・他学級・他学年の仲間 ・相手学級の先生 ・教室・特別教室・体育館 ・グラウンド、砂場 ・加納城址公園			・他学級・他学年の仲間（かぞく） ・新１年生 ・新１年生を迎えることに関わる先生（教頭、部主任） ・体育館 ・加納城址公園		
教科等との関連	・国語：こんなものみつけたよ　どうぞよろしく　としょかんへいこう わけをはなそう　おおきくなった ・算数：10までのかず　なんばんめ　かずしらべ ・図画工作：すきなかたちやいろなあに　すなやつちとなかよし					・国語：しらせたいな　みせたいな ・算数：なんじなんじはん ・音楽：はくをかんじとろう	・国語：みんなにしらせよう　てがみでしらせよう ・算数：たしざん　ひきざん　いろいろなかたち ・音楽：にほんのうたを　たのしもう ・図画工作：おってたてたら　さわりごこちはっけん			・国語：ことばあそびをつくろう　これは、なんでしょう いいこといっぱい、１年生 ・算数：大きなかず　ずをつかってかんがえよう ・体育：ボールあそび　マットランド　からだつくりあそび		

１年３組　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 いきものとなかよし (50)	①四季の自然と触れ合いながら、自分のしたい遊びを決めることができるようにする。 ②よりよい遊びになるように遊び方を工夫したり、生き物を大切にしたりすることができるようにする。	①自分のしたい遊びを仲間へ伝えたり、仲間の考えを肯定的に受け入れたりすることができるようにする。 ②自分も仲間も楽しむことのできる遊びをつくることができるようにする。	①願いに合った遊びを目指すことを通して、自分や自然のよさに気付き、そのよさを生かしながら、仲間が楽しむことのできる遊びをつくろうとする態度を養う。

活動の計画	○春の自然と触れ合い、お気に入りの生き物を見つける。(貢献①) ○２年生と加納城址公園へ行き、自然を生かした遊びを考え、実際に遊ぶ。(問題①) (８)	○春の自然との違いを見つけ、色や数、大きさなどの視点をもって観察し、自分なりに記録する。(貢献①) ○加納城址公園へ行き、仲間を誘って遊ぶ。(関係①) (10)	○秋の自然と触れ合い、気付いたことを自分なりにまとめながら、より楽しい遊びになるように工夫する。(問題②) ○秋の自然で遊べることを考え、自分と仲間が楽しめる遊びになるように工夫する。(関係②) (22)	○冬の自然と触れ合い、発見した事実を基にして四季の変化をまとめる。(貢献①) ○来年度の１年生に城址公園の魅力を伝えるマップを作成する。(貢献①) ○まとめたことを学級や他学年の仲間へ伝える。(貢献①) (10)
加除修正欄	・はじめに２年生と加納城址公園へ行き、公園の魅力を教えてもらった。 ・２年生からプレゼントされたアサガオの種を植えて、育て始めた。	・加納城址公園で遊んだ秘密基地を、学校の運動場にも作ろうと計画した。 ・秘密基地をつくるために、校長先生に手紙を書いた。	・アスレチックやツリーハウスなど、秘密基地づくりを始めた。 ・秘密基地に使う枝や木の実を集めた。 ・秘密基地の中に生き物基地もつくった。	
想定される姿	・タンポポの綿毛がどこまで飛ぶかやってみたいな。 ・ナズナで音を鳴らして遊ぼう。 ・シロツメクサでアクセサリーを作るよ。 ・城址公園で昆虫を探したいな。 ・アサガオが成長して嬉しいな。	・アサガオの花で色水をつくって友だちのものと比べたよ。 ・加納城址公園にいる虫の種類や数が春の頃と変わったよ。	・花や葉っぱの色が変わったり、枯れていたり、見つけた虫の種類が変わったりしているな。 ・他のクラスの友だちも誘って遊びたいな。	・季節によって違う遊びができて楽しいよ。 ・４組の○○さんと一緒に秘密基地で遊ぶことができて楽しかったよ。 ・大きなマップを作って来年の１年生に伝えよう。
実際の姿	・公園にはダンゴムシがいっぱいいて嬉しかったよ。 ・アサガオの芽が出て嬉しい。これからどんな風に育っていくのかな。	・秘密基地をつくるのには時間が短いし、他の人も使う公園では難しいよ。 ・学校に秘密基地を作ったらいつでも遊べるから作りたいな。 ・枯れたアサガオで色水をつくるときれいで楽しかったよ。	・丸太を立てて基地をつくりたいけれど倒れたら危ないからどうしよう。 ・シーソーをつくって遊べたよ。 ・アサガオの種ができたから、新しい１年生にプレゼントしたいな。	

●ジレンマ ■エラー	■やりたい遊びが見つからない。 ■思ったようにアサガオが成長しない。 ●命ある生き物で遊んでよいか悩む。 ●見つけた虫を持って帰りたいけれど、自然の中に残しておいてあげたい気持ちもあって悩む。	■計画したことが思うようにいかない。 ■誘った仲間が楽しめていない。 ■計画していたことよりも楽しそうなことがあって、その遊びを優先してしまう。 ●自分がしたいことと、仲間がしたいことが一致しない。

１年３組　本時案　（北運動場、雨天時：南体育館）

目標

動植物に優しく接しようという心情を基にしながら、運動場にある１年３組の秘密基地「なかよしふぞくきち」を制作する活動を通して、学級の願いに合う秘密基地になるように、工夫したり粘り強く取り組んだりすることができる。（問題解決力）

本時（30/50）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　秘密基地づくりに込めた願いを確認する。 〇どんな秘密基地にしたいのですか。 ・クラスのみんなや生き物が楽しめるところ。 ・学校の友だちが集まりたくなるようなところ。 ・加納城址公園にある秘密基地みたいに、自然のものをいっぱい使った秘密基地にしたいな。	〇単元の出口を意識しながら活動できるようにするために、学級の願いを確かめたうえで活動に臨むようにする。 〇見通しをもって主体的に活動を進められるように、それぞれのチームがしたいことを明確にする。 〇切実感をもって活動に取り組んだり、同じ願いをもった仲間と対話しながら協働的に取り組んだりできるようにするために、内容ごとにチームを組んで活動する。 〇「動植物に優しく接しよう」という価値観を基に行動を判断できるようにするために、「どうしてもっとたくさん木の実を取ってこないの。」と問うて、生き物を大切にしていることを自覚できるようにし、その判断を価値付けながら全体へ広める。
２　本時、それぞれがしたいことを活動するチームで確認する。 ・今日は、木の実を使って看板に飾りを付けて、もっと楽しくなるようにしたいよ。 ・もう少し丸太を動かして、椅子としても使えるようにしたい。 ・ダンゴムシたちが過ごしやすいように、もっと枯れ葉を集めたいな。 みんなが　たのしいとおもう　「なかよしふぞくきち」を　つくろう。	
３　それぞれのチームで活動する。 **【ツリーハウスづくり】** ・２つできたからもうひとつつくりたいな。 ・もっと大きい木でつくりたいけれど、倒れたら危ないからどうしよう。けがをすると、楽しくなくなるからやっぱりやめよう。 **【看板づくり】** ・文字だけだと少し寂しいから、自然の物を使って飾り付けをしよう。 ・木の実を付けたいけれど、ちぎってしまうとかわいそうだな。落ちているものを探そう。 **【生き物基地】** ・ダンゴムシが過ごしやすいように、もっと枯れ葉を集めよう。 ・今いるダンゴムシたちにとってこの生き物ランドは狭いかな。もう少し広くしてもいいかな。 **【森の音楽隊】** ・自然の物を使って、音楽の授業でやったように楽器をつくるよ。 ・楽器で演奏できるようになったら、来た人がもっと楽しくなると思う。 ・どんな曲がいいかな。	〇願いの実現に向けて活動を工夫できるようにするために、「みんなが集まりたくなる基地にするには、どうしたらよいかな。」と、願いに立ち返る声かけをしたり、「〇〇しているから、みんなが楽しい気持ちになりそうだね。」と価値付けたりする。 **目標に迫った姿をどのように見届けるか** 学級の願いに合った秘密基地となるように、ツリーハウスや生き物基地などを工夫して制作している。（問題解決力） ・制作しているときの姿や、仲間と話しているときの発言、振り返りの発言から見届ける。
４　本時の学びを振り返る。 〇今日はどんな工夫をしましたか。 ・私は、看板の飾り付けを工夫しました。もう文字は書いてあったけれど、もっと楽しくなるように〇〇さんと考えて木の実や枝を付けました。落ちている木の実を集めたり、ボンドで付けたりするのは大変だったけれど、諦めずに付けることができました。	〇願いの実現に向けて、問題解決力を発揮したことを自覚化するために、「どんな工夫をしましたか。」と問うて、振り返るようにする。

第２学年　学びのカテゴリー「野菜」

第１学年では、「遊び」を通して、自分が興味・関心をもった対象に楽しみながら関わり、自分の世界を広げてきた。第２学年では、「野菜」をカテゴリーと設定した。「野菜」というコンテンツが、児童にとって身近であり、収穫や食べたときの喜びを味わえたり分かち合えたりできるよさが、児童の発達段階に適していると考えたからである。一人一人が願いをもち、試行錯誤をしながら探究を進めた先に、「できた」「やってよかった」という達成感を味わうことで、探究することのよさを実感する子を生み出したい。

第１単元では、「自分で育てた野菜を食べてみたい。」「家族のために作りたい。」という願いを基に「野菜を大切に育てていこう。」と考え、よりよく育つ方法を調べたりお家の方や野菜名人に聞いたりしながら、活動を工夫してきた。毎日一生懸命野菜の様子を観察し、献身的に世話を続けてきたことで、「葉っぱの数が増えた。」「花が咲いた。」「収穫できた。」といったような充実感を得ることができた。

第２単元では、第１単元で味わった収穫の喜びを基に「育てた野菜をもっとたくさんの人に食べてもらいたい。」という、他者意識をもった野菜作りへと思考が変化している。野菜のよりよい生長に向け「自分のやるべきことを果たしていこう。」という思いをもち、収穫に向けて「どのように野菜と関わるとよいか。」「育てた野菜により親しんでもらうにはどうするとよいか。」など、仲間と話合いを繰り返しながら活動をしている。

自分の野菜と関わり続けること、野菜を通した人との出会いから新たな視点、考えに気付くことを通して、よりよい生き方を探究し続けている。

松尾雄太郎
鈴木　香子
桐山　裕也

２年２組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：野菜（全140時間）

第２学年の目標	（１）問題解決力に関わって	願いに合った野菜を栽培する活動を通して、見通しをもちながら試行錯誤を続けたり、実現可能かどうかを立ち止まって考えたりし、やり切ることができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	願いに合った野菜を栽培する中で生まれたジレンマやエラーについて考える活動を通して、解決するために必要なことを伝え合い、よりよい考えを生み出し、活動できるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	願いに合った野菜を栽培する活動を通して、育てる喜びや人を幸せにする良さに気付き、自他のために行動する態度を養う。
カテゴリー設定の理由	第１学年では、「遊び」を通して、自分が興味・関心をもった対象に楽しみながら関わり、自分の世界を広げてきた。第２学年では、「野菜」をカテゴリーと設定した。「野菜」というコンテンツが、子供たちにとって身近であり、収穫や食べたときの喜びを味わえたり分かち合えたりできるよさが、発達段階に適していると考えたからである。一人一人が願いをもち、試行錯誤をしながら探究を進めた先に、「できた」「やってよかった」という達成感を味わうことで、探究することのよさを実感する子を生み出したい。	
学びの基盤となる道徳的諸価値	善悪の判断、自律、自由と責任・希望と勇気、努力と強い意志・親切、思いやり・感謝・礼儀・友情、信頼 勤労、公共の精神・家族愛、家庭生活の充実・よりよい学校生活、集団生活の充実・自然愛護・感動、畏敬の念	
学びを構成する要素	人　自分　仲間　家族　地域の人　店の人　農家　給食に携わる人　学校　野菜　畑　土　水　太陽　気候　季節　虫　鳥　自然 育てる　働く　食べる　渡す　売る　伝える　願い　喜び　献身性　達成感　充実感　魅力　自己の成長　感謝	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	よし！やろう！！野菜づくり！！！ ～やさいをそだててたべよう～　（43）					よし！やろう！！えがおいっぱい野菜大作戦 ～ぜん校のなかまのために～　（57）				よし！やろう！！とどけよう！！！ ～より多くの人に～　（40）		
主な学習活動	○１年生までのどう生きるかでの学びを振り返り、「どんな野菜を」「誰のために」育てたいのかを明確にする。 ○「はつか大根」作りを行い、野菜の生長の様子を実感する。 ○「はつか大根」の振り返りから、よかったことや問題点を明らかにして夏野菜作りにつなげる。 ○夏野菜調べを行い、願いや理由を明確にもって、自分が育てたい野菜を決める。 ○願いの実現に向けて、土作り、畝作り、野菜の世話を行う。 ○国語「かんさつ名人になろう」での観察の視点をもとに、野菜の変化を捉える。 ○必要に応じて、情報収集や人に聞く活動を行い、問題の解決と行動を繰り返す。 ○問題解決の過程で生まれた、全体で考えるべき事柄についてグループや全体で話し合い、判断する。 ○収穫や誰かに食べてもらえたこと、自分で食べられたことで願いが実現した喜びを共有する。 ○探究してきたこと（願い、解決方法、うれしかったこと、難しかったこと、どう乗り越えたか）を振り返る。 ○野菜の生長や収穫に向けて、夏休み前や夏休み期間中の世話について考え、実行する。				夏野菜の世話と収穫を続け、収穫や食べる喜びを感じる	○夏野菜の経験を振り返り、探究したよさを確かめる。 ○夏野菜を育てた経験や、4月の児童の願いの中の言葉から「全校のために」どんな野菜を育てたいか、願いを明確にする。 ○栄養教諭や調理員さんとの対話を通して、思いを知り、野菜との向き合い方を考える。 ○安全で美味しい野菜作りを目指すために、専門家と出会い、野菜を育てる際の新たな視点や解決方法を知る。 ○自分や他者の考えをもとにしながら野菜作りに取り組み、試行錯誤を続ける。 ○虫や病気の被害を避け、より元気に育てる方法はないか、自分で調べたり仲間の考えを聞いたりしながら、対応策を考える。 ○全校からの実際の声を受けて、人のために野菜を育てることや、難しいことに向き合うことのよさを実感する。 ○全校のなかまにおいしく食べてもらうために、全校に伝えることを考える。 ○給食に出た野菜について、全校や栄養教諭、調理員さんの声から、どんなことを考えていかないといけなかったのか振り返る。 ○「全校」「給食に携わる人」の両方のためになる野菜作りを目指し、試行錯誤しながら世話を続ける。 ○野菜を収穫し、栄養教諭や調理員さんに確かめてもらい、これまでの取組の達成感を味わう。 ○これまで探究してきたことを振り返る。 ○冬休み明けの学習の見通しをもつ。				○給食のプロジェクトを振り返り、全校の仲間が自分たちの活動を通して笑顔になってもらったこと、「野菜を育てるよさ」や「難しいことを乗り越えられた経験」を確かめ、今後の活動の願いを明確にする。 ○自分たちが作った野菜をより多くの人に食べてもらうためには、どうしていくとよいのか、活動の見通しをもつ。 ○「やさいブック」を作り、育てた生長の様子をまとめ、作った思いも一緒に届ける。 ○チームに分かれ、育てる野菜や育て方等を考え、野菜を育てる。 ○より安全で美味しい野菜作りを進めるとともに、その魅力を伝えるためにできることを考え、準備を進める。 ○２年生へつなぐとともに、1年間の探究を振り返る。		
想定される ●ジレンマ ■エラー 【道徳的諸価値】	●水をあげたいけれど、他のなかまがやってしまう。水の調整がうまくできない。 ●自分は○○（野菜）をもっと育てたいという思いと、活動時間を守らなければいけないという思いで葛藤する。 ●せっかく大切な芽が出てきたのに、間引きをするのはもったいない。 ■毎日の世話・観察を忘れてしまう。 ■みんなは育っているのに、どうして自分の苗はうまく育っていないのか、分からない。 ■野菜を大きくおいしい野菜に育てる方法が分からない。 ■虫や鳥に野菜が食べられてしまう。 ■自分のよさや成長に気付くことができない。 ■思っていたような収穫（量、質）ができない。 【希望と勇気、努力と強い意志・家族愛、家庭生活の充実・自然愛護・感動、畏敬の念】					■人のために、継続して世話をする必要があるのに、継続して世話をすることが難しい。 ■多くの人に食べてもらうためには、考えなければならないことが多くあり、全てを解決することが難しい。 ■学級や学年の仲間と協力する必要があるが、意見をまとめることや共に活動することが難しい。 ■どれだけ丁寧に育てたとしても、廃棄される野菜が生まれてしまい、廃棄を無しにすることが難しい。 ●たくさん作ろうとすると、一つ一つの野菜の世話が疎かになってしまう。 　一つ一つを大切にしようとするとたくさんの野菜をつくることは難しい。どちらにすればよいのだろう。 ●作った野菜を給食で食べてもらえてうれしかったが、実際には育てた野菜に問題があったことがわかった。 　本当にこれから大切にしなければならないことは何だろう。 【希望と勇気、努力と強い意志・感謝・勤労、公共の精神・よりよい学校生活、集団生活の充実・自然愛護・感動、畏敬の念】				■「より多くの人」に渡すためにはどうすればよいのか、品質的な問題を解消するにはどうしてよいのか分からない。 ■何を伝えていくのか、どう伝えていくとよいのか、仲間と考えが合わない。 【善悪の判断、自律、自由と責任・希望と勇気、努力と強い意志・新設、思いやり・礼儀、感謝・自然愛護・感動、畏敬の念】		
人材活用施設	・JA厚見支店の方 ・加納にある野菜の販売店 ・家の人 ・おじいさん、おばあさん ・野菜に詳しい先生 ・３年生や４年生					・加納にある野菜の販売店　　・家の人 ・おじいさん、おばあさん　　・野菜に詳しい先生 ・３年生や４年生 ・給食に携わる人（栄養教諭、調理員、食品を運搬する人） ・附属小中学校の仲間や先生　　・農家				・加納にある野菜の販売店　・家の人　　・おじいさん、おばあさん ・野菜に詳しい先生　　・３年生や４年生 ・給食に携わる人（栄養教諭、調理員、食品を運搬する人） ・附属小中学校の仲間や先生・農家		
教科等との関連	・国語：図書かんたんけん　春がいっぱい　かんさつ名人になろう　メモをとるとき 　こんなもの、見つけたよ　夏がいっぱい ・算数：せいりのしかた　２けたのたし算　２けたのひき算　長さのたんい 　100より大きい数　かさのたんい　時こくと時間 ・音楽：かぼちゃ ・図工：たのしくうつして　ともだち見つけた！					・国語：秋がいっぱい　そうだんにのってください　おもちゃの作り方をせつめいしよう 　みきのたからもの ・算数：三角形と四角形　かけ算　かけ算九九づくり　長いものの長さのたんい ・音楽：だがっきパーティー ・図工：音づくりフレンズ　わくわくおはなしゲーム　パタパタストロー				・国語：冬がいっぱい　すてきなところをつたえよう 　楽しかったよ、二年生 ・算数：1000より大きな数　分数　はこの形 ・図工：たのしかったよドキドキしたよ		

２年２組　単元シート	本単元の目標		
単元名 よし！やろう！！ えがおいっぱい野菜大作戦 ～ぜん校のなかまのために～ (57)	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
	①願いを基に全校のために野菜を栽培する活動を通して、野菜と向き合い、試行錯誤しながら問題を解決できるようにする。 ②野菜作りを通して、問題解決に向けて、他者と関わったり、給食に出すことが実現可能かどうかを立ち止まって考えたりし、野菜のお世話をやり切ることができるようにする。	①給食に出せる野菜にするために必要だと思うことを人に伝えたり、受け入れたりして、考えを再構築できるようにする。 ②これまで調べたことや聞いたことを基に、野菜を元気に育てる方法を自分で考えたり、仲間と一緒に行動に移したりできるようにする。	①野菜が生長し、給食に提供できたことに、うれしさや楽しさ、喜びを感じ、学びを振り返ることで、自分にできることを続けていこうとする態度を養う。 ②他者からの反応を受け止めることで、願いの実現に向けて大切なことを実感し、自分の良さを生かして行動しようとする態度を養う。

活動の計画	○夏野菜の経験を振り返り、探究したよさを確かめる。（貢献①） ○夏野菜を育てた経験や、４月の児童の願いの中の言葉から「全校のために」どんな野菜を育てたいか、願いを明確にする。（貢献②） (10)	○栄養教諭や調理員との対話を通して、思いを知り、野菜との向き合い方を考える。(関係①) ○安全で美味しい野菜づくりを目指すために、専門家と出会い、野菜を育てる際の新たな視点や解決方法を知る。(問題②) ○自分や他者の考えを基にしながら野菜作りに取り組み、試行錯誤を続ける。（問題①） (10)	○虫や病気の被害を避け、より元気に育てる方法はないか、自分で調べたり仲間の考えを聞いたりしながら、対応策を考える。（問題②） ○全校からの実際の声を受けて、人のために野菜を育てることや、難しいことに向き合うことの良さを実感する。（関係②） (10)	○全校の仲間においしく食べてもらうために、全校に伝えることを考える。（貢献①） ○給食に出た野菜について、全校や栄養教諭、調理員の声から、どんなことを考えていかないといけなかったのか振り返る。（貢献①） (10)	○「全校」「給食に携わる人」の両方のためになる野菜作りを目指し、試行錯誤しながら世話を続ける。（問題①） ○野菜を収穫し、栄養教諭や調理員に確かめてもらい、これまでの取組の達成感を味わう。（関係①） (10)	○これまで探究してきたことを振り返る。（貢献①） ○冬休み明けの学習の見通しをもつ。（貢献②） (7)
加除修正欄	○雑草だらけになってしまった畑を整える。（関係②）	○				
想定される姿	・夏野菜を育ててきた自分の活動に満足感をもち、「全校の仲間のために」という願いをもつ。	・給食に携わる人の思いや、自分たちの育てた野菜を学校給食に出すためには条件があることを知り、よりよいものを創り出そうとする思いをもつ。 ・調べたことを基に育てる。	・元気でおいしい野菜に育てるための方法を調べ、自分の野菜作りに必要なことを行う。 ・育てた野菜をどのように調理するとおいしく食べられるか考える。	・給食に自分たちが育てた野菜が出ることを伝える方法を考える。 ・育ててきた途中に頑張ったことや、栄養教諭の思いを伝えたいと願う。	・野菜の生長を観察することで、その変化に気付く。 ・何を大切にしながら育てたかを伝える方法を考える。 ・収穫や給食に提供できたことに喜びを感じる。	・自分たちの活動が、多くの人の笑顔と自分の喜びにつながったことに気付く。 ・自分の成長に気付く。
実際の姿	・たくさん収穫できる野菜を育てて、給食に出したり、家族に食べてもらったりしたい。	・大きくおいしく育ってほしいという願いをもって、大切に育てることで、大きくおいしく育つはず。毎日様子を見に行く。よ。				

●ジレンマ ■エラー	■人のために、継続して世話をする必要があるのに、継続して世話をすることが難しい。 ■多くの人に食べてもらうためには、考えなければならないことが多くあり、全てを解決することが難しい。 ■学級や学年の仲間と協力する必要があるが、意見をまとめることや共に活動することが難しい。 ■丁寧に育てたとしても、廃棄される野菜が生まれてしまい、廃棄を無くすことが難しい。	●たくさん作ろうとすると、一つ一つの野菜の世話が疎かになってしまう。一つ一つを大切にしようとするとたくさんの野菜を作ることは難しい。どちらにすればよいのだろう。 ●作った野菜を給食で食べてもらえてうれしかったが、実際には育てた野菜に問題があったことがわかった。本当にこれから大切にしなければならないことは何だろう。

２年２組　本時案　（２年２組教室）

目標

自分たちが育てた野菜を給食に使ってもらうまでの過程や思いを発信するための方法と内容を仲間と交流する活動を通して、全校の仲間に「よりおいしく食べてもらいたい」という共通の願いを基に、発信する内容を工夫することができる。（関係構築力）

本時（33/57）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　これまでを振り返り、本時の見通しを確認する。 〇今日は全校に伝える方法と伝えたい内容について交流しよう。みんなの願いは何だったかな。 ・全校の仲間によりおいしく食べてもらいたい。 全校のなかまに、何をつたえたら、 自分たちが作った（やさい）をよりおいしく食べてもらえるかな。 **２　仲間と全校の仲間に伝える方法を考える。** 〇全校の仲間にどうやって伝える？ ・畑にある野菜を紹介する動画を撮って、朝の会や帰りの会でクラスに見せに行きたい。直接反応を見ることができるから。 ・野菜を作っている様子の写真を撮って、チラシを作って持っていきたい。本当は直接野菜を見せたいけれど、教室まで持っていくことができないから、写真なら分かりやすくなると思う。 **３　実際に、話をしたり動画を撮ったりする。** ※少人数グループ内で話したり撮ったりして、作っていく。 **４　作っているものを仲間と見せ合って、より分かりやすくなるように工夫する。** 〇素敵な工夫がたくさんあるよ。自分たちが作った物を紹介したい班はある？ ※作っている途中で一度見せ合って、感想を伝え合う。 ・３年生は、去年野菜を育てているから、「みなさんが去年作ってくださった小松菜のように、おいしい野菜になるように大切に育ててきました。病気にならないように、葉の様子を毎日見ました。」（葉の様子を見ている自分の姿の写真を見せながら話す。） ・（畑にある野菜を見せながら、）「毎日、葉の表と裏のすみずみまでよく見て、虫がいないか確かめたよ。一週間でこれくらい大きくなっているよ。」 ・「給食を楽しみにしていてね。」という一言を付け足すと、４年生はもっと楽しみにしてくれるかもしれないよ。 ・「成長するために必要な栄養がバランスよくとれるように、使う野菜を決めていると堀先生が言っていました。給食に出てくるものは全部食べると体が強くなりますよ。」 ・栄養は難しい言葉だと思うけど、５年生には分かると思う。 **５　本時を振り返り、生み出した考えを書く。** ・〇〇さんが言っていたように、自分たちが野菜をどのように育ててきたか写真を見せながら紹介することで、給食に出ることを楽しみにしてくれる人が増えるかもしれない。３年生がどう思うか、３年生に見せた時の様子が気になる。早く見せたい。	〇前時までに明らかになった全校に伝えたい内容を掲示しておくことで、伝える内容が選択できるようにする。 〇これまでの畑の野菜を育ててきた経験を基に内容を交流できるように「これまでいろいろな工夫をしてきたけど、どんなことをしたら大きく元気に育った？」「畑の世話をしていて、嬉しかったことはあった？」と、問いかける。 〇苦手な野菜でもおいしく感じた実体験を思い出すことができるように、夏野菜を育てた経験や栄養教諭や調理員さんがどんな思いで給食を作っているのか振り返る。 〇自分たちの苦手な野菜を頭に浮かべ、仲間が話した願いや思いを伝えられたら食べられそうか、問いかける。 〇子供の発言に対して、理由を問い直し、裏にある願いや思いに気付かせる。 〇自分たちが作っているものを仲間と見せ合うことで、より良いものを作っていけるようにする。 **目標に迫った姿をどのように見届けるか** 自分たちが育てた野菜を使った給食について全校に伝える方法や伝えたい内容について、仲間と交流しながら工夫している。 （関係構築力） ・発言の様子や振り返りシートから見届ける。

２年３組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：野菜（全140時間）

第２学年の目標	（１）問題解決力に関わって	願いに合った野菜を栽培する活動を通して、見通しをもちながら試行錯誤を続けたり、実現可能かどうかを立ち止まって考えたりし、自分たちが決めた活動をやり切ることができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	願いに合った野菜を栽培する中で生まれたジレンマやエラーについて考える活動を通して、解決するために必要なことを伝え合い、よりよい考えを生み出し、活動できるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	願いに合った野菜を栽培する活動を通して、育てる喜びや人を幸せにするよさに気付き、自他のために行動する態度を養う。
カテゴリー設定の理由	第１学年では、「遊び」を通して、自分が興味・関心をもった対象に楽しみながら関わり、自分の世界を広げてきた。第２学年では、「野菜」をカテゴリーと設定した。「野菜」というコンテンツが、子供たちにとって身近であり、収穫や食べたときの喜びを味わえたり分かち合えたりできるよさが、発達段階に適していると考えたからである。一人一人が願いをもち、試行錯誤をしながら探究を進めた先に、「できた」「やってよかった」という達成感を味わうことで、探究することのよさを実感する子を生み出したい。	
学びの基盤となる道徳的諸価値	善悪の判断、自律、自由と責任・希望と勇気、努力と強い意志・親切、思いやり・感謝・礼儀・友情、信頼 勤労、公共の精神・家族愛、家庭生活の充実・よりよい学校生活、集団生活の充実・自然愛護・感動、畏敬の念	
学びを構成する要素	人　自分　仲間　家族　地域の人　店の人　農家　給食に携わる人　学校　野菜　畑　土　水　太陽　気候　季節　虫　鳥　自然 育てる　働く　食べる　渡す　売る　伝える　願い　喜び　献身性　達成感　充実感　魅力　自己の成長　感謝	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	よし！やろう！！にこにこまんてん野菜大作戦 ～やさいをそだててたべよう～　（43）					よし！やろう！！　えがおいっぱい野菜大作戦 ～ぜん校の仲間のために～　（57）				よし！やろう！！　とどけ野菜大作戦 ～より多くの人に～　（40）		
主な学習活動	○１年生までのどう生きるかでの学びを振り返り、「どんな野菜を」「誰のために」育てたいのかを明確にする。 ○「はつか大根」作りを行い、野菜の生長の様子を実感する。 ○「はつか大根」の振り返りから、よかったことや問題点を明らかにして夏野菜作りにつなげる。 ○夏野菜調べを行い、願いや理由を明確にもって、自分が育てたい野菜を決める。 ○願いの実現に向けて、土作り、畝作り、野菜の世話を行う。 ○国語「かんさつ名人になろう」での観察の視点をもとに、野菜の変化を捉える。 ○必要に応じて、情報収集や人に聞く活動を行い、問題の解決と行動を繰り返す。 ○問題解決の過程で生まれた、全体で考えるべき事柄についてグループや全体で話し合い、判断する。 ○収穫や誰かに食べてもらえたこと、自分で食べられたことで願いが実現した喜びを共有する。 ○探究してきたこと（願い、解決方法、うれしかったこと、難しかったこと、どう乗り越えたか）を振り返る。 ○野菜の生長や収穫に向けて、夏休み前や夏休み期間中の世話について考え、実行する。				夏野菜の世話と収穫を続け、収穫や食べる喜びを感じる	○夏野菜を収穫した経験や、食べたり食べてもらったりしたことを振り返り、探究したことのよさを確かめる。 ○4月の願いの中の言葉から、「全校の仲間のため」という方向付けをする。 ○「全校の仲間のために」どんな野菜を育てたいのか、願いを明確にする。 ○調理室の見学や栄養教諭や調理員さんとの対話を通して思いを知り、野菜との向き合い方を考える。 ○美味しい野菜を目指すために、専門家と出会い、野菜を育てる際の新たな視点や解決方法を知る。 ○自分や他者の考えをもとにしながら野菜作りに取り組み、試行錯誤を続ける。 ○全校からの実際の声を受けて、人のために野菜を育てることや、難しいことに向き合うことのよさを実感する。 ○収穫された野菜が実際には虫に食べられていたため、全て使うことができず、給食で提供する量が足りていなかった事実を知り、その問題をどう乗り越えるかを考え、願いを再構築する。 ○さらに「全校」「給食に携わる人」の両方のためになる野菜作りを目指し、試行錯誤しながら世話を続ける。 ○野菜を収穫し、栄養教諭や調理員さんに確かめてもらい、これまでの取組の達成感を味わう。 ○これまでの探究してきたことを振り返る。				○給食のプロジェクトを振り返り、全校の仲間が自分たちの活動を通して笑顔になってもらったこと、「野菜を育てる良さ」や「難しいことを乗り越えられた経験」を確かめ、今後の活動の願いを明確にする。 ○自分たちが作った野菜をより多くの人に食べてもらうためには、どうしていくとよいのか、活動の見通しをもつ。 ○「やさいブック」を作り、育てた生長の様子をまとめ作った思いも一緒に届ける。 ○チームに分かれ、育てる野菜や育て方等を考え、野菜を育てる。 ○より安全で美味しい野菜作りを進めるとともに、その魅力を伝えるためにできることを考え、準備を進める。 ○２年生へつなぐとともに、1年間の探究を振り返る。		
想定される ●ジレンマ ■エラー 【道徳的諸価値】	■育てるために、自分から働く必要があるとわかっていながら、継続して世話をすることが難しい。 ■育てるための情報を収集するも、実際に使える情報が何かを選択することが難しい。 ■教えられた解決方法がどういうことなのかがわからず、活用することが難しい。 ■大切に育てている野菜をボール遊びやカラスから守るための方法を考えることが難しい。 ●大切に育てている野菜なのに、育てるために「抜く」ことをやらなければならないこと。 ●自分がただやりたいことをしていくのか、本当に野菜のためになることをするのか。 【希望と勇気、努力と強い意志・家族愛、家庭生活の充実・自然愛護・感動、畏敬の念】					■人のために、継続して世話をする必要があるのに、継続して世話をすることが難しい。 ■多くの人に食べてもらうためには、考えなければならないことが多くあり、全てを解決することが難しい。 ■学級や学年の仲間と協力する必要があるが、意見をまとめることや共に活動することが難しい。 ■どれだけ丁寧に育てたとしても、廃棄される野菜が生まれてしまい、廃棄を無しにすることが難しい。 ●たくさんつくろうとすると、一つ一つの野菜の世話が疎かになってしまう。一つ一つを大切にしようとするとたくさんの野菜をつくることは難しい。どちらにすればよいのだろう。 ●作った野菜を給食で食べてもらえてうれしかったが、実際には育てた野菜に問題があったことがわかった。本当にこれから大切にしなければならないことは何だろう。 【希望と勇気、努力と強い意志・感謝・勤労、公共の精神・よりよい学校生活、集団生活の充実・自然愛護・感動、畏敬の念】				■「より多くの人」に渡すためにはどうすればよいのか、品質的な問題を解消するにはどうしてよいのか分からない。 ■何を伝えていくのか、どう伝えていくとよいのか、仲間と考えが合わない。 【善悪の判断、自律、自由と責任・希望と勇気、努力と強い意志・新設、思いやり・礼儀、感謝・自然愛護・感動、畏敬の念】		
人材活用施設	・JA厚見支店の方 ・加納にある野菜の販売店 ・家の人 ・おじいさん、おばあさん ・野菜に詳しい先生 ・３年生や４年生					・加納にある野菜の販売店　　・家の人 ・おじいさん、おばあさん　　・野菜に詳しい先生 ・３年生や４年生 ・給食に携わる人（栄養教諭、調理員、食品を運搬する人） ・附属小中学校の仲間や先生　　・農家				・加納にある野菜の販売店　・家の人　　・おじいさん、おばあさん ・野菜に詳しい先生　　・３年生や４年生 ・給食に携わる人（栄養教諭、調理員、食品を運搬する人） ・附属小中学校の仲間や先生・農家		
教科等との関連	・国語：図書かんたんけん　春がいっぱい　かんさつ名人になろう　メモをとるとき こんなもの、見つけたよ　夏がいっぱい ・算数：せいりのしかた　２けたのたし算　２けたのひき算　長さのたんい 100より大きい数　かさのたんい　時こくと時間 ・音楽：かぼちゃ ・図工：たのしくうつして　ともだち見つけた！					・国語：秋がいっぱい　そうだんにのってください　おもちゃの作り方をせつめいしよう みきのたからもの ・算数：三角形と四角形　かけ算　かけ算九九作り　長いものの長さのたんい ・音楽：だがっきパーティー ・図工：音作りフレンズ　わくわくおはなしゲーム　パタパタストロー				・国語：冬がいっぱい　すてきなところをつたえよう 楽しかったよ、二年生 ・算数：1000より大きな数　分数　はこの形 ・図工：たのしかったよドキドキしたよ		

２年３組　単元シート	本単元の目標		
単元名 よし！やろう！！ にこにこまんてん野菜大作戦 (57)	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
	①願いを基に全校のために野菜を栽培する活動を通して、野菜と向き合い、試行錯誤しながら問題を解決できるようにする。 ②野菜作りを通して、問題解決に向けて、他者と関わったり、実現可能かどうかを考えたりして、野菜の世話を最後までやり切ることができるようにする。	①給食に出す野菜にするために必要だと思うことを伝えたり、受け入れたりして、考えを再構築できるようにする。 ②これまで調べたことや聞いたことを基に、世話の仕方や諸問題への対策を自分で考えたり、仲間と一緒に行動に移したりできるようにする。	①野菜が生長し、附属の仲間に食べてもらえたことで、自己や他者の嬉しさや楽しさ、喜びを感じ、学びを振り返ることで、自分にできることを続けていこうとする態度を養う。 ②他者からの反応を受け止めることで、願いの実現に向けて大切なことを実感し、自分のよさを生かして行動しようとする態度を養う。

活動の計画	○夏野菜を収穫して食べたり食べてもらったりしたことを振り返り、探究したことのよさを確かめる。(貢献①) ○４月の児童の願いの中の言葉から、「全校の仲間のために」どんな野菜を育てたいのか、願いを明確にする。(貢献②) (10)	○栄養教諭や調理員との対話を通して思いを知り、野菜との向き合い方を考える。(関係①) ○安全で美味しい野菜作りを目指すために、専門家と出会い、新たな視点や解決方法を知る。(問題②) ○自分や他者の考えを基にしながら野菜作りに取り組み、試行錯誤を続ける。(問題①) (10)	○全校の仲間に野菜を食べてもらうだけでなく、より楽しく食べてもらうために自分にできることを考える。(貢献①) ○全校からの実際の声を受けて、人のために野菜を育てることや、難しいことに向き合うことのよさを実感する。(関係②) (10)	○虫よけ、病気など、よりおいしく育てる方法はないか、自分で調べたり仲間の考えを聞いたりしながら、対応策を考える。(問題②) ○給食で出た野菜について、全校、栄養教諭や調理員さんの声から、どんなことを考えていかないといけなかったのか振り返る。(貢献①) (10)	○「全校」「給食に携わる人」の両方のためになる野菜作りを目指し、試行錯誤しながら世話を続ける。(問題①) ○野菜を収穫し、栄養教諭や調理員さんに確かめてもらい、これまでの取組の達成感を味わう。(関係①) (10)	○これまで探究してきたことを振り返る。(貢献①) ○冬休み明けの学習の見通しをもつ。(貢献②) (７)
加除修正欄	○夏野菜の畑をどうしていくとよいか考え、実行する。 ○栄養教諭との話からどんな野菜がよいのか考える。	○全校に出すためには、どんな野菜が適しているのか調べる。 ○土づくりや、たねをうえる準備をする。				
想定される姿	・夏野菜を育ててきた自分の活動に満足感をもつとともに、今度は、「全校の仲間のために作りたい」という願いをもつ。	・給食に携わる人の思いや、自分たちの育てた野菜を学校給食に出すためには条件があることを理解する。 ・調べたことを基に育てる。	・収穫のタイミングを考え、お世話を続ける。 ・自分たちの作った野菜により親しんでもらうための方法を考える。	・野菜の成長を観察することで、その変化に気付く。 ・大きくおいしく育てるための方法を知り、自分の野菜作りに必要なことを行う。	・野菜の成長を観察することで、その変化に気付く。 ・収穫や給食に提供できた喜びを感じる。	・自分たちの活動が、多くの人の笑顔と自分の喜びに繋がったことに気付く。 ・自己の成長に気付く。
実際の姿	・野菜を全校やお世話になった人たちに届け、食べた人を笑顔にしたいという願いをもつ。	・育てる野菜が決まり、「“みんな”で育てる」意識を強くする。 ・毎日観察し発芽していないか調べる。				

●ジレンマ ■エラー	■人のために、継続して世話をする必要があるのに、継続して世話をすることが難しい。 ■多くの人に食べてもらうためには、考えなければならないことが多くあり、全てを解決することが難しい。 ■学級や学年の仲間と協力する必要があるが、意見をまとめることや共に活動することが難しい。 ■どれだけ丁寧に育てたとしても、廃棄される野菜が生まれてしまい、廃棄をなくすことが難しい。 ●たくさん作ろうとすると、一つ一つの世話が疎かになってしまう。一つ一つを大切にしようとするとたくさんの野菜を作ることは難しい。どうすればよいだろう。 ●作った野菜を給食で食べてもらえてうれしかったが、実際には育てた野菜に問題があったことがわかった。これから大切にしなければならないことは何だろう。

２年３組　本時案　（２年３組教室）

目標

育てている野菜のためにできることを話し合う活動を通して、野菜を大切に育てたいという願いを基に、自分の考えを伝えたり仲間の考えを聞いたりしながら、今できることを実践することができる。(問題解決力)

本時（31/57）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　願いの確認をする。 ・“みんな”でおいしい野菜を作って、ふぞくの仲間を笑顔にしたい。 ・自分たちが作った野菜を食べて、おいしいって言ってほしい。 やさいがよりおいしく育つために、できることはあるかな。 **２　担当している畝を確認したり、普段の観察から気付いたりしていることをグループで交流する。** ・虫がたくさんついている。葉っぱが食べられているから、夏野菜みたいにスプレーとかをした方がいいんじゃないかな。 ・他と比べて大きくなっていないな。他のチームはどんなお世話をしているのか、聞いてみたいな。 ・土が崩れて、根が見えてきている。このままだと心配だから、土を増やしていきたいな。 ・虫がつかないようにするためには、どうするとよいか調べたい。 **３　活動の方向を伝え合ったり、アドバイスを送ったりする。** ・みんなの野菜が大きくなっているのはどうしているか聞きたいな。 →　肥料の量を考えながらやっているよ。　水の量を考えているよ。 ・虫対策をやろうと思っているよ。 →　食べられた葉っぱは切っておくといいよ。 葉っぱの裏とかによくついているから、確かめるといいよ。 **４　それぞれのチームごとに野菜の世話をしたり、対処法を調べたりする。** ＜予想される活動＞ ・雑草を抜いたり、土を増やしたりして畝を整える。　・水や肥料をあげる。 ・葉の裏を見ながら虫をとる。　・芽かきや土寄せを行う。 ・タブレット端末や本を使いながら、虫対策やより元気に収穫できる方法を調べていく。 **５　本時の振り返りを行う。** ・自分たちは、野菜が大きくなっていないことへの対処を考えていたけれど、栄養が足りていないということが分かったから、肥料をあげてみた。これからは野菜の状態を見ながら、肥料や水の量を考えていきたい。	〇願いを確認するとともに、「どんな野菜ができるとよいか」と問うことで、「より大きく」「よりおいしく」といった今よりも向上させたいという視点をもたせられるようにする。 〇自分たちでの困り感が出しやすいように、「水」「大きさ」「根の状態」「肥料」「葉の状態」「その他」など、視点を提示し、考えを整理できるようにする。 〇タブレット端末で写真を撮って提示したり、自分たちの畝に足を運んだりしながら、考えが伝え合えるように促していく。 〇様々な困り感への対応の中から、仲間の思いを受容しながらグループで優先して取り組みたいことを決定していく。 〇他チームの気付きや活動を聞く中で、自チームの世話に生かせそうな視点に気付かせる。 **目標に迫った姿をどのように見届けるか** 野菜がより大きくよりおいしく育てたいという願いをもって、野菜の状況に合わせた活動を考え実践することができている。(問題解決力) ・活動の様子やワークシートの記述から見届ける。 〇次回への見通しをもつことができるようにするために「①困り感　②対処したこと　③これから取り組みたいこと」をポイントに挙げて振り返る。

第３学年　学びのカテゴリー「花」

第２学年では、「野菜」を通して「野菜で全校を笑顔にしたい」という願いをもち、収穫できたことの喜びや自分たちが育てた野菜で人を幸せにする達成感を味わいながら活動してきた。その中で、トライアル＆エラーを繰り返し、仲間と協力しながら乗り越えることで仲間と共に活動するよさを味わうことができた。第３学年ではより他者との関わりを感じさせる題材としてカテゴリーを「花」とした。花は見て楽しんだり、他者の気持ちを前向きに変容させたりすることができると考えている。また、これまでの学びとのつながりをもちつつ、命あるものを大切に育てていく心を養うことができると考えた。さらに、自分の願いだけではなく、他者の考えを受容しながら活動を進めることを大切にし、自分や仲間を幸せにする方法について探究していく。

第３学年の児童は、自分で選んだ花を育てたり、みんなで花壇をつくったりすることで、生命に関わる様々な気付きを獲得しながら願いの実現に向けて探究を続けている。活動を始めるにあたり、花を育てた経験がそもそも少ない児童が多かったため、個人で花を育てる単元と、集団で花壇を育てていく単元を並行で進めている。

個人の花を育てる単元では、花に対して知識や経験を獲得したり、花を育てる楽しさや喜びを感じたりするために、自分で花を決め、育てた。きれいに咲かせるための方法を調べたり、生育が良くない花についてどうしたらよいかを話し合ったりもした。これらの経験を通して、毎日関わりたいという献身性を身に付けつつある。また、世話をしていたが枯れてしまうというエラーから、命には限りがあるという有限性についても目を向け始めている。

集団で育てる花壇の単元では、「全校の仲間を笑顔にしたい」という願いを根底にもちながら、花壇で育てたい花を調べたり、花壇のデザインを考えたりしている。その中で「仲間の考えを肯定的に受け止め、考えを深めること」を大切にしている。また、多くの人が訪れる花壇を見学したり専門家と対話したりした。その経験から自分たちの花壇に対する願いやイメージをより具体的にもつことができた。

北村　佳之
岩田　尚之
佐藤　睦

３年２組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：花（全105時間）

第３学年の目標	（１）問題解決力に関わって	花の栽培を通して出会った問いをもとに、自分や仲間の幸せを生み出すために自分にできることを考え、やりきることができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	花の栽培を通して、仲間の考えを肯定的に聞いたり自分の考えを相手や目的を意識して伝えたりしながら、ジレンマやエラーに対する互いに納得できる考えを生み出し、活動することができるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	花の栽培や様々な人との触れ合いを通して、自分の長所や仲間の頑張りに気付き、自分や仲間の幸せを生み出す方法を考え、仲間と共に行動しようとする態度を養う。
カテゴリー設定の理由	第２学年では、野菜栽培でトライアル&エラーを繰り返し、願いをもちながら仲間と共に活動することのよさを味わってきた。３年生では、花の栽培を通して自分の願いだけではなく、他者の考えを受容しながら活動を進めることを大切にし、人のためになる経験を積むとともに、自分や仲間を幸せにする方法について探究していく。これまでの学びの過程とつながりをもちつつ、他者や自然についてより理解を深めることができ、子供たちの自己実現に向かうために必要な資質・能力を効果的に育むことができると考え、カテゴリーを「花」と設定した。	
学びの基盤となる道徳的諸価値	個性の伸長・希望と勇気、努力と強い意志・相互理解、寛容・勤労、公共の精神・よりよい学校生活、集団生活の充実・生命の尊さ・自然愛護	
学びを構成する要素	自然　季節　植物　仲間　専門家　全校　命　継承　願い　幸せ　笑顔　喜び　魅力　貢献　働く	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	個人：君に決めた！元気に咲いてね！！ぼく・私のお花さん！（14時間）					個人：〇〇のために咲かせたい！ぼく・私の花（12時間）				「次へつなぐ　私たちの花壇や思い」（17時間）		
	集団：みんなでつくろう！わくわく花壇（34時間）					集団　：花を使って　みんなを〇〇に！（28時間）						
主な学習活動	〇昨年度の学びを振り返る。　〇今年度の願いをもつ。 【個人：君に決めた！元気に咲いてね！ぼく・私のお花さん！】 〇自分が育てたい花を調べる。 〇花を育てるために必要なことを調べる。 〇花の苗を植え替え、世話を継続する。 〇自分の花の紹介活動を計画し、実行する。 【集団：みんなでつくろう！わくわく花壇！】 〇学校の花壇について調べる。 〇ぎふワールドローズガーデン（可児市）を見学し、花壇について学ぶ。 〇昨年度の花をどうするかを考える。 〇専門家（JAの方）から花壇づくりを学ぶ。 〇どんな花壇にしたいかを考え、花壇を整備する。 〇花壇に来てもらうための方法を考え、実行する。 〇季節の変化やその他のエラーについて考え、対策を行う。 〇夏休み中の世話について考え、計画を立てる。 〇これまでの活動を振り返り、今後の活動の願いや見通しを仲間と共有する。				夏休みの世話を計画し、実行する。花の世話に取り組んできたことをもとに	〇夏休みの活動や現在の花の様子を振り返る。 〇夏休み前の振り返りをもとに、今後の願いや見通しを再確認する。 【個人：〇〇のために咲かせたい！ぼく・私の花】 〇これまでの探究をもとに、自分の願いをもつ。 〇願いの実現に向けて、必要なものやことを調べる。 〇願いの実現に向けて計画を立て、実行する。 〇中間振り返りを行い、今後の活動を修正する。 〇これまでの活動を振り返り、今後の活動を計画する。 【集団：みんなを笑顔に！ニコニコ花壇！！】 〇現在の花壇を見つめる。 〇仲間に花壇についての意識調査をする。 〇自分たちの願いと仲間の意識から目指す花壇を考える。 〇専門家（JAの方）に花壇づくりについて相談する。 〇願いの実現に向けて、花壇を整備する。 〇花壇に来てもらうための方法を考え、実行する。 〇季節の変化やその他のエラーについて考え、対策を行う。 〇冬休みのお世話について考え、計画を立てる。				〇これまでの取組を振り返り、大切にしてきたことを確かめる。 〇来年度の３年生のために自分たちにできることを考え、これまでの取組や思いを形にしてまとめ、伝える活動を計画し、実行する。 〇これまでの活動を振り返り、「花が自分たちにとってどんなものか」を考え、これまでの自分の学びや変化、成長を見つめる。 〇これまでの活動に対する思いをまとめ、引継ぎ活動を計画する。 〇計画をもとに引継ぎ活動を実行する。 〇これまでの取組を振り返り、自分の生き方につながるものを確かめる。		
想定される ●ジレンマ ■エラー 【道徳的諸価値】	■計画したことをやろうと思っても、全員で取り組むことが難しい。 ■何度も話し合い、改善しようとしてもうまく進めることができない。 ●人のためと思って活動していたことが、人のためにならず、嫌な思いをさせてしまった。 ●今の活動で、少しでも嫌な思いをする人がいるなら今後の活動をどうしたらよいのだろう。 【努力と強い意志・相互理解，寛容・勤労・よりよい学校生活・生命の尊さなど】					■自分がよいと思って伝えたことが、学級や他学級の仲間に伝わらない。 ●自分がやりたいと思ったことと、全校の仲間が思っていることに違いがあるな。どうすればよいのだろうか。 ●どこまで全校の仲間の声を計画に入れたらよいのだろうか。 【努力と強い意志・相互理解，寛容・勤労・よりよい学校生活・生命の尊さなど】				■２年生が本当に知りたいことは何だろう。 ■自分たちが４月に悩んだように、次の３年生も花壇の花をどうするかを考えることになるから３月末に花壇の花を全て無くしてしまった方がよいのだろうか。 【個性の伸長・希望と勇気・相互理解、寛容・生命の尊さなど】		
人材活用施設	・Ⅰ部の仲間 ・学校の先生 ・園芸店の人 ・JAの人 ・岐阜ワールドローズガーデンの人 ・岐阜農林高校の人 ・家族					・Ⅰ部・前期課程・環境部 ・学校の先生 ・岐阜農林高等学校の園芸科 ・花に関わる仕事をしている人 ・家族				・２年生 ・卒業する９年生 ・新入生 ・家族		
教科等との関連	・国語：もっと知りたい、友達のこと（話す・聞く） ・社会：学校のまわりの様子 ・算数：棒グラフ ・理科：植物を育てよう					・国語：山小屋で三日間過ごすなら はんで意見をまとめよう（話す・聞く） 仕事の工夫見つけたよ ・社会：岐阜市の様子 ・算数：大きな数　円と球				・国語：伝わる言葉で表そう（書く）		

３年２組　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 花を使ってみんなを〇〇に！ (28)	①花の栽培を通して自分の願いや問いを見いだすことができるようにする。 ②願いの実現や問いの解決に向けて、納得がいくまでやりきることができるようにする。	①願いの実現や問いの解決に向けて、自分の思いを伝えたり仲間の考えを肯定的に聞いたりすることができる。 ②仲間との対話を通して、互いに納得できる考えや方法を見いだし、活動することができる。	①花の栽培や様々な人との関わりを通して、できたことや頑張ったことに達成感や喜びを感じたりまわりの人も喜ばせようとしたりする態度を養う。

活動の計画	〇自分の願いをもとに、プロジェクトチームをつくる。(問題①) (例) ・プレゼントチーム ・アレンジメントチーム ・花壇の充実チーム 〇チームごとに活動の計画を立てる。 〇プロジェクトを実行する。(関係②) (８)	〇チームごとにプロジェクトを振り返り、成果と課題を確かめる。(貢献①) 〇プロジェクトの成果と課題を全体で共有する。(問題①) 〇成果と課題を基に、願いを見いだし、プロジェクトの計画を立てる。(関係①) (４)	〇プロジェクトの計画や準備を見直す。 (例)　(関係②) ・プレゼントチーム ・アレンジメントチーム ・花壇の充実チーム ・イベントチーム 〇プロジェクトの準備を進める。(問題①) 〇プロジェクトを実行する。(問題②) (12)	〇プロジェクトを振り返る。(貢献①) 〇プロジェクトの成果と課題を全体で共有する。(関係①)、(貢献①) 〇これまでの活動を振り返り、自分の変化や成長を見つめる。(問題①) (４)
加除修正欄				
想定される姿	・前の活動で１、２年生の子が喜んでくれたから、次はもっとたくさんの仲間に喜んでもらいたいな。 ・長く楽しんでもらえるようにしたい。どうすれば花を綺麗に咲かせ続けることができるのだろう。	・アンケートやインタビューをしてみると、みんな楽しんでくれたみたいでうれしいな。 ・今度はもっとたくさんの仲間に私が育てている花のきれいさを知ってほしいし、もっとみんなを明るく元気にしたいな。	・前回の反省を生かして、必要になる物を早めに準備したり、多くの人に参加してもらえるように、お昼の放送を使って紹介したりしたいな。 ・準備したけど全部使うことができなかったな。どうすればよかったのかな。	・たくさんの仲間が参加してくれたからうれしいな。かぞくの〇〇さんが来てくれたし、今度は何をしようかな。 ・活動を通して、仲間の考えを聞くことでこれまで以上に楽しい活動にすることができたよ。
実際の姿				

●ジレンマ ■エラー	●計画したことをやろうと思っても、仲間と協力して取り組むことが難しい。どうすればみんなで協力できるのかな。 ■暑い日が続いて、花たちの元気がなくなってきてしまった。	■活動はしてきたけど、本当に仲間を笑顔にすることができているのかだろうか。 ●他のチームも花を使うから足りないな、どうしよう。

３年２組　本時案　（３年２組教室）

目標

「私たちのプロジェクトの成果は何か？」について仲間と対話する活動を通して、自分と異なる立場の考えに共感しながら、これまでの経験や自分たちの願いを基に、今後の活動で大切にしたいことを仲間とともに見いだすことができる。

（関係構築力）

本時（25/28）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　これまでの歩みを振り返り、共有する。 私たちのプロジェクトの成果は何か？ 〇問いについて、チームで対話してきたことを共有しましょう。 〇各チームのプロジェクトを聞いて、感想や質問を交流しましょう。（全９チーム） 花で絵をつくろう　チーム【調理員さん、おばあちゃん】 ・調理員さんに感謝の気持ちを伝えたり絵を渡したりすることができたからプロジェクトは成功したと思うよ。 ・たくさんの人がパンフレットをもらってくれたよ。 プレゼント　チーム【家庭・おうちの人】 ・おうちの人にしおりや扇子をプレゼントして、泣いてしまうくらい喜んでもらうことができたよ。 ・花たちの魅力をおうちの人に伝えることができたよ。 イベント　チーム【前期課程の仲間、図書室に来る人】 ・多くの人に花壇に来てもらうことができたよ。 ・花のきれいさや可愛さを知ってもらうことができたよ。 ・イベントに参加した人に楽しんでもらうことができた。 お守り　チーム【家庭、教室・友達、おうちの人】 ・おうちの人に、感謝の気持ちを伝えることができたよ。 ・仲間と協力して効率よく作ることができたよ。 ・もらってくれた人が今も大切にしてくれているよ。 **【予想される仲間からの質問】** ・どれくらいの人が参加してくれたんですか？　・参加したらみんな喜んでくれたって考えていいの？ ・今、花壇に来てくれている人は何人なのかな？　・本当に活動の効果はあったのかな？ ・「成功」ってどう基準で決めているの？どのようになっていたら成功って言っていいのかな？ **２　全体での対話をもとに、問いを見いだし、さらに仲間と対話をする。** （例）「プロジェクトの成功」とは？ ・相手が笑顔になっていたりもらったものを大切にしてくれたりしていたら、成功と言えるのではないか。 ・相手もそうだけど、私たち自身が楽しかったなとか、またやりたいな！やってよかったなと思えれば、そのプロジェクトは成功に向かっていると思うから私は「成功」だと思うよ。 **３　本時の学びの振り返りをワークシートに書く。** ・チームのみんなと考えていた時には、相手のために活動することができたと思っていたけど、他の仲間の話を聞いてみると、本当に喜ばせることができたのかが分からなくなった。自分たちもインタビューやアンケートで確かめることも必要だと感じた。ただ、相手のために自分から工夫したり仲間と協力したりすることが楽しかったし、相手も喜んでくれていたから私たちのプロジェクトは成功していたと思う。次は最後のプロジェクトとなるからこれまでのプロジェクトでの成果を生かして、より多くの人が笑顔になってくれる活動をしていきたいと思う。	〇前時までにチームごとにプロジェクトの成果について仲間と対話を行い、自分たちの考えをまとめ、全体交流まで行っておく。本時は、他チームへの感想や質問を交流する場を設定し、自分たちの成果について対話することを通して、仲間と考えたい問いを見いだすことができるようにする。 〇仲間との対話で、課題や問いについてとことん考えていけるよう、誰もが大切にされる安心感を大切にすることを対話のはじめに確認し、必要に応じて児童に声をかける。 〇他チームからの感想や質問を聞き、そこで表出された児童の文脈（疑問、興味・関心）をもとに、全体で考えたい問いを見いだせるよう、教師がファシリテートを行う。 〇全体での対話で見いだした問いをもとに（例）「今後も大切にしたいこと」「来年度に向けて」「プロジェクトの成功とは？」「花の魅力って何？」「幸せとは？」等について、仲間と対話を進める。 〇全体での対話をもとに、自分たちの成果や課題を見直す時間を確保し、今後の活動に生かせるようにする。 **目標に迫った姿をどのように見届けるか** これまでの経験や仲間の考えをもとに、自分とは異なる立場の考えに共感し、自分の考えを仲間に伝えている。（関係構築力） ・発言の様子やワークシートの記述から見届ける。

３年３組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：花（全105時間）

第３学年の目標	（１）問題解決力に関わって	花の栽培を通して出会った問いをもとに、自分や仲間の幸せを生み出すために自分にできることを考え、やりきることができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	花の栽培を通して、仲間の考えを肯定的に聞いたり自分の考えを相手や目的を意識して伝えたりしながら、ジレンマやエラーに対する互いに納得できる考えを生み出し、活動することができるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	花の栽培や様々な人との触れ合いを通して、自分の長所や仲間の頑張りに気付き、自分や仲間の幸せを生み出す方法を考え、仲間と共に行動しようとする態度を養う。
カテゴリー設定の理由	第２学年では、野菜栽培でトライアル&エラーを繰り返し、願いをもちながら仲間と共に活動することのよさをを味わってきた。第３学年では、花の栽培を通して自分の願いだけではなく、他者の考えを受容しながら活動を進めることを大切にし、人のためになる経験を積むとともに、自分や仲間を幸せにする方法について探究していく。これまでの学びの過程とつながりをもちつつ、他者や自然についてより理解を深めることができ、子供たちの自己実現に向かうために必要な資質・能力を効果的に育むことができると考え、カテゴリーを「花」と設定した。	
学びの基盤となる道徳的諸価値	個性の伸長・希望と勇気、努力と強い意志・相互理解、寛容・勤労、公共の精神・よりよい学校生活、集団生活の充実・生命の尊さ・自然愛護	
学びを構成する要素	自然　季節　植物　仲間　専門家　全校　命　継承　願い　幸せ　笑顔　喜び　魅力　貢献　働く	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	個人：さかせてみよう！わたしの花（24時間） 集団：みんなでつくろう！わくわく花だん（24時間）					個人：〇〇のためにさかせてみよう！私の花（12時間） 集団：花でえがおをつくろう！（28時間）				次へつなぐ　私たちの花だんや思い（17時間）		
主な学習活動	〇昨年度の学びを振り返る。 〇今年度の願いをもつ。 【学級全体　みんなでつくろう！わくわく花壇】 〇専門家（JA）と一緒に花壇について学ぶ。 〇フラワーローズガーデンの花壇を見て、みせかたを学ぶ。 〇フラワーローズガーデンで働いていた人花壇への願いなどについて対話をする。 〇昨年度に植えてある花をどうするか考える。 〇どんな花壇をつくりたいのか考え、実行する。 【個人探究　さかせてみよう！わたしの花】 〇自分が育てたい花を調べ、決定する。 〇花を育てるために必要なことを調べる。 〇自分が育てたい花を植え、育てる。 〇花を咲かせて、枯れたときどうするとよいのか調べる。				夏の前までに取り組んできたことをもとに花の世話を計画し、実行する。	〇夏休み前や夏休み中の活動を振り返り、今後の見通しをもつ。 【学級全体　花でえがおをつくろう！】 〇花壇や花、学校生活に対する他学年の意識を調査する。 〇花で仲間を笑顔にする活動を計画し、実行する。 〇活動後の他学年の意識を調査する。 〇４年生、環境部、外部の専門家（農林の学生、花屋等）と「花で人を笑顔にするってどういうこと？（仮）」について対話し、これからの活動を考える。 〇仲間を笑顔にするための活動を計画し、実行する。 〇活動後の他学年の意識を調査する。 【個人追究　〇〇のためにさかせてみよう！私の花】 〇だれ、何のために花を咲かせたいのか考える。 〇目的に合った花はどのようなものがあるのか調べる。 〇種から花を育てていくために必要なことや聞くことができる人はいないか調べる。 〇自分の目的に合った花を育てる。 〇これまでの活動の成果と課題を考える。				〇これまでの取組を振り返り、大切にしてきたことを確かめる。 〇来年度の３年生のために自分たちにできることを考え、これまでの取組や思いを形にしてまとめ、伝える活動を構想する。 〇これまでの活動を振り返り、「花が自分たちにとってどんなものかの」を考え、これまでの自分の学びや変化、成長を見つめる。 〇これまでの活動に対する思いをまとめ、引継ぎ活動を計画する。 〇計画をもとに引継ぎ活動を実行する。 〇これまでの取組を振り返り、自分の生き方につながるものを確かめる。		
想定される ●ジレンマ ■エラー 【道徳的諸価値】	■計画したことをやろうと思っても、全員で取り組むことが難しい。 ■何度も話し合い、改善しようとしてもうまく進めることができない。 ■その花に合った育て方を調べてやっていたが、上手く育たない。 ●人が喜ぶと思ってやったことなのに思っていた反応と違っていたからどうするとよいのだろう。 ●やることに意味を感じるが、少しでも嫌な思いをする人がいるなら今後の活動をどうしたらよいのだろう。 【努力と強い意志・相互理解，寛容・勤労・よりよい学校生活・生命の尊さなど】					■自分がよいと思って伝えたことが、学級の仲間や他学級の仲間に伝わらない。 ■全校の仲間が笑顔になるように思い描いている花壇をつくろうとしているが花がうまく咲かず、花壇がきれいにならない。 ●自分がやりたいと思ったことと、学級の仲間が思っていることに違いがあるな。どうすればよいのだろうか。 ●どこまで全校の仲間の声を計画に受け入れたらよいのだろうか。 【努力と強い意志・相互理解，寛容・勤労・よりよい学校生活・生命の尊さなど】				■２年生が本当に知りたいことは何だろう。 ■自分たちが４月に悩んだように、次の３年生も花壇の花をどうするかを考えることになるから、３月末に花壇の花を全て無くしてしまった方がよいのだろうか。 【個性の伸長・希望と勇気・相互理解、寛容・生命の尊さなど】		
人材活用施設	・Ⅰ部の仲間 ・学校の先生 ・園芸店の人 ・JAの人 ・岐阜ワールドローズガーデンで働いていた日比野さん ・岐阜農林高校の人 ・家族					・Ⅰ部・前期課程・環境部 ・学校の先生 ・岐阜農林高等学校の園芸科 ・花に関わる仕事をしている人 ・家族				・２年生 ・卒業する９年生 ・新入生 ・家族		
教科等との関連	・国語：もっと知りたい、友達のこと（話す・聞く） ・社会：学校のまわりの様子 ・算数：棒グラフ ・理科：植物を育てよう					・国語：山小屋で三日間過ごすなら はんで意見をまとめよう（話す・聞く） 仕事の工夫見つけたよ ・社会：岐阜市の様子 ・算数：大きな数　円と球				・国語：伝わる言葉で表そう（書く） ・社会：市のうつりかわり ・算数：大きな数、棒グラフ ・理科：植物を育てよう		

３年３組　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 花でえがおをつくろう！ (28)	①花で全校を笑顔にしたいという願いをもとに問題を発見できるようにする。 ②自分や仲間の幸せを生み出すためにできることを考え、行動することができるようにする。	①花で全校の仲間を笑顔にするために、仲間の考えを肯定的に聞いたり、相手や目的を意識して伝えたりすることができるようにする。 ②仲間と互いに納得できる考えを生み出すことができるようにする。	①花の栽培や様々な人との触れ合いを通して、自分の長所に気付き、全校の仲間の笑顔をを生み出す方法を考え、仲間と共に行動しようとする態度を養う。

活動の計画	○花で全校を笑顔にするためには、どのタイミングでどのような活動があるのかの見通しをもつ。(問題①) ○今の花壇の状況から、今後どのようにしていくとよいかについて願いに立ち返りながら、確認をする。(問題①) （３）	○花で全校の仲間を笑顔にするためにプロジェクトを考える。(関係①) ○考えたプロジェクトをグループごとに紹介する。(関係①) ○第１プロジェクトをグループごとに実行する。(関係②) (10)	○第１プロジェクトを振り返り、成果と課題を明らかにする。(問題①) ○第１プロジェクトの振り返りをもとにもっと全校の仲間を笑顔にするためにどんなことができそうか専門家と対話をする。(関係②) ○考えたプロジェクトをグループごとに紹介する。(関係①) ○第２プロジェクトの活動計画を立て、実行する。(貢献①) (10)	○ここからの行事に向けて、花で何をどうしていくのか計画を立てる。(問題②) （８）
加除修正欄				
想定される姿	・卒業式や新１年生のために花を使って何かできそうだな。 ・今の花壇で、本当に全校の仲間が笑顔になっているのかな。	・花壇に来てもらうだけではなく、花壇に工夫をしたら見て笑顔になってくれないかな。 ・花壇だけではなく、花を校内に飾ることでもっと多くの人に花を見てもらうことにつながりそうだな。	・全校のみんなを笑顔にできると思ったけど、やってみると全校のみんなを笑顔にすることは難しかった。 ・自分たちの思いだけでプロジェクトを進めていて、それで笑顔になると思っていたけど、もっと相手のことを考えてプロジェクトを考えていかないといけないな。	・卒業式や入学式には花壇に花をいっぱいにしたいな。 ・卒業式と入学式で、時期が違うから花を植える時期や花の種類を考えないといけないな。
実際の姿	・卒業式や入学式に花を咲かせたいな。花を咲かせるためには、１月ごろには準備が必要そうだな。 ・今の花壇では、枯れてしまっている花もあるし、願いを達成できない。	・花に興味をもってもらえるように、花の特徴を書いた看板を作りたいな。 ・朝、登校してくる子に宣伝をしたら、花壇を見てもらえそう。		
●ジレンマ ■エラー	●じっくり花を見てほしいけど、見てくれた人が朝の活動に遅れてしまうのはまずい！どうしたらいいのかな。 ●みんなと協力するのはいいけど、もともとやりたかったこととは違うものになってきてしまっている。 ■笑顔をつくれると思ってやってみたけど、そんなに笑顔になってくれていないな。		●まだ咲いているから植え替えるかどうか迷う。どちらも大切なんだけど、どうしたらいいんだろう。 ■自分たちの考えた活動に参加してくれる人が少しずつ増えてくれるといいなと思っていたけど、たくさんの人が希望してくれた。うれしいけど、どうしたら全校のみんなのために準備することができるの？	

３年３組　本時案　（３年３組教室）

目標

「花で全校のみんなを笑顔にする」ためのプロジェクトについて紹介する活動を通して、仲間の思いや外部講師のアドバイスを受容しながら、自分の思いを伝えたり、自分たちのプロジェクトについて見つめ直したりすることができる。

（関係構築力）

本時（16/28）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　考えているプロジェクトについてグループごとに紹介する。 ＜花壇をよりよくしようプロジェクト＞ ＜花のイベントをしようプロジェクト＞ ＜きれいな花を咲かせようプロジェクト＞ ＜花の宣伝をしようプロジェクト＞ ２　プロジェクトについて意見 ※各グループのプロジェクの紹介ごとに意見を伝える。 ※外部講師（日比野さん）からのアドバイスを伝える。 考えているプロジェクトを見直そう。 ３　プロジェクトの練り直しをする。 〇仲間や日比野さんからのアドバイスを受けて、自分たちのプロジェクトがよりよくなるよう見直し、考えましょう。 ・花壇をよりよくするために看板を立てるだけではなく、もっと花を増やすことも必要なのではないかと意見をもらったけど、苗を増やすことはできないからどうしたらよいのかな。 ・花を切って、花瓶に入れることで校内にも花をたくさんにすることができることはクラスの仲間も賛成してくれたね。花瓶も自分たちで作ったらよりたくさんの場所に置くことができるかもと意見をもらったからどうしていくとよいか考えよう。 ・もっと花を知ってもらうために花壇に看板を立てることやパンフレットを作ることだけではなく、朝、登校するときにみてもらうよう声をかけたり、少しでも足を止めてくれた子にその花のことについて説明したりできるように自分たちももっと花について知らないといけないね。花を知ってもらうとその花を欲しいと思う子やクラスはいないかな。そのためにも花をもっと増やすことをしていきたいな。 ４　本時の学びの振り返りをワークシートに書く。 ・私たちのグループでは、校内の置ける場所に花瓶を置いて色々な場所で、花を見てもらうようにしようと考えて、みんなに紹介しました。もっと見てもらいやすくするために、入れる花瓶も工夫した方がいいとアドバイスをもらって、ペットボトルに飾りをつけることになったので、次の活動から、花瓶づくりをしていきたいです。	〇第１プロジェクトでの経験を基にしたり、願いに立ち戻ったりしながらアドバイスをすることができるようにするためにどうしてそう思ったのか問い返す。 〇「意見を受けて、なるほどと思うところはどんなところがありましたか。」と問うことで仲間の意見を受容しながら、意見の取捨選択ができるようにする。 〇グループで交流するときには、仲間からのアドバイスや専門家の対話の中で分かったことを基に自分の考えを交流することができるようにする。 〇願いは何なのかということを常に問うことで、「どうしてそのような活動をしたいのか。」と子ども同士が聞き合い願いに立ち返ることができるようにする。 〇交流を通して、グループで何が決まったのか、次の活動をどうしていくのかについて書くことができるようにする。 目標に迫った姿をどのように見届けるか 仲間の意見を肯定的に聞いたり、自分の考えをアドバイス受けたことを基に、仲間に伝えたりしている。 （関係構築力） ・発言の様子やワークシートから見届ける。

第４学年　学びのカテゴリー「動物」

第３学年では、花の生命の美しさや尊さを実感してきた。そんな児童だからこそ、飼育動物に対する生命の重みと育てることへの責任を強く感じることができると考える。第４学年では、飼育活動を通して、「自分の願い」から「自他の願い」というように視野を広げることで見えてきた問題の解決を目指して、今まで以上に飼育動物と関わったり、その動物を支える人と出会い、対話をしたりする中で、動物の幸せを考え、自分はどうすべきかを探究していく。また、献身的に飼育動物と関わることを通して、命の有限性を感じさせ、自他の命を大切にする心を育む。

４年１組は、「動物たちに幸せになってほしい」という願いをもち、飼育動物が幸せにくらすために自分たちができることを探究してきた。継続して飼育動物と関わることや岐阜大学の先生や学生との交流を通して、動物の習性を知ったり、触れ合い方を学んだりすることで、さらに動物たちに愛着をもち、動物の気持ちに寄り添った関わり方や環境づくりなど、試行錯誤しながら実践を行ってきた。さらに、「動物たちの魅力を校内の仲間に伝えたい」という思いから、動物と人をつなぐプロジェクトの計画を進めている。

４年３組は、「全ての仲間が幸せになる飼育」という願いのもと、動物と全校の仲間のそれぞれが幸せになることを目指し、探究をしてきた。動物の生と死を間近で見たり、休日も継続的に動物と関わったりする中で、命の有限性を感じ、自他の命を大切にする心を育んできた。これらの経験を踏まえ、動物たちと全校の仲間のためにできることを模索し、動物たちと全校の仲間が触れ合うことのできるプロジェクトを企画した。動物たちや全校の仲間の様子を基に、より願いが実現できるようなプロジェクトに修正し、活動を進めている。

下川　舞子
中村　幸智
田中　雄也

４年１組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：動物　（全105時間）

第４学年の目標	（１）問題解決力に関わって	動物や人との関わりを通して出会った問いを基に、自分や仲間、動物たちが幸せに生きるために考えた自分にできることを、やり切ることができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	動物との関わりや動物に携わる人との交流を通して、仲間の考えを肯定的に聞いたり自分の考えを根拠を基に伝えたりしながら、ジレンマやエラーに対して互いに納得できる考えや最適解を生み出し、活動することができるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	飼育活動や様々な人との交流を通して、命の尊さやこれからの自分の生き方を見つめ直し、自分の長所を生かして行動しようとする態度を養う。
カテゴリー設定の理由	第３学年では、花の生命の美しさや尊さを実感してきた。そんな子供たちだからこそ、飼育動物に対する生命の重みと育てることへの責任を強く感じることができると考える。第４学年では、飼育活動を通して、「自分の願い」から「自他の願い」というように視野を広げることで見えてきた問題の解決を目指して、今まで以上に飼育動物と関わったり、その動物を支える人と出会い、対話をしたりする中で、動物の幸せを考え、自分はどうすべきかを探究していく。	
学びの基盤となる道徳的諸価値	希望と勇気、努力と強い意志・親切、思いやり・相互理解、寛容・勤労、公共の精神・よりよい学校生活、集団生活の充実・生命の尊さ・自然愛護	
学びを構成する要素	飼育　生命　達成感　幸せ　笑顔　病気　死　誕生　性格　個性　食物　体験　動物園　かわいい　ペット　ふれあい　環境　関わり方　安全　仲間	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	動物の幸せを考えた飼育を目指して（35時間） ～動物たちに自分ができること～					動物たちの魅力を伝えよう（40時間） ～動物と人のつながりについて考える～				動物の命をつなぐ(30時間) ～動物たちの未来を考える～		
主な学習活動	○飼育活動を経験して感じたことや、気になっていることを交流する。 ○動物の様子を観察したり、触れ合ったりすることを通して、動物の性格や好きな食べ物・遊びなどを知る。 ○インターネットや図鑑を使って、動物の特徴や食べ物、病気などを調べる。 ○動物への関わり方や環境など、動物が幸せにくらすためによりよい方法を考える。 ○専門家の方から話を聞いて、現在の環境や関わり方について見つめ直し、計画したことが動物にとって本当に幸せなのか再検討する。 ○動物への接し方や環境づくりなど、動物が幸せにくらすためによりよい方法を実践する。				詳しく観察をしたり動物の様子をさらに世話をしたりする 飼育活動を継続し動物の気持ちに寄り添って	○動物たちとの関わりの中で、さらに愛着をもったり魅力を感じたりする。 ○動物たちの幸せや動物たちの立場に立つことで、自分たちにできることを考え実行する。 ○動物と携わる方々（獣医師、岐阜大学教育学部理科教育講座の教授や学生など）との出会いを通して、人と動物との関わりを様々な視点で見つめていく。 ○動物と携わる方々との出会いを通して、命の大切さについて考え、動物と人とのつながりについて見直していく。 ○飼育している動物が与えてくれる力を校内の人たちに発信していくプロジェクト活動を行う。				○飼育の引継ぎ会の計画を立てる。 ○引継ぎ会の実施と見届け活動を行う。 ○動物たちとの別れに向けて、動物たちのためにしてあげたいことを考え、実行する。 ○今年度の学びを振り返り、キャリアパスポートに記入する。 ○飼育を通してどんな自分になれたのかを振り返る。		
想定される ●ジレンマ ■エラー 【道徳的諸価値】	■飼育活動を時間までに終わらせることができない。 ■教えてもらった方法でやってみるが、うまくいかない。 ■調べた方法でやってみるが、飼育が上手くできているのか分からない。 ●自分たちが動物の様子を見て実践しようとしていることは、本当に動物にとって幸せなのか葛藤する。 【生命の尊さ・自然愛護・希望と勇気、努力と強い意志・親切、思いやりなど】					■飼育する動物について情報を収集し、共有することを通して、ただ動物の魅力を伝えるだけでは、全校児童生徒と動物の距離は埋められないと実感する。 ●自分の思いと仲間の思いの違いから、自分の思いを優先したいけれど、仲間の思いも受け入れなければならないことに葛藤する。 ●動物と仲良くなってもらうには、体験活動を行いたいが、動物にストレスがかかってしまうかもしれない。どちらを優先すればいいのか葛藤する。 【生命の尊さ・自然愛護・希望と勇気、努力と強い意志・親切、思いやり・相互理解、寛容など】				■飼育する動物について、様々な価値観をもつ全校児童生徒に対して、自分たちの思いや考えを伝えることができず、つまずく。（全校発信プロジェクト） ●３年生に楽しく達成感のある活動をメインに伝えていくべきか、苦しいことや大変なことも時間をかけて伝えていくべきか葛藤する。（引き継ぎプロジェクト） 【生命の尊さ・自然愛護・希望と勇気、努力と強い意志・よりよい学校生活、集団生活の充実など】		
人材活用施設	・獣医師 ・加納小学校の児童や先生 ・ペットショップの職員 ・岐阜大学教育学部理科教育講座（生物学）の教授や学生					・獣医師　・岐阜大学教育学部理科教育講座（生物学）の教授や学生 ・保健所の職員　・自然保護官 ・動物園の飼育員　・ペットショップの職員				・ここまでに出会った方々		
教科等との関連	・国語：メモ（話す・聞く）　お礼の手紙（書くこと） ・社会：すみよいくらしをつくる（水・ゴミ） ・算数：折れ線グラフと表 ・理科：季節と生物（春・夏） ・特別活動（飼育活動）					・国語：パンフレットを読む（読むこと）　わかったことをまとめる（書くこと） ・算数：がい数 ・理科：季節と生物（秋）（冬）　わたしたちの体と運動 ・図工：ひみつのすみか（立体）				・国語：新聞を書く（書くこと） ・理科：季節と生物（春のおとずれ） ・図工：カードで伝える気持ち（工作） 忘れられない気持ち（絵画）		

４年１組　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 動物たちの魅力を伝えよう ～動物と人のつながりについて考える～ (40)	①飼育動物や全校の仲間を幸せにしたいという願いを基に、問題を発見できるようにする。 ②飼育動物や仲間が幸せに生きるために自分にできることを考え、動物たちの魅力を伝えるプロジェクトを最後までやり切ることができるようにする。	①飼育動物や仲間の幸せのために、他者の思いや考えを肯定的に聞いたり、自分の考えを根拠を基に伝えたりすることができるようにする。 ②互いに納得できる考えや最適解を生み出すことができるようにする。	①飼育動物や仲間の幸せのために、自分の長所を生かして動物の魅力を伝えようとする態度を養う。

活動の計画	○飼育動物との関わりの中で、さらに愛着をもったり魅力を感じたりする。（問題①） ○動物の幸せを考えたり動物の立場に立ったりすることで、自分たちにできることを考え実行する。（問題①） ○自分たちが感じる動物の魅力について交流する。（関係①） (8)	○岐阜大学へ行き、須山先生や大学生がどのように動物と関わっているか見学したり対話したりする。（関係①） ○動物と携わる人との出会いを通して、命の大切さについて考え、人と動物との関わりを見つめ直す。（問題②） ○動物と人が幸せに関わるには、何が大切なのか話し合う。（関係②） (14)	○動物の魅力を全校の仲間に伝えるプロジェクトを計画する。（問題②） ○計画したプロジェクトが、動物や全校の仲間にとって本当に幸せなのか再検討する。（関係①） ○動物と人が幸せに関わることができるプロジェクトを実践する。（貢献①） (12)	○動物や全校の仲間を幸せにするために自分たちが実践したことを振り返り、成果と課題を明らかにする。（貢献①） ○３年生への引継ぎ会に向けて、引継ぎ事項や環境についてやり切ることを整理し、学年間で交流する。（関係②） (6)
加除修正欄	・動物と全校の仲間をつなぐ活動を行う前に、飼育動物のことを知ってもらう必要があると考え、ポスターを見てもらう対象やポスターを貼る場所を意識して、ポスター作りを行う。	・岐阜大学へ行く前に、見学の視点や今後のふれ合い体験に向けて学び取りたいことについて、ポスター作りチームごとに話し合う。		
想定される姿	・自分が作ったおもちゃで、ライトが遊んでくれて嬉しい。 ・お腹がすいているときの合図が分かってきた。（ドアの前で待っている。） ・動物たちを小屋の外に出すと、喜んで遊んでくれるので、自分も嬉しくなる。 ・飼育小屋へ行ったり声を掛けたりすると、動物たちが近づいてくれるようになった。	・動物にストレスがかからないように、動物のことを第一に考えて関わっている。 ・いつも動物の自由にさせているわけではなく、だめなことはだめとしっかり教えたり、危険なときは守ったりしている。 ・ある程度の信頼関係ができていないと、動物は安心できない。	・附属小中学校の仲間の一員として、名前や個性などを知ってほしい。 ・動物を抱っこしたい子がいたら、触れ合える体験コーナーを作りたい。 ・抱っこされると、動物にとってストレスになってしまうのではないか心配。 ・全校のみんなに、動物と何がしたいかアンケートをとり、動物にとって幸せかどうか考えたい。	・動物のことを知ってもらうことができたので、全校のみんなも動物たちを大切にしてくれると嬉しい。 ・みんなが動物を見に来てくれるのは嬉しいけれど、動物のストレスにならないように、見るときの注意などを呼びかけていきたい。 ・プロジェクトを行ったことで、動物や全校の仲間が幸せな気持ちになってくれると嬉しい。
実際の姿	・多くの人に見てもらえるように、ポスターが貼ってある場所を放送で呼びかけたりお知らせに行ったりしよう。 ・ポスターを貼った場所にパンフレットやクイズの紙を置いて、たくさんの仲間に動物のことを知ってもらえる工夫をしよう。			
●ジレンマ ■エラー	■飼育する動物について情報を収集し、共有することを通して、ただ動物の魅力を伝えるだけでは、全校の仲間と動物の距離は埋められないと実感する。		●自分の思いと仲間の思いの違いから、自分の思いを優先したいけれど、仲間の思いも受け入れなければならないことに葛藤する。 ●動物と仲良くなってもらうには、体験活動を行いたいが、動物にストレスがかかってしまうかもしれない。どちらを優先すればいいのか葛藤する。	

４年１組　本時案　（４年１組教室）

目標

動物と全校の仲間をつなぐプロジェクトについて話し合うことを通して、動物や全校の仲間を幸せにしたいという願いを基に、仲間の考えを肯定的に聞いたり、自分の考えを根拠を基に伝えたりすることができる。（関係構築力）

本時（25/40）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　動物と全校の仲間をつなぐプロジェクトについて確認する。 〇前時までに、どんなプロジェクトの計画を立てましたか。 ・飼育動物について知ってもらうために、動物の名前や個性などを伝えたい。 ・たくさんの人が動物を見られるように、広い場所を用意したい。 ・動物が食べる仕草がかわいいので、餌やり体験コーナーを作りたい。食べ物を食べさせる体験をしてもらって、動物のかわいさを感じてもらいたい。 ・ふれあい体験コーナーを作りたい。実際に動物を触ったり抱っこしたりする体験を通して、動物のかわいさを知ってもらいたい。	〇動物と全校の仲間をつなぐために、どんなプロジェクトを計画したのか全体で共有し、不安要素はないか問いかけることで、本時の問いにつなげる。
２　計画しているプロジェクトが、動物や全校の仲間にとって幸せなのか話し合う。 〇計画したプロジェクトについて、みんなで話し合いたいことはありますか。 ・たくさんの人が集まって来たら、動物にストレスがかかるのではないか。 ・餌をあげたい人がたくさんいたら、動物が食べ物を食べすぎて調子が悪くならないか心配。 ・慣れていない人に抱っこされたら、動物は不安になるのではないか。暴れて下に落ちてしまったら、動物が怪我をするかもしれない。 ・人に慣れていない動物もいるので、もし動物が暴れたりすると、全校の仲間がびっくりするのではないか。 **動物や全校のなかまが幸せになるように、プロジェクトを計画しよう。** 〇自分たちが行おうとしているプロジェクトが、動物や全校の仲間にとって幸せなのかを考えましょう。 ・たくさん人が集まってしまったら、動物と触れ合えない人がいるかもしれない。事前にアンケートをとって、どれくらいの人が見に来たいのかを調べて、人が集中しそうだったら、曜日や日にちで見に来る人を分ければいい。 ・慣れていない人が抱っこしたときに、動物が怪我をするのはとても心配。だから、自分たちが抱っこして、触りたい人に触らせる体験にしたらいいのではないか。大学の須山先生も、動物たちや私たちの様子をよく見て、ふれあい体験をさせてくれていたよ。 ・餌やり体験は、順番やあげる量を決めて、動物が食べ物を食べすぎないように調整してあげるといい。あと、食べてはいけないものを動物が食べてしまわないように注意しないといけないので、しっかり４年生で呼びかけたい。 ・騒がしいのは動物にとってストレスだと昨年の４年生が言っていたし、本にも書いてあったよ。だから、できるだけ小さい声で話すようにお願いするなど、動物が苦手なことについては、事前に伝えておきたい。	〇全体で「願い」を確認し、現在の計画が「動物」と「全校の仲間」の幸せにつながっているのかに着目して話し合いができるようにする。 〇自分たちが行おうとしていることが、動物や全校の仲間を幸せにすることにつながっているのかを自分ごととして捉え、自分の考えを根拠を基に仲間に伝えることができるように、全体交流の前に小集団の仲間（ポスタープロジェクトチーム）との交流を位置付ける。 〇願いに立ち返って発言することができるように「その活動が本当に動物や全校の仲間を幸せにすることにつながるのか。」と問う。
３　本時の学びを振り返る。 ・〇〇さんが、動物のことも全校の仲間のことも考えた意見を言っていたので、みんなの幸せを考えていていいと思いました。 ・今計画中のプロジェクトを改善して、動物や全校のみんなが幸せになるふれあい会を成功させたいです。	**目標に迫った姿をどのように見届けるか** 動物や全校の仲間を幸せにしたいという願いを基に、仲間の考えを肯定的に聞いたり、自分の考えを根拠を基に伝えたりしている。 （関係構築力） ・発言の様子内容やワークシートの記述から見届ける。

４年３組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：動物（全105時間）

第４学年の目標	（１）問題解決力に関わって	動物や人との関わりを通して出会った問いを基に、自分や仲間、動物たちが幸せに生きるために考えた自分にできることを、やり切ることができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	動物との関わりや動物に携わる人との交流を通して、仲間の考えを肯定的に聞いたり根拠を基に自分の考えを伝えたりしながら、ジレンマやエラーに対して互いに納得できる考えや最適解を生み出し、活動することができるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	飼育動物や様々な人との交流を通して、命の尊さやこれからの自分の生き方を見つめ直し、自分の長所を生かして行動しようとする態度を養う。
カテゴリー設定の理由	第３学年では、花の生命の美しさや尊さを実感してきた。そんな子供たちだからこそ、飼育動物に対する生命の重みと育てることへの責任を強く感じることができると考える。第４学年では、飼育活動を通して、「自分の願い」から「自他の願い」というように視野を広げることで見えてきた問題の解決を目指して、今まで以上に飼育動物と関わったり、その動物を支える人と出会い、対話をしたりする中で、動物の幸せを考え、自分はどうすべきかを探究していく。	
学びの基盤となる道徳的諸価値	希望と勇気、努力と強い意志　・親切、思いやり・相互理解、寛容・勤労、公共の精神・よりよい学校生活、集団生活の充実・生命の尊さ・自然愛護	
学びを構成する要素	飼育　生命　達成感　幸せ　笑顔　病気　死　誕生　性格　個性　食物　体験　動物園　かわいい　ペット　ふれあい　環境　関わり方　安全　仲間	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	全ての仲間が幸せになる飼育を目指して①（35時間） ～動物たちに自分ができること～					全ての仲間が幸せになる飼育を目指して②（40時間） ～動物と自分、全校の仲間との関わりから、人と動物の共生を考える～				私はこう生きる(30時間) ～自分の命・生き方と向き合う～		
主な学習活動	○昨年度の４年生から引きついだ飼育を自分たちだけでできるようにするために、仲間と関わり合いながら活動する。 ○学級の仲間とどんな飼育活動を目指すか、願いを確かにする。 ○自分が担当する飼育動物に対して、継続的に関わる。 ○生命の誕生に触れる。 ○飼育活動を通して感じたことや、気になったことを交流する。 ○暑さ対策を考える。 ○夏休みの飼育活動に向けて、各学級で大切にしてきたことや飼育活動に対する思いを交流し合い、これから大切にしたいことや方法など、学年で共通理解を図る。				飼育活動を継続し動物の様子をさらに詳しく観察したり動物の気持ちに寄り添ったりする世話をする	○動物との関わりの中で、さらに愛着をもったり魅力を感じたりする。 ○動物と携わる人たち（獣医師、岐阜農林高等学校の生徒など）との出会いを通して、人と動物との関わりを様々な視点で見つめていく。 ○全校の児童生徒と飼育動物が関わることのできる場を設定し、動物の魅力を伝える。 ○動物と携わる人たちとの出会いを通して、命の大切さについて考え、飼育動物のために自分たちには何ができるかを考え、実行する。				○飼育の引継ぎ会の計画を立てる。 ○引継ぎ会の実施と見届け活動を行う。 ○動物たちとの別れに向けて、動物たちのためにしたいことを考え、実行する。 ○動物と携わる人との出会いを通して、命の大切さについて考え、これから自分はどのように行動していくのかを明らかにしていく。 ○飼育を通してどんな自分になれたのかを振り返る。 ○「命について考えたこと」や「これからの自分の生き方について考えたこと」を保護者に伝える。		
想定される ●ジレンマ ■エラー 【道徳的諸価値】	■飼育活動を時間までに終わらせることができない。 ■調べた方法でやってみるが、上手く飼育できているのか分からない。 ■自分は何でもやっているのに○○さんはやりたいことしかやらない。 ●動物によって得意・不得意、好き・嫌いがあるから、役割分担した方がよいのではないか。 ●苦手、嫌いはあるけれど、飼育活動をやりきらないといけない。 ●飼育小屋で生活することが、動物たちにとって本当に幸せなのか分からない。 ●自分たちが動物の様子を見て実践しようとしていることが、動物にとって本当に幸せなのか分からない。 【生命の尊さ・自然愛護・希望と勇気、努力と強い意志・親切、思いやりなど】					■いろいろな遊び道具の提案があって、意見がまとまらない。 ■全校の仲間に自分たちの思いややりたいことが上手く伝わらない。 ●自分の思いと仲間の思いの違いから、自分の思いを優先したいけれど、仲間の思いも受け入れなければならないことに葛藤する。 ●全校の児童生徒と飼育動物が関わる場を設定することは、本当に動物にとって幸せなのか分からない。 【生命の尊さ・自然愛護・希望と勇気、努力と強い意志・親切、思いやりなど】				■命を大切にして生活をしていくために、これから自分がどのように行動をしていくべきか分からない。 ●３年生に楽しく達成感のある活動をメインに伝えていくべきか、苦しいことや大変なことも時間をかけて伝えていくべきか葛藤する。（引き継ぎプロジェクト） 【生命の尊さ・自然愛護・希望と勇気、努力と強い意志・よりよい学校生活、集団生活の充実など】		
人材活用施設	・獣医師 ・岐阜農林高等学校					・獣医師　　・岐阜農林高等学校の生徒 ・保健所の職員　　・自然保護官 ・動物園の飼育員　・ペットショップの職員				・ここまでに出会った方々 ・保護者		
教科等との関連	・国語：メモ（話す・聞く）　お礼の手紙（書くこと） ・社会：すみよいくらしをつくる（水・ゴミ） ・算数：折れ線グラフと表 ・理科：季節と生物（春・夏） ・特別活動（飼育活動）					・国語：パンフレットを読む（読むこと）　わかったことをまとめる（書くこと） ・算数：がい数 ・理科：季節と生物（秋）（冬）　わたしたちの体と運動 ・図工：ひみつのすみか（立体）				・国語：新聞を書く（書くこと） ・理科：季節と生物（春のおとずれ） ・図工：カードで伝える気持ち（工作） 忘れられない気持ち（絵画）		

４年３組　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 全ての仲間が幸せになる飼育を目指して ～動物と自分、全校の仲間の関わりから、人と動物の共生を考える～ (40)	①飼育動物だけでなく、全校の仲間を幸せにしたいという願いを基に問題を発見できるようにする。 ②問題解決に向けて自分で何をすべきかを考え、行動することができるようにする。	①動物に携わる人と交流する際や仲間と活動を話し合う際に、根拠を基に自分の考えを伝えたり、他者の考えを肯定的に聞いたりできるようにする。 ②互いに納得できる考えを生み出すことができるようにする。	①動物との関わりから命の尊さを実感し、自分にできることを考え、命を大切に生活しようとする態度を養う。

活動の計画	○夏休みの飼育活動や個人プロジェクトを振り返り、夏休み明けの活動を計画する。(問題①) ○専門家と交流し、専門的な知識を得たり、動物の魅力を実感したりする。(関係①) ○飼育動物の魅力を発信して、全校の仲間を幸せにしたいと願いをもつ。(貢献①) (８)	○飼育動物と関わることで、全校の仲間が幸せになるような第一プロジェクトを企画する。(関係②) ○ヒヨコを育てるために、必要なことを調べる。(問題②) ○ヒヨコを育てる中で、命の尊さを実感する。(貢献①) (16)	○第１プロジェクトを振り返り、成果と課題を明らかにする。(問題①) ○全校の児童生徒に第１プロジェクトの感想を聞き、プロジェクトを修正する。(関係②) ○ヒヨコと触れ合うことのできる第２プロジェクトを企画する。(貢献①) (12)	○第２プロジェクトを振り返り、成果と課題を明らかにする。(問題①) ○飼育動物と関わった１年間の学びを振り返り、自分の生き方を考える。(貢献①) (４)
加除修正欄	・動物の魅力を全校の仲間に知ってもらいたいと願い、触れ合い活動を計画した。 ・触れ合い活動に向けて、専門的な知識を得るために専門家と交流した。	・1,2 年４組と 3,4 年４組の児童と動物が触れ合うことができるプロジェクトを企画した。 ・岐阜大学の須山先生からヒヨコを 3 羽譲り受けた。	・ヒヨコが大きくなったため、ヒヨコの場所を教室から飼育小屋に移した。 ・ヒヨコとの触れ合い活動をするために、困っていることを専門家に質問した。	
想定される姿	・全校の仲間が飼育動物と触れ合うことができるような場を設定しようとする。 ・新たに生まれた問いを解決するために、専門家にインタビューをしたいと考える。 ・ヒヨコを間近で見て、自分たちも育ててみたいと思う。	・昼休みに全校の仲間が動物と触れ合うことができるような場を設定しようとする。 ・どこで、どのようにヒヨコを育てていくかを話し合う。 ・継続的にヒヨコと関わり、成長を見守る。	・動物との関わりを通して、もっと多くの仲間に幸せになってほしいと第２プロジェクトを企画する。 ・各学級にアンケートを配付し、全校の仲間の思いを知ろうとする。 ・動物にストレスがかからないようなプロジェクトを考える。	・動物の幸せを守りつつ、全校の仲間を幸せにすることができた達成感を感じる。 ・動物たちの命を大切にしてきた経験から、自分たちの命について捉え直そうとする。
実際の姿	・エサやり体験と触れ合い体験をして全校の仲間に動物の魅力を知ってほしいな。 ・触れ合い体験でニワトリは、小屋から出した方がよいか聞いてみよう。	・動物を怖いと感じる仲間もいたから何か工夫できることはないかな。 ・平日だけでなく、土日も当番を決めてヒヨコと関わることで、学級全員でヒヨコの成長を見届けよう。	・３年生が、うさぎやニワトリだけでなく、ヒヨコも見たいと言っていたよ。 ・同じ人ばかり、エサをあげていて多くの人に魅力を伝えることができなかったよ。	

●ジレンマ ■エラー	●動物たちの魅力を発信し、全校の児童生徒を幸せにしたいが、動物たちはストレスに感じるのではないかと葛藤する。	■多くの人が動物を見に来て、一人一人が動物と十分に触れ合う時間を確保できない。	■全校の仲間に自分たちの思いが上手く伝わらない。
	●ヒヨコを育てたいが、自分たちが育てることが本当に動物の幸せになるのか葛藤する。	■ヒヨコの育て方が分からない。	●ヒヨコを見たい仲間がいるが、多くの人が見ると、ストレスになるのではないかと葛藤する。

４年３組　本時案　（北校舎ピロティ、飼育小屋）

目標

「動物の魅力が伝わるように、どんな工夫をするとよいか」を対話する活動を通して、全校の仲間にも動物の魅力を知ってほしいという願いを基に、伝えたい動物の魅力を整理したり、自ら参加者に魅力を伝えに行ったりするなどして、動物の魅力が伝わるプロジェクトに修正することができる。（問題解決力）

本時（28/40）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　第一プロジェクトを振り返り、本時学級の仲間とやりたいことを共有する。 〇今日の触れ合い活動でやりたいことは何ですか。 ・前回の触れ合い活動では、キラやゲンキ（ニワトリ）が怖いと言っていた仲間がいたから、誰でも近づけるようにご飯を食べているかわいいところやだっこをされて落ち着いているところを特に見せたいな。 ・ヒヨコばかりに人が集まらないように、積極的にお客さんに声をかけて、いろいろな動物の魅力を知ってもらいたいな。 ・第一プロジェクトでは、動物たちを外へ出すことで精一杯だったけど、今日はお客さんに魅力をどんどん伝えていきたいよ。	〇全体の場で、数名を指名し、「どうして、〇〇をやってみたいの」と問うことで、「いろいろな動物の魅力を知ってもらって、全校の仲間を幸せにしたい」という学級の願いを確認する。
動物の魅力が伝わるように、どんな工夫をするとよいか。	
２　グループに分かれて活動をする。 〇グループに分かれて活動をしましょう。 〔ウサギ〕（にっこり池：５チーム） ・元気に走っている姿を見てほしいな。 ・おいしそうにご飯を食べる姿を見てほしいな。 【想定されるジレンマやエラー】 ・ウサギが外に出ることを嫌がったら、どうしよう。外に出すことができなくても、魅力を伝えたいな。 〔ニワトリ〕（ピロティ：２チーム） ・ニワトリがお散歩する様子を見てほしいな。 ・ご飯を食べているニワトリのかわいさを知ってほしいな。 【想定されるジレンマやエラー】 ・ニワトリが興奮しないように、どんな工夫をするとよいかな。ニワトリも参加者も安心できる環境をつくりたいな。 〔ヒヨコ〕（ピロティ：３チーム） ・手に乗せて、ヒヨコの温かさを感じてほしいな。 ・ふわふわなヒヨコを触ってみてほしいな。 【想定されるジレンマやエラー】 ・人がたくさん集まりそうだな。どうすれば、多くの参加者に魅力を伝えられるかな。	〇自分たちの周りに参加者がいないチームには、「どうするとこの動物の魅力がお客さんに伝わるかな。」と声をかけ、学級の願いに立ち返ることができるようにする。積極的に参加者に声をかけに行く児童を価値付ける。 〇活動の際に、「お客さんに動物の魅力は伝わったかな。」と問い、相手の立場になって参加者の気持ちを考えることができるようにする。また、「どうするとお客さんの気持ちが分かるかな。」と問い、よりよいプロジェクトにするためには、参加者の気持ちを確認する必要があることに気付くことができるようにする。
３　本時の学びの振り返りをワークシートに書く。 ・私は、「ヒヨコのかわいさを全校の仲間に知ってほしい」と思って、実際にヒヨコを手に乗せて、ヒヨコと触れ合ってもらえるように工夫しました。しかし、順番待ちの列が長くなって、待たせてしまう時間が増えてしまい困りました。次の時間は待っている時間も楽しんでもらえるような工夫を考えて、もっと動物の魅力を伝えることができるようにしたいです。	〇「今日工夫したこと」と「困ったこと」の２つの視点で振り返りを書く。数名を意図的に指名し、次回の活動の見通しをもつことができるようにする。 **目標に迫った姿をどのように見届けるか** 動物の魅力を知ってほしいという願いを基に、自分から参加者に声をかけ触れ合い活動を実施する中で、問題点を見付け、プロジェクトを修正している。 （問題解決力） ・活動の様子やMetaMoJiの記述から見届ける。

第５学年　学びのカテゴリー「暮らし」

これまで、学級の仲間、野菜、花や動物など、子供たちは目の前の人や生き物を対象として探究してきた。第４学年では、飼育動物や動物に関わる仕事をする人について探究することを通して生命の尊さを学んだ。そんな児童だからこそ、身近な動物から、身近な人へと対象が変わったとしても、生命の尊さをもって、相手の生き方に寄り添うことができ、暮らしている方の人生の尊さに共感できると考えた。そこで第５学年では、学びのカテゴリーを「暮らし」とすることで、自分や他者の「暮らし」を通して見えてきた問題に対して切実感をもち、その解決を通して「幸せな暮らしとは何か」「よりよい暮らしとは何か」を考え、自分はどうすべきかを探究していく。

第１単元では、自分や学校の仲間、学校生活においての暮らしを支えてくれる人に目を向け、その暮らしをよりよくするために、〇〇さん笑顔いっぱいプロジェクトやスマイルプロジェクトを行ってきた。１組では、「自分たちのよりよい暮らしを創りたい」という願いのもとプロジェクトを計画した。その中で、幸せの捉えは人によって異なることに気付き、相手のことを深く知ることや相手のことを思って活動することが大切であることが分かった。また、自分たちが本気になって活動することで対象の暮らしをよりよくすることができることを子供たちは実感した。第２単元では、高齢者を対象とし、「高齢者の幸せな暮らし」を自分たちの手で生み出すことができるよう探究を進めていく。３組は、スマイルプロジェクトを通して、全校の仲間が笑顔になる瞬間について調査したことで、人によって笑顔になる瞬間が違うということを知り、より多くの仲間が笑顔になる方法を考えプロジェクトを進めた。第２単元では、対象を地域に住む外国人と繰り返し関わることで、直面する諸問題を自分事と捉えて、「外国人の幸せな暮らしを創造する」ことについて探究を進めていく。

窪田　泰三
岩田　奈々
伊藤　暢宏

５年１組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：暮らし　（全105時間）

第５学年の目標	（１）問題解決力に関わって	人と関わり暮らしを見つめる中で問いをもったり、問題を発見したりして自分や他者の暮らしがよりよくなるために自分にできることを考え、解決に向けて行動することができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	自分や他者の暮らしをよりよくするために、他者と自らつながり、他者の考えを肯定的に聞いたり自分の考えを筋道立てて伝えたりしながら、ジレンマやエラーに対して互いに納得できる考えを生み出すことができるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	自分や他者の暮らしをよりよくしたいという態度を養う。
カテゴリー設定の理由	これまでに、学級の仲間、野菜、花や動物など子供たちの目の前にある実体的な人や生き物を対象として探究してきた。特に第４学年では、飼育動物や動物に関わる仕事をする人たちについて探究することを通して、生きているものの生命の尊さを学んだ。そんな児童だからこそ、身近な動物から、身近な人へと対象が変わったとしても、生命の尊さをもって、相手の生き方に寄り添うことができ、暮らしている方の人生の尊さに共感できると考えた。そこで第５学年では、学びのカテゴリーを「暮らし」とすることで、自分や他者の「暮らし」を通して見えてきた問題に対して切実感をもつとともに、問題の解決を通して「幸せな暮らしとは何か」「暮らしをよりよくするとは何か」を考え、自分はどうすべきかを探究していく。	
学びの基盤となる道徳的諸価値	自主、自律、自由と責任・希望と勇気、克己と強い意志・親切、思いやり・真理の探究・感謝・友情、信頼・相互理解、寛容・規則の尊重 公正、公平、社会主義・社会参画、公共の精神・家族愛、家庭生活の充実・よりよい学校生活、集団生活の充実・生命の尊さ・よりよく生きる喜び	
学びを構成する要素	生活　学校　家族　仲間　幸せ　心　環境　自然　生き物　安全　健康　生命　人　ふれあい　喜び　笑顔　感謝　自分らしさ　個性　夢　決意　不便　便利	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月

単元名（時数）	自分たちの暮らしを見つめる（50時間）	他者の暮らしを見つめる（55時間）
主な学習活動	○これまでの探究学習を振り返る活動を通して、５年生では何と関わっていくのか、何について考えていくのかを話し合う。 ○自分たちに目を向け、願いを共有し、よりよい(楽しい○幸せな)暮らしとは何かを考える。 ○どうしたら学校の暮らしがよりよくなるのかという視点で学校内を探索し、気付いたことを交流する。 ○学校の仲間のよりよい(楽しい○幸せな)暮らしとは何か自分なりに考えをまとめ、よりよい暮らしの実現に向けた願いをもつ。 ○自分たちの暮らしを支えて下さる方（学校内外）の願いや仕事を知ると共に、その人たちに共通していることを考える。 ○学校で暮らす人に継続的に関わり、自分事の暮らしにしていく。 ○学校の暮らしの中で問題を発見する。 ○学校の暮らしをよりよくしたいと考え、問いを立てて、プロジェクトを立ち上げる。 ○自分たちでプロジェクトの活動計画を立て、活動内容を吟味する。 ○プロジェクトを通して考えたこと、感じたことをまとめ、他者とつながりながら実行していく。 ○プロジェクトを通して学校の暮らしの変化を見つめながら、暮らしについてより知りたいという興味○関心をもつ。	○学校の外に出て、自分とは異なる暮らしをしている人と出会う。（フィールドワーク） ○人の暮らしを支える立場の人と出会う。 ○自分たちのまわりには、様々な人の暮らしがあることに気付く。 ○自分と異なる暮らしをしている人と継続的に関わる。（フィールドワーク） ○出会った人の暮らしについて、暮らしの中にある本当の幸せについて考える。（自分事になっていく） ○対象の方の暮らしの問題解決を目指して課題を設定し、プロジェクトを立ち上げる。 ○対象の方や、その方と関わりのある社会とつながり、情報を収集する中で、どんな活動をするべきか計画を立てる。 ○目的や意図に応じた活動（発信）を行う。 ○これまでの活動を振り返り、暮らしを見つめる中で、自分自身が学んできたことをまとめる。 ○交流を通して、仲間が学んできたことを知り、「暮らし」について、共通して大切なものを見いだす。 ○個やグループで探究してきたことをまとめ、これからの自分の暮らしについてどう生きるか、自分なりの考えをまとめ、学年の仲間に発表する。
想定されるエラー（■）ジレンマ（●）【道徳的諸価値】	■どうすることが学校の仲間にとっての幸せな暮らしが実現したといえるのかわからない。 ■プロジェクトを実行したが、本当にみんなの暮らしをよりよくすることに繋がったのか。 ●学校の暮らしを支えて下さる人の思いを知った時、～するべきだと思うけれど、学校生活をしている自分としては○○○することの方がいいと思うし、どうしたらいいのだろうか。 【親切、思いやり・相互理解、寛容・よりよく生きる喜びなど】	■自分のしていることが、相手の暮らしをよりよくすることにつながっているのかわからない。 ■相手の○○さんにとって、今自分が行っていることが本当に必要なことなのかがわからない。 ●自分は～することが大切だと思って誰かのために活動しているのだけれど、○○さんにとってそれは本当に「～な暮らし」と言えるのだろうか。 【真理の探究・社会参画・家族愛、家庭生活の充実・集団生活の充実・よりよく生きる喜びなど】
人材活用施設	・保護者 ・人の暮らしを支える立場の人 （学校で働く警備員、学校の養護教諭、学校の調理員、PTAの方） ・岐阜大学の先生	・自分と異なる暮らしをしている人
教科等との関連	・国語：きいて、きいて、きいてみよう－インタビューをするとき－（話す・聞く） どちらを選びますか－互いの立場を明確にして、話し合おう－（話す・聞く） ・社会：国土の気候のと特色くらしを支える食料生産、わたしたちの生活と工業生産 ・算数：整数と小数、２つの量の変わり方、小数のかけ算・わり算、体積、合同な図形、整数の性質、分数のたし算とひき算、平均 ・理科：メダカのたんじょう、植物の実や、種子のでき方 ・家庭科：私の生活、大発見！ ・外国語：Hello, friends!、Happy birthday!、Can you play dodgeball?	・国語：統計資料の読み方－資料を用いた文章の効果を考え、それをいかして書こう－（書く） 「子ども未来科」で何をする－事実と感想、意見とを区別して、説得力のある提案をしよう－（話す・聞く） ・社会：情報化した社会と産業の発展、わたしたちの生活と環境 ・算数：割合、帯グラフと円グラフ、 ・理科：ものの溶け方、ふりこの性質、電磁石の性質、人のたんじょう ・家庭科：気持ちがつながる家族の時間 ・外国語：Welcome to Japan!

５年１組　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 他者の暮らしを見つめる (55)	①自分が関わる人の暮らしをよりよくしたいという願いを基に、問題を発見することができるようにする。 ②問題の解決に向けて、高齢者の暮らしをよりよくするための方法を自分で考え、行動することができるようにする。	①高齢者と自らつながり、他者の考えを肯定的に聞いたり、自分の考えを筋道立てて伝えたりすることができるようにする。 ②高齢者や仲間の思いを大切にしながら、活動を進めることができるようにする。	①高齢者や自分の生き方を見つめ直し、暮らしをよりよくするために行動しようとする態度を養う。

活動の計画	○学校の外に出て、自分と異なる暮らしをしている人や人の暮らしを支える立場の人と出会う。（問題①） ○自分たちと異なる暮らしをしている人たちと継続的に関わる。（問題①） (10)	○高齢者の幸せな暮らしを創り出すためにはどうするとよいのかを考え、自分の意見を仲間に伝える。（関係①） ○高齢者の幸せな暮らしを創り出すためのプロジェクトを計画する。（問題②） ○仲間の意見に寄り添い、お互いに納得のいくプロジェクトを計画する。（関係②） ○実際にプロジェクトを実行し、その後、関わる高齢者の様子や生の声を基に振り返りを行う。（関係①） (12)	○プロジェクトの振り返りを基に、次のプロジェクトに生かす。（問題①） ○自分が関わりをもっている○○さんのことをもっと詳しく知ろうする。（関係②） ○「自分と関わりのある○○さんの幸せな暮らし」のために、１人１人に寄り添ってプロジェクトを考え、実行する。（貢献①） ○プロジェクトが、高齢者の人たちの幸せな暮らしにつながっているのかを見直し、改善する。（問題②） (23)	○これまでの活動を通して、自分の中にある「暮らしとは」についてまとめる。（貢献①） ○探究をしてどんな自分になることができたのか、今後自分の生き方にどう生かしていくのかを明確にし、仲間に伝える。（貢献①） (10)
加除修正欄				
想定される姿	・自分たちに高齢者の人の幸せな暮らしをつくることができないかな。 ・関わり続けることで、高齢者の○○さんのことが少し分かるようになってきた気がする。	・高齢者と関わることでいろいろと分かってきたことがあるから、何か一緒にできることはないかな。 ・暮らしをよりよくするために「やるべきこと」「やったほうがいいこと」に分類して、プロジェクトの内容を決めていこう。 ・もっと一人一人に寄り添うことが大事だな。	・プロジェクトを見直したり、関わる高齢者の人の様子やリアルな声を聞いたりしたことを基にして、もう一度計画してみよう。 ・自分が関わる高齢者の人のことを今以上に知って、その人が本当にしてほしい事、望んでいることを考えることが大事だ。	・自分たちの手で暮らしをつくることは大変だけれど、やりがいもあるな。 ・これからの生活の中で、相手の事をよく知ること、相手の立場に立って考えることを大切にしていこう。
実際の姿				

●ジレンマ ■エラー	■イベントを開催したけれど、いつも関わっている○○さんはその間ずっと楽しそうにしているわけではなかった。もっと他の方法を考えないといけない。 ●自分たちの思いと仲間の思いのズレに葛藤する。	■○○さんのことを知って、プロジェクトの計画を立てようと思うけれど、自分一人で考えるだけではどうしたらよいかわからない。 ●自分たちの思いと高齢者の思いのズレに葛藤する。
	●○○さんの暮らしを幸せにするために考えたことだけど、○○さんの望んでいることは少し違ったみたいだ。	

５年１組　本時案　（５年１組教室）

目標

高齢者の人たちに対して、自分たちにできることは何かを仲間と議論する活動を通して、自分と異なる仲間の意見に共感したり、関わらせてもらっている高齢者の〇〇さんの立場に立って考えることを基に、自分の考えを広げたり深めたりしながらプロジェクトについて内容を考えることができる。

（問題解決力）

本時（24/55）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　高齢者施設にいる〇〇さんの幸せな暮らしを創り出すために自分たちにできることを考える。 〇〇さんの幸せのために自分たちに何ができるのか。 〇高齢者の人たちの幸せを創り出すためにどんなことができそうですか。（前時に考えた意見を全体で共有する） ・高齢者の人たちに喜んでもらえるようなプロジェクトがしたいです。 ・私たちも一緒になって楽しく活動できるようなことをしたいです。 ・〇〇さんは～することが好きだと言っていたから、１人１人に合ったことを行いたいです。 ・〇〇さんは思うように活動することができないかもしれないから、動きを少なくしたものがいいと思います。 **２　自分の立場を明らかにする。** ※いろいろな立場の人と交流する中で自分の考えを整理して、立場を明らかにする。 ※自ら他者とつながったり、自分の席でワークシートに考えをまとめたりして、自分の立場で話ができるようにする。 **３　自分の立場を基に、全体交流をする。** みんなで１つのプロジェクトがしたい：・学校祭や宿泊研修など、みんなで活動したからとてもいい思い出になりました。だから、１人よりもみんなで何かをやる方が盛り上がるし、楽しくなると思うからみんなで大きなプロジェクトを考えたいです。 １人１人に合ったプロジェクトがしたい：・〇〇さんと話をする中で、趣味や好きなことがわかりました。だから、〇〇さんが本当に好きなことをやってあげることが幸せな暮らしをつくることにつながると思います。 プロジェクトをするとかではなくてその人に寄り添って話をしたり聞いたりしたい：・何かプロジェクトを企画したり、みんなで何かをやったりするのではなくて、話し相手になって一人一人に寄り添うことが大切だと思います。 **４　３つの立場から１つを決め、内容を考えていく。** ・それぞれ関わらせてもらっている人に寄り添って活動することは大切にしていきたいです。 ・活動が激しいものではなく、一緒に歌を歌ったり、手を繋いで一緒にできるようなことをしたりしていきたいです。 ・昔の遊びを自分たちが覚えて一緒にできるとよいと思います。 **５　議論して学んだことや次の活動で自分が行うことをワークシートに書く。（振り返り）** ・みんなで１つのプロジェクトをすることになったけれど、「〇〇さんの幸せを創り出したい」という願いのところはみんな同じだから、自分が関わらせてもらっている〇〇さんが楽しめるようなプロジェクトにしていきたいです。	〇自分の考えや、自分とは異なる考えをもった仲間の意見を再確認するために、これまで話をしてきた内容について交流する場を位置付ける。 〇それぞれの立場の意見を共有するために、前時のワークシートや児童の発言を基に、それぞれの立場の意見をもった児童を意図的に指名する。 〇「～さんの意見で自分が納得できるところはどういうところですか。」と問うことで、仲間の意見に共感できるようにする。 〇高齢者の方の幸せな暮らしを考え、その人に寄り添って発言することができるようにするため、またその方にとってよりよい生活を生み出していくプロジェクトにできるようにするために、活動を決めていく際に再度願いや自分が関わっている高齢者の方と話した内容を確認する場を位置付ける。 **目標に迫った姿をどのように見届けるか** 「〇〇さんの幸せな暮らしを創り出したい」という願いを基に、自分と異なる立場の意見に共感し、その上で仲間に考えを伝えたり、高齢者の〇〇さんの立場に立って考えたりしながらプロジェクトの内容を決めようとしている。 （問題解決力） ・発言の様子やワークシートの記述から見届ける。

５年３組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：暮らし　（全105時間）

第５学年の目標	（１）問題解決力に関わって	人と関わり暮らしを見つめる中で問いをもったり、問題を発見したりして自分や他者の暮らしがよりよくなるために自分にできることを考え、解決に向けて行動することができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	自分や他者の暮らしをよりよくするために、他者と自らつながり、他者の考えを肯定的に聞いたり自分の考えを筋道を立てて伝えたりしながら、ジレンマやエラーに対して互いに納得できる考えを生み出すことができるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	自分や他者の暮らしをよりよくしたいという態度を養う。
カテゴリー設定の理由	これまでに、学級の仲間、野菜、花や動物など子供たちの目の前にある実体的な人や生き物を対象として探究してきた。特に第４学年では、飼育動物や動物に関わる仕事をする人たちについて探究することを通して、生きているものの命の尊さを学んだ。そんな児童だからこそ、身近な動物から、身近な人へと対象が変わったとしても、生命の尊さをもって、相手の生き方に寄り添うことができ、暮らしている方の人生の尊さを共感できると考えた。そこで第５学年では、学びのカテゴリーを「暮らし」とすることで、自分や他者の「暮らし」を通して見えてきた問題に対して切実感をもつとともに、問題の解決を通して「幸せな暮らしとは何か」「暮らしをよりよくするとは何か」を考え、自分はどうすべきかを探究していく。	
学びの基盤となる道徳的諸価値	自主、自律、自由と責任・希望と勇気、克己と強い意志・親切、思いやり・真理の探究・感謝・友情、信頼・相互理解、寛容・規則の尊重 公正、公平、社会主義・社会参画、公共の精神・家族愛、家庭生活の充実・よりよい学校生活、集団生活の充実・生命の尊さ・よりよく生きる喜び	
学びを構成する要素	生活　学校　家族　仲間　幸せ　心　環境　自然　生き物　安全　健康　生命　人　ふれあい　喜び　笑顔　感謝　自分らしさ　個性　夢　決意　不便　便利	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月

単元名（時数）	幸せな暮らしとは…～自分となかまの暮らしを見つめ創造する～（52時間）	幸せな暮らしとは…～外国人の暮らしを見つめ創造する～（53時間）
主な学習活動	○「暮らし」とは何かをイメージし、現段階での自分にとっての暮らしの幸せとは何かを考える。 ○自分の幸せと仲間の幸せには似ているところあれば違うところもあることに気付く。 ○附属小中学校の仲間の「暮らし」をよりよくしたいという願いをもつ。 ○附属小中学校の仲間の「暮らし」をよりよくしたいという願いをもとに、自己課題を設定する。 ○自己課題をもとに、附属小中学校の仲間の「暮らし」をよりよくするために自分たちに何ができるか話し合う。 ○自分たちで附属小中学校の仲間を笑顔にする「第１回スマイルプロジェクト」の活動計画を立て、実行する。 ○「第１回スマイルプロジェクト」を振り返り、成果と課題を明らかにする。 ○「第１回スマイルプロジェクト」の振り返りをもとに、もっと多くの仲間を笑顔にするためには自分たちに何ができるかを考える。 ○「第２回スマイルプロジェクト」の活動計画を立て、実行する。 ○「第２回スマイルプロジェクト」を振り返り、「暮らしをよりよくするとは…」についてまとめる。 ○学校の中だけなく、地域に目を向けると様々な暮らしがあることを学ぶ。	○自分たちの身の回りにある「暮らし」を知るために地域に出て、外国人と出会う。 ○外国人と自分の「暮らし」を比べる。 ○Anjanaさんにとって幸せな「暮らし」とは何かを考える。 ○Anjanaさんの「暮らし」をよりよくするために、プロジェクト①を計画する。 ○Anjanaさんを幸せにするためのプロジェクト①を実行する。 ○プロジェクト①についてフィードバックをもらう。 ○プロジェクト①を整理分析する。 ○Anjanaさんとの関わりを繰り返し、Anjanaさんの「暮らし」をもっと幸せにするために自分にできることはないか考える。 ○Anjanaさんをもっと笑顔にするためにプロジェクト②を計画する。 ○プロジェクト②を実行する。 ○これまでの探究を振り返り、整理してまとめる。 ○「幸せな暮らしを共に創る」ことを通して学んだことを学年の仲間や岐阜市国際交流協会などに発表したいと願いをもつ。 ○これまでの学習について発表する。
想定されるエラー（■）ジレンマ（●）【道徳的諸価値】	■どうすることが附属小中学校の仲間を笑顔にすることにつながるのかわからない。 ■「スマイルプロジェクト」で笑顔にならなかった人たちのために、自分には何ができるのか分からない。 ●附属小中学校のみんなが笑顔になってほしいけど、みんなを笑顔にすることは本当にできるのだろうか。 【親切、思いやり・友情、信頼・相互理解、寛容・家族愛、家庭生活の充実・よりよく生きる喜びなど】	■自分のしていることが、相手の「暮らし」を支えることにどうしてつながっているのだろうか。 ●外国人のAnjanaさんにとっての暮らしに対する考え（価値観）は、本当に支えるべきものなのだろうか。 ■自分もみんなも共通する幸せな暮らしとは何かが分からない。 【克己と強い意志・真理の探究・自主、自律・社会参画・集団生活の充実・よりよく生きる喜びなど】
人材活用施設	・附属小中学校の仲間	・外国人 ・岐阜市国際交流協会
教科等との関連	・国語：きいて、きいて、きいてみよう－インタビューをするとき－（話す・聞く） どちらを選びますか－互いの立場を明確にして、話し合おう－（話す・聞く） ・社会：国土の気候のと特色くらしを支える食料生産、わたしたちの生活と工業生産 ・算数：整数と小数、２つの量の変わり方、小数のかけ算・わり算、体積、合同な図形、整数の性質、分数のたし算とひき算、平均 ・理科：メダカのたんじょう、植物の実や、種子のでき方 ・家庭科：私の生活、大発見！ ・外国語：Hello, friends!、Happy birthday!、Can you play dodgeball?	・国語：統計資料の読み方－資料を用いた文章の効果を考え、それをいかして書こう－（書く） 「子ども未来科」で何をする－事実と感想、意見とを区別して、説得力のある提案をしよう－（話す・聞く） ・社会：情報化した社会と産業の発展、わたしたちの生活と環境 ・算数：割合、帯グラフと円グラフ、 ・理科：ものの溶け方、ふりこの性質、電磁石の性質、人のたんじょう ・家庭科：気持ちがつながる家族の時間 ・外国語：Welcome to Japan!

５年３組　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 幸せな暮らしとは… 外国人の暮らしを見つめ創造する (53)	①外国人の暮らしをよりよくしたいという願いをもとに問題を発見できるようにする。 ②問題解決に向けて自分で考え、行動することができるようにする。	①外国人の暮らしをよりよくするために、他者の思いや考えを肯定的に聞いたり、自分の考えを筋道立てて伝えたりできるようにする。 ②互いに納得できる考えを生み出すことができるようにする。	①外国人の暮らしをよりよくするために行動しようとする態度を養う。

活動の計画	○自分たちの身の回りにある「暮らし」を知るために地域に出て、外国人と出会う。(問題①) ○外国人と自分の「暮らし」を比べる。(問題①) ○Anjana さんにとって幸せな「暮らし」とは何かを考える。(問題②) (10)	○Anjana さんの「暮らし」をよりよくするために、プロジェクト①を計画する。(関係②) ○Anjana さんを幸せにするためのプロジェクト①を実行する。(貢献①) ○プロジェクト①についてフィードバックをもらう。(関係①) ○プロジェクト①を整理分析する。(問題①) (16)	○Anjana さんとの関わりを繰り返し、Anjana さんの「暮らし」をもっと幸せにするために自分にできることはないか考える。(問題②) ○Anjana さんをもっと笑顔にするためにプロジェクト②を計画する。(関係②) ○プロジェクト②を実行する。(貢献①) (14)	○これまでの探究を振り返り、整理してまとめる。(問題①) ○「幸せな暮らしを共に創る」ことを通して学んだことを学年の仲間に発表したいと願いをもつ。(問題①) ○これまでの学習について発表する。(関係②) (13)
加除修正欄				
想定される姿	・地域に出て「暮らし」について調査してみよう。 ・外国人の暮らしの手助けが僕たちにできないだろうか。 ・Anjana さんともっと関わらないと「暮らし」が分からない。もっと話を聞いてみたい。	・どうすれば自分たちの手で Anjana さんの笑顔を創り出すことができるかな。 ・Anjana さんの笑顔が見られたということは、自分たちの手で、Anjana さんの幸せな「暮らし」を創ることができたのかな。 ・どうすれば Anjana さんはもっと喜んでくれるか考えたいな。	・何度も関りをもつことで Anjana さんの笑顔が増えているんじゃないかな。 ・特別なことをするんじゃなくて、一緒の時間を過ごすだけでも幸せを感じるんじゃないかな。 ・Anjana さんが笑顔になると自分も笑顔になってうれしいな。	・これまで、幸せな「暮らし」を探究する中で、附属小中学校の仲間も外国人も相手の幸せを考えるときは、相手に寄り添うことが大切なんだと分かった。 ・自分が学んできたことをもっとたくさんの人に知ってもらいたいな。
実際の姿				

●ジレンマ ■エラー	●Anjana さんにとっての暮らしに対する考え（価値観）は本当に自分が支えるべきものなのだろうかと葛藤する。 ■自分のしていることは、Anjana さんの暮らしを幸せにすることにつながっているのか分からない。 ■自分もみんなも共通する幸せな暮らしが何か分からない。

５年３組　本時案　（５年３組教室）

目標

「自分たちとの関わりの中でAnjanaさんを笑顔にするためにはどうすればよいか」について対話する活動を通して、自分と異なる意見や立場を理解して聞いたり、自分の考えや意見を伝えたりしながら、Anjanaさんを笑顔にしたいという願いを基に、納得できる考えを生み出すことができる。

（問題解決力）

本時（12/53）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　これまでの歩みを振り返り、共有する。 〇願いを実現するために、Anjanaさんについてわかったことを共有しましょう。 ・Anjanaさんはカレー屋さんをしながら日本での暮らしを楽しんでいる。 ・日本では買いたいものがすぐに買いに行けたり、バスが時間通りに来たりするなど、便利だと言っていた。 ・Anjanaさんも、私たちと同じで家族や人との関わりの中で幸せを感じ笑顔になっている。 ・漢字を読んだり書いたりすることは難しいと言っていた。	〇これまでのAnjanaさんとの関りの中で得た情報を共有する場を位置付け、Anjanaさんが日本で暮らす中で、どんなことを感じ、願っているかを確認する。
２　本時の課題を確認する。 自分たちとの関わりの中でAnjanaさんを笑顔にする方法を考えよう。 〇Anjanaさんを笑顔にするために何ができるか考えましょう。 【お店】 ・Anjanaさんはお店をしているから、そのお店にたくさんお客さんが来ると笑顔になるんじゃないかな。 【言葉】 ・日本語が難しいと言っていた。日本語が分かれば、日本人との関りも増えて笑顔になるんじゃないかな。 【つながり】 ・Anjanaさんのことをもっと知ったり、僕たちのことをもっと知ってもらったりして関ることでAnjanaさんは笑顔になるんじゃないかな。	〇話し合いの論点が明確になるように、Anjanaさんが笑顔になる方法についてどのような意見が出たのかそれぞれの立場が分かるように板書する。 〇本質に迫った活動内容を考えることができるようにする。 ・考えた活動内容が実現可能かどうか。実現するためにはどうすればよいかを問うことで経験や体験を基にして考えるきっかけをつくる。 ・自分の願いや思いだけでなく、Anjanaさんの思いに合ったものなのかを問うことで、願いを実現するために最適なプロジェクトを決め出していく。
３　仲間の意見を聞きながら、自分の考えを再構築し、納得解を生み出していく。 〇仲間の意見を聞いてどう思ったかな。 【お店】 ・たしかにお店にたくさんお客さんが来るようになると、Anjanaさんはうれしいと思うけれど、私たちにできることはあるのかな。 【言葉】 ・日本語が難しいと言っていたけれど、Anjanaさんは上手に日本語を話していたし、困っているようには見えなかった。 【つながり】 ・たくさん質問をして、Anjanaさんのことは知れたけど、僕たちのことは伝えられていない。もっとAnjanaさんと話したいな。	**目標に迫った姿をどのように見届けるか** 「Anjanaさんを笑顔にする」ために、自分の意見を伝えたり仲間の意見を聞いたりしながら自分なりの納得解を見いだしている。 （問題解決力） ・発言の様子やワークシートの記述から見届ける。
４　本時の学びの振り返りをワークシートに書く。 ・私ははじめ、Anjanaさんはカレー屋さんをしているから、お店に来るお客さんが増えればAnjanaさんも笑顔になると思っていた。でも、Anjanaさんと対話しているときの顔を思い浮かべたり、仲間の話を聞いたりして、もっとAnjanaさんのことを知ってAnjanaさんを笑顔にするために自分に何ができるか考えたい。	

第６学年　学びのカテゴリー「まちづくり」

第６学年は、昨年度第５学年の「暮らし」を探究することを通して、一人一人の暮らし方が違えば、幸せの在り方が違うこと（多様性）に気付き、一人一人の思いや考えを大切にして暮らしていくこと（共感）を大切にして学んできた。そして今年度は、価値観の異なる一人一人の暮らしの集合体である「まち」に学びのフィールドを広げた「まちづくり」を探究領域としている。「まち」にある「人・もの・こと」をみつめ、「まち」の問題を発見し、その問題を解決するために、自分で課題を立て、自分に何ができるかを考え判断し、解決に向けて実行していく探究学習である。その探究では、「まち」という System を考えていく中でも、いつも頭の中には「あそこに住んでいる〇〇さん」という personal の視点（第５学年で学んできたこと）を大切にして、まちづくりを行う中で、自分の生き方をみつめていくことを目指していきたい。

「まちをつくる」という単元では、第１単元「まちをみつめる」を通して、自分たちの「まち」に関わる知的な興味・関心を大切にしながら、繰り返し「まち」へフィールドワークにでかけた。次第に学級ごとで知的な興味・関心の方向は変わっていき、１組は「河原町」、２組は「加納のまち」、３組は「柳ケ瀬商店街」と探究の拠点ができた。そこで出会った「人・もの・こと」に対して、関わる時間が多くなっていくうちに心が通い合い、他人ごとではなくなってきた。だからこそ、見えてきた「まち」の問題を児童は切実に感じた。そして第２単元では、「自分たちにできることはないだろうか」と「自分ごと」になって、課題を設定してまちづくりのプロジェクトを結成し、活動内容を企画。いよいよ本格的に「まちづくり」が始まった。しかし簡単にことは進まない。児童は、探究を通して起こるエラーやジレンマを乗り越えて、よりよいまちを目指し歩み続ける。

中村みな子
干場康平
青木笙悟

６年２組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：まちづくり（全105時間）

第６学年の目標	（１）問題解決力に関わって	まちの「人・もの・こと」をみつめ、問題を発見し、その問題を解決するために、自分で課題を立て、自分にできることは何かを考え判断し、解決に向けて実行することができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	まちの「人・もの・こと」をみつめていく中で、まちづくりの内容や目的に応じて、他者とつながり、自分の考えを発信したり、他者の考えに共感したりしながら、互いに納得できる考えを生み出し、活動につなげることができるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	まちで発見した問題を「自分ごと」のように感じ、少しでもそのまちの「人・もの・こと」をよりよくしたいと心から願い、実際に動き出そうとする態度を養う。
カテゴリー設定の理由	第５学年では、学びのカテゴリーを「暮らし」として、ある人の暮らしを見つめる中で見えてきた問題の解決を通して、一人一人の暮らし方が違えば、生きがいも違うことを学んできた。その学習経験が、第６学年の「まちづくり」において、まちにある問題を解決していくときに、そのまちに住む〇〇さんのことを頭に思い浮かべながら、切実な思いでまちづくりを行う上で、本質を極める探究の実現につながると考える。	
学びの基盤となる道徳的諸価値	自主、自律・克己と強い意志・真理の探究・親切、思いやり・友情、信頼・相互理解、寛容・社会参画・家族愛、家庭生活の充実・集団生活の充実・郷土愛・よりよく生きる喜び	
学びを構成する要素	まち　寄り添う　生活　暮らし　家族　仲間　幸せ　愛　環境　自然　安全　健康　生命　歴史　人　つながり　ふれあい　喜び　笑顔　感謝　自分らしさ　個性　夢　決意　創造	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	まちをみつめる～まちの「人・もの・こと」を知る～（52時間）						まちをつくる～まちの「人・もの・こと」がよりよくなるために創造する～（53時間）					
主な学習活動	〇「まち」とは何かをイメージし、知的な興味・関心を広げる。（インタビュー） 〇「まち」へ出かけて、「まち」にある「人・もの・こと」と出会う。（フィールドワーク） 〇「まち」にある特定の「人・もの・こと」に興味をもち、「繰り返し「まち」へと出かけていき、対話する。（フィールドワーク） 〇「まち」にある特定の「人・もの・こと」と継続的に関わる中で、まちの問題（まちに住む方のつながり・防災意識）を発見する。（フィールドワーク・考え、議論） 〇「宿泊研修」では、奈良や京都のまちにある「人・もの・こと」に関わる問題と立ち向かってまちづくりを行う人と出会い対話する中で、問題を解決するには、「自分が市民として、同じ思いをもつ人々が集まり、知り合い、そして自らが手入れするプロセスが大切であること」を学び、まちづくりをしていくきっかけとなる。そして「市民としての自分」が鍵を握っていることを知る。（地域の方と協働） 〇「宿泊研修」で学んだことを振り返り、「まち」にある問題を解決するために、まちづくりプロジェクトを行うことを立ち上げる。（地域の方と協働）				自分たちのまちづくりプロジェクトに関わる情報を収集したり、プロジェクトの具体的な内容を提案できるように準備したりする	〇まちづくりプロジェクト行う中で、もっとまちの人との距離を縮めたいと願い、繰り返しまちまちにいる方と対話をしたり、まちで行われている活動に参加したりする。（フィールドワーク） 〇自分たちと同じ問題に対して「まちづくり」を行なっている地域の方と出会いつながる。（フィールドワーク） 〇まちづくりを行う地域の方と、自分たちの思いや考えと、それに関わるプロジェクトについて協働的に考え、議論していく。（フィールドワーク・考え、議論）		〇まちづくりプロジェクト活動の実施に向けて、準備を行う。（フィールドワーク・考え、議論） 〇まちづくりプロジェクトを実施したときに、本当に「まち」にある問題は解決できるのかを地域人材やそこに住む方々、利用する方々と対話する。（フィールドワーク・考え、議論） 〇まちづくりプロジェクト活動を実行している中での成果と課題を明らかにして、プロジェクト活動の内容・方法を改善していく。または、あらためて活動の目的をまちの人にとってよい方向で見直す。（考え、議論） 〇プロジェクト活動を実行していく。（フィールドワーク） 〇プロジェクト活動を振り返り、まちづくりを通して、何を学んだのかをまとめていく。 〇まちづくりを通して学んできたことを自分の言葉で、これから「まちづくり」に関わる地域の方へ「私たちが学んだまちづくりについて」発信していくことで思いや願いを広げていく。（表現）					
想定される ●ジレンマ ■エラー 【道徳的諸価値】	■「まち」の問題に対して、自分たちにできることは全くない気がする。 ●どうして、この「まち」の人は、この問題をそのままにしているのだろうか。モヤモヤする。 【真理の探究・親切、思いやり・相互理解、寛容・社会参画・郷土愛】					■まだまだ自分たちは、まちの「人・もの・こと」の状況を知らない。 【真理の探究・相互理解、寛容・社会参画・郷土愛】		■自分たちが行おうとしているプロジェクト活動の内容は、まちの人への効果はないのかもしれない。どうすることで、まちの人にとって効果がある活動内容になるのだろうか。 ●（プロジェクトの実行中）自分たちは正しいと思っていたプロジェクト活動の内容が、全てのまちの人に応じていないという事実に対して、正しいことだから続けるのか、全員に合わないからやめるべきのか、それとも…どうしたらよいのだろうか。 【真理の探究・相互理解、寛容・社会参画・郷土愛・よりよく生きる喜び】					
人材活用施設	・加納東地区自治会連合会　会長　川田 政美 ・岐阜大学地域科学部　　富樫 幸一 ・岐阜大学社会システム経営学環　高木 朗義 ・加納東公民館の職員の方々 ・加納東地区に住んでいる方々					・加納東地区自治会連合会 会長 川田 政美 ・岐阜大学地域科学部　富樫 幸一 ・岐阜大学社会システム経営学環 高木 朗義 ・加納東公民館の職員の方々 ・加納東地区に住んでいる方々		・加納東地区自治会連合会　会長　川田 政美 ・岐阜大学地域科学部　　富樫 幸一 ・岐阜大学社会システム経営学環　高木 朗義 ・加納東公民館の職員の方々 ・加納東地区に住んでいる方々				
教科等との関連	・国語：聞いて、考えを深めよう ・社会：日本国憲法　国の政治　願いを実現する政治					・算数：棒グラフと折れ線グラフ　円グラフと帯グラフ　データの活用		・国語：調べた情報の使い方 ・社会：わたしたちの生活と政治 ・算数：データの活用 ・理科：電気と私たちのくらし てこのしくみとはたらき				

６年２組　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 まちをつくる ～まちの「人・もの・こと」がよりよくなるために創造する～ (53)	①加納のまちの「人・もの・こと」をみつめ、まちの問題を発見できるようにする。 ②問題を解決するために、自分で課題を立て、自分にできることは何かを考え判断し、解決に向けて実行することができるようにする。	①加納のまちの「人・もの・こと」をみつめていく中で、まちづくりの内容や目的に応じて、他者とつながることができるようにする。 ②つながった他者に自分の考えを発信したり、他者の考えに共感したりしながら、互いに納得できる考えを生み出し、活動につなげることができるようにする。	①加納のまちで発見した問題を「自分ごと」のように感じられる態度を養う。 ②少しでも加納のまちの「人・もの・こと」をよりよくしたいと心から願い、実際に動き出そうとする態度を養う。

活動の計画	○「つながり」と「防災」の二つの視点で「全力まちづくりプロジェクト」の具体的な活動内容を企画する。(問題②) ○まちにフィールドワークへ行き調べたり、確認したりしてプロジェクトの準備をする。(貢献①) (15)	○「全力まちづくりプロジェクト」の活動内容を再検討するために、まちに住む方と対話する。(関係①) ○プロジェクト活動の準備をしていく中で、起こったジレンマやエラーを共有し、考え、議論する。(関係②) ○プロジェクト活動の内容に応じたフィールドにて、目的をもって準備を行う。(問題②) (19)	○「全力まちづくりプロジェクト」を実行する。(問題②) ○プロジェクト活動中、まちに住む方の意識）を調査する。(貢献②) ○「全力まちづくりプロジェクト」の活動の成果や課題を振り返る。(問題②) （７）	○「全力まちづくりプロジェクト」の活動内容を振り返ったとき、今後のまちの様子が気になり、まちに住む方に「このまちの人・もの・こと」の素晴らしさについての思いや考えを発信していきたいと願い、最後のプロジェクト活動を企画し、準備する。(問題②) ○まちに住む方に自分たちのまちへの思いや考えを発信する。(貢献②) (12)
加除修正欄				
想定される姿	・「つながり」を生み出すためにまちの人が一緒に活動できるイベントをしたり、「減災」につながるように、このまちや人にあった防災マップを作ったりしたい。	・「つながり」を生み出すには、一度の活動ではなくて、継続的なものにしていくことが必要だ。 ・「減災」を目指したときに、高齢者や外国人の方、障がいのある方も含めて、その人に合った防災マップ作りや、共助の方法を考えていく必要がある。	・プロジェクト活動を実行するために準備をしているが、支えてくれる方が見えてすごく嬉しい。そして、それはまちづくりで大事な「まちに住んでいる人が、自分ごとでまちづくりをしているまちがよいまち」につながっていると思う。	・私にとってこのまちは、とても大切で大事なまちになった。そして、このまちの人やこと（行事)、もの全てがとても魅力的で大好きだ。 ・まちの魅力と感謝の思いをまちの人に伝えたい。
実際の姿				

●ジレンマ ■エラー	■今の防災マップやつながるイベントでは、「その時だけ」になってしまい、まちの人の日常につながらない…。 ●一人一人が災害に備えたり、まちに住む人とつながったりすることは大事なはずなのに、高齢者や外国人、障がいがある方の中には、防災をあきらめたり、つながりに必要性を感じない方もいる。それは、それぞれに事情があってのことだと理解できるが…どうしよう。

６年２組　本時案　（６年２組教室）

目標

まちの防災イベントを企画し準備を行う中で、「つながり」や「防災」に必要性を感じていない方がいるという事実を知り、ここまでに出会った人から学んだことや自分が経験した事実を基に今後の活動をどうすべきかを考え、議論することを通して、人それぞれに見えない思い（価値観）があることに気付き、その思い（価値観）を大切に一人一人に応じた長期的な活動も行っていきたいと活動内容を考えようとする。（貢献する人間性）

本時（23/53）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　これまでの歩みを振り返り、共有する。 〇現在の「全力まちづくりプロジェクト」の問題点について確認する。 ・自分たちは、まちの人にとって「つながり」や「防災」は必要だと思って活動をしてきているけれど、まちの人の中には自分たちと価値観が違って、「つながりたくない」と思っている方がいる。「つながりたくない」と思っている人は、イベントに来ない。 ・まちの人の思いをダイレクトに聞いた調査でも、「自分に関わらないでほしい」と言って避けるようにしていた方もいた。外国人の〇〇さんは「どうしてつながらないといけないの」と話していたし、プロジェクトメンバーの入学さん（地域包括センター南部）は、市の職員やまちづくりを行っている人たちもみんなこの問題を解決できないでいると言っている。もうどうしようもない。 ・でも私は、みんなが「つながり」と「防災」を大切にできるまちをつくっていきたいからあきらめたくない。 「つながりたくない」と思うまちの人とどのように向き合うべきなのか、今後の「全力まちづくりプロジェクト」の活動について考えよう。 **２　「全力まちづくりプロジェクト」の今後について考え、議論する。** ・「つながりたくない」と思ってみえる方は、それぞれに抱えている思いや悩みがあるのじゃないかなあ。入学さんから聞いたのだけれど、その思いや悩みは様々あって例えば①コミュニケーションがうまく取れない方、②障がいがあることを受け入れることができずに、自分の弱い部分を安心して人に見せられない人がいると聞いた。「つながりたくない」人は、自分勝手ではないと思う。 ・人の価値観はその人の生きてきた経験でつくられたものだから、きっと理由があるはず。そのことは、知ったらいけないし、分かることは難しいかもしれないけれど、それでも分かりたいと思う気持ちをあきらめたら、その人のことを本当の意味で助けることにはならないのではないかなあ。 ・プロジェクトメンバーの堀さん（加納長刀町自治会長）が、顔見知りになること、あいさつ交わすことの繰り返しがつながりになっていくのかもしれないと話していた。もっとまちの人が長期的に関わり合い、顔見知りになったり、あいさつを交わしたりすることができる活動を行うこともしていきたい。自分たちと価値観が異なっていても、その人を大切にし続けることで、少しずつでも分かり合えてつながることになるかもしれない。 **３　今後の「全力まちづくりプロジェクト」の活動内容について、個で考えたり協働で考えたりする。** ※自ら他者とつながって協議したり、自分の席でワークシートに書きまとめたりして、今後のプロジェクトの活動内容を考える。 **４　本時の学びの振り返りをワークシートに書く。** ・人にはそれぞれ思い（価値観）があり、その思い（価値観）を分かろうとあきらめずに長い時間をかけて少しずつ関わっていくことがとても大切だということが分かった。次のプロジェクト会議では、少しずつつながるために毎週あいさつウォーキングをしてみたいと川田さん（加納東地区連合会長）に提案しよう。	〇考え、議論する目的や内容を明確にするために、児童それぞれの思いを出し合い、それを児童たち自身で集約し整理するようにする。（本時教師が、「それぞれの共通点って何？」と必要に応じて切り返し、児童が整理することができるようにする） 〇自分の目で確かめた事実を基に、自分の思いや考えを伝え合えるように、根拠や理由がない場合は「どうしてそう考えたのですか？」と切り返して、何を基にしたのかを明らかにする。 〇本時考え、議論した中での児童が出した共通了解を板書に位置付けて共有することで、それが振り返りの視点となり、次への活動に繋げることができるようにする。 思い（価値観）を大切に・長期的な活動 **目標に迫った姿をどのように見届けるか** ここまでに出会った人から学んだことや自分が経験した事実を基に、人それぞれに見えない思い（価値観）があることに気付き、その思い（価値観）を大切に一人一人に応じた長期的な活動も行っていきたいと活動内容を考えようとしている。（貢献する人間性） ・発言の様子やワークシートの記述から見届ける。

６年３組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：まちづくり（全105時間）

第６学年の目標	（１）問題解決力に関わって	まちの「人・こと・もの」をみつめ、問題を発見し、その問題を解決するために、自分で課題を立て、自分にできることは何かを考え判断し、解決に向けて実行することができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	まちの「人・こと・もの」をみつめていく中で、まちづくりの内容や目的に応じて、他者とつながり、自分の考えを発信したり、他者の考えに共感したりしながら、互いに納得できる考えを生み出し、活動につなげることができるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	まちで発見した問題を「自分ごと」のように感じ、少しでもそのまちの「人・こと・もの」をよりよくしたいと心から願い、実際に動き出そうとする態度を養う。
カテゴリー設定の理由	第５学年では、学びのカテゴリーを「暮らし」として、ある人の暮らしを見つめる中で見えてきた問題の解決を通して、一人一人の暮らし方が違えば、生きがいも違うことを学んできた。その学習経験が、第６学年の「まちづくり」において、まちにある問題を解決していくときに、そのまちに住む〇〇さんのことを頭に思い浮かべながら、切実な思いでまちづくりを行うという本質を極める探究の実現につながると考える。	
学びの基盤となる道徳的諸価値	自主、自律・克己と強い意志・真理の探究・親切、思いやり・友情、信頼・相互理解、寛容・社会参画・家族愛、家庭生活の充実・集団生活の充実・郷土愛・よりよく生きる喜び	
学びを構成する要素	まち　寄り添う　生活　暮らし　家族　仲間　幸せ　愛　環境　自然　安全　健康　生命　歴史　人　つながり　ふれあい　喜び　笑顔　感謝　自分らしさ　個性　夢　決意　創造	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	まちをみつめる～まちの「人・こと・もの」を知る～（52時間）						まちをつくる～まちの「人・もの・こと」がよりよくなるために創造する～（53時間）					
主な学習活動	〇「まち」とは何かをイメージし、知的な興味・関心を広げる。（話合い・授業参観でのインタビュー） 〇「まち」へ出かけ「まち」にある「人・こと・もの」と出会う。（フィールドワーク） 〇「まち」に繰り返し、出かけていく中で、「まち」にある特定の「人・こと・もの」に興味をもち問い続ける。（フィールドワーク） 〇「まち」にある特定の「人・こと・もの」と継続的に関わる中で、まちの問題を発見する。（フィールドワーク・考え、議論） 〇「宿泊研修」では、奈良や京都のまちにある「人・もの・こと」に関わる問題と立ち向かってまちづくりを行う人と出会い対話する中で、問題を解決するには、「自分が市民として、同じ思いをもつ人々が集まり、知り合い、そして自らが手入れするプロセスが大切であること」を学び、まちづくりをしていくきっかけとなる。そして「市民としての自分」が鍵を握っていることを知る。（地域人材） 〇「宿泊研修」で学んだことを振り返り、「まち」にある問題を解決するために、市民としてプロジェクト活動を行うことを計画する。				柳ヶ瀬商店街に関わる情報を収集する	〇自分たちと同じ問題に対して「まちづくり」を行なっている地域の方と出会いつながる。（フィールドワーク） 〇まちづくりを行う地域の方と、自分たちの思いや考えと、それに関わるプロジェクトについて協働的に考え、議論していく。（フィールドワーク・考え、議論）		〇実際に「まち」にある問題は解決できるのかを地域人材やそこに住む方々、利用する方々と対話する。（フィールドワーク・考え、議論） 〇プロジェクト活動の実施に向けて、準備を行う。（フィールドワーク・考え、議論） 〇プロジェクト活動の成果と課題を明らかにして、プロジェクト活動の内容・方法を改善していく。または、あらためて活動の目的を見直す。（考え、議論） 〇「まちづくり」プロジェクト活動を実行していく。（フィールドワーク） 〇プロジェクト活動を振り返り、「まちづくり」を通して、何を学んだのかをまとめていく。 〇「まちづくり」を通して学んできたことを自分の言葉で、次に「まちづくり」を行う５年生や、これから「まちづくり」に関わっていってほしい地域の方へ「私たちが学んだまちづくりについて」発信していく。				
想定される ●ジレンマ ■エラー 【道徳的諸価値】	■「まち」の問題は、自分たちのような子供が何ができることなのだろうか。全く何もできない気がする。 ●どうして、この「まち」の人や、この「まち」を利用する人は、この問題をそのままにしているのだろうか。モヤモヤする。 【真理の探究・友情、信頼・相互理解、寛容・集団生活の充実・郷土愛など】					■自分のしたいことと、「まち」が望んでいることが違う。 ●「まちづくり」で自分は〇〇したい。でも、そこに住む〇〇さんは～した方が良いと言っている。 【真理の探究・相互理解、寛容・社会参画・集団生活の充実など】		■私たちが行うプロジェクトは、「まちづくり」としてみたときに、〇〇の部分が貢献できていない。 ●プロジェクトを実行するとき、〇〇をすべきか、それとも□□なのか、どちらかを優先すべきなのか決めきれない。どちらも思いや願いがある。どのようにしていくことがベストなのだろうか。 【克己と強い意志・真理の探究・相互理解、寛容・社会参画・集団生活の充実・郷土愛・よりよく生きる喜びなど】				
人材活用施設	・岐阜柳ヶ瀬商店街振興組合連合会　水野 琢朗 ・柳ヶ瀬を楽しくする株式会社　福富　梢					・岐阜柳ヶ瀬商店街振興組合連合会　水野 琢朗 ・柳ヶ瀬を楽しくする株式会社　福富　梢		・岐阜柳ヶ瀬商店街振興組合連合会　水野 琢朗 ・柳ヶ瀬を楽しくする株式会社　福富　梢				
教科等との関連	・国語：聞いて、考えを深めよう　話の内容を捉えて ・社会：日本国憲法　国の政治　願いを実現する政治 ・算数：棒グラフと折れ線グラフ　円グラフと帯グラフ　データの活用							・国語：調べた情報の使い方 ・社会：わたしたちの生活と政治 ・算数：データの活用 ・理科：電気と私たちのくらし　てこのしくみとはたらき				

６年３組　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 まちをつくる ～まちの「人・もの・こと」がよりよくなるために創造する～ (53)	①繰り返しまちに関わる中で、問題点を発見し、解決するために課題を立て、自分にできることを考え判断し、解決に向けて実行することができるようにする。	①よりよいまちづくりをするために、進んで他者とつながり、自分の考えを発信したり、他者の考えに共感したりすることができるようにする。 ②様々な立場の人の思いを尊重しながら、互いに納得できる考えを生み出し、活動につなげることができるようにする。	①まちで発見した問題を「自分ごと」のように感じ、少しでもそのまちの「人・こと・もの」をよりよくしたいと心から願い、実際に動き出そうとする態度を養う。

活動の計画	○まちに繰り返し訪れ、柳ヶ瀬にいる人の思いを聞くことを通して、自分たちがしたいまちづくりについて見つめ直す。(貢献①) ○まちづくりに対する自分の願いと、まちの人の望むことを比べながら聞く。(関係①) (８)	○人によって願いに違いがあることに気付き、どうすればよいか話し合ってまちづくりのテーマを改める。(関係①) ○プロジェクトを企画し、活動の実施に向けて準備を行う。(貢献①) (18)	○プロジェクトを実行し、まちの人に感想を聞く。(関係①) ○プロジェクトを通して気付いた問題点について話し合ったり、まちの人の思いを聞きに行ったりする。(問題①) ○プロジェクト活動の内容・方法を改善しながら、継続していく。(貢献①) (21)	○プロジェクト活動を振り返り、自分たちが見つけた柳ヶ瀬の魅力や、活動を通して学んだことを５年生や地域の方に発信する。(貢献①) (６)
加除修正欄	○柳ヶ瀬中央市場の活動停止を受け、今の自分達が柳ヶ瀬のためにできることは何かを考えた。			
想定される姿	・柳ヶ瀬の建物を見るよりも、そこにいる人に聞いた方が、もっと柳ヶ瀬について知ることができると思う。 ・商店街の○○さんは、もっと若いお客さんに来てほしいと言っていたよ。	・大通りに店を構える○○さんは、新しいことを取り入れていきたいと思っているけど、細い通りの○○さんは、今のままでいいと話していたよ。 ・柳ヶ瀬商店街で新しく始められた取組のお手伝いをしよう。 ・イベントのお手伝いをしよう。	・○○さんは手伝ってくれたことに喜んでいたよ。 ・イベントがある日は人が集まるけど、そうでない日には人が来ない。 ・子どもが楽しめる要素が少ないのかな。	・柳ヶ瀬はシャッター街のイメージが強くて、活気がないイメージだったけど、まちを知るうちに、柳ヶ瀬が変化していることが分かった。まちの人はそれぞれが願いをもって活動していることを学んだ。
実際の姿	・柳ヶ瀬中央市場ができて、にぎわっていたが、三日でなくなってしまい、また静かになってしまった。しかし、今ある店にも良さがあるんだから、宣伝をしたい。			
●ジレンマ ■エラー	●自分たちのしたいこととまちの人が願うことが違う。 ■自分たちはイベントをすることで人が集まると思っていたけど、集まるのはその日だけで、それ以外の日は少ないまま。 ■柳ヶ瀬はたしかに良さがあるんだけど、それがまちの外にいる人には伝わらない。 ●まちにいる人の願いを大切にしたいが、人によって望むことが違う。どうしたらいいかな？			

６年３組　本時案　（６年３組教室）

目標

まちの人に聞いてきた柳ヶ瀬に対する思いを伝え合い、今後の自分たちの活動を考えることを通して、様々な立場の人の考えを受けてまちづくりをしたいという思いを基に、その違いにどう向き合うかを考えることができる。（関係構築力）

本時（12/53）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　それぞれが聞いてきたまちにいる人の願いを共有する。 柳ケ瀬の人たちの思いをもとに、これからの活動を考えよう。 〇まちの人の思いを伝え合いましょう。 柳ケ瀬を活性化させたいという思い ←― 迷い ―→ 現状のままでいたいという思い ・柳ケ瀬をもっと若い世代でにぎわうまちにしたい。そのためには、今ある店が力を合わせることが大切。 ・柳ケ瀬商店街をなくすわけにはいかない。 ・高島屋が閉業してしまって、人通りが少なくなってしまった。このままではいけないとは思うが、どうしたらよいかわからない。 ・自分の店はこのままでいい。宣伝をして、自分の店にたくさん人が来てほしいとは思わない。 ・私たちは「若い世代でにぎわうまちになるといい」と思っていたけど、そう思っていない人もいるのは、どうしてだろう。 **２　まちの人の思いが異なる要因を知り、自分たちの活動を考える。** 〇「現状のままでいたい」と考えるお店は、もう長年店をやってきて、ご年配の夫婦が２人で店をやっているそうです。今よりも人が増えても、お客さんに満足してもらえるようなサービスができないから、常連客だけでいいと話していました。どうしたらいいでしょうか？ ・宣伝してほしいと思っている店はあるのだから、そういう店だけを宣伝していけばいいと思う。　→ 宣伝活動をしたい。 ・宣伝にこだわらなくてもいいと思う。そういうお店があるのに、宣伝活動を続けてしまっていいのかな。全てのまちの人の思いを大切にしたいなら、他の活動を考えた方がいいんじゃない？　→ 活動を修正したい。 ・そもそもまちの人の思いはばらばらなんだから、全てを大切にすることはできないと思う。 ・まちの人の思いは大切だけど、自分たちの願いは「若い世代でにぎわうまちにしたい」ということだから、そこは変えちゃいけないと思う。それならば、やっぱり今は宣伝をした方がいい。 ・まだまちの人の思いを全て聞けてはいないから、もっと柳ケ瀬で思いを聞いた方がいいと思う。 → もっと町の人との関わりを大切にしてから考えたい。 **３　本時の学びの振り返りをワークシートに書く。** ・私は、人がたくさん来てにぎわうことが柳ケ瀬商店街にとって良いことだと思っていたけれど、そう思っていない人がいることが分かった。全ての人の思いを実現することはできないけれど、より多くの人によいと思ってもらえるようなまちづくりがしたい。なぜなら、このままでは柳ケ瀬商店街から人がどんどん少なくなってしまうし、それではいけないと思う。だから、宣伝活動をしたいと思う。	〇本時までに「よりよいまちづくりをするためには、もっとまちの人の願いを聞かなくてはいけない」という意識から、実際に柳ヶ瀬に行き、自分が関心をもった店の人に「柳ヶ瀬がどんなまちになることを願っているか」を聞いておく。それをもとにして、自分の考えを生み出す。 〇まちの人の思いをふまえて、自分たちの活動を考えるときに、特定の立場に偏った考え方ではなく、様々な立場の人の願いに寄り添えているかを見届けるために「他の立場のまちの人の願いについてはどう思う？」と問う。必要に応じて、自分たちの願いにも目を向けられるように問いかける。 〇今後の活動を決めるときには、これまでに出会った人が話したことや自分たちが経験したことを思い返して、考えを述べられるように教室掲示にこれまでに出会った人や思いを位置付ける。 **目標に迫った姿をどのように見届けるか** 様々な立場の人の考えを受けてまちづくりをしたいという思いを基に、まちづくりに対する自分の願いをもっている。 （関係構築力） ・発言の様子やワークシートの記述から見届ける。

第７学年　学びのカテゴリー「社会」

第７学年は、昨年度までにまちづくりに関わる探究を通して、まちがよりよくなるために自分ができることは何かを考え行動してきた。そのことを通して、まちに住む人の価値観は様々であり、人々の生き方は多様であることを知り、そこへの興味・関心をもった。だからこそ、第７学年「社会」では、多様な人々と向き合い、よりよい社会になるように「自主的に考え行動すること」「社会参画の意識と社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努めること」など、本校第７学年で願う姿に迫りながら、自己実現に向かう資質・能力を育んでいる。

「社会を創っている人とは」の単元では、若狭研修での漁師の方との対話を通して、「漁師の方たちは自分の仕事に誇りをもっていること」「様々な願いをもちながら働いていること」などを知った。それとともに、「社会の中で働いている人たちはどのような願いをもって働いているのだろうか」という疑問や、「『社会とは何か？』という大きな問いを考えていくために、様々な職種の方の気持ちを聞きたい。」という思いが湧き上がってきた。

「社会に参画してみよう」の単元では、様々な方と共に社会に参画することで、１組は「働くとは何か」、２組は「人の役に立つとはどういうことか」、３組は「協働とは何か」という問いについて考えていく。そのために、職場体験でお世話になった事業所の方々や岐阜市役所鉄道高架推進課の方々からお話を伺ったり、社会参画における意見交流などを継続的に行ったりして、問いについて探究を続けている。１組は、職場体験を通して働く上で大切にしていることについて探究しており、２組は、岐阜市役所鉄道高架推進課の方とともに「駅とまちを光でつなぐ杜のイルミネーション」の実施に向けて準備を行っている。

今西　賀寿真
平尾　龍平
江口　伸一郎
岡本　恭子

７年１組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：社会（全85時間）

第７学年の目標	（１）問題解決力に関わって	問題解決に向けて、具体的な根拠を元に、他者の考えや価値観を尊重しながら、客観的な事実を踏まえて自分の考えを書くこと話すことができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	実社会で活動する人や仲間の考えを聞いたり、自分の考えを筋道立てて伝えたりする中で、対立やジレンマに対して、互いに納得できる考えを創り出したり、双方の考えを取り入れたりできるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	自分や身近な社会のよさに気付き、よりよい社会にするために努力する人々に敬意をもちながら、自分にできることを、仲間や社会に生きる人々と共に行動しようとする態度を養う。
カテゴリー設定の理由	第６学年では、まちがよりよくなるために自分ができることは何かを考え行動してきた。そのことを通して、まちに住む人の価値観は様々あり、人々は多様であることを知り、そこへの興味・関心をもった。だからこそ、第７学年では、多様な人々と向き合い、よりよい社会になるように自分なりに考え行動することでリアルな社会を知ることができると考えた。	
学びの基盤となる道徳的諸価値	自主、自律、自由と責任・向上心、個性の伸長・真理の追究、創造・思いやり、感謝・相互理解、寛容・遵法精神、公徳心・公正、公平、社会正義・勤労・国際理解、国際貢献・よりよく生きる喜び	
学びを構成する要素	共感　多様性　（雇用　勤労　障がい　仲間　世代　福祉　幼児　国際理解　伝統文化　違い　偏見　ユニバーサルデザイン　食品ロス　動物愛護　よりよいまちづくり）	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	社会をよりよくしようとする人たちの思いを知る（30時間）					社会をよりよくするために自分たちにできることは何か（40時間）				よりよい社会に生きるために（15時間）		
主な学習活動	○探究テーマを考える。 ○若狭研修を通して、自分たちと「食」でつながっている漁師という仕事について知る。 ○漁師さんの思いを社会は実現できているのかを考える。 ○「社会」という捉えについて、自分たちと社会人との違いを知る。 ○「働く」とは何かを探究する。 ○「働く」意味を知るために、実際に社会の中で働いている保護者の方に話を聞く。 ○働く上で大切にされている思いを知る。				「働く」を探究するために、働く上で大切にしていることを調査する。	○たくさんの大人に話を聞くことで、働くことは社会をよりよくすることにつながっていることを知る。 ○自分たちの生活している社会である学校をよりよくするためには、どのような問題があるのかを考え、附属学校に関わる大人にも問題を聞く。 ○「学校」という社会をよりよくするために、自分たちにできることは何かを考える。 ○実際に職場体験学習を通して、その人たちが見ている社会や、その社会をよりよくするためにどのように努力されているのかを体験する。 ○附属学校の登下校時のマナーを守れるようにするための活動を行う。 ○自分たちの活動が意味あるものであったのかを調査する。 ○学校以外の社会においても、自分たちがよりよくするための何か活動ができないかを、職場体験学習の経験をもとに考え実行する。				○学びをどのようにまとめるか計画を立てる。 ○今後も自分たちにできそうな活動を考える。 ○１年間の活動を振り返る。 ○今年度の学びを振り返り、キャリアパスポートを記入する。		
想定される ●ジレンマ ■エラー 【道徳的諸価値】	●働く人は、それぞれがよりよい社会を願って大切にされている思いがあるが、それが実現することは難しいのに、活動し続けることに意味があるのか分からない。 ■社会について「働く」を軸に考えてきたが、社会とは何かがなかなか見えてこない。 【自主、自律、自由と責任・思いやり、感謝・遵法精神、公徳心・公正、公平、社会正義・勤労など】					■附属学校という社会をよりよくしたいと思うが、具体的にどのような方法で行えば効果的であるかが分からない。 ■自分たちが考えた活動で、本当に社会がよりよくなっているか分からない。 ●自分たちも、この活動をする思いがあるし、それを一緒に活動してくれない人がいることもよく分かるが、社会がよりよくなっていくためにこういった違いがあり続けていいのか分からない。 【向上心、個性の伸長・相互理解、寛容・遵法精神、公徳心・公正、公平、社会正義・勤労・よりよく生きる喜びなど】						
人材活用施設	・若狭漁港 ・Bリーグ長崎ヴェルカアスレチックトレーナー ・株式会社松福					・美濃染元　福田屋 ・岐建　株式会社 ・セントラルメンテナンス ・岐阜中央郵便局 ・その他職場体験先の事業所						
教科等との関連	・国語：情報を的確に聞き取る　情報を整理して書こう　聞き上手になろう ・社会：世界の人々の生活と環境　中世の日本 ・保健体育：スポーツの多様性 ・家庭科：私たちの衣生活 ・外国語：Friends in New Zealand					・国語：情報を的確に聞き取る　情報を整理して書こう　聞き上手になろう ・社会：世界の諸地域　中世の日本 ・保健体育：心身の発達と心の健康 ・家庭科：私たちの住生活 ・外国語：Foreign Artists in Japan　Think Globally, Act Locally				・国語：情報を的確に聞き取る　情報を整理して書こう　聞き上手になろう ・社会：世界の諸地域　近世の日本 ・保健体育：心身の発達と心の健康 ・家庭科：私たちの住生活　私たちの成長と家族・地域 ・外国語：This year's Memories		

７年１組　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 社会をよりよくするために自分たちにできることは何か （40）	①社会をよりよくするために、自分たちの身の回りの社会である学校で起こりうる問題を発見できるようにする。 ②問題解決のために自分たちに何ができそうかを考えることができるようにする。	①社会をよりよくするために、他者の思いや考えを肯定的に受け止め、そこから自分の考えを生み出すことができるようにする。 ②互いに納得できる考えを生み出すことができるようにする。	①中学生の自分たちでもできることは何なのかを本気で考え、実際に動き出そうとする態度を養う。

活動の計画	○社会を少しでもよくしようと考え行動している人の思いを実感するための職場体験学習を計画する。（問題①） ○自分たちが生活している附属学校の問題は何かを考えるために、附属学校に関わる大人の考えを聞く。（関係①） ○附属学校における問題の「登下校のマナー」について自分たちにできることはないか考える。（関係②） （10）	○職場体験学習を通して、誰もが「その人が見ている社会が少しでも良くなるように自分にできることは何か」を考え行動していることを知り、中学生の自分たちにできることを考える。（問題①） ○附属学校における問題の「登下校のマナー」を改善するための活動計画を考える。（関係②） （10）	○「登下校のマナー」を改善するための活動を実際に行う。（貢献①） ○活動を行ってみての感想や意見を集め、自分たちが活動してきたことで得られたことを考える。（関係①） ○自分たちの活動に参加してくれなかった人たちの思いに触れ、一緒に参加できるような新たな活動を生み出す（関係②） （10）	○学校の中以外にも、自分たちが社会をよりよくするためにできることはないかを考える。（問題②） ○職場体験学習を通して見つけた問題を振り返り、自分たちにできることはないかを考える。（貢献①） ○活動計画を考える。（関係②） （10）
加除修正欄	○附属学校には自分たちで改善できる問題と、そうでない問題があることを知る。（問題②）	○職場体験学習先で学んだ、問題解決の方法をもとに、附属学校の問題を解決するための方法を考える、（関係①）	○「登下校のマナー」だけでなく、「飼育動物の扱い」「感じのよい附属生」「あいさつ」などの附属学校の問題を解決しようと考える、（貢献①）	
想定される姿	・自分たちも実際に体験したら、大切にしていることがなぜ大切なのかを知ることができるのかもしれない。 ・実際に職場体験へ行きたい。 ・働くことを通さなくても、自分たちが見ている学校という社会の問題であれば解決できるのではないか。	・働く上でその人が見ている「社会」を少しでもよくしようと努力されている姿をみて、自分たちも社会をよりよくする活動をしたいと思った。 ・働く大人たちと同じように、自分たちはまず附属学校の問題を解決したい。 ・どうすれば、登下校時のマナーを改善することができるのだろう。	・自分たちが行った活動で効果があったのかを様々な人に聞いてみたい。 ・自分たちがやろうとしていたことに、協力してくれない人もいたけれど、どうすればよかったのだろう。 ・何も変わらないように見えても少しでも社会のためになったのではないか。	・学校以外にも社会はたくさんあるのだから、その社会をよりよくするために自分たちにできることがあるのではないか。 ・職場体験先で見つけた社会の問題を、もしかしたら自分たちで少しは良い方向へ進めることができるのかもしれない。
実際の姿	・自分たちで改善できる問題があるのにも関わらず、何も行動しないのはおかしい。何とかして、附属学校をよりよい学校にしたい。	・マナーが悪い人たちに、どのように伝えれば改善してもらえるのだろう。 ・一緒にバスを使っている人たちはどんな思いで乗っているのだろう。		
●ジレンマ ■エラー	■働いていない自分たちに、社会のために何ができるのかが分からない。 ■マナーを守ってもらいたいと思うが、効果的な方法が思いつかない。 ●自分たちが、社会をよりよくするために考えた活動は、協力してくれる人もいたし、協力してくれない人もいたが、意味のない活動だったのだろうか。 ●価値観の違いによって、社会はうまく回っていないと考えていたが、価値観の違いはあってはいけないことなのだろうか。			

７年１組　本時案　（７年１組教室）

目標

各々が附属学校の１番の問題であると考えた問題を改善するための活動を振り返ったり新たに考えたりすることを通して、「附属学校という社会をよりよくしたい」という願いを基に、今後どうしていけばよいのかを考えていく。（貢献する人間性）

本時（２９/４０）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）

１　自分が１番の問題だと思ったことに対して、どうすれば改善することができるのか考える。

問題を解決するには、どんな視点で、どんな活動を行う必要があるのだろうか。

〇附属学校の問題を改善、解決するためにどうしていけばよいのかをグループでまとめていきましょう。

★登下校バス内の過ごし方	登下校電車の待ち方	感じのよい附属生	飼育動物の扱い
・バスを実際に利用している人が何のために利用しているのかを聞き、その隣に座るあなたはどう過ごすかという啓発 CM を作りたい。	・電車を待つ際にうるさくなっている現状を伝え、どのようにすればよいのかの啓発ポスターを作りたい。	・藤井校長先生の思いを聞いて、自分たちが考えたことを放送する。それが、どう影響したのかを調べたい。	・４年生の飼育活動を実際に見て、感じたことや思ったことをもとに、よりよくするために一緒に飼育活動を行っていきたい。
感じのよい附属生	登下校のマナー	不要物の持ち込み	あいさつ
・附属生が実際にどれだけ意識できているのかを調査したい。	・マナーの良い姿悪い姿について、他学年にもアンケートをとり、現状を把握したい。	・どんなものが不要物なのかを伝えるポスターを作成したい。	・すれ違いあいさつや、教室に入るときのあいさつを元気よくしましょうというポスターを作成したい。

・どうすれば、自分たちの思いがより伝わるのか分からない。
・こうしてほしいという呼びかけや、そのポスターだけで本当によくなっていくのかが分からない。

２　仲間の活動を見て、自分たちに取り入れられそうなものがないかを考える。

〇★グループの作っている CM をみんなで見て、自分たちの活動と違うところや、取り入れられそうなものはないですか。
・自分たちは既に放送を行ってみたが、「こうしましょう」と呼びかけているだけだった。★グループのように、みんながもう一歩踏み込んで考えるような工夫が無いと、思いが伝わらないと思った。
・附属学校の児童生徒という社会でしか問題を伝えられていなかったけれど、もっと違う視点で考えて伝えていきたい。
・★グループの CM を見て、自分の見ている世界が広がるような感じがした。バスだけでなく、登下校時にはたくさんの人と一緒の社会を共有しているということを、みんなに伝えればマナーがよりよくなるのではないか。
・バスの中も１つの社会で、様々な人たちがいることや、その人のことを考えるという視点が自分たちにはなかったから、ポスターを描き直したい。

４　本時の学びの振り返りをワークシート（メタモジ）に書く。

・私は、今まで附属学校がよりよくなると思って、「マナーやルールを守りましょう。」というポスターを作成して掲示をしてきたけれど、今日★グループの CM を見て、自分は附属学校という社会でしかこの問題が捉えられていないのだと気付いた。社会は様々な場所にあって、視点を変えることで、相手に深く考えてもらえるのではないかと思った。現に自分がそうだった。実際に★グループの人たちに、もっと周りに目が向けられるようなポスターにした方が、マナーやルールを守る意味が伝わるのではないかとアドバイスをもらった。次回はそのアドバイスをもとにポスターを作り直したい。

〇教師の手立てと見届け

〇見通しをもって主体的に活動を進められるように、それぞれのチームがしたいことや、そのチームが問題と考えていることを明確にする。
〇職場体験学習先の問題解決の方法をもとに活動することで、問題解決の方法に根拠をもって活動できるようにする。
〇切実感をもって活動に取り組むために、自分が問題だと思っていることと共通の問題意識を持っている仲間とチームを組むことで、協働的に活動を進められるようにする。
〇問題を多面的多角的に捉えて活動を行うために、★グループの活動と自分たちの活動を比べることで、新たな視点や視野の広がりがあるような活動へと変化していく。
〇★グループの CM と自分たちの活動との違いを問うことで、視点の変化や視野の広がりが必要であることを生徒自身が感じ活動へとつなげていく。
〇チームで本時考えたことや、今後行う活動について他チームに説明する場を設け、お互いの活動に意見を出し合い、見る人の思いやどう感じるのかを素直に言い合うことで、よりよい附属学校を作っていくための活動にするためにはどんな工夫が必要であるか考えていく。
〇生徒の振り返りを、「問題解決力」「関係構築力」「貢献する人間性」と結びつけて価値づけていく。

目標に迫った姿をどのように見届けるか

自分たちが行ってきた、行おうとしてきた活動が問題解決につながったのか、繋がるのかを考え、「附属学校という社会をよりよくしたい」という願いを基に、様々な視点をもってこの先の活動を考えることができる。

（貢献する人間性）

・発言の様子やワークシートの記述から見届ける。

７年２組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：社会（全85時間）

第７学年の目標	（１）問題解決力に関わって	問題解決に向けて、具体的な根拠を元に、他者の考えや価値観を尊重しながら、客観的な事実を踏まえて自分の考えを書くこと話すことができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	実社会で活動する人や仲間の考えを聞いたり、自分の考えを筋道立てて伝えたりする中で、対立やジレンマに対して、互いに納得できる考えを創り出したり、双方の考えを取り入れたりできるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	自分や身近な社会のよさに気付き、よりよい社会にするために努力する人々に敬意をもちながら、自分にできることを、仲間や社会に生きる人々と共に行動しようとする態度を養う。
カテゴリー設定の理由	第６学年では、まちがよりよくなるために自分ができることは何かを考え行動してきた。そのことを通して、まちに住む人の価値観は様々あり、人々は多様であることを知り、そこへの興味・関心をもった。だからこそ、第７学年では、多様な人々と向き合い、よりよい社会になるように自分なりに考え行動することでリアルな社会を知ることができると考えた。	
学びの基盤となる道徳的諸価値	自主、自律、自由と責任・向上心、個性の伸長・真理の追究、創造・思いやり、感謝・相互理解、寛容・遵法精神、公徳心・公正、公平、社会正義・勤労・国際理解、国際貢献・よりよく生きる喜び	
学びを構成する要素	共感　多様性　（雇用　勤労　障がい　仲間　世代　福祉　幼児　国際理解　伝統文化　違い　偏見　ユニバーサルデザイン　食品ロス　動物愛護　よりよいまちづくり）	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	社会を創っている人とは（30時間）					社会に参画してみよう（40時間）				社会の一員になろう（15時間）		
主な学習活動	○探究テーマを設定する。 ○様々な方との対話を通して、社会の一員として生きている方の思いに触れる。 ○社会の一員としてボランティア活動に参加し、「人の役に立つこと」の意味について考える。 ○活動に参加する中で生まれるエラーやジレンマについて考える。 ○問題解決の方法について、多面的・多角的に考える。 ○今後の活動の見通しを立てる。 ○夏休みの計画を立てる。				身の回りの問題を見つめ直し、人の役にたつことを考え、実行する	○岐阜県赤十字血液センターの方と協働し、岐阜駅で献血の呼びかけ活動を行うとともに、献血センターでできることや献血がどのように役立てられているかを宣伝する活動を通して、人の役に立つことの意義について考える。 ○岐阜市役所鉄道高架推進課の方と協働し、「駅とまちを光でつなぐ杜のイルミネーション」の企画に参加する。「岐阜市の玄関口である岐阜駅を美しく彩ることで岐阜市を活気づけたい」「岐阜市の伝統工芸品とイルミネーションを組み合わせることで岐阜市の伝統工芸品の魅力を広めたい」という願いの実現に向けて、鉄道推進課の方の力を借りながら、イルミネーション作品を作成する。 ○イルミネーションの企画に携わる方の思いや岐阜市の伝統工芸品についての宣伝活動を行い、社会に参画することの意義について考える。 ○自分たちの行動が人の役に立っているかを考える。				○学びをどのようにまとめるか計画を立てる。 ○社会の一員として、他者のためにできることを考える。 ○実践の計画をたてる。 ○１年間のプロジェクトを振り返る。 ○今年度の学びを振り返り、キャリアパスポートを記入する。		
想定される ●ジレンマ ■エラー 【道徳的諸価値】	●何かを消費するだけで人の役に立っているのか、それとも他者に感謝されて初めて人の役に立ったと言えるのか。 ■介護や医療の現場でボランティア活動をしたいと考えていたが、人の命の重さや中学生にできることを考えると難しいと断られてしまった。 【自主、自律、自由と責任・尊法精神、公徳心・公正公平、社会正義・思いやり・勤労など】					■献血に対する敷居の高さを感じている人たちが大勢いる。また、若年層の献血をしている人の人数が減少傾向にある。こういった問題を解決していくためにできることは何だろうか。 ●岐阜市に訪れる様々な方は、年齢も国籍も多様である。そのなかで、どんな人たちにも伝わるようにイルミネーションに携わる方の思いを届けたり、岐阜市の伝統文化を広めたりしていくためにはどうすればよいのだろう。 【相互理解、寛容、社会参画、向上心、個性の伸長、よりよく生きる喜びなど】				●岐阜市に住んでいる人々と共に、様々な問題と向き合い生きていくにはどうすべきかと葛藤する。 【相互理解、寛容・よりよく生きる喜びなど】		
人材活用施設	・岐阜市役所 ・岐阜市介護福祉センター ・岐阜市生涯学習センター					・岐阜市役所鉄道高架推進課 ・岐阜県赤十字血液センター ・岐阜市歴史博物館 ・スターエム（株） ・ＣＨＩＫＡＫＥＮプロダクツ（株）				・岐阜市役所 ・岐阜県赤十字血液センター		
教科等との関連	・国語：情報を的確に聞き取る　情報を整理して書こう　聞き上手になろう ・社会：世界の人々の生活と環境　中世の日本 ・保健体育：スポーツの多様性 ・家庭科：私たちの衣生活 ・外国語：Friends in New Zealand					・国語：情報を的確に聞き取る　情報を整理して書こう　聞き上手になろう ・社会：世界の諸地域　中世の日本 ・保健体育：心身の発達と心の健康 ・家庭科：私たちの住生活 ・外国語：Foreign Artists in Japan　Think Globally, Act Locally				・国語：情報を的確に聞き取る　情報を整理して書こう　聞き上手になろう ・社会：世界の諸地域　近世の日本 ・保健体育：心身の発達と心の健康 ・家庭科：私たちの住生活　私たちの成長と家族・地域 ・外国語：This year's Memories		

７年２組　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 社会に参画してみよう （40）	①社会に参画することを通して、目的を達成するために大切なことや必要なことを考えることができるようにする。 ②自分にできることは何かを考え判断し、実行することができるようにする。	①様々な人の意見や仲間の考えを肯定的に聞いたり、自分の考えを筋道を立てて伝えたりすることができるようにする。 ②対立やジレンマに対して、互いに納得できる考えを創り出したり、双方の考えを取り入れたりしながら活動することができるようにする。	①社会の一員として、人々の幸せのために活動している方の思いにふれることを通して、よりよい社会にするために努力する人々に敬意をもちながら、自分にできることを考え、仲間と共に行動しようとする態度を養う。

活動の計画	○献血の呼び込み活動にあたって、岐阜に住む人たちにどのようなことを伝えたいかを話し合う。（関係①） ○若年層の献血に協力してくださる方が減少傾向にある原因を考え、対策を考える。（問題①） ○岐阜県赤十字血液センターの方と共に岐阜駅で献血の呼び込み活動を行う。（貢献①） （８）	○市政を通して人の役に立っている市役所の方の思いを聞きたいという生徒の願いをもとに、鉄道高架推進課の方から「駅とまちを光でつなぐ杜イルミネーション」事業の話を聞く。（関係①） ○イルミネーション事業に関わって、自分たちにできることを考え、鉄道高架推進課の方へ提案をする。（問題②） （８）	○竹の灯りイルミネーション作り・看板作り・広告宣伝の３つのグループに分かれ、制作活動を行う。（問題②） ○中間報告会で鉄道推進課の方へ進捗状況について報告をし、迷っていることなどについてアドバイスをもらう。（問題②）、（関係②） ○事業についてのインタビューを行い、その結果をもとに、自分たちの活動は人の役に立っているかを考える。（関係①、②） （14）	○イルミネーション事業について、事業が市民の方々にどう受け止められているかを調査する。（問題①） ○調査結果をまとめ、鉄道推進課の方へ報告する。（問題②） ○市政に参画して感じたことについて振り返り、「人の役に立つとは」という問いについてまとめる。（貢献①） （10）
加除修正欄	○対話を通して、現時点での「人の役に立つ」とはどういうことかを整理する。			
想定される姿	・献血の流れや献血ルームの中の様子が分かるようにすると、献血に協力してくれる人が増えるのではないか。 ・呼び込み活動をするなかで、一回も献血をしたことのない人が「やってみよう」と言ってくれて嬉しかった。	・これまでイルミネーションを観て「綺麗だな」と思っていたけど、その事業を計画している方の思いは考えた事もなかった。 ・イルミネーション事業に参加することで、岐阜のまちを活気づけたり、岐阜市の伝統工芸品の素晴らしさを伝えたりしたい。	・竹の灯りを美しく作るコツを知りたいな。制作している方に教えてもらおう。 ・看板はどのように作るとよいだろう。看板を制作している人はどのようなことを考えて作っているのかな。 ・イルミネーションについて好意的に思っていない人もいる。自分たちの活動は人の役に立っていると言えるだろうか。	・イルミネーションを楽しんで観てくれている方はたくさんいた。自分たちがしたことが様々な人たちの喜びにつながって嬉しかった。 ・携わる人の思いは予想よりも伝わっていなかった。でも、イルミネーションを楽しんでくれている方が大勢いるだけで自分も幸せな気持ちになった。
実際の姿	○人の役に立つとはという問いについて次のような３通りの考えができた。「相手と自分、両者が嬉しい気持ちになること」、「相手を思い行動すること」、「自分が幸せになること」			

●ジレンマ ■エラー	■献血に対する敷居の高さを感じている人たちが大勢いる。また、若年層の献血をしている人の人数が減少傾向にある。こういった問題を解決していくためにできることは何だろうか。	●イルミネーションを楽しみにしている人もいれば、税金の使い道についてや治安の悪化などを心配して、好意的に見ていない人もいる。自分たちのしていることは本当に人の役に立っているのだろうか。

７年２組　本時案　（７年２組教室）

目標

岐阜の伝統工芸品の魅力や職人の方々の思いを発信したいという願いの実現に向けて制作した動画やオーナメントを岐阜市役所の方に観ていただくことを通して、多くの方へ思いを届けることができるものになっているかどうかを振り返り発信する内容について再考することができる。（問題解決力）

本時（21/30）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　本時の目的を確認する 〇「駅とまちを光でつなぐ杜のイルミネーション」に向けて、市役所の方にみんなが作った動画を観てもらいましょう。 作成した動画は、私たちの発信したい願いが伝わるものになっているだろうか。 **２　各グループに分かれ、動画の趣旨を市役所の方に伝え、作成した動画を観てもらう。** ＜のぼり鯉グループ＞ ・登り鯉に使われている色の由来と、泳いでいるように見えるための工夫について知って欲しくて動画を作りました。 ・中国の五行思想をもとに５色を使って登り鯉が描かれており、安泰と繁栄の意味が込められています。 ・和紙を揉むことで柔らかで温かい質感を出すことと、飾ったときに風に揺れて空を泳ぐように見えることを意識しています。 ＜岐阜和傘&岐阜提灯グループ＞ ・岐阜和傘が華奢な細身の美しい傘であること、光に透かした時の色彩などの美しさを伝えたくて動画を作りました。 ・蛇目傘、番傘、日傘など、和傘も用途によって様々な種類があり、造りにも違いがあります。 ・岐阜提灯は実用品ではなく美術工芸品であり、だからこそ１つ１つ職人が心を込めて作っていることを伝えたくて動画を作りました。 ・花の種類を多様化させたり、様々なサイズの物を作ったりして現代のニーズに合うように日々試行錯誤を繰り返しています。 ＜筒引き染め&オーナメントグループ＞ ・筒引き染めの美しさと、縁起を担ぐための色彩のきまりと、字体の秘密を伝えたくて動画を作りました。 ・オーナメントは、「伝統工芸品だけでなく中学生の豊かな発想を大切にして制作をしてほしい。」という、市役所の方の思いをもとに、「岐阜のまちを明るく照らしたい」という願いを込めて作りました。 **３　市役所の方の意見を聞き、発信する内容について再考する。** →取材をしたからこそ分かったことや、自分たちが実際に見たり触れたりして感じたことを伝えたいという気持ちが伝わってきた。そういった思いをより伝わるようにするために、インタビューの動画に字幕をつけたり、写真だけでなく自分たちの声として感想などを動画に組み込んでいったりすると良いのではないか。 **４　本時の活動を振り返る** ・イルミネーションの企画をしている市役所の方とは違う切り口で「岐阜のまちを明るく照らすこと」と「伝統工芸品の魅力を伝えること」について活動できていると感じた。今回教えてもらったことを動画に反映させて、市役所の方と共にイルミネーション事業を成功させたい。	〇生徒がスライドをもとにこれまでの探究の歩みについて、市役所の方に話をすることで、今回の授業の目的を市役所の方と共有する。 〇各グループに市役所の方に入っていただくことで、それぞれのグループで作成した動画を視聴していただき、どのような思いで動画を作成したのかを伝えたり、意見を聞いたりできるようにする。 〇中学生である自分たちだからこそできるアプローチの仕方を考え、動画やオーナメントの制作に生かそうとしている生徒の姿を価値づける。 **目標に迫った姿をどのように見届けるか** 岐阜市役所の方のアドバイスをもとに、作成した動画が多くの方へ思いを届けることができるものになっているかどうかを振り返り、発信する内容について再考している。（問題解決力） ・発言の様子やワークシートの記述から見届ける。

第８学年　学びのカテゴリー「社会に生きる」

生徒は、これまでのどう生きるかの探求で、学びのカテゴリー（探究領域）ごとに様々な問題を自分ごととして発見し、その問題を解決しようと考え、判断し、行動してきた。その学習経験を通して、社会に生きる人々は様々な見方や考え方をもって生きていることを学んだり、前向きに自分の得意なことや苦手なことと向き合い、将来を見据え考え始めたりしている。そんな生徒が第８学年で探究する学びのカテゴリーは、「社会に生きる」である。多様な価値観をもつ人が生きる社会の中で「自分はこれからどう生きていきたいのか？」を考え、テーマをもち、自身の将来を見据えながら探求していく。生徒が自身の将来を考える中で、社会や自分に必要なものや磨くべきことを模索し、判断し、それらを確立させるために行動する姿の具現を目指していく学びである。

第１単元の「社会とは？」では、前年度の学びである「多様性」を「違い」と捉え、自分と他者との違い、生きている環境の違い、見方・考え方の違い、事象に対する価値観の違いなどについて考えてきたことを出発点とし、大阪研修での、企業訪問や職業講話の体験を基に、１組では「幸せとは」、２組では「幸せに生きるとは」、３組では「人と人とがつながり幸せに生きるとは」という学級別の探究テーマが設定された。

第２単元では、各学級の探究テーマを軸として、自分たちの知的好奇心、興味・関心や疑問を満たす様々な人と対話を行ったり、「学びたい」という願いに沿った研修先を自ら選定したりする学びを進めてきた。また、夏季休業期間には、自ら探究テーマを設定して、個人探究計画書を作成し、対話相手を探し出すことで、個人探究を進めてきた。本時は、ここまでの生徒の学びの文脈を踏まえ、「社会」に対する認識をさらに広げ、深める。

磯谷　直毅
池田　久志
岡田　春香
岸　　周吾

８年１組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：社会に生きる　（全105時間）

第８学年の目標	（１）問題解決力に関わって　自分の生き方と繋げながら探究することで「問題」に気付き、解決するために「問い」を生み出し、問いを解決するために何ができるか考え行動できるようにする。											
	（２）関係構築力に関わって　仲間や実社会に生きる人の考えを共感的に受け入れ、それぞれの願いや考えを踏まえた上で、納得解や最適解を相手と協働して導こうとすることができるようにする。											
	（３）貢献する人間性に関わって　社会の様々な事柄や他者の生き方について関心をもち、生き方に触れる過程で、よりよい自己の生き方を見つめようとする態度を養う。											
カテゴリー設定の理由	第７学年までに、様々な問題と出会い、解決していく過程で、自分を取り巻く社会で生きる人々は、いろいろな見方や考え方をもって生きていることを理解しながら学んできた。自分の得意なことや苦手なことが認識できるようになり、自分の将来のことも考える時期である。これまで学んできたことを生かし、多様な価値観をもつ人が生きる社会で「自分はこれからどう生きていきたいのか？」を考え、自身の将来を見据える。その将来を考える中で、自分に必要なものや磨くべきこと等を模索し、判断し、それらを確立させるため行動する姿を具現させたい。☒											
学びの基盤となる道徳的諸価値	向上心、個性の伸長・希望と勇気、克己と強い意志・真理の探究、創造・思いやり、感謝・礼儀・相互理解、寛容・公正、公平、社会主義・社会参画、公共の精神 勤労・家族愛、家庭生活の充実・よりよい学校生活、集団生活の充実・国際理解、国際貢献・自然愛護・よりよく生きる喜び											
学びを構成する要素	伝統、文化、観光、環境、食、命　多様性（国籍、言語、性別、LGBTQ、障害、UD、インクルーシブ、福祉、差別、偏見、貧困、自分との違い、生きる環境の違い、それぞれの見方考え方、価値観の違い、共生） 社会　社会問題　自然環境　科学技術　勤労　働く人の思い、やりがい											
月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	Ⅰ社会とは（46時間）				Ⅱ社会を知る（41時間）					Ⅲ社会を広げる（18時間）		
主な学習活動	○前年度の「多様性」の学びを振り返り、自分はどんな環境の中で生きているのか客観的に捉える。 ○前年度の３学級の学びの中で共通した学びや価値を洗い出し、今年度の学びのテーマへとつなげる。 ○学級テーマを視点とし、大阪で研修する。	○大阪での企業研修の学びを振り返る。 ○大阪研修で「幸せとは」を視点とした研修を通した、疑問点について出し合う。 ○疑問点を学級の問いとして、岐阜での探究に向けた計画を立てる。 ○問いの解決に向けた研修先や対話相手を決める。 ○計画した研修や対話を行う。 ○学びをまとめ、学級で交流する。		○夏休み個人探究を行う。 ○個人探究の計画を立てる。 ○探究先へアポイントメントをとる。 ○探究先の方と対話をする。 ○個人探究した内容をまとめる。 ○個人探究のまとめを学級内で交流し、探究の方法や探究テーマについて知識を広げる。	○探究テーマに迫るための問いを考え、対話や校外学習へ出向く。 ○生まれた問いにつながる対話・研修計画を立てる。 ○アポイントメントを取る。 ○対話したり、見学したり、体験したりする。 ○学んだ内容を整理し、自分の考えをまとめる。 ○学級の仲間と対話をし、次の問いをもつ。 ○学習を振り返り、探求テーマへの考えをまとめ、広げる。 ※このサイクルを繰り返す。					○単元Ⅰ、Ⅱを通して自分が学んだことを整理する。 ○周りの人が幸せになるために自分にできることは何か、大きな社会の中の一員としてできることを考える。 ○キャリアパスポートをまとめる。		
想定されるエラー（■）ジレンマ（●）【道徳的諸価値】	●多様な人々がいる中で、どうしたらみんなが幸せになれるのだろう。 ■大阪研修で、自分は○○に企業研修に行きたいが、仲間は△△へ行きたい。どうしようか。 ●どうしたらよりよく人とつながることができるのだろう。 【勤労・相互理解、寛容・社会参画、公共の精神・国際理解、国際貢献など】				■探究テーマに迫れるような企業がどこか分からない。どんな問いがあれば探究テーマに迫れるのか分からない。 ●私は企業Aを推しているが、他のメンバーはみんな企業Bを推している。でも企業Bの良さも確かに分かる。グループとしてどちらを推すべきか。 ■訪問したい企業へアポを取ったら断られてしまった。 ●社会のために何かしてみたいけど、自分にできることはあるのかな。 【真理の探究、創造・相互理解、寛容・社会参画、公共の精神・自然愛護・よりよく生きる喜びなど】					●社会の一員ではあるが、その中の1人として、何ができるのだろうか。 ■自分の探究しているテーマだけで考えると難しさがあったけれど、他のグループと協力・コラボすると解決できることもあるんじゃないか？ ■探究する時間がまだ足りない。できる限りもっと知りたい、考えたい。 ●探究を通して自分の将来について少し考えることはできたが、それを実現できるかどうかは別問題だ。実現させるためにはもっと○○の部分を鍛えなければならないな。 【相互理解、寛容・よりよく生きる喜びなど】		
人材活用施設	大阪研修 企業研修先：山岡金属工業（株）、合同食品株式会社、日本銀行大阪支店、シマノ自動車博物館、大阪起業家ミュージアム、株式会社ブロードエンタープライズ、株式会社クボタ、江崎記念館、シェラトン都ホテル大阪、大阪地方検察庁 市内学級別研修先：大阪城・パナソニックミュージアム、あべのハルカス・あべのハルカス美術館、万博公園・国立民俗学博物館 ・合同会社USJ　職業講話：清水　郡氏、吉本興業　２０世紀				・岐阜県警察本部 ・労働基準監督署					・Ⅱ期で出会った人や施設		
教科等との関連	・国語：聞き上手になろう～質問で思いや考えを引き出す～ ・社会：日本の地域的特徴と地域区分（人口、産業、交通、通信） ・数学：データの分析　データの比較と箱ひげ図　確率　標本調査				・国語：立場を尊重して話し合おう～討論で多角的に検討する～ ・社会：日本の諸地域 ・数学：データの分析　データの比較と箱ひげ図　確率　標本調査 ・音楽：日本の伝統芸能					・国語：国語の学びを振り返ろう ～テーマを決めて話し合い、壁新聞をつくる～ ・社会：開国と近代日本の歩み（産業革命と資本主義）		

８年１組　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 Ⅱ社会を知る (41)	①探究テーマと自分の生き方をつなげて問いをつくり、対話する相手や内容を考え計画を立てることができるようにする。 ②問題解決に向け、自分に何ができるか考え行動できるようにする。	①仲間や対話する相手の考えや生き方を受け入れ話し合うことができるようにする。 ②自分の思いを伝えたり仲間の考えを共感的に受け入れたりしながら共に活動できるようにする。	①対話する相手の生き方に触れ、今の自分には何ができるか考えたり、行動したりする態度を養う。

活動の計画	○夏休みの個人探究の学びを小グループや学級で交流する。(関係①) ○警察署へ行き、市民を守る警察官が感じる幸せについて知ったり、ハローワークの方から、働く人たちを守る仕事をする方の幸せについて学んだりする。(問題②) （５）	○夏休みの個人探究や、校外学習の学びから、探究テーマについての自分の考えを整理する。（問題①) ○学級で交流を行い、もっとどんなことを知っていきたいのか、どんな場所へ行き、誰から話を聞けるとよいかを考えていく。（問題①) （３）	○・問いを明らかにするための計画（対話や訪問) ・アポ取り ・学級への提案、決定 ・計画の実行 ・学びの整理 ・学級での交流、新たな問いづくりのサイクルを繰り返し行う。 (問題①、②) ○ここまでの活動を振り返って探究テーマに対しての自分の考えをまとめる。（貢献①) (28)	○校外学習や対話を終えた中で、探究テーマ「幸せとは」についての自分の考えを整理する。(問題②) ○学級でそれぞれが考えた「幸せ」について対話をする。(関係①) ○話を聞いたり体験したりする中で、出会った方々のように、自分たちにも「幸せ」を生み出すことはできないか、考える。(貢献①) （５）
加除修正欄				
想定される姿	・働くことについて聞く中で、自分や家族の幸せのためでもあるが、社会の一員としての責任があることを知った。 ・労働基準監督署では、働く人が働きやすい環境を作るために、仕事をしていた。相手の幸せが自分の幸せに繋がっていることが分かった。	・市民の安全や労働者が安心して働けることなど、自分自身のことよりも、自分以外の周りの人の状態が、自分の幸せとの関わりがあることが分かった。 ・もっといろいろな人と出会ったり、いろいろな場所へ行ったりして、探究テーマに迫りたい。	・「幸せ」について考えていく中で、幸せは自分だけで感じるものではなく、周りの人とのつながりの中で生まれてくることが分かった。そのつながりが、社会をつくっていると思った。その社会の中の１人として、自分も何かできないだろうか。	・探究を繰り返していく中で、自分の考えがどのように変容していったのかを振り返る。 ・探究テーマについて、自分の考えをもち、話すことができる。
実際の姿				

●ジレンマ
■エラー

■探究テーマに迫るためには、どんな校外学習先がよいか分からない。

■校外学習先に行く目的をうまく伝えることができない。

●自分自身の幸せと、周りの人の幸せではどちらが大切なのだろう。

●校外学習先Ａもよいが、校外学習先Ｂでしか知れないこともある。どちらに行くべきか。

■自分たちが提案した校外学習先は選ばれなかった。

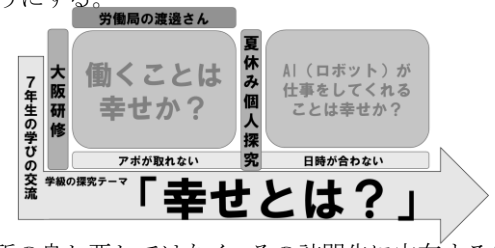
８年１組　本時案　（８年１組教室）

目標

これまでの学びの経験を基に、学級の探究テーマ「幸せとは？」に迫るための研修先を選定する際に、自身の考えの広がりや深まりを生み出す可能性を予測し、お互いの立場を尊重しながら仲間と折り合い、現時点での最適解として選択・判断することで、学級の研修先を決定することができる。

（関係構築力）

本時（28/41）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　前時までの探究を確認する。 〇前回までにどのようなことを知り、学んできましたか。 ・労働局の渡邊さんは、仕事を必要としている人に寄り添って相談に乗り、仕事の紹介をしていた。労働環境を改善するために、会社に対して労働時間や条件の適正化を働きかけていた。紹介した人からの感謝の言葉や、働く姿からやりがいを感じていた。 探究テーマ「幸せとは？」に迫るための研修先は、私たちにとって、どちらがふさわしいか。 **２　自己の考えを発表し、全体で交流する。** 【研修先Ａ】 ・私は、研修先Ａがよいと思います。なぜなら、私たちが学んだのは、直接お客さんや利用者さんなど、関わった人から感謝されたときにやりがいを感じることだ。その思いは接客業以外の仕事でも同じなのか気になります。 【研修先Ｂ】 ・私は、研修先Ｂがよいと思います。働く中での、人と人とのつながりの中に、幸せややりがいがあること学んだ。近年、様々なものが自動化されていく中で、人とのつながりが減っている。働く中のつながりが減ってしまっても、幸せややりがいは変わらないのか気になります。 〇「その研修先で大切にしたい〇〇は、何を優先して選んでいるのですか？△△ですか？」 〇「Ｍさんの発言の□□に対して、皆さんはどう思いますか？大切にされている判断の基準は何ですか？」 **３　１組が行く研修先を決定し、確認をする。** 〇「みんなで、意思決定をする際は、多数決という方法を採用すると以前話し合い、決定しました。それについて、今回は意見がある人はいますか？」 **４　振り返りを記入する** 〇「Ｋさん、Ｋさんが選んだ研修先は選ばれませんでした。今のあなたの気持ちを教えてください。」 ・私は研修先〇を選びました。しかし、選ばれたのは研修先△でした。それぞれの研修先について考えを出し合っていく中で、研修先△では□□について学び、考えを深められそうだと分かりました。まずはそこで、自分の学びを深めたいと思います。	〇これまでの学びの足跡を掲示し、可視化することで、生徒が本時までの思考の流れをイメージできるようにする。  〇場所の良し悪しではなく、その訪問先に内在する価値を見出して発言できるように促す。また、板書には価値を抽出して位置付けることで、生徒が訪問先の良し悪しを議論するのではなく、内在する価値の葛藤を議論できるように促す。 〇リーダーが進行をできるよう、本時までの学習の中で、リーダーが進行する対話を行う。必要に応じて、研修先で学べる価値について考えさせる質問を投げかける。（例：やりがい、人とのつながり、お金、時間など） 〇「幸せ」について、その研修先がどのような関わりがあるのか、関わりや価値を整理して板書に位置付ける。 **目標に迫った姿をどのように見届けるか** 自身の主張と他者の主張との折り合いを生み出そうとしている姿（自己調整） （関係構築力） ・全体交流での発言、振り返りの記載。

８年３組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：社会に生きる　（全105時間）

第８学年の目標	（１）問題解決力に関わって　自分の生き方と繋げながら探究することで「問題」に気付き、解決するために「問い」を生み出し、問いを解決するために何ができるか考え行動できるようにする。											
	（２）関係構築力に関わって　仲間や実社会に生きる人の考えを共感的に受け入れ、それぞれの願いや考えを踏まえた上で、納得解や最適解を相手と協働して導こうとすることができるようにする。											
	（３）貢献する人間性に関わって　社会の様々な事柄や他者の生き方について関心をもち、生き方に触れる過程で、よりよい自己の生き方を見つめようとする態度を養う。											
カテゴリー設定の理由	第７学年までに、様々な問題と出会い、解決していく過程で、自分を取り巻く社会で生きる人々は、いろいろな見方や考え方をもって生きていることを理解しながら学んできた。自分の得意なことや苦手なことが認識できるようになり、自分の将来のことも考える時期である。これまで学んできたことを生かし、多様な価値観をもつ人が生きる社会で「自分はこれからどう生きていきたいのか？」を考え、自身の将来を見据える。その将来を考える中で、自分に必要なものや磨くべきこと等を模索し、判断し、それらを確立させるため行動する姿を具現させたい。☒											
学びの基盤となる道徳的諸価値	向上心、個性の伸長・希望と勇気、克己と強い意志・思いやり、感謝・礼儀・相互理解、寛容・公正、公平、社会主義・社会参画、公共の精神・勤労 家族愛、家庭生活の充実・よりよい学校生活、集団生活の充実・国際理解、国際貢献・自然愛護・よりよく生きる喜び											
学びを構成する要素	伝統、文化、観光、環境、食、命　多様性（国籍、言語、性別、LGBTQ、障害、UD、インクルーシブ、福祉、差別、偏見、貧困、自分との違い、生きる環境の違い、それぞれの見方・考え方、価値観の違い、幸せの価値観、共生）　つながる　社会　社会問題　自然環境　科学技術　勤労　働く人の思い、やりがい											
月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	Ⅰ社会とは（46時間）				Ⅱ社会を知る（41時間）					Ⅲ社会を広げる（18時間）		
主な学習活動	○前年度の「多様性」の学びを振り返り、自分はどんな環境の中で生きているのか客観的に捉える。 ○「人と人とがつながり幸せに生きる」とは、どんなことなんだろう。 ○大阪にはどんな「人と人とのつながり」があるか探究する。	○大阪研修を通して、自分たちの周りにある「人と人とのつながり」＝社会　を認識する。 ○７年生で学んだ多様性とつなげながら、だれもがよりよく生きることのできる社会について考える。 ○探究テーマに迫るために、対話をする。 ・タマキ写真館 田巻さん ・横山統括校長先生		○夏休み個人探究を通して、「人と人のつながり」について考えを深める。 ○個人探究の計画を立てる ○探究先へアポイントメントをとる ○対話をする ○個人探究した内容をまとめる ○個人探究のまとめを学級内で交流し、探究の方法や内容項目について知識を広げる。 ○新たな視点を基に「問い」をもつ。	○探究テーマに迫るための問いを考え、対話を行う。 ○生まれた問いにつながる対話の計画を立てる。 ○アポイントメントをとる。 ○対話したり、見学したり、体験したりする。 ○学んだ内容を整理し、自分の考えをまとめる。 ○学級の仲間と対話をし、次の問いをもつ。 ○これまでの学習を振り返り、探究テーマへの考えをまとめ、広げる。 ※このサイクルを繰り返す					○「人と人とがつながり幸せに生きるとは」について考えをまとめる。 ○家族や仲間、身近な人との関係でできている社会の中で、守られながら生活してきた自分に気付き、多様な人々が生きる「社会」の一員として、社会の中にある問題点や自分にできることを考える。 ○学びをどのようにまとめるか計画を立てる。 ○今後も自分たちにできそうな活動を考える。 ○１年間の活動を振り返る。 ○今年度の学びを振り返り、キャリアパスポートを記入する。		
想定されるエラー（■）ジレンマ（●）【道徳的諸価値】	●多様な人々がいる中で、どうしたらみんなが幸せになれるのだろう。 ■生きていく上で、「人と人とのつながり」は、切り離すことができない。 ●どうしたらよりよく人とつながることができるのだろう。 【相互理解、寛容・社会参画、公共の精神・勤労・国際理解、国際貢献など】				■●人とつながり合い、よりよく生きるためには、上手くいかないことも、失敗することもある。自分の幸せだけではなく、相手の幸せを考えて、相手に寄り添ったり、折り合いをつけたりする必要もある。自分の幸せと相手の幸せを考えることは、どちらが大切だろう。 ■探求テーマに迫る対話相手が分からない。 ●より多くの人とつながるために、社会で何かしたい。でも、今の自分にできることはあるだろうか。 【相互理解、寛容・社会参画、公共の精神・勤労・よりよく生きる喜びなど】					●社会の一員ではあるが、今の自分に何ができるのだろうか。 ■探究する時間がまだ足りない。もっと知りたいし考えたい。 ●探究を通して自分の将来について少し考えることはできたけれど、それを実現できるかどうかは分からない。実現させるためにはもっと○○について考えたり、力をつけていかなければならない。 【向上心、個性の伸長・希望と勇気、克己と強い意志・よりよく生きる喜びなど】		
人材活用施設	大阪研修企業研修先：山岡金属工業（株）、合同食品株式会社、日本銀行大阪支店、シマノ自動車博物館、大阪起業家ミュージアム、株式会社ブロードエンタープライズ、株式会社クボタ、江崎記念館、シェラトン都ホテル大阪、大阪地方検察庁 市内学級別研修先：あべのハルカス・あべのハルカス美術館 ・合同会社USJ　職業講話：清水　郡氏、吉本興業芸人：２０世紀 ・タマキ写真館 田巻さん ・横山統括校長先生				・４組作業班、新居先生 ・パティスリー　ピベ　森　美帆さん ・探究テーマや問いに基づいた対話相手、企業 ・これまでの対話相手にさらに聞く					・Ⅱ期で出会った人や施設		
教科等との関連	・国語：聞き上手になろう～質問で思いや考えを引き出す～ ・社会：日本の地域的特徴と地域区分（人口、産業、交通、通信） ・数学：データの分析　データの比較と箱ひげ図　確率　標本調査				・国語：立場を尊重して話し合おう～討論で多角的に検討する～ ・社会：日本の諸地域 ・数学：データの分析　データの比較と箱ひげ図　確率　標本調査 ・音楽：日本の伝統芸能					・国語：国語の学びを振り返ろう ～テーマを決めて話し合い、壁新聞をつくる～ ・社会：開国と近代日本の歩み（産業革命と資本主義）		

８年３組　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 Ⅱ社会を知る (41)	①探究テーマと自分の生き方をつなげて問いをつくり、対話する相手や内容を考え計画を立てることができるようにする。 ②問題解決に向け、自分に何ができるか考え行動できるようにする。	①仲間や対話する相手の考えや生き方を受け入れ話し合うことができるようにする。 ②自分の思いを伝えたり仲間の考えを共感的に受け入れたりしながら共に活動できるようにする。	①対話する相手の生き方に触れ、今の自分には何ができるか考えたり、行動したりする態度を養う。

活動の計画	○夏休みに個人探究（職場見学）してきたことをもとに交流する。(関係①) ○学級全体で対話をする。(関係②) ○仲間と対話したことをもとに問いをつくり、その解決に向けて、対話する相手を考える。(問題①) （３）	○４組の仲間の作業学習を見学する（関係①) ○４組の仲間と「ものづくり」について対話をする。(関係②) ○対話した内容を整理し、次の問いをつくる。(問題①) （３）	○探究テーマに迫るための問いを考える。(関係①) ○対話の計画を立て、アポイントメントをとる。(問題①) ○対話したり、見学したり、体験したりして学んだ内容を整理し、自分の考えをまとめる。(問題②) ○学級の仲間と対話をし、次の問いをもつ。(問題①) ○これまでの学習を振り返り、探究テーマへの考えをまとめる。(貢献①) (30)	○これまでの探求を通して、「人と人とがつながり幸せに生きるとは」について考えたことを振り返り、自分の成長、変化をまとめる。(問題②) ○家族や仲間、身近な人との関係でできている社会の中で生活する自分に気付き、多様な人々が生きる「社会」の一員として、社会の中にある問題点や自分にできることを考える。(貢献①) （５）
加除修正欄			・パティシエの森さん、薬剤師の望月さん、４組担任の新居先生、脳外科医の榎本さんと対話をした。これまで対話をしてきたことを基に、学んだことをまとめ、自分の生き方につなげたい。	
想定される姿	・人とつながるために働く中には、うまくいくことばかりではなく、失敗や苦しい思いをすることがあると分かった。しかし、それを乗り越えていくことで、自分が成長できたり、誰かの生活のために貢献できたりするときに幸せを感じることができる。	・自分にできることや得意を生かしたり、技術を磨き続けたりすることで誰かの幸せに貢献できる。 ・４組の仲間は、お客さんや共に作業をする仲間とつながり合っている。僕たちもふぞくマーケットで何かできることはないか。	・これまで自分たちが考えてきた「人と人とがつながり幸せに生きる」は、自分と自分のことを支え、守ってくれる相手との関係の中での心地よさだった。もっと広い視野で「社会」と自分の関係を見つめ、自分たちに何ができるか考えていく必要がある。	・家庭や学校の中だけではない私たちが接している社会、これから進んでいく社会は、様々な人の努力や相手の幸せを願う思いに支えられている。今の自分たちでできることはないか考え行動したり、提案したりできることがあるのではないか。
実際の姿		・４組の仲間は、ものづくりを通して、強くつながり合っていた。僕たちとのつながりはまだ弱い。もっとつながれるよう、新居先生とも対話をして、４組仲間のことをもっと知りたい。	・森さんの生き方から、夢は広がり続けるものだと学んだ。森さんの芯の強さが素敵だと思った。自分の芯をつくって磨いていきたい。	

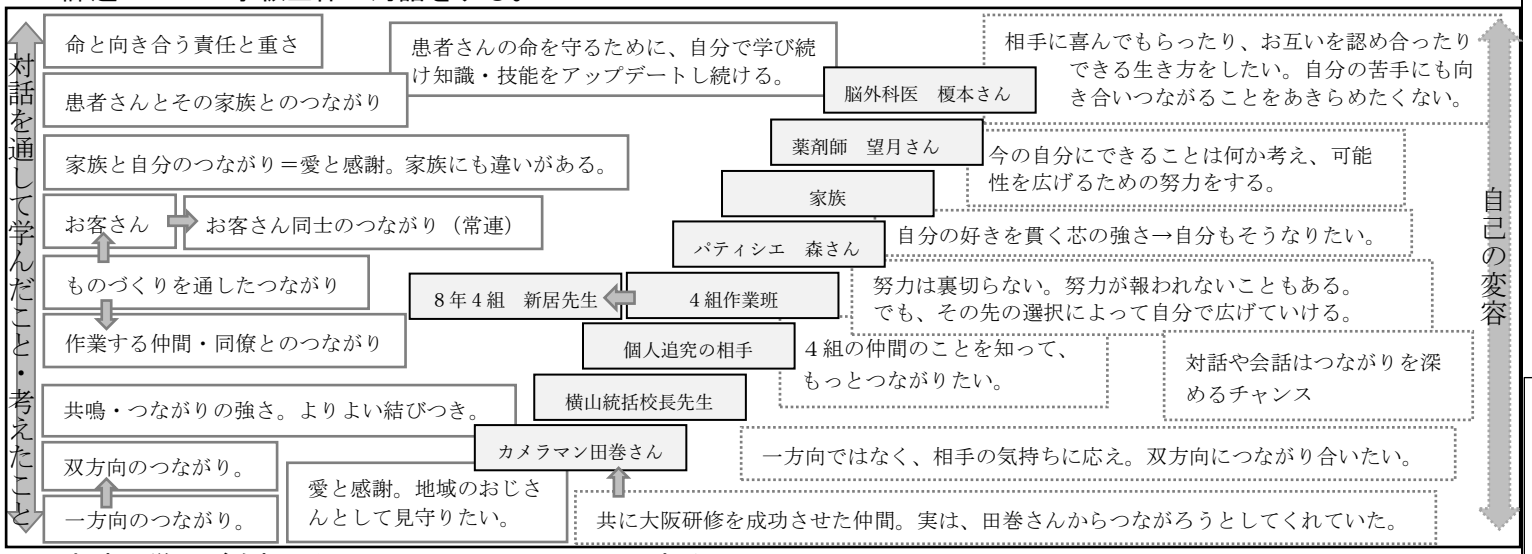
●ジレンマ ■エラー	■●人とつながり合い、よりよく生きるためには、上手くいかないことも、失敗することもある。自分の幸せだけではなく、相手の幸せも考えて、相手に寄り添ったり、折り合いをつけたりする必要もある。自分の幸せを考えることと相手の幸せを考えることは、どちらが大切なのだろう。	
	■探求テーマに迫る対話相手が分からない。	■より多くの人とつながるために、社会のために何かしたい。でも、今の自分にできることはあるだろうか。

８年３組　本時案　（８年３組教室）

目標

これまで対話をしてきた相手が大切にしている「人とのつながり方」や「社会のなかで幸せに生きるとは」にある共通点や相違点を基に、仲間と交流する活動を通して、探究テーマ「人と人とがつながり幸せに生きるとは」の広がりや深まりを実感し、自己の変容や成長を再認識することで、これから社会のなかで自分はどう生きていくのか考えることがきる。（貢献する人間性）

本時（27/41）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　これまでの歩みを振り返る。 〇これまで対話をしてきた方から学んだことすべてをつなげて対話をしたい。それぞれの方の生き方に共通点や相違点違はありましたか。 ・職業の違いはあるけれど、対話をしたどの人も「人とのつながり」を大切にすることで、自分の生き方が広がっている。 ・相手とよりよくつながるためには、大変なことや困難なこともあり、それを乗り越える芯の強さが必要だと分かった。 これまでの対話を通して考えた「人と人がつながり幸せに生きる」とは **２　課題について学級全体で対話をする。**  **３　本時の学のびを振り返り、ワークシートに記入する。** ・自分の夢を貫き通し、自分の強さや弱さも認め前に進む森さんは芯の強い人。今の私は就きたい職業がまだ分からないけれど、望月さんや榎本さんのようにこれからなりたいものに出会えたときのために、可能性を広げておきたい。そのために今できることに真剣に挑みたい。 ・好きなことを仕事にできる生き方は幸せだと思う。でも、そこにたどり着くには、幸せなことばかりではない。いろんな人の支えがあり頑張ることができるし、人とのつながりはどんどん強く大きなものになっていく。私は、これまで頑張ってきた掃除を仲間が認めてくれたことが自信になり成長できた。次は、自分から仲間につながり支えることができるようになりたい。仲間と一緒に成長し続けたい。	〇これまで対話をしてきた内容について交流する場を位置づける。 〇これまでの対話のメモやポートフォリオ等を見返しながら、自分の考えをつなげたり、深めたりしながら対話ができるようにする。 〇学級全体の思考の流れがつかめるよう、構造的な板書でそれぞれの考えや意見を位置づける。また、道徳的諸価値を表出した言葉、自分たちの生活や経験と結びつけて考えたことを板書に位置付ける。 〇これまでの対話の中から出てきた「人と人とのつながり」に関係するキーワードと結び付けながら、考えをつなげていけるようにする。 **目標に迫った姿をどのように見届けるか** これまで対話してきた相手の生き方から学んだことを基に、交流する活動を通して、自己の変容を認識したり、自分にできることを考えたりしようとしている。（貢献する人間性） ・発言の様子やワークシートの記述から見届ける。

第９学年　学びのカテゴリー「社会に生きる」

生徒は、これまでのどう生きるか、学びのカテゴリー（探究領域）ごとにある様々な問題を発見し、その問題を自分のこととして捉え、解決しようと考え判断し、行動してきた。その経験を通して、社会に生きる人々は様々な見方や考え方をもって生きていることを学び、前向きに自分の得意なことや苦手なことと向き合い、将来を見据え考え始めている。そんな生徒が第８・９学年で探究する学びのカテゴリーは、「社会に生きる」である。 多様な価値観をもつ人が生きる社会の中で「自分はこれからどう生きていきたいのか?」を考え、テーマをもち、自身の将来を見据えながら探究する。生徒が自身の将来を考える中で、社会や自分に必要なものや磨くべきことを模索し、判断し、それらを確立させるために行動する姿の具現を目指していく学びである。

第１単元「社会を考える」では、各グループで設定した探究テーマを基に東京研修で調査活動を行った。

「多文化共生」をテーマにしたグループでは、外国人と共に住むまちづくりを目指す活動を行っている市民活動団体の方に話を聞き、互いに理解し合うことや相手を大切にしようとすることが、多文化共生社会の実現に大切であると学ぶことができた。グローバル化が進む多文化共生社会の中で、どう生きるべきかを考えたいという願いをもち、岐阜市の現状や在住外国人の思いを調べ、自分の中にある壁に、どのように向き合えば、様々な国や地域の人と互いに理解し合うことができるのか考え続けている。

「地域の魅力づくり」をテーマにしたグループでは、アートを取り入れて街の魅力を創出している企業を訪問して話を聞き、アートの魅力や可能性を通して地域のもつ魅力を活かすことができると学んだ。岐阜でアートを活かした活動や地域の魅力づくりをしている人と出会い、柳ヶ瀬商店街で行われるイベントの企画・運営を協働して行った。このような取組が、継続的に行われるように、その改善案を提案するなど、社会に関わり続けようとしている。

潮田　航大
大塚　光朗
浅井　拓也
丹下　侑輝
髙橋　亮
大坪　雅詩

第９学年Aグループ　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：社会に生きる　（全105時間）

第９学年の目標	（１）問題解決力に関わって　実社会や実生活の中にある問題に対する問いを生み出し、社会がよりよくなるように自分に何ができるか様々な視点や立場から考え、行動することができるようにする。											
	（２）関係構築力に関わって　仲間や実社会に生きる人の考えを共感的に受け入れ、自他の願いや考えを踏まえた上で、他者と協働しながら納得解や最適解を導こうとすることができるようにする。											
	（３）貢献する人間性に関わって　自分や社会について考え、社会に生きる人々に敬意をもちながら、自分にできることを進んで考え、他者とともに社会のために行動しようとする態度を養う。											
カテゴリー設定の理由	７年生までに、様々な問題と出会い、解決していく過程で、自分を取り巻く社会で生きる人々は、いろいろな見方や考え方をもって生きていることを理解しながら学んできた。自分の得意なことや苦手なことが認識できるようになり、自分の将来のことも考える時期である。これまで学んできたことを生かし、多様な価値観をもつ人が生きる社会で「自分はこれからどう生きていきたいのか？」を考え、自身の将来を見据える。その将来を考える中で、自分に必要なものや磨くべきこと等を模索し、判断し、それらを確立させるため行動する姿を具現させたい。											
学びの基盤となる道徳的諸価値	自主、自立、自由と責任・向上心、個性の伸長・希望と勇気、克己と強い意志・真理の探究、創造・思いやり、感謝・礼儀・相互理解、寛容・社会参画、公共の精神・勤労・よりよい学校生活、集団生活の充実・郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度・国際理解、国際貢献・自然愛護・よりよく生きる喜び											
学びを構成する要素	社会　社会問題　国際理解　国際問題　日本と諸外国の違い　多文化共生社会　自然環境　SDGs　勤労　多様性　伝統文化　食文化　福祉　地域社会　働き方　政治　テクノロジー　社会貢献　ウェルビーイング											
月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	社会を考える（52時間）				多文化共生社会の実現に向けて身の回りで実現されていることについて情報を収集する	社会をつくる（41時間）				社会に生きる（12時間）		
主な学習活動	○各自の問いをもとに、探究テーマを考える。 ○探究テーマをもとに、どんな活動をしたいかを考える。 ○東京研修で見てみたいこと、聞きたいことをもとに、研修先を大久保地域に決める。 ○大久保地域で誰に会い、どんなことを聞いたり調べたりしたいか、研修の計画を立てる。 ○東京研修で体験活動や調査活動を行う。学んだことをまとめる。 ○私たちの生活する岐阜ではどんなことを考えたり探究したりできそうか、東京研修で広がった視点を軸にしながら考える。		○東京研修での学びをもとに、岐阜で多文化共生に関わってどんなことをしたり考えたりしたいかを話し合う。 ○自分たちが学びたいことについて関わりのある団体や人について考え、出会う。 ○出会った方々と、多文化共生や岐阜の現状について対話する。 ○多文化共生について学んできたことをもとに、夏休み中の個人探究についての計画を立てる。			○夏休み中に行った個人探究について、グループ内で交流する。 ○もっと多くの外国人や、様々な立場の方々の思いを聞くには、誰とアポイントメントを取り、どんな活動していくとよいかを考える。 ○岐阜市国際交流協会で働く方々や、外国人留学生などと対話したり文化交流をしたりすることを通して、多文化共生についての理解を図ったり、誰もが住みやすい社会について考えを深めたりする。 ○自分たちと関わってきた方々と日本文化や他国の文化を交流し合い、もっと互いに分かり合えるようなイベントを企画し、実行する。 ○自分の問いを振り返り、自分の考えのがどのように変容がしたのか、またそれはどんな体験や思いがあったからなのかを客観的に見つめ、まとめる。 ○実施してきた活動や交流をふり返った上で、多文化共生とはどのようなことか自分の考えを見つめ直す。				○多文化共生に関わって学んだことや考えたことを、市役所や国際交流協会の方に発信する。 ○自分が学んだことやまとめたことについて、自学級に戻り交流する。 ○自分の問いについてまとめたことや、仲間の学習から学んだことをもとに、自分の考えの変容や成長をまとめる。 ○どう生きるかの学習で学んだことや考えたこと、自分の生き方についてまとめたことを、後輩に伝える。		
想定されるエラー（■）ジレンマ（●）【道徳的諸価値】	■個々の問いはみんな違うけど、その中でどんなことをみんなと考えていけばいいのだろう。 ●東京と岐阜では、住んでいる外国人の数が違うし、生活の様子や環境も違う。そのため、住んでいる人たちの考え方や意識も違う。どちらの考え・実態も分かるけど、どちらを尊重して活動していくべきだろうか。 ●１つの問題を解決しようとすると、別の問題が出てくる。どちらを優先的に考えるべきなのかな。 【　相互理解、寛容　社会参画、公共の精神　勤労　国際理解、国際貢献　真理の探究、創造　】					■外国人に日本の文化やマナーなどを伝えようとしたが、うまく伝わらなかった。 ■もっと岐阜のことを知ってもらうためによさや魅力を伝えたい。でも、外国人がよいと感じてもらえる場所がとしてふさわしいかが分からない。 ●自分たちがやりたいツアーの提案がうまくかなかった。外国人や意見を言ってくださった方と、自分たちの思いにズレがある。どちらを尊重すればいいのだろうか。 【　相互理解、寛容　社会参画、公共の精神　勤労　国際理解、国際貢献　真理の探究、創造　郷土の伝統と文化の創造、郷土を愛する態度　】				■今までどう生きるかを通して様々なことを考えてきたけど、自分の進路や生き方にどうつなげていけばよいか分からない。 ●相手意識や、お互いを受け入れ合う気持ちをもつことで、誰もが安心して過ごせる関係を築くことができると分かったが、実際に社会に出たときにそこまで考えて行動できるかが不安だな。 【　向上心、個性の伸長　希望と勇気、克己と強い意志　社会参画、公共の精神　よりよく生きる喜び】		
人材活用施設	共住懇　代表　山本重幸さん 岐阜市役所　国際課 岐阜市国際交流協会 多文化交流プラザ					岐阜市役所　国際課 岐阜市国際交流協会 多文化交流プラザ 岐阜大学　留学生センター 岐阜県国際交流センター				岐阜市役所　国際課 岐阜市国際交流協会		
教科等との関連	・国語：聞き上手になろう～質問で思いや考えを引き出す～ ・社会：二度の世界大戦と日本、現代の日本と私たち ・数学：データの分析　データの比較と箱ひげ図　確率　標本調査					・国語：立場を尊重して話し合おう～討論で多角的に検討する～ ・社会：現代社会と私たち、個人の尊重と日本国憲法、現代の民主政治と社会、私たちのくらしと経済 ・数学：データの分析　データの比較と箱ひげ図　確率　標本調査 ・英語：Unit4 Be Prepared and Work Together、Unit5 A Legacy for Peace				・国語：国語の学びを振り返ろう ～テーマを決めて話し合い、壁新聞をつくる～ ・社会：地球社会と私たち、より良い社会を目指して ・英語：Unit6 Beyond Borders		

９年Ａグループ　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 「社会」をつくる (41)	①自分の問いやグループの探究テーマに迫るために、誰と出会い、どんな活動を行うか計画を立てることができるようにする。 ②問題解決に向けて何ができるか、様々な視点から手段・方法を考え、行動することができるようにする。	①問題解決に向けて、実社会に生きる人や仲間との関係を築きつつ、その考えや価値観を受け入れることができるようにする。 ②他者との関わりで導いた納得解や最適解をもとに、自分の関わり方を見つめることができる。	①実社会に生きる人や仲間の多様な価値観に気付き、敬意をもって働きかけようとする態度を養う。 ②自分にできることを考え、積極的に活動に参加したり、提案しようとしたりする態度を養う。

活動の計画	○夏休みに個人探究したことを交流する。交流したことや今までの学習をもとに、個人の問いやグループの探究テーマに迫るためにはどんな学習をしたいか考え、計画を立てる。(問題①) ○多様な立場や考えの方と対話し、多文化共生について理解していきたいという願いを基に、たくさんの外国人が集まる場所を調べる。(貢献①)　(５)	○岐阜市に住む外国人と対話や活動をし、思いや考え方、互いの文化を交流する。(関係①) ○体験をもとに対話し、自分の考えを深めたり、広い視野で考えたりする。(貢献①) ○継続して外国人と関わり、一緒に活動する中で、もっと関わりをもつ方法や工夫を考える。(問題②)　(16)	○これまでに学んだことや話し合ったこと、体験したことをもとに、「岐阜市の魅力エンジョイツアー」のコンセプトや企画内容について話し合う。　(問題①) ○企画した内容について、多様な立場や考え方の方から意見を聞き、それらを受け入れた上で修正する。　(関係①) ○自分たちが考えたツアーを留学生に PR し、参加者を募る。　(問題①)　(12)	○自分たちができることとして計画したツアーを実践する。(貢献②) ○実践した活動について、外国人からフィードバックやアドバイスをもらい、自分たちの関わり方を見つめ直す。(関係②) ○学習してきたことや経験してきたことをふり返り、多文化共生に対する考えや意見について自分の考えを見つめ直す。(関係②)　(８)
加除修正欄				
想定される姿	・普段気付かなかったけれど、身の回りには外国人の方々が安心して住めるような工夫がたくさんあった。 ・岐阜市は誰にとっても安心して生活できる場所なのかをもっと考えていきたい。 ・もっと多くの外国人の思いや考え方を知った上で、自分たちができることを考えていきたい。	・最初はうまく話せるか心配だったけど、一緒に遊んだり話したりしていくうちに、気軽に話せるようになった。関わり、互いを知ることは大事だな。 ・偏見や差別を減らすには、もっと深く外国人と関わり、互いを理解し合うことが大切だと分かった。 ・人と人とのつながりが、安心や笑顔を生むのだと分かった。	・外国人の方々がツアーを楽しみながら岐阜の魅力を知ったり、お互いを理解し合えたりできる企画になるように考えて、実行していきたい。 ・関わっていくうちに、外国人というより「○○さん」という見方に変わった。 ・相手が外国人でも日本人でも、相手のことを知ることが心の距離を縮めることにつながる。この学びを伝えていきたい。	・自分たちが考えたことや学んだことについて、多くの方に伝えていきたい。 ・相手を受け入れるという思いや、他者のことも大切にするという考え方が、多文化共生の実現には大切なのだな。
実際の姿				
●ジレンマ ■エラー	■無意識のうちに自分と相手との間に壁を作ってしまうのはどうしてなのか。 ■国が違うだけで、文化や常識を受け入れられないのはどうしてか。	●どうすれば○○さんのことを、もっと仲の良い関係だと思えるようになるのかな。 ■外国人の思いを尊重して企画したいが、すべて実現させるのは難しいな。	●体験を通して学んだことや考えたことは、どうすれば多くの方たちに伝わるか。	

９年Ａグループ　本時案　（南舎２階多目的ホール）

目標

外国人との体験や学習を通して考えた岐阜市内案内プランの内容をゲストティーチャーと対話する活動を通して、「差別や偏見をなくし、誰もが安心して生活できる多文化共生社会を実現したい」という願いを基に、自分と異なる立場の考えを受け入れながら、自分の意見や提案を見つめ直したり再構築したりすることができる。（関係構築力）

本時（27/41）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　これまでの学習の歩みを振り返る。 どうすれば外国の方に岐阜市の魅力を楽しんでもらえるプランになるか。 〇これまでの学習や体験を踏まえて、自分たちはどんなことを学び、考えてきましたか。 ・誰もが安心して生活できる岐阜市にしたいという願いをもとに、岐阜市の取組を知ったり、岐阜大学の留学生の方たちと関わったりしてきた。留学生と関わることで、外国の方に対する見方が変わってきた。自分たちのことを知ってもらえるのはもちろんだけれど、相手の国や相手のことを知るのも楽しいことだと分かった。今日はゲストティーチャーの方々から意見をいただき、岐阜市の魅力をもっと知ってもらえるプランにしていきたい。 **２　自分たちが考えた企画をゲストティーチャーに提案し、意見やアドバイスを聞く。** ・自分たちが考えた企画のコンセプトを分かってもらえてよかった。岐阜市のよさや魅力を伝えたり、留学生の方たちと一緒になって企画を楽しんだりしたい。 ・ゲストティーチャーの方から意見をいただいて、修正すべき点が分かった。自分の経験や思いも入れてプレゼンできると説得力があるものになると分かった。また、日本のルールやマナーなどについてもツアーの中で伝えていきたい。 ・外国人目線での意見をもらえて、自分たちのプランを見直すことができた。相手の思いや立場を大切にしたツアーにしたいし、そういう気持ちが多文化共生につながるのだと思った。 **３　自分たちのプランは、岐阜市の魅力を伝えられる内容になっているかを見つめ直す。** 〇みんなで考えた行き先を案内することで、本当に岐阜市のよさや魅力を伝えられるかな。 ・金華山や岐阜城の詳しい歴史までは、うまく話せるか心配だな。事前にもっと調べておく必要がある。 ・人からの意見や予測では、説得力がないから魅力的ではない。自信をもって魅力を伝えながら案内できるといいな。 ・長良川を一緒に見るだけではなく、鵜飼や花火大会のこともそこで話すことで、より魅力が伝わるな。 ・自分は金華山に何度も登ったことがあるし、鮎菓子が好きだから、それらのよさや魅力を自分の経験を話しながら案内して伝えたいな。そうすることで、相手に自分のことをより理解してもらえることにもつながる。 **４　本時の振り返りをノートに書く。** ・自分の経験や思いを伝えることでより魅力が伝わるし、それにより相手ともっとつながりあえるのだと思った。お互いのことを理解し合えるように努力することが、多文化共生の実現には大切だと思ったし、ツアーのときだけでなく、外国の方と接する上で大切にしていきたい。	〇これまで考えてきたことや学習してきたことを、代表生徒がゲストティーチャーに伝えながらふり返り、本時の学習の目的を共有する。 〇学習の中でどう考えたかについて、これまでの経験や、考えてきたことをもとに話せるようにする。 ゲストティーチャー候補 ・国際交流協会の方　１名 ・岐阜観光コンベンション協会の方　１名 ・岐阜大学の留学生　２名 「外国人を支える活動をしている団体」「観光を促進している団体」「岐阜市に住む外国人」の３つの立場の方から意見をいただき、交流する。 〇ゲストティーチャーの意見を聞いてどう思ったかを問い、自分の意見をふり返ったり、再構築したりできるようにする。 〇「なぜそう思えたの？」「どんな体験を通してそう思ったの？」などと問い、考えが変化した理由や価値観の変容に生徒が気付けるようにする。 **目標に迫った姿をどのように見届けるか** ゲストティーチャーや仲間の考えを聞いて、自分とは異なる立場の考えに共感したり、その上で自分の考えを見つめ直したり、再構築したりしている。（関係構築力） ・発言の様子やノートの記述から見届ける。

９年Ｅグループ　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：社会に生きる　（全105時間）

第９学年の目標	（１）問題解決力に関わって　実社会や実生活の中にある問題に対する問いを生み出し、社会がよりよくなるように自分に何ができるか様々な視点や立場から考え、行動することができるようにする。											
	（２）関係構築力に関わって　仲間や実社会に生きる人の考えを共感的に受け入れ、自他の願いや考えを踏まえた上で、他者と協働しながら納得解や最適解を導こうとすることができるようにする。											
	（３）貢献する人間性に関わって　自分や社会について考え、社会に生きる人々に敬意をもちながら、自ら進んでできることを考え、他者とともに社会のために行動しようとする態度を養う。											
カテゴリー設定の理由	第７学年までに、様々な問題と出会い、解決していく過程で、自分を取り巻く社会で生きる人々は、いろいろな見方や考え方をもって生きていることを理解しながら学んできた。自分の得意なことや苦手なことが認識できるようになり、自分の将来のことも考える時期である。これまで学んできたことを生かし、多様な価値観をもつ人が生きる社会で「自分はこれからどう生きていきたいのか？」を考え、自身の将来を見据える。その将来を考える中で、自分に必要なものや磨くべきこと等を模索し、判断し、それらを確立させるため行動する姿を具現させたい。											
学びの基盤となる道徳的諸価値	自主、自律、自由と責任・向上心、個性の伸長・希望と勇気、克己と強い意志・真理の探究、創造・思いやり、感謝・礼儀・相互理解、寛容・社会参画、公共の精神 勤労・よりよい学校生活、集団生活の充実・郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度・国際理解、国際貢献・自然愛護・よりよく生きる喜び											
学びを構成する要素	社会　社会問題　国際問題　日本と諸外国の違い　自然環境　科学技術　SDGs　勤労　多様性　伝統文化　福祉　地域社会　政治　働き方　テクノロジー　芸術　ウェルビーイング											
月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名（時数）	社会を考える（52時間）				アートがどのように社会貢献に用いられているか情報を収集する。自分のやりたいアートの現状をまとめる。	社会をつくる（41時間）				社会に生きる（12時間）		
主な学習活動	○各自の問いをもとに、探究テーマを考える。 ○探究テーマをもとに、どんな活動をしたいかを考える。 ○東京研修で見てみたいこと、聞きたいことをもとに、研修先を天王洲アイルに決める。 ○天王洲アイルで誰に会い、どんなことを聞いたり調べたりしたいか、研修の計画を立てる。 ○東京研修で体験活動や調査活動を行う。学んだことをまとめる。 ○私たちの生活する岐阜ではどんなことを考えたり探究したりできそうか、東京研修で広がった視点を軸にしながら考える。		○東京研修での学びをもとに、岐阜でアートを用いて活動している人を調べる。 ○岐阜でアートを用いて活動をしているニュー銀座堂の渡邉さんに出会う。 ○岐阜柳ケ瀬商店街を訪れ、アートがどのように使用されているかを調査する。 ○自分たちがやってみたいアートを考える。 ○アートを発信する方法としてＳＮＳの使い方をgifugramの波多野さんから聞く。 ○自分たちがやってみたいアートをアーティストに提案する。			○夏休みに行った個人探究について交流し、アートが社会の中でどのような役割を果たしているか分析する。 ○岐阜柳ケ瀬商店街でアートがどのように活用されているか調査する。 ○岐阜柳ケ瀬商店街の水野さんやイベント実行委員の方と出会い、話を聞く。 ○イベントの計画を立てる。各担当に分かれ、協力してくださる方や企業にアポイントを取る。 ○各担当と協力してくださる方で思いを共有し、イベント開催に向けて準備をする。 ○柳ケ瀬商店街の方の意見をもとに、修正する。 ○地域の小学校や地域の方へイベントの告知を行う。 ○イベントを開催する。 ○イベントを通して見たこと、聞いたこと、感じたことを、交流する。 ○イベントの改善案を考える。 ○柳ケ瀬商店街の人へ改善案を提案する。 ○柳ケ瀬商店街の人の意見をもとに改善案を修正する。				○２年間の探究を振り返り、まとめる。 ○自分が学んだことやまとめたことについて、自学級に戻り交流する。 ○自分の問いについてまとめたことや、仲間の学習から学んだことをもとに、自分の考えの変容や成長をまとめる。 ○どう生きるかの学習で学んだことや考えたこと、自分の生き方についてまとめたことを、後輩に伝える。		
想定されるエラー（■）ジレンマ（●）【道徳的諸価値】	■個々の問いはみんな違うけど、その中でどんなことをみんなと考えていけばいいのだろう。 ●なぜ渡邉さんは岐阜柳ケ瀬商店街にアートコミュニティの場を作ろうとしたのか。自分がアートを作り、展示するのでもよかったのではないか。 ■自分たちが提案したアートに対し、「あなたたちの本当にやりたいことって何なの？」と言われてしまった。 【　相互理解、寛容　社会参画、公共の精神　勤労　国際理解、国際貢献　真理の探究、創造　】					■柳ケ瀬商店街へ来る人が増えたことは嬉しいけど、その分様々な人への配慮を考えることができていなかった。 ●子どもを対象としたイベントで多くの人が訪れたのはよかったが、それによって別の問題も起きた。イベントを実施することが本当に商店街のためになったのだろうか。 【　相互理解、寛容　社会参画、公共の精神　勤労　国際理解、国際貢献　真理の探究、創造　郷土の伝統と文化の創造、郷土を愛する態度　】				■今までどう生きるかを考えてきたけど、自分の人生をよりよくするにはどの考え方が大事になるだろう。 ●自分の行ってきた活動と仲間の行ってきた活動のどちらの良さも分かる。社会にとっては今どちらが大切になるのだろう。 【　向上心、個性の伸長　希望と勇気、克己と強い意志　社会参画、公共の精神　よりよく生きる喜び】		
人材活用施設	〈昨年度までの人材〉 ７年生　・柳ケ瀬商店街・岐阜大学留学生センター・岐阜国際交流センター ８年生　・ぎふコーラ・長良川漁協・都ホテル・カムカムスワロー・大日コンサルタント ・寺田倉庫 ・ニュー銀座堂　・gifugram　・市役所					・東京研修での校外学習先で紹介してもらった人や企業 ・夏休みに調べてきた人や企業 ・ニュー銀座堂 ・岐阜で活動するアーティスト ・gifugram ・岐阜柳ケ瀬商店街 ・岐阜市役所				・ニュー銀座堂 ・岐阜で活動するアーティスト ・gifugram ・岐阜柳ケ瀬商店街 ・岐阜市役所		
教科等との関連	・国語：立場を尊重して話し合おう～討論で多角的に検討する～ ・社会：日本の地域的特徴と地域区分（人口、産業、交通、通信） ・数学：データの分析　データの比較と箱ひげ図　確率　標本調査 ・美術：学校の空間 ・英語：Unit2 Haiku in English					・国語：国語の学びを振り返ろう ～テーマを決めて話し合い、壁新聞をつくる～ ・社会：日本の諸地域 ・数学：データの分析　データの比較と箱ひげ図　確率　標本調査 ・美術：メッセージを考える ・英語：Unit6 Beyond borders				・国語：国語の学びを振り返ろう ～テーマを決めて話し合い、壁新聞をつくる～ ・数学：データの分析　データの比較と箱ひげ図　確率　標本調査 ・英語：Unit6 Beyond Borders		

９年Ｅグループ　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 「社会」をつくる (41)	①自分の問いやグループの探究テーマに迫るために、誰と出会い、どのような活動を行うか計画を立てることができるようにする。 ②問題解決に向けて何ができるか、様々な視点から手段・方法を考え、行動することができるようにする。	①問題解決に向けて実社会に生きる人や仲間と関係を築き、その考えや価値観を受け入れることができるようにする。 ②他者との関わりで導いた納得解や最適解をもとに、自分の関わり方を見つめることができるようにする。	①実社会に生きる人や仲間の多様な価値観に気付き、敬意をもって働きかけようとする態度を養う。 ②自分にできることを考え、積極的に活動に参加したり、提案したりしようとする態度を養う。

活動の計画	○夏休みに行った個人探究について交流する。交流したことや今までの学習をもとに、個人の問いやグループの探究テーマに迫るためにはどんな学習をしたいか考え、計画を立てる。(問題②) ○アートは社会の中でどのような役割を果たしているかを調査する。(問題①) ○岐阜柳ケ瀬商店街をアートの視点で分析し、柳ケ瀬商店街の水野さんやイベント実行委員の小山さんから話を聞く。(関係②)　(５)	○イベントの実行委員の小山さんからハロウィンイベントのコンセプトや概要を聞き、自分たちが参加する方法や工夫を考える。(貢献①) ○各担当に分かれ、柳ケ瀬商店街の人にアポイントメントを取る。その方とどんな企画にしたいか交流する。(関係②) ○各担当で活動を計画し、ハロウィンイベントに向けて準備を行う。(問題②) (16)	○生徒が前期課程（小学校）校舎へ行き、ハロウィンイベントの開催の告知を行う。(関係①) ○ハロウィンイベントの最終打ち合わせを行う。(問題②) ○ハロウィンイベントを開催する。(関係②) ○ハロウィンイベントの経験を振り返り、感じたことをまとめ、交流する。(問題②) ○来年度のハロウィンイベントに向けた改善案を考える。　(問題②) ○来年度イベントの改善案を柳ケ瀬商店街の人に提案し、協議する。(関係①) (12)	○柳ケ瀬商店街の人の意見をもとに、来年度のイベントの改善案を修正する。(問題②) ○他学年に向けて改善案を発表し、柳ケ瀬のことを知る人を増やす。(関係②) (8)
加除修正欄	○地域の魅力を作るために柳ケ瀬商店街が行っている企画を調査する。(問題①)	○各担当に分かれ、~~柳ケ瀬商店街の人にアポイントメントを取る。その方と~~どのような企画にしたいか交流する。(関係②)	○来年度の柳ケ瀬商店街のイベントについて考える。(問題②) ○来年度、柳ケ瀬商店街で実施するイベントについて協議する。(関係①)	
想定される姿	・アートは社会で多く使われていることが分かる。社会にどんな影響を与えているのだろう。 ・柳ケ瀬や岐阜のまちでアートを活かした活動をしたい。	・美術の授業で使ったアプリを用いてチラシを作ることができそうだ。 ・私は参加者が楽しみ、まちの人と交流が生まれるイベントにしたい。 ・柳ケ瀬商店街の人とともにハロウィンイベントを成功させたい。	・より多くの人に私たちの思いを伝えるために、直接宣伝をしたい。 ・柳ケ瀬の人や参加者全員がよかったと思うイベントにするには何が必要だろう。 ・今回のイベントをよりよいものにして続いていってほしい。	・柳ケ瀬商店街の人の思いも大切に、改善案を修正したい。 ・自分たちが企画したことや考えた改善案を、他学年に伝え、今後も柳ケ瀬商店街に関わる人が増えてほしい。
実際の姿	・高島屋が閉店した柳ケ瀬商店街で活動する水野さんの動画を見て、私たちも柳ケ瀬の再興に協力したいと思った。	・柳ケ瀬商店街の人から、柳ケ瀬らしさとは何かを聞かれ、うまく答えることができなかった。そのため、柳ケ瀬商店街についてもう一度調べた。		

●ジレンマ ■エラー	■柳ケ瀬商店街へ来る人が増えたことは嬉しいけど、その分様々な人への配慮を考えることができていなかった。	●子どもを対象としたイベントで多くの人が訪れたのはよかったが、それによって別の問題も起きた。イベントを実施することが本当に商店街のためになっただろうか。
	●私たちがやりたいことと、社会が求めているものが違った。自分たちのやりたいことも社会が求めていることもどちらも間違っていない。どうしたらよいだろう。	

９年生Ｅグループ　本時案　（南舎２階多目的ホール）

目標

柳ケ瀬商店街で実施したハロウィンイベントを振り返り、来年度に向けた改善案を協力してくださった方へ提案する活動を通して、「人と人がつながるうイベントにするために、来年度のイベントをよりよくしたい」という願いを基に、同じグループの仲間やイベントに協力してくださった方の考えを共感的に受け入れたり、折り合いをつけたりし、改善案やイベントを来年度以降も発展していくようにと考えることができる。（関係構築力）

本時（27/41）

活動内容（〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け
１　イベントの振り返りから、本時の見通しをもつ。 ・私たちのグループでは「岐阜に行きたいと思えるまちにしたい」という探究テーマで学びを進めてきました。柳ケ瀬商店街で行われるハロウィンイベントでアートを利用し、企画運営してきました。今日はその経験をもとに、来年度に向けた改善案を発表します。 人と人がつながるイベントにするために、来年度はどんな改善をすることができるだろう。 **２　イベントに協力してくださった方へ、成果・課題や改善案を発表する。** 〇柳ケ瀬商店街のイベントを来年度に向けてどんな改善ができるでしょうか。 ・今回のイベントでは、商店街のお店とアーティストの方がつながり、看板を作ることができました。お店の方の願いがアーティストの方の力で形になったことで、双方向の意見の折り合いをつけていくのがすごく難しかったが、話し合ったことでみんなの思いを一致させることができた。一緒に集まって話ができる機会を増やしたい。 ・私たちは、もっと子どもたちの動きを分かりやすくしないといけないと思いました。実際に参加者の動きを見ていると、待ち時間が多かったり、休憩が必要だったりで、どこで何ができるのかを話せるスタッフの数が必要だと感じた。 **３　改善案を全体で交流する。** ・商店街にこれだけの人が集まることが分かったから、企画をもっと増やしたい。しかし、その分対応も難しくなるため、ボランティアの募集をかける必要があると分かった。また協力してくれる企業を増やすこともできそうだと教えてもらったため、ハロウィンの仮装イベントをもっと大規模にできそうだ。 ・今回はイベントで多くの人を集めることができた。しかし、参加者が多く、苦労している人がいたことも分かった。参加者を増やすことも大切だが、様々な参加者がいることも配慮したい。 ・アーティストの方にも装飾を協力してもらったことでクオリティの高いものができた。お金を集めて、有名なアーティストの方に書いてもらうのはどうだろう。参加者や商店街の負担になってはいけないが、私たちが作った人とのつながりを生かすことはできるはずだ。 **４　本時の学びの振り返りをノートに書く。** ・イベントを通して、多くの人と意見を重ねるうちに、それぞれの立場をつなげて個別では生み出せなかった良さを生み出すことができるようになってきた。これがみんなで創り上げることの大切さだと思うし、こうやって自分が意見を言うことでよりよいものに変えていけるといいなと思った。	〇柳ケ瀬商店街の人やアーティストとの関わりが想起できるように今までの学びを掲示する。 〇ハロウィンイベントでの経験やこれまで考えてきたことを振り返り、本時の学習の目的を共有する。 〇「どうしてその改善案を提案したのか」と問い返し、経験から自分の意見を語れるようにする。 〇イベントに協力してくださった方と交流することができる場を位置づけ、生徒がイベントの改善案をより客観的に見つめ直すことができるようにする。 ゲストティーチャー（予定） 浅野商店 サツキテーラー 柳ケ瀬商店街でお店を出している方 ニュー銀座堂のアーティストの方 〇意見を再構成する場を位置づけ、生徒がイベントに協力してくださった方の意見を聞いて、考えたことや迷ったことを共有することができるようにする。 〇様々な人の意見に触れた子どもの意識の変化が分かる記述を紹介し、これからどうすればよいか見通しをもつことができるようにする。 **目標に迫った姿をどのように見届けるか** 自分たちが実施したイベントでの経験をもとに、同じグループの仲間や協力してくださった方の考えを共感的に受け入れ、来年度以降のイベントをより発展させようと提案する姿から見届ける。 ・全体交流の場での発言の様子やノートの記述から見届ける。

特別支援学級３・４年
学びのカテゴリー「遊び・生活づくり」

第１・２学年では、願いをもって遊ぶことを通して、自分から周りの仲間へと、かかわりを広げ、一緒に取り組むよさを感じられるように活動を仕組んできた。第３・４学年では、自分が育てたい作物を作り、収穫したものを仲間と共有する活動や自分も仲間も楽しく遊べるように工夫して活動することを通して、自分の活動は自分だけでなく、周りの仲間の喜びにもつながることを経験する。仲間とよりよい関係をつくるために自分にできることはないかを自分なりに考え、その願いを実現していくことができるようにしていきたい。

７月までの学習では、たくさんのダンボールを目の当たりにすると、「自分たちの部屋を作りたい。」と願い、個々の部屋やみんなで入ることのできる部屋を作ることを繰り返した。繰り返すうちに、温泉を作ったり、道路や線路を作って遊んだりするようになり、「自分たちのまちをつくりたい」という願いに発展していった。

９月以降は、町探検に行き、自分たちでテーマを決めることで、よりまちづくりに対する具体的なイメージをもち、工夫していくことができるように活動を展開していく。

特別支援学級９年
学びのカテゴリー「進路・余暇」

子供たちは、第９学年までに、作業学習を行うことや高等部を調べることを通して、自立心や協同心等が育まれてきた。第９学年では、卒業後の進路先や職業について調べることを通して、自分の進路について理解をする。その中で興味をもった職業について体験することを通して、働くことの意義や、やりがいを学んでいく。また、仲間と一緒に様々な余暇活動を行うことを通して、自分の好きな時間を有意義に過ごす楽しさも味わっていく。ときには身近な人と相談しながら、自己選択、自己決定することを通して、自分の将来の生き方を考えていく。

９年４組では、東京研修の企業見学において「オリエンタルランド」の特例子会社の「舞浜コーポレーション」の業務内容を見学した。生徒は、そこで働く人の姿に憧れをもち、同じ活動をしたいと願うようになり、アイロンがけの活動を行うようになった。その後、憧れの対象であるＡさんと交流をしながら、アイロンがけの技術や働く上で大切なことを学ぶことを通して、「もっといろんな事業所の様子や、そこで働く人と交流したい。」と願うようになった。第２単元では、岐阜県の事業所の方と交流することを通して、体験や人から話を聞く活動の中から「働く上で大切なこと」を学んでいく。

長島ヒデキ　江口隆寛　牧村拓　平野和俊　新居豊子　土生雄一

３・４年４組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：遊び・生活づくり（全105時間）

特別支援学級 第３・４学年の目標	（１）問題解決力に関わって	自分の願いをもち、何を作りたいか、どのように作りたいかなど自分の考えをもって活動すると共に、願いに向かって活動に没頭したり、次にやりたいことを考えたりすることができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	自分の思いを伝えたり、仲間の思いを聞いたりするなどして活動をすると共に、誘われる、誘うなどして一緒に活動したり、仲間のよいところを見付けたりすることができるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	活動する中で、「できた。」「楽しい。」と感じたり、仲間を誘って楽しんでもらおうと願い、「一緒にできた。」「一緒にできて楽しい。」と感じたりすることができるようにする。
カテゴリー設定の理由	第１・２学年では、願いをもって遊ぶことを通して、自分から周りの仲間へと、かかわりを広げ、一緒に取り組むよさを感じられるように活動を仕組んできた。第３・４学年では、自分が育てたい作物を作り、収穫したものを仲間と共有する活動や自分も仲間も楽しく遊べるように工夫して活動することを通して、自分の活動は自分だけでなく、周りの仲間の喜びにもつながることを経験する。仲間とよりよい関係をつくるために自分にできることはないかを自分なりに考え、その願いを実現していくことができるようにしていきたい。	
学びの基盤となる道徳的諸価値	善悪の判断、自律、自由と責任・個性の伸長・希望と勇気、努力と強い意志・親切、思いやり・感謝・友情、信頼 相互理解、寛容・規則の尊重・勤労、公共の精神・家族愛、家庭生活の充実・よりよい学校生活、集団生活の充実・自然愛護	
学びを構成する要素	人（自分、仲間、先生）　畑　達成感　心地よさ　仲間と力を合わせて　収穫への期待　貢献　仲間に喜んでもらえた喜び　自分の成長	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月		10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名 （時数）	「野菜を育てて楽しもう①」（20時間）		「作ってあそぼう」（15時間）	「野菜を育てて楽しもう①」（10時間）		「野菜を育てて楽しもう②」（10時間）	「作ってあそぼう」（14時間）	「作ってあそぼう」（11時間）		「野菜を育てて楽しもう②」（13時間）		「作ってあそぼう」（12時間）	
主な学習活動	「去年の畑での活動を振り返ろう」 「育てたい野菜を決めよう①」 「収穫した野菜で何をするか決めよう①」 「野菜の育て方を知ろう」 〇これまでの畑での活動を振り返る。 〇自分や全員で育てたい野菜を決める。 〇収穫した野菜で何をするのか、アイデアを出し合う。 〇苗植え・水やり・草取りといった手入れの流れをつかむ。		「ダンボールであそぼう 」 〇どんな遊びの場にしたいかを決定する。 〇自分たちの願いに向かって、ダンボールを使って遊びの場を作る。 〇仲間から誘われたり、誘ったりしながら遊ぶ。	「育てた野菜を収穫しよう①」 「収穫した野菜で楽しもう①」 〇育てた野菜を収穫する。 〇食べる・遊ぶ・紹介するなど、決めたことを実践する。		「育てたい野菜を決めよう②」 「収穫した野菜で何をするか決めよう②」 〇前期での経験をもとに、自分の考えをもち、話せるようにする。 〇前期での経験をもとに畑の手入れを見通しをもつ。 〇自分が何をやりたいか願いをもち、行動に移す。	「〇〇ランドを作ってあそぼう①」 〇学校や町を探検する。 〇探検を基に遊びの場のテーマを決定する。 〇素材に慣れ親しみながら、テーマに沿って、作ったり遊んだりする。 〇自分の思いを伝えたり、仲間の思いを聞いたりして、楽しい遊びの場になるように活動する。		「〇〇ランドを作ってあそぼう②」 〇テーマに向けて、これまでの活動を基に、いろいろな素材を使って〇〇ランドを作る。 〇作ったり遊んだりする中で、「もっと～～したい。」と願い、〇〇ランドを作る。 〇仲間から誘われたり仲間を誘ったりしながら、できた〇〇ランドで一緒に遊ぶ。		「育てた野菜を収穫しよう②」 「収穫した野菜で楽しもう②」 「畑の活動をふりかえろう」 〇育てた野菜を収穫する。 〇食べる・遊ぶ・紹介するなど、決めたことを実践する。		「仲間をさそってあそぼう」 〇他の学級の仲間も誘って一緒に遊びたいと願い、そのために必要なことを考える。 〇仲間と一緒に楽しく遊ぶことを願いながら、遊びの場を作る。 〇仲間と一緒に遊んで楽しかったと実感をもつ。 〇今年の活動を振り返る。
想定される ●ジレンマ ■エラー 【道徳的諸価値】	■育てたい野菜が夏には育たない。 ■土や草を触りたくないな。 ■野菜が大きくなってきているのに、虫や鳥に食べられる。 ●仲間と意見が合わないな。 【希望と勇気、努力と強い意志・相互理解、寛容・自然愛護】		■ルールを守れない。 ■自分の気持ちを伝えられない。 ●自分のやりたいことと仲間のやりたいことが違うみたいだ。 【善悪の判断、自律、自由と責任・個性の伸長・親切、思いやり・規則の尊重】	■もっとたくさんの野菜を収穫したかった。 ●やりたいことはたくさんあるけれど、野菜の数には限りがあるな。 【感謝・家族愛、家庭生活の充実　よりよい学校生活、集団生活の充実・生命の尊さ】		■夏野菜と同じものは育てられない。 ■もっとたくさん、大きくなった野菜を収穫したいな。 ■野菜がなかなか大きくならないな。 ●仲間と意見が合わないな。 【希望と勇気、努力と強い意志・相互理解、寛容・自然愛護】	●自分のやりたいことと仲間のやりたいことが違うみたいだ。 ■どのように伝えるるとよいのかな。 ■思ったように作れないな。 【善悪の判断、自律、自由と責任・友情、信頼・相互理解、寛容・個性の伸長】		●自分のやりたいことと仲間のやりたいことが違うみたいだ。 ■もっと～～したいけど、思うように作れないな。 ■もっと～～したいけれど、どうやって伝えるとよいかな。 【善悪の判断、自律、自由と責任・友情、信頼・相互理解、寛容・個性の伸長・よりよい学校生活、集団生活の充実】		●やりたいことはたくさんあるけれど、野菜の数には限りがあるな。 【感謝・勤労、公共の精神　家族愛、家庭生活の充実・よりよい学校生活、集団生活の充実】		■どんなことをするとみんなが喜んでくれるのだろう。 ●みんなと遊ぶと、合わせる必要があるな。自分のやりたいことだけやれるわけではないんだな。 ■自分もみんなも楽しむためにはどうしたらいいのかな。 【希望と勇気、努力と強い意志・感謝・相互理解、寛容・規則の尊重・勤労、公共の精神・よりよい学校生活、集団生活の充実】	
人材活用 施設	・下級生の仲間 ・川光園芸 ・にっこり畑		・身近な場所（運動場、体育館、遊戯室、教室など）	・下級生の仲間 ・家族 ・先生 ・にっこり畑		・下級生の仲間 ・川光園芸 ・５～９年生の仲間 ・にっこり畑 ・南校舎の畑	・身近な場所（運動場、体育館、遊戯室、教室など）		・身近な場所（運動場、体育館、遊戯室、教室など）	下級生の仲間 家族 先生 にっこり畑		・４組の仲間 ・交流学級の仲間 ・身近な場所（運動場、体育館、遊戯室、教室など）	
教科等との関連	・国語：夏野菜図鑑 ・算数：いくつある？長さを測ろう ・理科：夏野菜を調べよう　野菜の成長の仕方 ・図画工作：畑の看板を作ろう		・国語：１日を振り返ろう ・算数：いくつある？ ・図画工作：遊びの道具を作ろう ・体育：体を動かそう	・国語：夏野菜図鑑 ・算数：野菜を教えよう ・理科：夏野菜を調べよう 野菜の成長の仕方 ・図画工作：収穫した野菜を描こう		・国語：秋冬野菜図鑑 ・算数：いくつある？ 長さを測ろう ・理科：秋冬野菜を調べよう ・図画工作：畑の看板を作ろう	・国語：１日を振り返ろう ・社会：町探検をしよう ・算数：いくつある？ ・理科：生きもの ・図画工作：遊びの道具を作ろう ・体育：体を動かそう		・国語：伝えよう ・社会：町探検をしよう ・算数：いくつある？ ・理科：生きもの ・体育：体を動かそう	・国語：秋冬野菜図鑑 ・算数：野菜を教えよう ・理科：秋冬野菜を調べよう ・図画工作：収穫した野菜を描こう		・国語：伝えよう　インタビューをしよう ・社会：町探検をしよう ・算数：いくつある？ ・理科：生きもの ・体育：体を動かそう	

３・４年４組　単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 作ってあそぼう (52)	①自分の願いをもち、何を作りたいか、どのように作りたいかなど自分の考えをもって、活動することができるようにする。 ②願いに向かって活動に没頭したり、次にやりたいことを考えたりすることができるようにする。	①自分の思いを伝えたり、仲間の思いを聞いたりすることができるようにする。 ②誘われる、誘うなどして一緒に活動したり、仲間のよいところを見付けたりすることができるようにする。	①活動する中で、「できた。」「楽しい。」と感じられる態度を養う。 ②仲間を誘って楽しんでもらおうと願い、「一緒にできた。」「一緒にできて楽しい。」と感じられる態度を養う。

活動の計画	ダンボールであそぼう ○どんな遊びの場にしたいかを決定する。(問題①) ○自分たちの願いに向かって、ダンボールを使って遊びの場を作る。(問題②) ○仲間から誘われたり、誘ったりしながら遊ぶ。(関係②) (15)	「○○ランドを作ってあそぼう①」 ○学校探検や町探検をする。(問題①) ○学校探検や町探検を基に遊びの場のテーマを決定する。(問題①) ○素材に慣れ親しみながら、テーマに沿って、作ったり遊んだりする。(問題②) ○自分の思いを伝えたり、仲間の思いを聞いたりして、楽しい遊びの場になるように活動する。(関係①) (14)	「○○ランドを作ってあそぼう②」 ○テーマに向けて、これまでの活動を基に、いろいろな素材を使って○○ランドを作る。(問題①) ○作ったり遊んだりする中で、「もっと～～したい。」と願い、○○ランドを作る。(問題②) ○仲間から誘われたり仲間を誘ったりしながら、できた○○ランドで一緒に遊ぶ。(関係②) (11)	なかまをさそってあそぼう ○他の学級の仲間も誘って一緒に遊びたいと願い、そのために必要なことを考える。(貢献①) ○仲間と一緒に楽しく遊ぶことを願いながら、遊びの場を作る。(問題②) ○４組や交流学級の仲間を誘って遊ぶ。(関係②) ○活動を振り返る。(貢献②) (12)
加除修正欄	・家を作りたいと願いをもち、活動を展開した。			
想定される姿	・ぼくは、～～な遊びの場にしたいな。 ・みんなはどんなことがしたいのかな。 ・たくさんダンボールを積んで作ろう。 ・もっと大きくしたいな。 ・できた○○ランドで遊ぶと楽しいな。	・こんな４組ランドにしたいな。 ・まずは、思った通りに作ってみよう。 ・もっとこうするといいんじゃないかな。もっとこうしてほしいな。□□さんに伝えよう。 ・何か物足りないな。うまくいかないな。実際に行ってきたいな。	・～～を使って、○○ランドを作りたいな。 ・どの材料をつかうとできるかな。 ・もっと～～を作りたいな。 ・□□さんと一緒に遊ぶと楽しいな。 ・学級のみんなで、生きものになりきって、かくれんぼをしたいな。	・１・２年４組の仲間も誘って遊びたいな。 ・交流学級の仲間を誘いたいな。 ・楽しく一緒に遊べるように、頑張って○○ランドを作ろう。 ・一緒に遊べて、楽しかったな。仲間と一緒に活動するのはうれしいな。
実際の姿	・自分（たち）の部屋を作りたいな。 ・車を作って乗りたいな。 ・家ができたから、まちにしたいな。 ・屋根を作るには、こうすればいいんだよ。			

●ジレンマ
■エラー

■ルールを守れない。

■もっと～～したいけれど、どうやって伝えるとよいかな。

●自分のやりたいことと仲間のやりたいことが違うみたいだ。

■思うように作れないな。

■もっと～～したいけど、思うように作れないな。

●みんなと遊ぶと、合わせる必要があるな。自分のやりたいことだけやれるわけではないんだな。

３・４年４組　本時案　（遊戯室）

目標

「４組生きものランド」を作って遊ぶ活動を通して、みんなで楽しむことのできる遊びの場にしたいという願いをもとに、遊びの場を一緒に作ったり、遊んだりすることができる。（関係構築力）

本時（36/52）

活動内容 （〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け						
		A児	B児	C児	D児	E児	F児
１　これまでの活動と今日の願いを確認する。 〇今日はどんなことがしたいですか。 ・今日は木のエリアを作りたいな。 ・生きものを増やしたいな。 ・最後にみんなでかくれんぼができるように隠れる場所を増やしたいな。	ねらい	仲間から誘われながらやりたいことを明らかにして、活動することができる。	自分の思いを伝えたり、仲間の思いを受け入れたりして一緒に活動することができる。	仲間の活動を真似したり、仲間の誘いを受け入れたりして、一緒に活動することができる。	仲間や教師の誘いを受け入れて、一緒に活動することができる。	仲間を誘って、一緒に活動しようとすることができる。	やりたいことやしてほしいことを仲間に伝えながら、一緒に活動することができる。
みんなで４組生きものランドをつくろう。 **２　必要なものを準備し、生きものランドを作る。** ・ダンボールをたくさん積むと、木になりそうだな。□□さん、一緒にやろうよ。 ・隠れることができるように、中に入れるようにするといいんじゃないかな。みんなに手伝ってほしいな。。 ・ビニール袋で生きものをもっと作ろう。 **３　できた部分を紹介する。** 〇今日の頑張りをみんなに伝えよう。 ・今日はみんなでかくれることができる大きな木を作ったよ。あとでみんなで入りたいな。 ・ビニール袋を使ってこんな生きものをつくったよ。 ・□□さんと一緒にたくさんダンボールを積んだよ。 **４　作った遊び場で遊ぶ。** ・生きものになりきって遊びたいな。 ・かくれんぼをしたいな。みんなでかくれようよ。 **５　本時の活動を振り返る。** 〇作ったり、遊んだりしてどうでしたか。 ・みんなで入れるかくれがを作ることができてよかったよ。 ・□□さんが手伝ってくれてうれしかったよ。 ・だんだんと生きものランドが出来上がってきたね。	手立て	〇作りたいものを発想することができるよう、見学に行ってきた場所の写真や調べたことなどを掲示しておく。 〇お互いにかかわり合う必然が生まれるように、環境を設定する。 ・ダンボールや画用紙などの材料を置く場所　・作る範囲など 〇したいことが明らかにできるよう、声を掛けたり例示したりする。 ・□□さんが～しているよ。 ・たくさん並べたらどうかな。 〇活動の様子から本人の思いを汲み取り、代弁する。 〇できたことを価値付ける。	〇やりたいことを仲間に伝えるよう促す。必要に応じて代弁する。 ・～がしたいのだね。□□さんに伝えたらどうかな。 〇本人の活動とテーマとを結び付けるような価値付けを行う。	〇写真など示しながら、何を使って、どんなことがしたいのかを一緒に考える。 〇仲間の活動の様子を見て、真似するとよいことを伝える。 〇できたことを価値付ける。	〇一緒に楽しむことができるように、声を掛ける。 ・□□さんが～～をしているよ。一緒にやってみたらどうかな。 〇本人の活動とテーマとを結び付けるような価値付けを行う。	〇仲間の活動に目を向け、助言をするとよいことを伝える。 ・□□さんが困っているよ。どうするといいかな。 〇仲間にどのように声をかけるとよいか、具体的に示す。 〇できたことを価値付ける。	〇自分の思いを仲間に伝えるよう促す。 ・～～がしたいんだね。みんなに伝えてみたらどうかな。 〇仲間にどのように声をかけるとよいか、具体的に示す。 〇できたことを価値付ける。
		目標に迫った姿をどのように見届けるか みんなで楽しむことのできる遊びの場にしたいという願いをもとに、遊びの場を一緒に作ったり、遊んだりしている。（関係構築力） ・活動の様子や発言から見届ける。					

９年４組　　年間指導計画　　「学びのカテゴリー」：進路・余暇　（全105時間）

特別支援学級 第９学年の目標	（１）問題解決力に関わって	自分の目指す姿を決めることを通して、願いをもって活動に取り組むことができるようにする。 願いの実現に向けて試行錯誤することを通して、よりよい自分になるために自己選択をして、行動することができるようにする。
	（２）関係構築力に関わって	自分や仲間のよさや苦手なことを知り、自他の願いの実現に向けて助言し合いながら取り組むことができるようにする。 仲間と共に活動に取り組むよさを実感し、相手や場面に相応しい言動をすることができるようにする。
	（３）貢献する人間性に関わって	体験的な学習から、自分と社会とのつながりを実感し、自分の生活に生かそうとする態度を養う。 企業の方やお客さんに関わることから、仲間や社会で生活する人が喜ぶことを考え、仲間と共に行動しようとする態度を養う。
カテゴリー設定の 理由	子供たちは、第８学年までに、作業学習を行うことや高等部について調べることを通して、自立心や協同心等が育まれてきた。第９学年では、卒業後の進路先や職業について調べることを通して、自分の進路について理解をする。その中で興味をもった職業について体験することを通して、働くことの意義や、やりがいを学んでいく。また、仲間と一緒に様々な余暇活動を行うことを通して、自分の好きな時間を有意義に過ごす楽しさも味わっていく。ときには身近な人と相談しながら、自己選択、自己決定することを通して、自分の将来の生き方を考えていく。	
学びの基盤となる 道徳的諸価値	自主、自律、自由と責任・節度、節制・向上心、個性の伸長・希望と勇気、克己と強い意志・思いやり、感謝 ・友情、信頼・遵法精神、公徳心・社会参画、公共の精神・勤労・よりよく生きる喜び	
学びを構成する 要素	人（自分、仲間、先生、高等部の先生、卒業した先輩、事業所の方）　夢　進路　休日の過ごし方 附属小中学校　進路先の学校　貢献　やりがい　長所　短所　喜び　困難　社会人として　マナー　お金　施設利用	

月	４月	５月	６月	７月	８月	９月	10月	11月	12月	１月	２月	３月
単元名 （時数）	「今後の進路を考えよう」（30）			「何して過ごす？」（10）		「働くって、どういうこと？」（40）			「何して過ごす？」（15）		「これまでの自分・ これからの自分」（10）	
主な学習活動	○進路先について、パンフレットやインターネットを使って調べる。 ○学校見学会を通して進路先を自分で見聞きし生活の見通しをもつ。 ○障がい者雇用に積極的な企業を見学し、卒業後の働く様子について学ぶ。 ○舞浜コーポレーションとトッパンが「働く上で大切なこと」の共通点をまとめ、そうなるために生活で何を意識して生活すればいいかを考える。 ○舞浜コーポレーションが行っていたアイロンがけ業務を体験してみる。 ○アイロンのかけ方を自分たちで調べ、よりきれいにできるようにする。 ○アイロンがけをやっている様子を仲間同士で見合いアドバイスを伝え、そのことをもとに次にどのように頑張りたいか目標を再設定する。 ○これまで練習してきた成果を舞浜コーポレーションの社員の方に見てもらいアドバイスをいただく。 ○これまでの活動を振り返り自分や仲間のよさについて話し合うことで、自分のよさや課題を再確認し、自立に向けて、自分の生活の目標を決める。			○4組の仲間が楽しめる遊びを計画する。 ○春休みやＧＷにどんなことをして過ごしたのか交流する。 ○夏休みにしたいことをまとめ、計画を立てる。 ○夏休み前に実践し、どんな気持ちになったのか交流する。	進路先の候補となる学校で、教育相談 何をして過ごしたことが一番楽しかったか、 記録する	○事業所の方の働いている様子を見学したり、話を聞いたりする中で「働く上で大切なこと」とは何か考え、仲間と交流し、まとめる。 ○職場体験をした自分の姿を仲間や働いている方のアドバイスから振り返り、次は何を頑張りたいか目標を再設定する。 ○前回とは異なる事業所で職場体験を行う。 ○自分が立てた目標を意識しながら職場体験を行う。 ○アドバイスを基に目標を再設定し、家族に作ったものを送りたいと願いをもち、そのために精一杯努力し、紙袋を作ることができる。 ○事業所での職場体験を通して、自分たちがこれまで立てた目標と実際の姿の経過を振り返り交流する。 ○自分や仲間のよさについて話し合うことで、自分の良さや課題を再確認し、それを踏まえたうえで、将来の職業について考える。 ○職場体験を終え、「働く上で大切なこと」を再構築する。			○お金を使って、やりたいことを考える。 ○活動場所までの行き方や、活動内容について仲間と一緒に考える。 ○公共交通機関を使い、活動場所まで移動し、仲間と一緒に活動する。 ○土日の休みにどんなことをして過ごしているのか交流する。 ○冬休みにしたいことをまとめ、計画を立てる。 ○冬休み前に実践し、どんな気持ちになったのか交流する。		○これまでの活動での自分の成長を振り返る。 ○高等部や高等学校に行くまでに、どんな自分になりたいか目標を立てる。 ○卒業までの残り期間、毎日自分の姿を振り返る。 ○これまでお世話になった方へ感謝の気持ちをどう伝えるか交流する。 ○後輩に伝えたい思いを整理する。 ○後輩に自分たちの思いを発表する。	
想定される ●ジレンマ ■エラー 【道徳的諸価値】	■自分の進路先になる学校は、どんな学校なのか分からないな。 ■将来の仕事は先のことでよく分からないな。 ■自分はどんな目標を立てればいいのか迷うな。 ■２つの特例子会社が大切にしていることで共通することをみつけるのが難しいな ●聞きたいことは、インタビューで聞くといいのかな自分たちで見付ければいいのかなどちらかな。 ●仲間に言われた自分のよさや課題が、自分が思っていたのと違うな。自分と仲間の意見どっちが正しいか分からないな。 ●仲間から丁寧にアイロンがけをしてと言われたけど、もっと素早くやった方がいい気もするからどちらを優先すればいいのかわからないな。 【自主、自律、自由と責任・節度、節制・向上心、個性の伸長・希望と勇気、克己と強い意志・思いやり、感謝など】			■自分が遊びたい遊びが決められないな。 ■どんな遊びかわからないからやりたくないな。 ●自分が遊びたい内容と、仲間が遊びたい内容が違って何をみんなでするか決まらないな。 【節度、節制・思いやり、感謝など】		■どこで職場体験をしよう。 ■それぞれの事業所の「働く上で大切にしたいこと」の共通点ってなんだろう。 ■仕事の内容を聞いたけど、上手くできるかな。 ■目標に向けてどうやってやるのかな。 ■注意されたどうしたらよかったのだろう。 ●仲間に話していることが伝わらないな。ゆっくり伝えたほうがいいのかな、分かりやすい言葉に変えたほうがいいのかな、どちらが伝わるのかな。 ●いくつか働く上で大切なことはあるけどどれを目標にしたらいいんだろう迷うな。 ●仲間や事業所の方がアドバイスだけど、仲間の意見と事業所の意見どれを大切にしたらいいんだろう。 【向上心、個性の伸長・希望と勇気、克己と強い意志・社会参画、公共の精神・勤労・自主、自律、自由と責任など】			■お金を使ってどんなことができるかな。 ■活動場所までどうやっていけばいいのかな。 ●仲間と自分の楽しいこととが違うな。どの活動がいいかな。 ●仲間と自分でお金を何に使うかが違うな。どうしたらいいのかな。 【節度、節制・友情、信頼・遵法精神、公徳心・社会参画、公共の精神など】		■自分のできるようになったことをどうやって伝えるといいかな。 ■誰に伝えるといいかな。 ●同じ作業班でも後輩に伝えたいことが違うな。何を引き継ぐといいかな。 ●伝えたいことが仲間と違うな何をつたえたらいいのかな。 【希望と勇気、克己と強い意志・思いやり、感謝・よりよく生きる喜びなど】	
人材活用 施設	・高等部のことを知っている身近な先生 ・附属小中学校を卒業した先輩 ・進路先の学校の先生 ・障がい者雇用を推進している企業の方			・学級や４組の仲間 ・先生 ・図書館 ・商業施設		・４組の仲間 ・事業所の方 ・実際に事業所で働く方 ・地域の事業所			・学級や４組の仲間 ・先生 ・図書館 ・商業施設		・４組の仲間 ・お世話になった先生 ・附属小中学校の校舎	
教科等との関連	・国語：話し方、聞き方　メモの取り方　見てきたことを話す　まとめ方（レポートに） ・家庭科：アイロンのかけ方			・国語：その日の出来事を振り返ろう　分かりやすく説明しよう ・数学：数と数量 ・体育：ゲーム運動		・国語：相手に応じた話し方、聞き方　体験したことをまとめよう　手紙の書き方（お礼） ・数学：数を数える　計量の仕方 ・家庭科：正しい服装　衛生（水の入れ方、机のふき方）　正しい掃除の仕方			・国語：話し方、聞き方 ・数学：お金の計算		・国語：話し方、聞き方　手紙の書き方 ・生単：まとめ方（プレゼン）	

９年４組単元シート	本単元の目標		
	問題解決力	関係構築力	貢献する人間性
単元名 働くって、どういうこと？ (40)	①自分の興味のあることを進んで調べることができるようにする。 ②職場体験の目標を自己決定し、目標を行動に移すことができるようにする。	①活動している仲間のよさや働かれている方のすごさに気付くことができるようにする。 ②仲間を励ましたり、アドバイスしたりすることができるようにする。 ③仲間や事業所の方の思いや考えを肯定的に聞いたり、考えを伝えたりできるようにする。	①自分の姿やまわりの言葉から自分の頑張りを振り返り、もっと頑張りたいと願いをもとうとする態度を養う。 ②精一杯活動することで、相手が喜ぶものができることが分かろうとする態度を養う。

活動の計画	・自分達が気になった事業所では、どんな仕事をしているのか調べたり、実際に見学したりする。(問題①) ・事業所の人が働いている様子を見学したり、話を聞いたりする中で「働く上で大切なこと」とは何か考え、仲間と交流し、まとめる。(関係①) (４)	○興味や関心をもった事業所で職場体験をする。(問題①) ○「働く上で大切なこと」を元に、職場体験をしている仲間の様子を見て、アドバイスすることができる。(関係①) ○職場体験をした自分の姿を仲間や働かれている人のアドバイスから振り返り、次は何を頑張りたいか目標を再設定する。(貢献①) (10)	・自分達が気になった前回とは異なる事業所で職場見学を行う。(問題①) ・これまで行った事業所と今回行った事業所で「働く上で大切なこと」の共通点は何か考え、交流しまとめる。(関係③) ・これまでの職場体験と話し合いでまとめた、「働く上で大切なこと」を基にこれから頑張りたい目標を立てる。(貢献①) (４)	○自分が立てた目標を意識しながら職場体験を行う。(問題②) ○「働く上で大切なこと」を基に、職場体験をしている様子を事業所の人に見てもらいアドバイスをいただく。(関係②) ○アドバイスを基に目標を再設定し、家族のために作ったものを送りたいという願いをもち、そのために努力し、紙袋を作ることができる。(貢献②) (17)	・事業所での職場体験を通して、自分達がこれまで立てた目標と実際の姿の経過を振り返り交流する。(関係③) ・事前にまとめた「働く上で大切なこと」と、職場体験で学んだことを照らし合わせ、「働く上で大切なこと」を再構築する。(貢献②) (5)
加除修正欄	・働く上で大切なことを東京研修で行った事業所からまとめることができた。				
想定される姿	・学校の周りにある事業所で、行っている仕事内容や働いている人の様子が分かる。 ・これまでの自分の姿と比べながら、「働く上で大切なこと」とは何かを考え、仲間と交流し、まとめる。	・事業所で体験してみて、働くことの楽しさや大変さが分かる。 ・働いているときの自分の姿や事業所の方のアドバイスから、活動の目標を振り返る。 ・自分のよさや可能性に気付き、活動の目標を見直す。	・前回と異なる事業所でも、「働く上で大切にしたいこと」は共通していることに気付く。 ・事業所で共通している「働く上で大切なこと」とこれまでの自分を振り返り、改めて自分の目標を立てる	・目標を意識しながら職場体験を行う。 ・家族に渡すためにより良い製品を作りたいと願い、もっとよい製品を作るためにはどうしたらよいか事業所の方からアドバイスをもらい、次の活動に生かす。	・職場体験を通して学んだことを、もう一度、「働く上で大切なこと」としてまとめる。 ・もっと成長したいという願いをもつ。
実際の姿	・これまでの自分の姿とこれまで行った事業所から、「働く上で大切なこと」を現段階でまとめることができた。				

●ジレンマ ■エラー	■働く上で大切なことをどう考えたらいいんだろう。 ■共通点が分からないな。 ■これから何を目標にしようかな。 ■目標に向けてどうやってやるのかな。 ●いくつか働く上で大切なことはあるけどどれを目標にしたらいいんだろう迷うな。 ●仲間や事業所の方がアドバイスだけど、仲間の意見と事業所の意見どれを大切にしたらいいんだろう。

９年４組　本時案　（９年４組教室）

目標

紙袋を分担して作ったり、事業所の方から話を聞いたりする活動を通して、働く上で自分に必要なことを知りたいという願いを基に、これから生活する上での目標を明らかにして生活に生かそうとする思いをもつことができる。（貢献する人間性）

本時（32/40）

活動内容 （〇教師の発問　・予想される児童生徒の発言）	〇教師の手立てと見届け					
		A児	B児	C児	D児	E児
１　活動の確認を行い、見通しをもつ。 〇紙袋作りをする姿を山下さんに見てもらいましょう。 紙袋作りの活動を通して、学んだことを伝えたり、話を聞いたりして、今後の目標を決めよう。	ねらい	これまで学びや本時の助言から、自分の頑張りを振り返り、目標を考えることができる。	山下さんの助言から、頑張らなくてはいけないことに気付き、目標を考えることができる。	これまでの本時の学びと今の自分を比べ、足りない部分に気付き、目標を考えることができる。	集中して紙袋作りに取り組み、周りの助言をもとに、目標を教師と決めることができる。	集中して紙袋作りに取り組み、周りの助言をもとに、自分で考え、目標を決めることができる。
２　紙袋作りをする。 〇紙袋作りをする姿を山下さんに見てもらいましょう。 **３　紙袋作りで頑張ったことを伝え、山下さんから話を聞く。** 〇紙袋作りで頑張ったことを伝え、山下さんからを聞こう。 ・丁寧な言葉づかいで次の人に製品を渡すことができたよ。 ・折り目を強く付けることで、次の人がやりやすくなるように頑張ったよ。 ・きれいに紙袋を折ることができたよ。 **４　日常生活の中で頑張ってきたことを伝え、山下さんから話を聞く。** 〇日常生活の中での何を頑張ってきたのか伝え、山下さんから話を聞こう。 ・授業が始まる前までに席に着くことを頑張ったよ。 ・朝運動で音楽が鳴り終わるまで走り続けることを頑張ったよ。 **５　自分を振り返り、これからの目標を立てる。** 〇これからの日常生活の目標を書こう。 ・山下さんの話から、自分の目標を少し変えようかな。 ・私の目標は、できているかどうか分かりづらかったから、もっとできたかできないか分かる目標にしよう。 ・自分は、シャツが出てしまう時があるからいつもシャツをしまって身だしなみを整えたいな。 ・教室の中に入ってきた先生や仲間にあいさつできていないから入ってきたら自分からあいさつがしたいな。	手立て	〇本時は、紙袋を作り、その姿を見てもらって助言をもらい、今後どうしたらよいか考える時間だと伝え、見通しをもてるようにする。				
		〇以前、山下さんに教えてもらったことを元に自分が何を意識したか話すように促す。	〇特に頑張っていたことは何かを自分で考えるように促し、自分の言葉で話せるようにする。	〇紙袋作りを始めた頃と今の様子を比べ何ができるようになったかを具体的に話すように促す。	〇「頑張っていたことは何。」と問い、その答えを元に教師と共に頑張りを振り返る。	〇「頑張っていたことは何。」と問い、その答えを基に自分で振り返り、自分の言葉で話すように促す。
		〇働く上で大切にしてほしいことを聞いた後に、これからの自分の目標を考え、記入する場を位置付ける。				
		〇いつ、どこでなにを頑張ってきたのかを具体的に話すように促す。 〇山下さんの話で自分ができているところはないか問い、自分の頑張りを認めつつ目標を考えるように促す。	〇目標を立てた理由から話し、自分のどの部分を良くしようとしたのか話すように促す。 〇山下さんの話と事業所が大切にしていたことを確認し、目標を考えるように促す。	〇どの部分をより良くするためにどんな目標を立て、どう頑張ったのか伝えるように促す。 〇山下さんの話と自分を比べ、足りない部分に気付き、目標を考えるように促す。	〇自分の目標と、それがどのくらいできてきたのかを話すように促す。 〇山下さんの話で大切だと思ったことを教師と確認し、考えるようにする。	〇自分の目標と、それがどのくらいできてきたのかを話すように促す。 〇山下さんの話を確認するように促し、自分で考えられるように促す。
		目標に迫った姿をどのように見届けるか 働く上で大切なことを知るために、紙袋を分担して作っている姿を事業所の方に見てもらい、自分の頑張ったことを伝えることを通して、これからの作業や生活する上での目標を明らかにして生活に生かそうする思いをもっている。（貢献する人間性） ・発言やワークシートの記述から見届ける。				

あ　と　が　き

近年、生成ＡＩの進化が目覚ましく、さまざまな分野での活用が進んでおります。例えば、オリジナルの画像や動画を瞬時に作成したり、カスタマーセンターへのお問い合わせへの対応を人間の代わりに回答したりするなど、すでに私たちの身の回りにも生成ＡＩを活用したサービスが増えてきています。このような技術の進歩は、私たちの生活や仕事の効率を大幅に向上させる一方で、人間の強みである「自分の行動を振り返って自分の成長につなげること」や「他者と意見交換して合意形成を図ること」等の重要性を再認識させてくれる絶好の機会でもあると感じています。

本研究においても、児童生徒が、「自分の願いをもって、その願いを達成するために学び続けること」を目指し、実践を重ねてきました。子どもたちどうしで「問い」を紡ぎ、他者と力を合わせて考え、よりよくするための行動に移すという、「どう生きるか」一連の学びは、教育目標「独歩・信愛・協働」の理念にも通じています。また、知識や技能の習得だけでなく、思考力や判断力、表現力を高め、主体的に学ぶ態度を育成することも含まれています。このように、「どう生きるか」の学びは、まさに学習指導要領の趣旨に沿ったものであり、児童生徒が予測困難な未来の社会でも活躍できる力を養うことにつながると実感しています。「どう生きるか」における児童生徒の探究心と創造力には日々驚かされており、その成長を見守ることができることを誇りに思っています。

本日の公表会は、指定最終年度の研究報告となりますが、「どう生きるか」で身に付けた資質・能力をいかに各教科の学習や教科横断的な学びの中でも生かしていけるかなど、さらなる検証や実践の積み重ねが必要だと考えています。本校教職員は、目の前の児童生徒の成長を願い、そのための教育実践に労を惜しまず取り組むことができます。本公表会にご参加の皆様には、本校の研究や教職員の教育実践に対して、率直なご意見ご指導をいただきますよう心よりお願いいたします。皆様のご支援とご協力を賜りながら、これからも一層の努力を続けてまいります。

本日はありがとうございました。

令和６年１１月２日

岐阜大学教育学部附属小中学校
校　長　　藤　井　　英　隆

研究同人

【令和６年度職員】

別府　哲	横山　真一	藤井　英隆	野口　正史	岸　貴彦
水﨑　綾香	小笠原　淳	冨倉　亮	伊藤　潤	岩﨑　英之
高木　俊裕	髙橋　亮	丹下　侑輝	豊吉　章孝	三戸　まみ
新井　敦子	堀　和子	上原　純	舟橋　和恵	佐藤　匠
桐山　裕也	松尾　雄太郎	鈴木　香子	岩田　尚之	北村　佳之
佐藤　睦	下川　舞子	中村　幸智	田中　雄也	窪田　泰三
岩田　奈々	伊藤　暢宏	干場　康平	中村　みな子	青木　笙悟
野原　健人	横田　満里	岡本　恭子	今西　賀寿真	平尾　龍平
江口　伸一郎	岸　周吾	磯谷　直毅	池田　久士	岡田　春香
大坪　雅詩	潮田　航大	大塚　光朗	浅井　拓也	水谷　直美
江口　隆寛	長島　ヒデキ	牧村　拓	平野　和俊	新居　豊子
土生　雄一	須田　詩音	葛西　希美		

【令和５年度転出職員】

今村　光章	丸山　早苗	沖田　由香	野々村　琢磨	森田　裕代
北川　基洋	林　賢太郎	三輪　圭佑	土開　敏真	渡辺　雅己
小寺　真実子	河合　真理			

【令和４年度転出職員】

宮川　浩司	各務　至	石田　華映	藤井　祐矢	山田　雄一朗
浅賀　崇史	兼松　明	早野　洋子	河合　美保	古村　真里江
松井　さやか	宮下　和弥	佐藤　蒼馬		

【令和３年度転出職員】

須本　良夫	古賀　英一	西野　美佳	淀川　雅夫	佐合　佑介
大羽　淳也	栗本　麻衣	鳥井　雄介	淺井　洋佑	千嶋　里英
三橋　直哉	平光　良平	金森　夕貴	田中　菜帆	杉山　翔乙
長尾　亮	荘加　菜摘			

【令和２年度転出職員】

中村　俊彦	佐藤　秀行	古川　貴之	南谷　雄一	小林　達也
高橋　直子	市橋　聖也	金澤　史斗	浅野　綾子	福岡　晶子